トリュフォンとの対話

ユスティノス
藤遥　制作

1〜2章　トリュフォンとの出会い、哲学者たちのもとでの遍歴

1:1 ある朝、わたしは柱廊の歩道を歩いていた。すると、ある人がほかの人たちといっしょにわたしに行き会い、「哲学者どの、こんにちは」と言った。そう言うと同時に、彼は向きを変えて、わたしと並んで歩きだした。彼の友人たちも、彼といっしょに向きを変えた。わたしも挨拶を返して、「いったい何でしょうか」と言った。1:2 すると彼は言った。「わたしはアルゴスで、ソクラテス派のコリントスから教わりました。この装いをまとっている人々を、軽んじたり、なおざりにしたりしてはならない。むしろ、なんとしても親しくもてなし、ともに語り合うべきだ。その交わりから、相手か自分に何かの益が生じるかもしれないから、と。どちらか一方が益を受けるだけでも、両方にとって良いことです。そのため、わたしはこういう装いの人を見ると、喜んで近づきます。いまもあなたに、同じわけで快く声をかけました。この人たちもわたしについて来ています。彼らも、あなたから何か良いことを聞けると期待しているのです」1:3 わたしは彼をからかって、「『人間のうちで最も優れた者よ、あなたはいったい何者か』」と言った。彼は、名前も生まれも、率直に打ち明けた。「わたしはトリュフォンといいます。割礼を受けたヘブル人です。このたび起こった戦争を逃れて、ギリシヤで、とくにコリントで、たいていの時を過ごしています」。わたしは言った。「では、あなたが哲学から受ける益が、あなたの立法者と預言者たちから受ける益ほどに大きいことがありうるでしょうか」。彼は言った。「どうしてですか。哲学者たちは、その議論をすべて神について交わしているではありませんか。神がただひとりで治めることや摂理について、いつも探究しているではありませんか。神的なものについて調べることこそ、まさに哲学の仕事ではありませんか」1:4 わたしは言った。「そうです。わたしたちもそう考えています。しかし、大多数の哲学者は、このことさえ心にかけていません。神は一人なのか、多くいるのか。わたしたち一人一人に配慮しているのか、いないのか。こうしたことを知っても、幸福には何の役にも立たないと考えているのです。それどころか、わたしたちにまでこう説き伏せようとします。神は宇宙の全体と、類や種そのものには心を配るが、わたしやあなた、つまり個々のものには、そこまでは心を配らない、と。もしそうなら、わたしたちが夜も昼も神に祈ることもないでしょう」1:5 「このことが彼らをどこに行き着かせるかは、察するのは難しくありません。実際、こう考える人々には、何を言うのも、何に従うのも、恐れなく自由にできます。罰を恐れることも、神から何か良いものを望むこともなく、したいことをし、言いたいことを言ってよいことになるのです。それもそのはずです。彼らは、同じことがいつまでも繰り返されると言います。わたしもあなたも、良くも悪くもならずに、もう一度同じように生きると言うのです。また別のある人々は、魂を不死で、からだを持たないものと仮定します。そして、悪いことをしても罰を受けることはないと考えます（実際、からだを持たないものは苦しみを受けません）。また、魂が不死である以上、もはや神から何も必要としないのです」1:6 すると彼は、愛想よくほほえんで言った。「では、あなたはこれらのことをどう考えているのですか。神についてどんな見解を持っているのですか。あなたの哲学とはどういうものですか。わたしたちに話してください」

2:1 わたしは言った。「わたしに見えていることを、あなたにお話ししましょう。実際、哲学は、まことにこの上なく大きな財産で、神の前で最も尊いものです。哲学だけが、わたしたちを神のもとに導き、神に引き合わせるのです。そして、哲学に心を向けた人々こそ、ほんとうに聖なる人々です。しかし、哲学とはいったい何なのか、何のために人間のもとに遣わされたのかは、多くの人に知られていません。実際、もし知られていたら、プラトン派もストア派もペリパトス派も、テオレティコイ派もピュタゴラス派もなかったでしょう。この知識は一つなのですから」2:2 「では、なぜ哲学が多くの頭を持つものになったのか。それをお話ししたいと思います。最初に哲学に触れ、そのために名声を得た人々がいました。後の人々は、真理について何も調べずに、その人々に従いました。ただ

彼らの忍耐と自制と、言葉の珍しさに驚き、それぞれが師から学んだことを真理だと思い込んだのです。そして、自分たちも後の人々にそうしたことや、それに似たほかのことを伝えました。こうして彼らは、その言説の父が呼ばれていたのと同じ名で呼ばれるようになったのです」2:3「わたしも初めは、そうした人の一人と交わりたいと強く願い、あるストア派の人に身をゆだねました。彼のもとでかなりの時を過ごしましたが、神については何も得るところがありませんでした。実際、彼自身も神を知らず、この学びが必要だとも言わなかったのです。そこで彼のもとを離れ、ペリパトス派と呼ばれる別の人のもとに行きました。自分では鋭い人だと思っている人でした。この人は最初の数日はわたしに付き合ってくれましたが、やがて謝礼の額を決めるよう求めてきました。わたしたちの交わりが無益なものにならないように、というのです。わたしはこのわけで彼のもとを去りました。そもそも哲学者だとは思えなかったのです」2:4「それでも、わたしの魂は、哲学に固有の、とりわけすぐれたものを、まだ聞きたくてなりませんでした。そこで、とても評判の高いピュタゴラス派の人のもとに行きました。自分の知恵を大いに誇っている人でした。わたしが彼の聴講者となり、弟子になりたいと思って話しかけると、彼は言いました。『それで、音楽と天文学と幾何学は学んだかね。いったい、まずこれらを教わらないで、幸福に役立つものの何かを見きわめられるとでも思うのかね。これらの学問が、魂を感覚でとらえられるものから引き離し、知性でとらえられるもののために役立つように整えるのだ。美そのもの、善であるものそのものを見ることができるようにね』」2:5「彼はこれらの学問を大いにほめ、必要なものだと言ったうえで、わたしを帰らせました。わたしが知らないと認めたからです。それで、わたしは、当然ながら、望みが外れて落胆しました。彼が何かを知っていると思っていただけに、なおさらでした。また、あの学問に費やさなければならない時間のことを考えると、長く先延ばしにすることには耐えられませんでした」2:6「途方に暮れたわたしは、プラトン派の人々とも会ってみようと思いました。実際、この人々の評判も大きかったのです。ちょうど、プラトン派の中でも抜きんでた聡明な人が、わたしたちの町に来たばかりでした。わたしはできるかぎり彼のもとで過ごし、進歩して、日ごとに大いに前進しました。からだを持たないものを知性でとらえることと、イデアを観想することに、わたしはすっかり心を奪われました。それが、わたしの思いに翼を与えました。短いあいだに、わたしは自分が賢い者になったと思い込みました。そして愚かにも、すぐにでも神を見られると望みました。実際、これがプラトンの哲学の目的なのです」

3〜4章　老人との出会い、神を見ることについての問答

3:1「わたしがそのような状態にあったころのことです。あるとき、深い静けさを存分に味わい、人の踏み跡を避けたいと思いました。そこで、海からそれほど遠くないある場所に出かけて行きました。着いたら一人で思いにふけるつもりだったその場所の近くまで来たときです。一人の年老いた人が、少し遅れてわたしについて来ていました。見たところ軽んじてよいような人ではなく、柔和で威厳のある人柄がにじみ出ていました。わたしは彼のほうを振り向くと、立ち止まって、彼をかなり鋭く見つめました」3:2「すると彼は、『わたしを知っているのかね』と言いました。わたしは知らないと答えました。彼はわたしに言いました。『では、なぜそんなにわたしをじっと見るのかね』。わたしは言いました。『あなたがたまたまわたしと同じ所におられるので、驚いているのです。実際、ここで人に会うとは思っていませんでしたから』。彼はわたしに言いました。『わたしは身内の者たちのことが気にかかっている。彼らは遠くへ旅に出ているのだ。それで、わたし自身も、彼らがどこかから姿を見せはしないかと、様子を見に来たのだ。だが、あなたはここで何をしているのかね』。わたしは言いました。『こういう過ごし方が好きなのです。実際、ここでは、だれにも妨げられずに自分自身と語り合えます。それに、こうした場所は、言葉を愛して学ぶのにとても役立つのです』」3:3「彼は言いました。『では、あなたは言葉を愛する者であって、行いを愛する者でも、真理を愛する者でも、まったくないのかね。ソフィストであるよりも、実践する者であろうと努めることもしないのかね』。わたしは言いました。『これにまさる大きな仕事を、だれが果たせるでしょうか。つまり、理性がすべてを導くことを示すことです。そして、理性をつかみ、その上に乗って、ほかの人々の迷いと営みを見下ろすことです。彼らが何一つ健全なことも、神に喜ばれることもしていないのを見るのです。哲学と正しい理性がなければ、だれにも思慮は備わらないでしょう。ですから、すべての人は哲学をしなければなりません。そして、これを最も大きな、最も尊い仕事と考えなければなりません。ほかのことは、二番目、三番目のものです。哲学に結びついているなら、ほどほどのもので、受け入れる値打ちがあります。しかし、哲学を欠き、それを扱う人々に哲学が伴わないなら、俗っぽい、卑しいものです』」3:4「すると彼は、言葉を引き取って言いました。『では、いったい哲学が幸福をもたらすのかね』。わたしは言いました。『まさにそうです。しかも、哲学だけがもたらすのです』。彼は言いました。『そもそも、哲学とは何か。また、哲学のもたらす幸福とは何か。話して差し支えがなければ、話してくれないか』。わたしは言いました。『哲学とは、存在するものについての知識であり、真理を深く知ることです。幸福とは、この知識と知恵の褒賞です』」3:5「彼は言いました。『ところで、あなたは何を神と呼ぶのかね』。わたしはこう答えました。『いつも同じありかたで、同じようにあり続け、ほかのすべてのものにとって存在の原因であるもの、これこそが神です』。彼はわたしの言うことを聞いて喜び、またこう尋ねました。『知識とは、さまざまな事柄に共通の名ではないかね。実際、どの技術でも、その一つを知っている人は、知識のある者と呼ばれる。兵を率いる術でも、舵を取る術でも、医術でも同じだ。ところが、神のことと人のことでは、そうはならない。人のことそのものと神のことを知らせ、さらに、それらの神性と義を深く知らせる知識が、何かあるのかね』。わたしは言いました。『もちろんです』」3:6「『では、どうかね。人と神を知ることは、音楽や算術や天文学、あるいはそういったものを知るのと同じかね』。わたしは言いました。『けっしてそうではありません』。彼は言いました。『それなら、あなたはわたしに正しく答えなかったことになる。実際、ある知識は、学びや何かの修練によってわたしたちに備わる。しかし、ほかの知識は、見ることによって与えられるのだ。もしだれかがあなたに、インドに、ある生き物がいる、と言ったとしよう。その生き物は、ほかのどの生き物とも姿が違い、これこれの形をしていて、さまざまな姿を持ち、色とりどりだ、と。あなたはそれを見るまでは、それを知ることはできない

だろう。それどころか、見た人から聞かないかぎり、それについて何一つ言うこともできないだろう』」 3:7「わたしは言いました。『もちろん、できません』。彼は言いました。『では、哲学者たちは、どうして神について正しく考えたり、何か真実なことを言ったりできるだろうか。神についての知識を持たず、神を見たことも、神について聞いたこともないのに』。わたしは言いました。『しかし、ご老人、神的なものは、ほかの生き物のようにこの目で見えるものではありません。ただ精神だけがとらえられるものです。プラトンがそう言っており、わたしもそれを確信しています』」

4:1「彼は言いました。『では、わたしたちの精神には、そのような、それほどの力があるのかね。それとも、精神は、存在するものを感覚によってとらえたのではないのかね。いったい、人間の精神が、聖霊に飾られていなければ、いつか神を見るだろうか』。わたしは言いました。『実際、プラトンはこう言っています。精神の目はまさにそのようなもので、そのためにわたしたちに与えられた。それは、その純粋な目そのもので、存在するものそのものを見ることができるためだ、と。存在するものとは、知性でとらえられるすべてのものの原因です。それは色も、形も、大きさも持たず、目が見るものは何一つ持ちません。プラトンによれば、それは存在するものそのものであり、あらゆる実在のかなたにあります。言い表すことも、語ることもできず、ただ美しく、善いものです。それは、生まれつきすぐれた魂に、その近しさと、見たいと恋い求める思いとのゆえに、突然に生じるのです』」 4:2「彼は言いました。『では、わたしたちと神とのあいだに、どんな近しさがあるのかね。それとも、魂もまた神的で不死であり、あの王なる精神そのものの一部なのかね。そして、あの精神が神を見るように、わたしたちも自分の精神で神的なものをとらえ、そこから、もう幸福でいられるのかね』。わたしは言いました。『まさにそのとおりです』。彼は尋ねました。『また、すべての生き物のすべての魂が、それを受け入れるのかね。それとも、人間の魂と、馬やろばの魂とは別のものかね』。わたしは答えました。『いいえ、どの生き物の魂も同じです』」 4:3「彼は言いました。『それなら、馬やろばも神を見るだろうか。あるいは、いつか見たことがあるだろうか』。わたしは言いました。『いいえ。実際、人間の大多数も見ません。正しく生き、義とほかのあらゆる徳によって清められた人でなければ、見ないのです』。彼は言いました。『それなら、近しさのゆえに神を見るのでも、精神であるから見るのでもなく、慎み深く、正しいから見るのかね』。わたしは言いました。『そうです。また、神を知性でとらえるものを持っているからでもあります』。『では、どうかね。山羊や羊が、だれかに不義を行うだろうか』。わたしは言いました。『だれにも何の不義も行いません』」 4:4「彼は言いました。『それなら、あなたの言い分では、これらの生き物も神を見ることになるのかね』。『いいえ。実際、そのからだは、そういうものなので、妨げになるのです』。すると彼は、言葉を引き取って言いました。『よく知っておきなさい。もしこれらの生き物が声を得たら、彼らのほうが、はるかにもっともな理由で、わたしたちのからだをののしるだろう。だが、いまはそのままにしておこう。あなたの言うとおりだと認めることにしよう。それより、こう答えてほしい。魂は、からだの中にあるあいだに見るのかね。それとも、からだから離れてから見るのかね』」 4:5「わたしは言いました。『魂が人間の姿をとっているあいだも、精神を通して、それが魂のうちに生じることはできます。しかし、とりわけ、からだから解き放たれて、自分だけになったときです。そのとき魂は、ずっと恋い求めていたものに出会うのです』。『いったい、魂は、ふたたび人間のうちに入ったとき、そのことを覚えているのかね』。わたしは言いました。『覚えていないと思います』。『では、見た魂にとって何の益があるのかね。見たことさえ覚えていないなら、見た者は、見なかった者よりも何がまさっているのかね』」 4:6「わたしは言いました。『わたしには答えられません』。彼は言いました。『一方、これを見るのにふさわしくないと判断された魂は、どんな目に遭うのかね』。『獣のからだに閉じ込められます。それが魂の受ける罰です』。『では、魂は、そのわけでそういうからだの中にいるのだと知っているのかね。何か罪を犯したのだと知っているのかね』。『知らないと思います』」 4:7「『それなら、どうやら、これらの魂にも、罰は何の益にもならないようだね。それどころか、罰を受けていると感じていないなら、罰を受けているとさえ、わたしは言わないだろう』。『そのとおりです』。彼は言いました。『すると、魂は神を見ることもなく、ほかのからだに移り変わることもない。実際、もし移り変わるなら、自分がこのように罰を受けていると知っているはずだ。そして、後でほんのささい

な罪でも犯すことを恐れるはずだ。しかし、魂は、神がおられること、また義と敬虔が良いものであることを、知性でとらえられる。このことには、わたしも同意する』。わたしは言いました。『おっしゃるとおりです』」

5〜8章　魂は不死かという問答、預言者たち、トリュフォンの忠告

5:1 「『すると、あの哲学者たちは、これらのことについて何も知らないのだ。実際、魂がいったい何であるかさえ、言うことができないのだから』。『知らないようです』。『また、魂を不死と言うべきでもない。もし不死なら、明らかに、生まれることのないものでもあるからだ』。『しかし、プラトン派と呼ばれるある人々によれば、魂は生まれることのないもので、不死です』。『いったい、あなたは世界も生まれることのないものだと言うのかね』。『そう言う人々もいます。しかし、わたしは彼らに同意しません』」 5:2 「『そうするのが正しい。実際、どんな理由があって、次のように考えないことがあろうか。これほど堅く、手ごたえがあり、組み合わさり、移り変わり、衰え、日ごとに生じる物体が、何かの始まりから生じた、と。もし世界が生まれたものなら、魂もまた生じたのであり、ひょっとすると存在しないこともある、ということにならざるをえない。実際、魂は、人間のために、またほかの生き物のために生じたのだ。もっとも、それは、あなたが、魂はそれぞれのからだといっしょにではなく、まったく別に生じたと言うのならの話だが』。『そのとおりだと思います』。『それなら、魂は不死ではない』。『はい、不死ではありません。世界もまた生まれたものだと、わたしたちには明らかになったのですから』」 5:3 「『しかし、すべての魂が死ぬとも、わたしは言わない。実際、もしそうなら、悪人たちにとって、まことに思いがけない幸運となるだろう。むしろ、どうなのか。敬虔な人々の魂は、どこかもっと良い場所に、不義で悪い魂は、もっと悪い場所にとどまる。そして、そのとき来る裁きの時を待っているのだ。こうして、神にふさわしいと明らかになった魂は、もはや死なない。一方、ほかの魂は罰を受ける。神が、それらが存在し、罰を受けることを望まれるかぎりである』」 5:4 「『あなたのおっしゃることは、プラトンが対話篇ティマイオスで、世界についてほのめかしていることのようなものでしょうか。プラトンはそこで、こう言っています。世界そのものは、生じたものであるかぎり朽ちる。しかし、神の意志のゆえに、解かれることも、死の定めにあうこともない、と。これと同じことが、魂についても、要するにすべてのものについても言われている、とあなたは思われるのですか。実際、神の後にあるもの、またいつかあるようになるものは、どれも朽ちる本性を持つ、というわけです[1]。そして、消え去って、もはや存在しなくなることもありうるのです。実際、神だけが生まれることのない、朽ちないものであり、だからこそ神なのです。それ以外のものは、すべて神の後にあって、生まれたもの、朽ちるものです』」 5:5 「『このために、魂は死にもし、罰も受けるのです。実際、もし魂が生まれることのないものだったなら、罪を犯すことも、愚かさに満ちることもなかったでしょう。また、臆病になったり、逆に向こう見ずになったりすることもなかったでしょう。それどころか、自分から豚や蛇や犬の中に入ることもなかったでしょう。また、魂が生まれることのないものであるなら、魂が強いられることも許されないはずです。実際、生まれることのないものは、生まれることのないものに似ていて、等しく、同じです。力においても誉れにおいても、一方が他方よりまさるとされることはないでしょう』」 5:6 「『ですから、生まれることのないものは、多くはありません。実際、もしそれらのあいだに何かの違いがあったなら、あなたは探しても、その違いの原因を見つけられないでしょう。そうではなく、思いをどこまでも先へ送り続け、ついには疲れ果てて、生まれることのない一つのものに立ち止まるでしょう。そして、それがすべてのものの原因だと言うでしょう。プラトンとピュタゴラスは賢い人々で、わたしたちにとって哲学の城壁や支えのようになった人々です。いったい、その二人が、このことを見落としたのでしょうか』とわたしは言いました」

6:1 「彼は言いました。『わたしは、プラトンにも、ピュタゴラスにも、要するにそういう考えを持つだれにも、まったく関心がない。実際、真理はこうなのだ。次のことから学べるだろう。魂は、生命であるか、生命を持つかのどちらかだ。もし生命であるなら、自分ではなく、何かほかのものを生かすだろう。動き

が、自分よりも、むしろ何かほかのものを動かすのと同じだ。魂が生きていることには、だれも反対しないだろう。しかし、もし生きているなら、生命であるから生きているのではなく、生命を受けて生きているのだ。何かにあずかるものは、それがあずかるものとは別のものだ。そして、魂は生命にあずかっている。神が、魂が生きることを望まれるからだ』」 6:2 「『それなら、神が魂の生きることを望まれないときには、魂はいつか生命にあずからなくなる。実際、生きることは、神にとってのように、魂に固有のものではない。そうではなく、人間はいつまでも存在するのではなく、からだもいつも魂とともにあるのではない。この結び合わせが解かれなければならないときには、魂はからだを離れ、人間は存在しなくなる。それと同じように、魂がもはや存在してはならないときには、生命を与える霊が魂から離れ去り、魂はもはや存在しない。むしろ、魂もまた、取られてきた所へ、ふたたび帰って行くのだ』」

7:1 「わたしは言いました。『では、これらの人々のうちにさえ真理がないのなら、人はこの先、どんな師に頼ればよいのでしょうか。あるいは、どこから益を得られるのでしょうか』。『ずっと昔に、哲学者と思われているこれらすべての人々よりも古い、ある人々がいた。幸いな、正しい、神に愛された人々で、神の霊によって語り、これから起こることを告げた。それが、いままさに起こっているのだ。人々は彼らを預言者と呼んでいる。この人々だけが、真理を見て、人々に語り出した。だれをはばかることも、だれに気後れすることもなく、人の評判に負けることもなかった。そうではなく、聖霊に満たされて、聞いたことと見たことだけを語ったのだ』」 7:2 「『彼らの書いたものは、いまもなお残っている。それを読んで彼らを信じる人は、大いに益を得ることができる。始まりについても、終わりについても、哲学者が知らなければならないことについてもだ。実際、彼らは、そのとき、論証によって言葉を語ったのではない。彼らは、あらゆる論証を超えた、真理の信頼できる証人だったからだ。そして、すでに起こったこと、いま起こっていることが、彼らを通して語られたことに同意するよう、人に迫るのだ』」 7:3 「『もっとも、彼らは、行った力あるわざのためにも、信じられて当然だった。彼らは、万物の造り主、父なる神に栄光を帰し、神から来られたキリストを、神の子として告げ知らせたからだ。惑わす汚れた霊に満たされた偽預言者たちは、そうしたことをしたこともなく、いまもしない。そうではなく、人々を驚かせるために、何か力あるわざを行おうと企て、惑わす霊と悪霊をほめたたえているのだ。だが、あなたは、何よりもまず、光の門があなたに開かれるように祈りなさい。実際、これらのことは、だれにでも見てとれるものでも、理解できるものでもない。神と神のキリストが悟らせてくださる人でなければ、悟れないのだ』」

8:1 「彼はこれらのことと、いまは話す時ではないほかの多くのことを語ると、それを追い求めるようにと命じて、去って行きました。それきり、わたしは彼に会っていません。すると、たちまち、わたしの魂に火がともりました。預言者たちと、キリストの友であるあの人々を恋い求める思いが、わたしをとらえました。そして、彼の言葉を心の中で思いめぐらすうちに、この哲学だけが確かで有益なものだと分かったのです」 8:2 「こうして、またこのようなわけで、わたしは哲学者なのです。そして、すべての人が、わたしと同じ熱意を抱いて、救い主の言葉から離れないでほしいと思います。実際、その言葉は、それ自体のうちに何か畏れを起こさせるものを持ち、正しい道からそれていく人々を恥じ入らせる力があります。そして、それをよく学ぶ人々には、この上なく快い安らぎが生まれます。ですから、もしあなたも、自分自身のことを少しでも心にかけ、救いを求め、神に信頼しているとします。そうであれば、神のキリストを深く知り、完全な者となって、幸福になることができます。あなたは、この事柄に無縁な人ではないのですから」 8:3 親愛なる友よ、わたしがこう言うと、トリュフォンといっしょにいた人々はどっと笑った。しかし、トリュフォン自身はほほえんで言った。「ほかのことについては、あなたの言うことを受け入れます。神的なもののへのあなたの熱意にも感心します。しかし、あなたは、忍耐と自制と慎みを修めながら、プラトンかほかのだれかの哲学を、いまも続けていたほうがよかったのです。偽りの言葉にだまされ、何の値打ちもない人間たちに従うよりは、そのほうがましでした。実際、あの哲学のあり方にとどまり、非難されずに生きていたなら、より良い定めへの望みが、あなたに残されていたでしょう。しかし、神を捨てて人間に望みをかけたあなたに、この先どんな救いが残っているというのですか」 8:4 「ですから、わたしの言うことも聞きたいなら、まず割礼を受けて

ください。実際、わたしはもう、あなたを友と思っています。それから、定めのとおりに、安息日と、祭りと、神の新月を守ってください。要するに、律法に書かれていることを、すべて行ってください。そうすれば、あなたはおそらく神からあわれみを受けるでしょう。一方、キリストは、たとえすでに生まれていて、どこかにおられるとしても、知られずにおられます。ご自分でもまだご自分を知らず、何の力も持っておられません。エリヤが来てキリストに油を注ぎ、すべての人に明らかにするまでは、そうなのです。ところが、あなたがたは、根拠のないうわさを受け入れて、自分たちのためにキリストなる者を作り上げています。そして、その者のために、いまむやみに滅びようとしているのです」

訳注

1 写本の後代の書き込みは、この文から五章六節の問いの前までを老人の言葉とする。

9〜11章　対話の始まり、トリュフォンの問い、新しい律法と新しい契約

9:1「人よ、あなたのことは大目に見ます。どうか、あなたが赦されますように」とわたしは言った。「実際、あなたは自分の言っていることが分かっていないのです。そうではなく、聖書を悟らない師たちに従い、思いつくままを当て推量で言っているのです。ところで、あなたが、このことについて説明を受ける気になってくだされればよいのですが。それは、次のことの説明です。わたしたちは惑わされてはいません。また、人々からそしりを浴びせられても、どんなに恐ろしい暴君に否むよう迫られても、このかたを告白することをやめません。実際、そばにいてくだされば、示しましょう。わたしたちが信じたのは、むなしい作り話でも、論証のない言葉でもありません。そうではなく、神の霊に満ち、力にあふれ、恵みに花開く言葉なのです」9:2すると、トリュフォンといっしょにいた人々は、また笑い出し、品のない声をあげた。わたしは立ち上がって、立ち去ろうとした。しかし、トリュフォンはわたしの外套をつかみ、わたしが約束したことを果たすまでは放さない、と言った。わたしは言った。「では、あなたの仲間たちに、騒いだり、こんなふうに見苦しくふるまったりさせないでください。そうではなく、聞きたいのなら、静かに聞いてもらいましょう。もし何かもっと大事な用事があって、そのじゃまになるなら、行ってもらいましょう。一方、わたしたちは、どこかに退いて一息つき、話を最後まで進めましょう」9:3トリュフォンも、わたしたちがそうするのがよいと考えた。そこで、わたしたちは脇へそれて、柱廊の中ほどにある走路のほうへ歩いて行った。一方、トリュフォンといっしょにいた人々のうち二人は、あざけり、わたしたちの熱心をからかって、去って行った。わたしたちがその場所に着くと、そこには両側に石の腰掛けがあった。トリュフォンといっしょにいた人々は、その片側に腰を下ろした。そして、彼らのひとりがユダヤで起こった戦争の話を持ち出し、彼らは語り合った。

10:1彼らの話がやむと、わたしは、ふたたび彼らにこう切り出した。「友人たちよ、あなたがたがわたしたちを責めるのは、次のことのほかに、何かあるのでしょうか。わたしたちは律法に従って生きていません。あなたがたの先祖のように肉に割礼を受けず、あなたがたのように安息日を守ってもいません。いったい、わたしたちの生活と品行までも、あなたがたのあいだで悪く言われているのでしょうか。わたしが言うのは、こういうことです。まさか、あなたがたまで、わたしたちについて信じ込んでいるのでしょうか。わたしたちが人を食べ、宴の後で明かりを消して、みだらな交わりにふけっている、などと。それとも、あなたがたがわたしたちをとがめるのは、ただ次のことだけでしょうか。わたしたちがこのような言葉に心を向け、あなたがたの思うところでは、真実でない考えを信じている、ということです」10:2トリュフォンは言った。「わたしたちがいぶかっているのは、まさにそのことです。一方、大勢の人が言っていることは、信じるに値しません。実際、それは人間の本性から、あまりにかけ離れています。また、あなたがたの、福音と呼ばれるものにある戒めも、まことに驚くべき、偉大なものだと、わたしは知っています。だれもそれを守れないと思うほどです。実際、わたしは心がけてそれを読んだのです」10:3「しかし、わたしたちが何より当惑しているのは、次のことです。あなたがたは、敬虔だと言い、ほかの人々よりすぐれていると思っています。それなのに、少しも彼らから離れず、異邦人と生活を違えていません。祭りも安息日も守らず、割礼も受けていないのです。そのうえ、十字架につけられた人間に望みをかけています。それでいて、神の戒めを行わずに、神から何か良いものを受けられると望んでいます。それとも、あなたは読んだことがないのですか。『八日目に割礼を受けない魂は、その民のうちから断たれる』（創世記一七・一四）と。異邦の者についても、銀で買われた者についても、同じように定められています」10:4「すると、あなたがたは、この契約[1]を真っ先に軽んじて、そのあとのことも、なおざりにしています。そして、神を知っているかのように、わたしたちを説き伏せようとしています。神を恐れる人々の行うことを、何ひとつ行わないのに、です。ですから、もしあなた

が、これに弁明できるとします。律法を守らないでも、どのようにして何かを望めるのか、それを示せるとします。そうであれば、わたしたちは、何よりもそれを喜んで聞きたいのです。ほかのことも、同じようにいっしょに調べましょう」

11:1 わたしは彼にこう言った。「トリュフォンよ、この万物を造り、整えられたかたのほかに、別の神はこれから先もいません。永遠の昔からいたこともありません。また、わたしたちは、わたしたちの神とあなたがたの神とを別々のものと考えているのではありません。そうではなく、まさにあのかたを神と考えているのです。強い手と高く上げた腕とで、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き出されたかたです。また、わたしたちは、ほかのだれかに望みを置いているのではありません。実際、ほかの神はいないのです。そうではなく、あなたがたも望みを置いているそのかた、アブラハムとイサクとヤコブの神に望みを置いているのです。しかし、わたしたちが望みを置いているのは、モーセによってでも、律法によってでもありません。実際、もしそうなら、わたしたちもあなたがたと同じことをしているはずです」11:2「しかし、事実はそうではありません。実際、トリュフォンよ、わたしは読んだのです。最後の律法と、あらゆる契約のうちで最も力ある契約が来る、ということを。それは、神の嗣業を自分のものにしようとするすべての人が、いま守らなければならない契約です。実際、ホレブでの律法は、もう古く、あなたがただけのものです。一方、あの最後の律法は、分け隔てなくすべての人のものです。律法に対して立てられた律法は、前の律法を終わらせました。そして、あとから結ばれた契約も、同じように前の契約を止めたのです。わたしたちには、キリストが、永遠の、最後の律法、また確かな契約として与えられました。その後には、律法も、命令も、戒めもありません」11:3「いったい、あなたは、イザヤの言うこれらの言葉を読んだことがないのですか。『わたしに聞け、わたしに聞け、わが民よ。王たちよ、わたしに耳を傾けよ。律法はわたしから出、わが裁きはもろもろの民の光となる。わが義はすみやかに近づき、わが救は出て行く。もろもろの民は、わが腕に望みを置く』（イザヤ五一・四～五）。また、エレミヤを通しても、まさにこの新しい契約について、こう言われます。『見よ、日が来る、と主は言われる。わたしはイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる。それは、わたしが彼らの先祖と、その手を取ってエジプトの地から導き出した日に立てた契約ではない』（エレミヤ三一・三一～三二）」11:4「すると、神が、新しい契約が立てられることを告げ、しかもそれを、もろもろの民の光として告げられたとします。そして、わたしたちは次のことを見て、確信しています。人々が、十字架につけられたこのイエス・キリストの名によって、偶像とほかの不義から離れて神に近づきました。そして、死に至るまで耐え忍んで、告白と敬虔を守り通しているのです。そうであれば、その行いと、それに伴う力から、すべての人が悟ることができます。このかたこそ新しい律法、新しい契約であられ、すべての民のうちから神からの良いものを待つ人々の、待ち望む者であられる、と」11:5「実際、まことの、霊のイスラエルの民族、またユダとヤコブとイサクとアブラハムの民族は、わたしたちなのです。アブラハムは、割礼を受けていないときに、その信仰のゆえに神から証しを受け、祝福され、多くの国民の父と呼ばれました。わたしたちは、この十字架につけられたキリストによって、神のもとに導かれた者です。このことは、話が進むにつれて示されるでしょう」

訳注

1 引用の続き『わたしの契約を破った』を受ける。写本で省かれたとみる説がある。

12〜14章　第二の割礼とまことの安息日、救いの洗い、キリストの二つの来臨

12:1 わたしは、さらに言葉を続け、こう持ち出した。「イザヤは、別の言葉でもこう叫んでいます。『わたしの言葉を聞け。そうすれば、あなたがたの魂は生きる。わたしは、あなたがたと永遠の契約を立てる。それは、ダビデの聖なる確かな恵みである。見よ、わたしは彼を、もろもろの国民への証人として与えた。あなたを知らない国民はあなたを呼び求め、あなたを知らない民はあなたのもとに逃れて来る。あなたの神、イスラエルの聖なるかたのゆえである。神があなたに栄光を与えられたからである』（イザヤ五五・三〜五）」 12:2 「まさにこの律法を、あなたがたは辱めました。その新しい聖なる契約を軽んじました。そして今も、受け入れず、悪を行ったのに悔い改めもしません。実際、あなたがたの耳はなおふさがれ、目は見えなくされ、心は鈍くされています。エレミヤが叫んだのに、それでもあなたがたは聞きません。律法を与えるかたがここにおられるのに、見ません。貧しい人々が福音を聞かされ、盲人が見えるようになっているのに、悟りません」 12:3 「いまや、第二の割礼が必要です。それなのに、あなたがたは肉のことで高ぶっています。新しい律法は、あなたがたがいつも安息を守ることを望んでいます。それなのに、あなたがたは一日だけ仕事を休んで、それで敬虔だと思っています。なぜそれが命じられたのかを理解していないのです。また、種なしパンを食べれば、神の御心を果たしたと言います。わたしたちの神である主は、そのようなことを喜ばれるのではありません。あなたがたのうちに、偽って誓う者や盗む者がいるなら、やめなさい。姦淫する者がいるなら、悔い改めなさい。そうすれば、その人は、神の喜ばしい、まことの安息日を守ったのです。手の清くない者がいるなら、身を洗いなさい。そうすれば、清いのです」

13:1 「実際、イザヤは、あなたがたを浴場に送ったのではありません。そこで殺人やほかの罪を洗い落とさせようとしたのでは、決してないのです。それらの罪は、海の水をすべて集めても清めるには足りません。そうではなく、当然ながら、これこそが、昔からあの救いの洗いだったのです。イザヤが言ったのは、この洗いのことです。それは、悔い改める人々のための洗いです。その人々は、もはや山羊や羊の血、雌牛の灰、小麦粉のささげ物によって清められるのではありません。そうではなく、信仰により、キリストの血とその死とによって清められるのです。キリストは、そのために死なれました。イザヤ自身が、こう言っているとおりです」 13:2 「『主は、その聖なる腕を、すべての国民の前にあらわされる。すべての国民と地の果ては、神からの救いを見る。去れ、去れ、去れ。そこから出よ。汚れたものに触れるな。その中から出よ。主の器を担う者たちよ、離れ出よ。あなたがたは、うろたえて行くのではないからである。実に、主があなたがたの前を行かれる。あなたがたを集められるのは、イスラエルの神、主である。見よ、わがしもべは悟り、高められ、大いに栄光を受ける」 13:3 「多くの人があなたに驚くように、あなたの姿もあなたの栄光も、人々から卑しめられる。そのように、多くの国民は彼に驚き、王たちは口をつむぐ。彼について告げ知らされなかった者たちが見、聞かなかった者たちが悟るからである。主よ、だれがわれわれの聞いたことを信じたか。主の腕は、だれにあらわれたか。われわれは、幼な子のように、かわいた土にある根のように、彼の前で告げた」 13:4 「彼には姿もなく、栄光もない。われわれは彼を見たが、彼には姿もなく、美しさもなかった。かえって、その姿は卑しく、人の子らよりも劣っていた。彼は打たれた人で、弱さを負うことを知っていた。その顔がそむけられたので、彼は卑しめられ、顧みられなかった。この人はわれわれの罪を負い、われわれのために苦しむ。しかるに、われわれは、彼が労苦のうちにあり、打たれ、虐げられているのだと思った」 13:5 「しかしこの人は、われわれの罪のために傷つけられ、われわれの不法のために弱った。われわれの平和の懲らしめは彼の上にあり、その打たれた傷によって、われわれはいやされた。われわれはみな羊のように迷い、人はおのおのその道に迷った。そして主は、彼をわれわれの罪に引き渡された。彼は虐げられたので、口を開かない。彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、ま

た、毛を刈る者の前で黙っている小羊のように、口を開かない」13:6「彼が低くされたとき、そのさばきは取り去られた。また、だれがその生まれを語ることができようか。その命が地から取り去られるからである。わたしの民の不法によって、彼は死に至る。わたしは、彼の墓の代わりに悪人たちを、彼の死の代わりに富む者たちを与える。彼は不法を行わず、その口に欺きは見いだされなかったからである。主は、彼をその打ち傷から清めようとされる。あなたがたが罪のためにささげるなら、あなたがたの魂は、長く生きる子孫を見る」13:7「また主は、彼の魂の労苦を取り去ろうとされる。彼に光を示し、悟りによって形づくり、多くの人によく仕える正しい者を、義としようとされる。そして、彼自身がわれわれの罪を負う。それゆえ、彼は多くの人を受け継ぎ、強い者たちの分捕り物を分ける。彼の魂は死に渡され、彼は不法な者たちとともに数えられたからである。彼自身が多くの人の罪を負った。そして、彼らの不法のために渡された」13:8「喜べ、子を産まない不妊の女よ。産みの苦しみをしない女よ、声を放って叫べ。荒れ果てた女の子らは、夫のある女の子らよりも多いからである。主は、こう言われたのである。あなたの天幕の場所と幕の場所を広くせよ。しっかりと張れ。惜しむな。あなたの綱を長くし、あなたの杭を強くせよ。右に左に広げよ。あなたの子孫はもろもろの国を受け継ぎ、あなたは荒れ果てた町々に人を住まわせる」13:9「恥を受けたからといって、恐れるな。そしりを受けたからといって、恥じ入るな。あなたは永遠の恥を忘れ、やもめであったときのそしりを、もう思い出さないからである。主が、ご自分のために名を成されたからである。あなたを救い出されたかたは、イスラエルの神として、全地で呼ばれる。主はあなたを、捨てられて気落ちした女のように、若いときから憎まれた女のように、呼ばれた』（イザヤ五二・一〇～五四・六）」

14:1「すると、わたしたちは、悔い改めと神を知ることとの洗いによって、信じる者となったのです。イザヤが叫んでいるとおり、この洗いは、神のもろもろの民の不法のために設けられました。そして、わたしたちは知っています。イザヤが前もって告げたあの洗い清め、悔い改めた人々を清めることのできるただ一つの洗い清め、これこそがいのちの水なのです。一方、あなたがたが自分のために掘った水ためは、こわれていて、あなたがたには何の役にも立ちません。実際、肉と体だけを輝かせるあの洗い清めに、何の益があるでしょうか」14:2「魂を、怒りから、貪欲から、ねたみから、憎しみから洗い清めなさい。そうすれば、見よ、体は清いのです。実際、これが種なしパンのしるしです。古い悪いパン種の行いを行わないためなのです。ところが、あなたがたは、すべてを肉の意味で理解してきました。そして、このようなことをしてさえいれば、魂が欺きと、要するにあらゆる悪とに満ちていても、それが敬虔だと考えています」14:3「だからこそ、神は、種なしパンを食べる七日の後に、新しいパン種を自分たちのためにこねるよう命じられたのです。それは、別の行いをすることであって、古い、悪い行いをまねることではありません。そして、これこそが、この新しい、律法を与えるかたがあなたがたに求めておられることです。そのことを示すために、わたしが先に述べた言葉を、もう一度語りましょう。省いたほかの言葉もいっしょに語ります。それは、イザヤによって、こう語られています」14:4「『わたしに聞き従え。そうすれば、あなたがたの魂は生きる。わたしは、あなたがたと永遠の契約を立てる。それは、ダビデの聖なる確かな恵みである。見よ、わたしは彼を、もろもろの国民への証しとして与えた。もろもろの国民の君とし、命令する者とした。あなたを知らない国民はあなたを呼び求め、あなたを知らない民はあなたのもとに逃れて来る。あなたの神、イスラエルの聖なるかたのゆえである。神があなたに栄光を与えられたからである」14:5「神を尋ねよ。神を見いだすときに、神があなたがたに近づかれるときに、呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、不法な人はそのはかりごとを捨てて、主に立ち帰れ。そうすれば、あわれみを受ける。主は、あなたがたの罪を豊かにゆるされるからである。わたしのはかりごとは、あなたがたのはかりごとのようではなく、わたしの道も、あなたがたの道のようではない。天が地から遠く離れているほど、わたしの道はあなたがたの道から、あなたがたの考えはわたしの思いから遠く離れている」14:6「雪や雨は、天から降ると、地を潤すまでは帰らない。地に産ませ、芽を出させ、種まく者に種を与え、食べるためのパンを与える。わたしの口から出る言葉も、そのようである。わたしが望んだことがすべて成し遂げられるまでは、決して帰らない。わたしは、わたしの命じたことを成功させる」14:7「あなたがたは喜びのうちに出て行き、楽しみのうちに教えられる。山と丘とは躍り上

がってあなたがたを迎え、野の木はみな枝を打ち鳴らす。いばらに代わっていとすぎが生え、おどろに代わってミルトスが生える。主は名となり、永遠のしるしとなって、絶えることがない』（イザヤ五五・三〜一三）」14:8「トリュフォンよ、預言者たちは、これらの言葉や、これに類する言葉を語りました」とわたしは言った。「そのうち、あるものは、キリストの最初の来臨について語られたものです。そのとき、キリストが卑しく、姿もなく、死ぬべき者として現れられることが、告げ知らされています。またあるものは、キリストの二度目の来臨について語られたものです。そのときキリストは、栄光のうちに、雲の上に来られます。そして、あなたがたの民は、自分たちが刺し通したかたを見て、それと知るでしょう。十二預言者のひとりであるホセアと、ダニエルとが前もって告げたとおりです」

15〜17章　まことの断食と心の割礼、肉の割礼の意味、キリスト者へのそしり

15:1「ですから、神のまことの断食をすることも学びなさい。イザヤが言っているとおりです。神に喜ばれる者となるためです」15:2「イザヤは、こう叫んでいます。『力を込めて叫べ。惜しむな。ラッパのようにあなたの声を上げ、わが民にその罪を告げ、ヤコブの家にその不法を告げよ。彼らは日ごとにわたしを尋ね、わたしの道を知ることを望む。義を行い、神のさばきを捨てなかった民のようである」15:3「彼らは今、正しいさばきをわたしに求め、神に近づくことを望んで、こう言う。「われわれが断食したのに、なぜ、ごらんにならないのか。われわれが魂を低くしたのに、なぜ、ごぞんじないのか」。あなたがたは、断食の日に自分の望むことを見いだし、配下の者をみな突いて追い立てているからだ。見よ、あなたがたは訴えと争いのために断食し、身分の低い者をこぶしで打つ。なぜ、あなたがたは今日まで、わたしのために断食して、叫びのうちにあなたがたの声を聞かせようとするのか」15:4「わたしが選んだのは、このような断食ではない。人がその魂を低くする日でもない。あなたが首を輪のように曲げ、荒布と灰を下に敷くとする。そうしても、あなたがたはそれを、断食とも、主に受け入れられる日とも呼ぶことはできない。主は言われる、わたしが選んだのは、このような断食ではない。むしろ、不義のきずなをことごとくほどき、無理な取り引きの結び目を断ち切れ。打ち砕かれた者を解き放って去らせ、不正な証文をみな破り捨てよ」15:5「飢えた者にあなたのパンを裂いて与え、家のない貧しい者をあなたの家に迎え入れよ。裸の者を見たら、着せてやれ。あなたの血を分けた身内を、顧みずにいてはならない。そうすれば、あなたの光は朝早く輝き出て、あなたの衣[1]はすぐに生え出る。あなたの義はあなたの前を進み、神の栄光があなたを包む。そのとき、あなたが叫ぶと、神はあなたに耳を傾けられる。あなたがまだ語っているうちに、神は「見よ、わたしはここにいる」と言われる」15:6「また、あなたが、きずなと、手を挙げることと、つぶやきの言葉とを、あなたの中から取り除くとする。飢えた者に心からあなたのパンを与え、低くされた魂を満ち足らせるとする。そのとき、あなたの光は闇の中に輝き出て、あなたの闇は真昼のようになる。あなたの神は、いつもあなたとともにおられる。あなたは魂の望むとおりに満ち足り、あなたの骨は肥える。潤った園のように、水の泉、あるいは水の絶えない地のようになる』（イザヤ五八・一〜一一）」15:7「ですから、あなたがたの心の包皮に割礼を施しなさい。神の言葉が、これらすべての言葉を通して求めているとおりです」

16:1「また、神ご自身も、モーセを通してこう叫んでおられます。『あなたがたは、かたくなな心に割礼を施し、もはや首をこわくしてはならない。あなたがたの神である主、主の主は、大いなる、力ある、恐るべき神である。この神は、人をかたより見ず、決してまいないを取られない』（申命記一〇・一六〜一七）。また、レビ記ではこうです。『彼らはそむいて、わたしを軽んじ、わたしに逆らって曲がった道を歩んだ。それで、わたしも彼らに対して曲がった歩みをし、彼らをその敵の地で滅ぼす。そのとき、彼らの割礼のない心は恥じ入る』（レビ記二六・四〇〜四一）」16:2「実際、アブラハムから始まった肉による割礼は、印として与えられました。それは、あなたがたが、ほかの国民からも、わたしたちからも分けられるためです。また、今あなたがたが当然の報いとして受けている苦しみを、あなたがただけが受けるためです。また、あなたがたの土地が荒れ果て、町々が火で焼かれ、あなたがたの目の前で、外国人が実りを食い尽くすためです。そして、あなたがたのうちのだれも、エルサレムに足を踏み入れないためです」16:3「実際、あなたがたが、ほかの人々と見分けられるのは、肉にあるあなたがたの割礼によるほかに、何もありません。実際、神は、これから起こることを前もって知っておられたし、今も知っておられます。また、それぞれにふさわしいものを前もって備えておられます。思うに、このことをあえて否定する者は、あなたがたのうちにひとりもいないでしょう。すると、これらのことがあなたがたに起こったのも、ふさわしく、正しいことなのです」16:4「実際、あなた

がたは、あの正しいかたを殺し、そのかたより前には、その預言者たちを殺しました。そして今も、そのかたに望みを置く人々と、そのかたを遣わされた、全能の、万物の造り主である神とを、退けています。あなたがたの力の及ぶかぎり、卑しめてもいます。あなたがたの会堂で、キリストを信じる者たちを呪っているのです。実際、あなたがたには、自分の手でわたしたちを殺す権限がありません。今、権力を握っている者たちがいるからです。しかし、それができたときには、いつでもそれも行いました」16:5「だからこそ、神は、イザヤを通して、あなたがたに向かって叫んでおられます。『見よ、正しい者が滅びたのに、悟る者はない。正しい者は不義の前から取り去られたからである。彼は平安のうちにある。その墓は、ただ中から取り去られた。不法の子らよ、姦夫のすえ、遊女の子らよ、あなたがたはここに近寄った。あなたがたは、だれに向かって戯れていたのか。だれに向かって口を開き、だれに向かって舌をほしいままにしたのか』（イザヤ五七・一～四）」

17:1「実際、ほかの国民は、わたしたちとキリストに対するこの不義に、あなたがたほど深くかかわってはいません。あの正しいかたと、そのかたから出たわたしたちについて、ほかの国民も悪い先入観を抱いています。あなたがたが、その張本人なのです。実際、あなたがたは、あのただひとり傷のない正しい人を、十字架につけました。そのかたの打たれた傷によって、そのかたを通して父のもとに来る人々に、いやしが与えられます。その後、あなたがたは、そのかたが死者のうちからよみがえり、天に昇られたことを知りました。預言が、そうなることを前もって示していたとおりです。それなのに、あなたがたは、自分の行った悪を悔い改めなかっただけではありません。そのとき、エルサレムから選り抜きの人々を選んで、全地に送り出したのです。その人々は、キリスト者という無神論の異端が現れたと言いました。そして、わたしたちを知らない者がみなわたしたちに対して言う、あのことを言い立てました。そのため、あなたがたは、自分自身にとって不義の元凶になっているだけではありません。分け隔てなく、ほかのすべての人々にとっても、そうなのです」17:2「イザヤが、こう叫んでいるのは正しいのです。『あなたがたのゆえに、わたしの名は異邦人のあいだで汚されている』（イザヤ五二・五）。また、『わざわいなるかな、彼らの魂は。自分たちに対して悪いはかりごとをめぐらしたからである。彼らは「正しい者を縛ろう。彼はわれわれに不都合だから」と言った。それゆえ、彼らは自分の行いの実を食べる。わざわいなるかな、不法な者は。その手のわざに応じて、悪いことが彼に起こる』（イザヤ三・九～一一）。また、別のところでも、こう言っています。『わざわいなるかな、長い綱で引くように自分の罪を引き寄せ、雌牛のくびきの革ひもで引くように不法を引き寄せる者たちは。彼らは言う、「彼のすみやかさが近づくように。イスラエルの聖なるかたのはかりごとが来るように。われわれが知るためだ」と。わざわいなるかな、悪を善といい、善を悪という者たちは。光を暗しとし、暗きを光とし、苦きを甘しとし、甘きを苦しとする者たちは』（イザヤ五・一八～二〇）」17:3「すると、あなたがたは、ただひとり傷のない正しい光に逆らって、苦く、暗く、不正なことを全地で言い立てようと努めたのです。その光は、神から人々に遣わされたかたです。実際、あなたがたには、そのかたが不都合だと思えたのです。あなたがたのところで、こう叫ばれたからです。『「わたしの家は祈りの家である」と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にした』（マタイ二一・一三、ルカ一九・四六）。また、そのかたは、宮の中の両替人の台をひっくり返されました」17:4「また、そのかたは叫ばれました。『偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわいである。はっかとうん香の十分の一を納めておりながら、神への愛と公平とを悟らない。白く塗った墓よ。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨でいっぱいである』（マタイ二三・二三、二七、ルカ一一・四二）。また、律法学者たちには、こう言われました。『律法学者たちよ。あなたがたは、わざわいである。かぎを持っていながら、自分もはいらず、はいろうとする人たちを妨げている。盲目な案内者たちよ』（マタイ二三・一三、一六、二四、ルカ一一・五二）」

訳注

1 七十人訳の多くの写本では『あなたのいやし』。

18〜21章　肉の割礼を守らない理由、安息日と食物の定め

18:1「実際、トリュフォンよ、あなたは、わたしたちのあの救い主が教えられたことを読んだのです。あなた自身が認めて、そう言ったとおりです。ですから、預言の言葉に加えて、あのかたの短い言葉もいくつか思い起こしたことは、場違いではなかったと思います」18:2「ですから、身を洗って、今こそ清くなりなさい。あなたがたの魂から悪を取り除きなさい。神が、あなたがたに、この洗いで身を洗い、まことの割礼を受けるよう命じておられるとおりにです。実際、わたしたちも、肉によるこの割礼も、安息日も、あらゆる祭りも、ひとつ残らず守っていたでしょう。それが、どういうわけであなたがたに命じられたのかを、知らなかったならばです。それは、あなたがたの不法と、心のかたくなさのためでした」18:3「実際、わたしたちは、人間や邪悪な悪霊たちがわたしたちに加えるあらゆることを、耐え忍んでいます。言い表せないこと、すなわち死や刑罰にまで至るほどです。そして、そのようなことをわたしたちにする者たちも、あわれみを受けるよう祈っています。また、新しい、律法を与えるかたがわたしたちに命じられたとおり、だれにも少しの仕返しもしまいとしています。そうであれば、どうして、わたしたちに害にもならないもの、つまり肉の割礼や安息日や祭りを、守らないはずがあるでしょうか」

19:1 するとトリュフォンは言った[1]。「まさにそこが、当惑するに値する点です。あなたがたは、それほどのことを耐え忍びながら、今わたしたちが論じているほかのすべてのことは、守らないのですから」19:2「それは、この割礼が、すべての人に必要なのではなく、あなたがただけに必要だからです。前に言ったとおり、今あなたがたが当然の報いとして受けている苦しみを、受けるためです。実際、わたしたちは、水ためのあの役に立たない洗い清めも受け入れません。それは、このいのちの洗い清めとは何の関わりもないからです。だからこそ、神は、こう叫んでおられるのです。『あなたがたは、生ける泉である彼を捨てて、自分のために、こわれた水ためを掘った。それは水を入れておくことができない』（エレミヤ二・一三）」19:3「肉に割礼を受けているあなたがたは、わたしたちの割礼を必要としています。一方、それを持っているわたしたちは、あの割礼を少しも必要としません。実際、もし、あなたがたが思っているように、それが必要だったなら、神は、アダムを包皮のあるままに造られなかったでしょう。また、肉に包皮のあるままでいけにえをささげたアベルの供え物を、顧みられなかったでしょう。また、エノクが、包皮のあるままで神に喜ばれることもなかったでしょう。そのエノクは見いだされなくなりました。神が彼を移されたからです」19:4「ロトは、割礼のないまま、ソドムから救い出されました。ほかならぬあの御使いたちと主とが、彼を送り出されたのです。ノアは、もう一つの種族の初めですが、割礼のないまま、子らとともに箱舟に入りました。いと高き神の祭司メルキゼデクも、割礼がありませんでした。肉による割礼を初めて受けたアブラハムが、その彼に、十分の一のささげ物を与えました。そして、メルキゼデクはアブラハムを祝福しました。神は、その位にしたがって永遠の祭司をお立てになる、とダビデを通して示されたのです」19:5「すると、この割礼は、あなたがただけに必要だったのです。それは、民が民でなく、国民が国民でなくなるためでした。十二預言者のひとりホセアも言っているとおりです。実際、先に名を挙げた正しい人々はみな、安息日を守らずに神に喜ばれました。その後のアブラハムとその子らもみな、モーセに至るまで、そうでした。モーセのとき、あなたがたの民は、荒野で子牛を造って、神に対して不義で恩知らずであることを現したのです」19:6「ですから、神は、その民に合わせて、御名に対してするように、いけにえをささげることも命じられました。あなたがたが偶像を拝まないためです。ところが、あなたがたは、それさえ守らず、かえって自分の子供たちを悪霊たちにささげていました。すると、安息日を守るよう、あなたがたに命じられたのも、あなたがたが神を覚えるためです。実際、神の言葉も、このことを示し

て、こう言っています。『わたしが、あなたがたをあがなった神であることを知るためである』（エゼキエル二〇・一二、二〇）」

20:1「実際、神は、ある食物を断つことも、あなたがたに命じられました。食べたり飲んだりするときにも、あなたがたが神を目の前に置くためです。あなたがたは、神を知ることから離れるほうへ傾きやすく、たやすく離れてしまう者たちだからです。モーセも言っているとおりです。『民は食べ、また飲み、立って戯れた』（出エジプト記三二・六）。また、『ヤコブは食べて満ち足り、肥え太った。愛された者は足でけった。彼は肥え太り、厚くなり、幅広くなって、自分を造った神を捨てた』（申命記三二・一五）。実際、ノアは正しい人でした。それで、神は、いのちあるものは何でも食べることを、彼に許しておられました。ただし、血のままの肉、つまり死肉は別でした。そのことは、モーセを通して、創世記という書物の中で、あなたがたに語り伝えられています」20:2彼が『青草のように』（創世記九・三）と言おうとしたので、わたしは先回りして言った。「『青草のように』という言葉を、なぜ、神が言われたとおりに受け取らないのですか。神が、青草を人の食物として造っておられたように、動物も、肉を食べるために与えておられた、ということです。ところが、あなたがたは言います。わたしたちがある草を食べないのだから、そのときからノアにも同じように区別が定められていた、と」20:3「あなたがたが解き明かすとおりに信じてはなりません。実際、まず、どの青草も食べることができる、と言うこともできます。それを裏づけることもできますが、そのことにはかかずらわないでおきます。しかし、たしかにわたしたちは青草を見分けて、すべてを食べるわけではありません。それでも、それが清くないもの、汚れたものだから、食べないのではありません。そうではなく、苦いか、いのちにかかわるか、とげがあるからです。一方、甘く、栄養に富み、最も良いものは、海のものも陸のものも、すべて求め、あずかっています」20:4「同じように、神は、モーセを通して、汚れたもの、不義なもの、律法に反するものを断つよう、あなたがたに命じられました。あなたがたは、荒野でマナを食べていながら、金の子牛を造って拝んだからです。神があなたがたのために行われる、あらゆる驚くべきわざを見ていながらです。そのため、神がいつもこう叫んでおられるのは正しいのです。『悟りのない子らだ。彼らのうちには信仰がない』（申命記三二・二〇、エレミヤ四・二二）」

21:1「また、神は、あなたがたとあなたがたの先祖の不義のために、安息日も守るよう命じられました。前に言ったとおり、印としてです。ほかの命令も定めておられました。さらに、神は示しておられます。あなたがたのうちのある者を、ともかくも生かしておかれたのは、異邦人のためだったのだ、と。彼らのあいだで御名が汚されないためです。これらのことは、神ご自身の言葉が、あなたがたに論証することができます」21:2「その言葉は、エゼキエルを通して、こう語られています。『わたしは、あなたがたの神、主である。わたしの命令に歩み、わたしの定めを守れ。エジプトの風習に交わってはならない。わたしの安息日を聖別せよ。それは、わたしとあなたがたとのあいだの印となる。わたしが、あなたがたの神、主であることを知るためである。ところが、あなたがたはわたしを怒らせ、あなたがたの子らも、わたしの命令に歩まず、わたしの定めを守り行わなかった。それは、人が行えば、それによって生きる定めである。かえって、彼らはわたしの安息日を汚し続けた」21:3「そこで、わたしは、荒野で彼らの上にわたしの憤りを注ぎ、彼らに対するわたしの怒りをし尽くそうと言った。しかし、わたしはそうしなかった。わたしの名が、異邦人の前で決して汚されないためである。そして、異邦人の目の前で、彼らを導き出した。また、わたしは荒野で、彼らに向かって手を上げた。彼らを異邦人のあいだに散らし、国々にまき散らすためである。彼らが、わたしの定めを行わず、わたしの命令を退け、わたしの安息日を汚し続けたからである。また、彼らの目が、先祖の思い計ったものを追っていたからである」21:4「また、わたしは彼らに、良くない命令と、それによって生きることのできない定めとを与えた。そして、わたしが、胎を開くすべてのものを通り過ぎるとき、彼らを、その家々で汚す。滅ぼすためである』（エゼキエル二〇・一九～二六）」

訳注

1 写本では、ユスティノスの言葉で『わたしたちは守らない』とある。

22〜23章　いけにえと神殿の定め、割礼は印であること

22:1「また、神が、これらのことも同じように行うよう命じられたのは、あなたがたの民の罪と偶像礼拝のためでした。そのような供え物を必要とされたからではありません。このことについて、十二預言者のひとりであるアモスを通して、神がどう叫んで言われるかを、聞いてください」22:2「『わざわいなるかな、主の日を望む者よ。あなたがたにとって、この主の日は何になるのか。それは暗くて光がない。人が獅子の前を逃れても熊に出会い、また家に飛び込んで、手を壁につけると、蛇にかまれるようなものである。主の日は暗くて光がなく、闇であって、輝きがないではないか。わたしは、あなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたの祝いの集まりで、わたしは香りをかがない」22:3「あなたがたがわたしに燔祭といけにえをささげても、わたしは受け入れず、その酬恩祭の華やかさも顧みないからである。あなたの多くの歌と詩とを、わたしから遠ざけよ。あなたの楽器の音を、わたしは聞かない。裁きは水のように、義は渡ることのできない急流のように、流れ下る。イスラエルの家よ、あなたがたは荒野で、わたしにほふった獣といけにえとをささげたか、と主は言われる。かえって、あなたがたは、モロクの幕屋と、あなたがたの神ラファンの星とをかついだ。それは、あなたがたが自分のために造った像である」22:4「わたしは、あなたがたをダマスコのかなたに移す、と主は言われる。その名を全能の神という。わざわいなるかな、シオンでおごり暮らす者たち、サマリヤの山に頼る者たちよ。かしらたちの中で名を挙げられた者たちは、諸国民の初物を摘み取った。イスラエルの家は、自分たちのために入り込んだ。あなたがたはみな、カルネに渡って見よ。そこから大ハマテに行き、そこからペリシテびとのガテに下れ。これらすべての王国のうちで、最も強い町々である。彼らの土地は、あなたがたの土地よりも大きいか」22:5「悪い日に向かって来る者たちよ。偽りの安息日に近づき、それに触れる者たちよ。象牙の寝台に寝て、その寝床でおごり暮らす者たちよ。群れのうちから小羊を、牛の群れの中から乳飲みの子牛を取って食べる者たちよ。楽器の音に合わせて手を打ち鳴らす者たちよ。彼らは、それをとどまるものと考え、過ぎ去るものとは考えなかった。鉢で酒を飲み、最上の香油を身に塗る者たちよ。彼らは、ヨセフの破滅を少しも悲しまなかった。それゆえ今、彼らは、移される権力者たちを始めとして、捕われ人となる。悪人たちの住まいは覆され、馬のいななきはエフライムから絶やされる』（アモス五・一八〜六・七）」22:6「また、エレミヤを通して、こう言われます。『あなたがたの肉といけにえとを集めて食べよ。わたしは、いけにえについても注ぎの供え物についても、あなたがたの先祖に命じなかったからである。彼らの手を取ってエジプトの地から導き出した日のことである』（エレミヤ七・二一〜二二）」22:7「また、ダビデを通して、第四十九篇の詩篇の中で、こう言われました。『神々の神、主は語られ、日の出るところから日の入るところまで、地を呼ばれた。シオンから、その麗しさの輝きが現れる。神は、あらわに来られる。われらの神は、もだされない。み前には火が燃え、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天と地とを呼び寄せられる。いけにえをもって神の契約を結ぶ、神の聖徒たちを、神のもとに集めよ。天は神の義をあらわす。神は、さばきぬしだからである」22:8「わが民よ、聞け。わたしは語ろう。イスラエルよ、わたしはあなたにあかしをする。わたしは神、あなたの神である。わたしがあなたを責めるのは、あなたのいけにえのゆえではない。あなたの燔祭はいつもわたしの前にある。わたしは、あなたの家から子牛を受け取らない。また、あなたの群れから雄やぎを受け取らない。野のすべての獣はわたしのもの、山々の家畜も牛もわたしのものだからである。わたしは空の鳥をことごとく知っている。野の美しさはわたしとともにある」22:9「たといわたしは飢えても、あなたに告げない。世界とその中に満ちるものとは、わたしのものだからである。わたしは雄牛の肉を食べ、雄やぎの血を飲むだろうか。賛美のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き者に果せ。悩みの日にわたしを呼べ。わたしはあなたを助け、あなた

はわたしをあがめるであろう。しかし、神は罪人に言われた。「あなたはなぜ、わたしの定めを述べ、わたしの契約を口にするのか。あなたは教えを憎み、わたしの言葉を後ろに投げ捨てた」 22:10 「「あなたは盗びとを見れば、これとともに走り、姦淫を行う者と分け前をともにした。あなたの口は悪をあふれさせ、あなたの舌はたばかりを仕組んだ。あなたは座して兄弟をそしり、自分の母の子につまずきを置いた。あなたはこれらのことをしたが、わたしは黙っていた。あなたは不法にも、わたしがあなたと同じような者になると思った。わたしはあなたを責め、あなたの目の前にあなたの罪をならべる。神を忘れる者よ、このことを悟れ。さもないと、神がかき裂かれ、救い出す者はいない。賛美のいけにえは、わたしをあがめる。そこには、わたしが彼に示す道、わたしの救いがある」』（詩篇五〇篇）」 22:11 「すると、神は、あなたがたからいけにえを受け取られません。また、初めにささげるよう命じられたのも、必要とされたからではありません。そうではなく、あなたがたの罪のためでした。実際、エルサレムにあって神殿と呼ばれたものを、神はご自分の家、あるいは庭と認められました。それも、必要とされたからではありません。そうではなく、この点でも、あなたがたが神に心を向け、偶像を拝まないためでした。そうであることを、イザヤが言っています。『あなたがたは、わたしのためにどんな家を建てたのか、と主は言われる。天はわが位、地はわが足台である』（イザヤ六六・一）」

23:1 「しかし、もし、わたしたちが、これらのことをこのように認めないなら、ばかげた考えに陥ることになります。エノクやほかのすべての人々の神が、同じ神ではなかったかのような考えです。彼らは、肉による割礼も受けず、安息日も、ほかのことも、守りませんでした。それらは、モーセが行うよう命じたことです。あるいは、神が、いつも同じ正しいことを行うよう、あらゆる民族の人に望まれたのではないかのような考えです。そのようなことを認めるのは、笑うべきこと、愚かなことに思われます」 23:2 「一方、こう認めることができます。いつも同じであられる神が、罪人である人々のために、これらのことや、それに類することを命じられた、と。また、神が、人を愛し、先を知り、何も必要とせず、正しく、善いかたであると、明言することができます。皆さん、もし、そうでないというなら、いま問われているこれらのことをどう考えるのか、わたしに答えてください」 23:3 だれひとり何も答えなかったので、わたしは続けた。「それゆえ、トリュフォンよ、あなたと、改宗者になろうと望む人々とに、わたしは神聖な言葉を宣べ伝えましょう。あの人から聞いた言葉です。見てください。天体は休むことも、安息日を守ることもありません。あなたがたは、生まれたままでいてください。実際、もし、アブラハムより前に割礼が必要でなかったのなら、今も同じように必要ではありません。モーセより前に、安息日を守ることも、祭りも、供え物も必要でなかったのなら、今も同じです。神の子イエス・キリストが、神の御旨に従い、アブラハムの血筋のおとめマリヤによって[1]お生まれになった後の、今のことです」 23:4 「実際、アブラハム自身も、包皮のあるままで、神を信じたその信仰によって義とされ、祝福されました。聖書が示しているとおりです。一方、割礼は、印として受けたのであって、義のために受けたのではありません。聖書も事実も、わたしたちにそう認めさせるとおりです。そのため、あの民については、正当にもこう言われていたのです。『八日目に割礼を受けない魂は、その民のうちから断たれる』（創世記一七・一四）」 23:5 「また、女性は肉の割礼を受けることができません。このことも、この割礼が、義の行いとしてではなく、印として与えられたことを示しています。実際、神は、女性も同じように、正しく徳のあることをすべて守ることができるように造られました。ただし、男と女とで、肉の形が違っているのを、わたしたちは見ます。けれども、そのために、そのどちらをも、正しいとも不義とも見なしはしません。そうではなく、敬虔と義によって、そう見なすのです」

訳注

1 写本では『マリヤによって』が『罪なしに』となっている。

24〜27章　新しい契約と、異邦人が受け継ぐ嗣業、安息日を命じる預言

24:1 わたしはさらに言った。「皆さん、八日目が、七日目にもまさって、ある奥義を持っていたことを示すこともできたのです。その奥義は、これらのことを通して、神が告げ知らせておられたものです。しかし、今は別の話にそれていると思われないように、叫んで言います。悟ってください。あの割礼の血は廃され、わたしたちは救いの血を信じたのです。今や、別の契約があり、別の律法がシオンから出ました」 24:2 「イエス・キリストは、望む者すべてに、石の小刀で割礼を施されます。昔から告げ知らされていたとおりです。それは、正しい国民、信仰を守る民が生まれるためです。真理をつかみ、平和を守る民です」 24:3 「神を恐れる人々、エルサレムの良いものを見たいと望む人々は、みな、わたしとともに来てください。さあ、主の光に歩みましょう。主は、その民、ヤコブの家を捨てられたからです。すべての国々よ、来てください。もろもろの民の不法のためにもはや攻められることのない、エルサレムに集まりましょう。実際、イザヤを通して、こう叫ばれます。『わたしは、わたしを求めない者たちに現れ、わたしを尋ねない者たちに見いだされた」 24:4 「わたしの名を呼ばなかった国々に、わたしは言った、「見よ、わたしはここにいる」と。わたしは、従わず、言い逆らう民に、よからぬ道に歩む者たちに、かえって自分の罪の後に従う者たちに、ひねもす手を伸べた。わたしの前で、わたしの怒りを引き起こす民である』（イザヤ六五・一〜三）」

25:1 「この人々は、自分を義とし、自分はアブラハムの子であると言っています。その彼らが、たとい小さな場所でも、わたしたちとともに受け継ぎたいと望むようになるでしょう。聖霊が、イザヤを通して、彼らになりかわって、こう叫んで言っているとおりです」 25:2 「『どうか、天から立ち帰り、あなたの聖なる栄光の家からごらんください。あなたの熱心と大能とは、いったいどこにありますか。主よ、あなたの豊かなあわれみは、どこにあるのですか。あなたは、われわれに対してみずからをおさえられたのです。あなたこそ、われわれの父だからです。アブラハムはわれわれを知らず、イスラエルはわれわれを認めなかったからです。しかし、主よ、われわれの父よ、あなたはわれわれを救い出してください。初めから、あなたの名はわれわれの上にあります。主よ、なぜ、われわれをあなたの道から迷わせ、われわれの心をかたくなにして、あなたを恐れないようにされたのですか」 25:3 「あなたのしもべらのために、あなたの嗣業である部族らのために、立ち帰ってください。われわれが、あなたの聖なる山を少しでも受け継ぐためです。われわれは、初めのころのように、あなたがわれわれを治められず、あなたの名がわれわれの上にとなえられなかったときのようになりました。あなたが天を開かれるなら、山々は、あなたの前でおののきにとらえられ、ろうが火の前で溶けるように溶ける。火は逆らう者たちを焼き尽くし、あなたの名は、逆らう者たちのあいだで明らかになる。もろもろの国は、あなたの前で騒ぎ乱れる」 25:4 「あなたが栄光あるわざを行われるとき、山々は、あなたの前でおののきにとらえられる。昔から、われわれは、あなたのほかに神を聞いたことがなく、われわれの目も、あなたのほかに神を見たことがなく、あなたのわざも見たことがない。神は、悔い改める者たちにあわれみを施される。正しいことを行う者たちを迎えられ、彼らは、あなたの道を思い起こす。見よ、あなたは怒られ、われわれは罪を犯した。それゆえ、われわれは迷い、みな汚れた者となった。われわれの義はことごとく、汚れた衣のようである。われわれは、自分の不法のために、木の葉のように散った。こうして、風がわれわれを吹き去る」 25:5 「あなたの名を呼ぶ者はなく、あなたによりすがることを思い起こさない。あなたが、み顔をわれわれから背け、われわれの罪のゆえに、われわれを渡されたからである。主よ、今こそ、立ち帰ってください。われわれはみな、あなたの民だからである。あなたの聖所の町は荒野となり、シオンは荒野のようになり、エルサレムはのろいとなった。家、すなわちわれわれの聖所と、われわれの先祖がほめたたえた栄光とは、火で焼かれた。そして、栄えある国々は、ことごとく倒れ

た[1]。主よ、これらのことがあっても、あなたはみずからをおさえ、黙して、われわれをいたく低くされた』（イザヤ六三・一五～六四・一一）」 25:6 するとトリュフォンは言った。「では、あなたの言うのは、どういうことですか。わたしたちのうちのだれも、神の聖なる山で、何ひとつ受け継がない、ということですか」

26:1 わたしは言った。「そうは言っていません。そうではなく、キリストを迫害し、今も迫害していて、悔い改めない者たちは、聖なる山で何ひとつ受け継ぎません。一方、キリストを信じ、犯した罪を悔い改めた異邦人は、受け継ぎます。族長たちや預言者たち、またヤコブから生まれたすべての義人とともにです。たとい安息日を守らず、割礼も受けず、祭りも守らなくても、必ず神の聖なる嗣業を受け継ぐのです」 26:2 「実際、神は、イザヤを通して、こう言われます。『わたしは主なる神、義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手を取り、あなたを強くする。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与えた。盲人の目を開き、足かせをはめられた者を縄目から導き出し、暗きに座する者を獄屋から導き出すためである』（イザヤ四二・六～七）」 26:3 「また、こうも言われます。『もろもろの民の上に旗をあげよ。見よ、主は地の果にまで聞こえるようにされたからである。シオンの娘たちに言え、「見よ、あなたの救い主は来た。その報いを手にし、そのわざはその前にある」と。これは、主にあがなわれた聖なる民と呼ばれる。あなたは、尋ね求められる町、捨てられない町となえられる。「エドムから来るこの者はだれか。その衣の赤さはボズラからのものか。装いの麗しいこの者が、力をもって激しく上って来るのか」。「わたしは、義と、救いのさばきとを語る者である」」 26:4 「「なぜ、あなたの衣は赤く、あなたの装いは、踏まれた酒ぶねから出たようなのか」。「踏みつぶされたもので満ちている。わたしはただひとりで酒ぶねを踏んだ。もろもろの民のうちには、わたしとともにいる者はひとりもない。わたしは憤りによって彼らを踏みつけ、土くれのように彼らを砕き、彼らの血を地に流れ下らせた。報復の日が彼らに来て、あがないの年が来ているからである。わたしは見たが、助ける者はなく、心を留めたが、ささえる者はなかった。そして、かいなが救い出し、わたしの憤りが立ち上がった。わたしは怒りによって彼らを踏みつけ、彼らの血を地に流れ下らせた」』（イザヤ六二・一〇～六三・六）」

27:1 するとトリュフォンは言った。「なぜ、あなたは、預言の言葉から望むものだけを選び出して語り、安息日を守るようはっきりと命じている言葉には触れないのですか。実際、イザヤを通して、こう言われています。『もし安息日にあなたの足をとどめ、聖なる日にあなたの思いのままを行わず、安息日を喜ばしい日、あなたの神の聖なる日と呼び、仕事のために足を上げず、口から言葉を語らないならば、あなたは主に信頼する者となる。主はあなたを地の良き物へと上らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、あなたを養われる。主の口がこれを語られたからである』（イザヤ五八・一三～一四）」 27:2 わたしは言った。「友人たちよ、わたしがそのような預言を省いたのは、それがわたしに逆らうと思ったからではありません。そうではなく、あなたがたが、次のことを理解してきたし、今も理解していると思ったからです。神が、モーセを通して命じられたのと同じことを、すべての預言者を通しても命じておられるとします。そうだとしても、それは、あなたがたの心のかたくなさと、神への恩知らずのためです。そのために、いつも同じことを叫んでおられるのです。せめてそうして、いつかは悔い改めて、神に喜ばれるようになるためです。そして、自分の子供たちを悪霊にささげることも、盗びとの仲間となり、まいないを好み、報いを追い求めることも、なくなるためです。みなしごのために裁かず、寡婦の訴えに心を向けないことも、それどころか、手を血で満たすことも、なくなるためです」 27:3 「実際、シオンの娘たちは、首を高くして歩き、目で合図しながら戯れ、衣のすそを引きずりました。実際、こうも叫ばれます。『すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている。悟りのある人はいない、ひとりもいない。彼らは、その舌で人を欺き、彼らののどは開いた墓であり、彼らのくちびるにはまむしの毒がある。彼らの道には破壊と悲惨とがあり、彼らは平和の道を知らない』（詩篇一四・二～三、ローマ三・一一～一三、一六～一七）」 27:4 「そのため、初めには、あなたがたの悪のために、これらのことが命じられていました。それと同じように、神は、同じことを通して、ご自分を思い起こし、知るように、あなたがたを招いておられます。あなたがたがその悪にとどまり、いやむしろ、それをつ

のらせているからです。しかし、神ご自身が言われるとおり、あなたがたは、心のかたくなな、悟りのない、目の見えない、足のなえた民です。うちに信仰のない子らです。くちびるでだけ神を敬い、心は神から遠く離れ、神の教えではなく、自分たちの教えを教えているのです」27:5「そうでないなら、言ってください。大祭司たちが安息日に供え物をささげて罪を犯すことを、神は望まれたのでしょうか。あるいは、安息日に割礼を受ける者たちと施す者たちが罪を犯すことを、望まれたのでしょうか。神は、生まれた子が、たとい安息日であっても同じように、八日目には必ず割礼を受けるよう命じておられるのです。それとも、もし安息日には悪いことだと知っておられたのなら、神は、生まれる子に、安息日の一日前か一日後に割礼を受けさせることが、おできにならなかったのでしょうか。あるいはまた、モーセとアブラハムより前に、義人と呼ばれ、神に喜ばれた人々がいました。彼らは、包皮に割礼を受けることも、安息日を守ることもしませんでした。なぜ神は、彼らにこれらのことを行うよう教えられなかったのでしょうか」

訳注

1 七十人訳では『われわれの栄えあるものは、ことごとく倒れた』。

28〜30章　心の割礼と、国々のささげるいけにえ、悪霊から守られる祈り

28:1 するとトリュフォンは言った。「前にも、あなたがこの問いを持ち出すのを聞いて、わたしたちは心に留めました。実際、本当のところ、心に留めるに値する問いです。わたしは、多くの人がするように、『神がそうよしとされたのだ』と言うのがよいとは思いません。それは、問われていることに答えられない者たちが、いつも持ち出す言い逃れだからです」 28:2 わたしは言った。「わたしは、聖書からも事実からも、論証を立てて論じているのです。そうである以上、割礼のないこのわたしを信じるのを、先に延ばしたり、ためらったりしないでください。あなたがたが改宗するために残された時は、わずかです。もしキリストが先に来られたなら、あなたがたは、むなしく悔い改め、むなしく泣くことになります。実際、あなたがたの願いは聞き入れられないでしょう。エレミヤは、民に向かってこう叫んでいます。『あなたがたの新田を耕せ。いばらの中に種をまくな。主のために割礼を施し、あなたがたの心の包皮に割礼を施せ』（エレミヤ四・三〜四） 28:3 「ですから、いばらの中や、耕していない地に、種をまいてはなりません。そこからは、あなたがたに実りはありません。キリストを知ってください。そうすれば、見よ、あなたがたの心に、良い新田が、良い、肥えた新田ができます。実際、『見よ、このような日が来ると、主は言われる。わたしは、包皮に割礼を受けたすべての者を罰する。エジプト、ユダ、エドム、モアブの子らである。異邦人はみな割礼のない者であり、イスラエルの全家も心に割礼のない者だからである』（エレミヤ九・二五〜二六） 28:4 「ごらんなさい。神が望まれるのは、印として与えられたこの割礼ではありません。実際、この割礼は、エジプト人にも、モアブの子らにも、エドムの子らにも、役に立ちません。そうではなく、ある人がスキタイ人やペルシヤ人だとします。そうだとしても、神とそのキリストを知り、永遠の正しい定めを守る人は、良い、益のある割礼を受けているのです。その人は神の友であり、神は、その人の贈り物と供え物とを喜ばれます」 28:5 「友人の皆さん、神ご自身の言葉も、あなたがたに示しましょう。神が、十二預言者のひとりマラキを通して、民に語られた言葉です。それはこうです。『わたしはあなたがたを喜ばないと、主は言われる。わたしは、あなたがたの手から、あなたがたのいけにえを受けない。日の出る所から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられているからである。どこでもわが名のために、いけにえが、清いいけにえがささげられているからである。わが名が国々のうちに敬われているからであると、主は言われる。ところが、あなたがたはそれを汚している』（マラキ一・一〇〜一二） 28:6 「また、ダビデを通して、こう言われました。『わたしの知らなかった民がわたしに仕え、耳に聞くやいなや、わたしに従った』（詩篇一八・四三〜四四）」

29:1 「わたしたち異邦人は、ともに集まって、神をあがめましょう。神は、わたしたちをも顧みてくださったからです。栄光の王、万軍の主を通して、神をあがめましょう。実際、神は、異邦人をも喜ばれ、あなたがたからよりも、わたしたちから、いけにえを喜んで受け入れておられます。すると、神から証しを受けたわたしに、なお割礼のことが何の意味を持つでしょうか。聖霊によって洗い清められたわたしに、あの洗い清めがどうして必要でしょうか」 29:2 「こう語れば、わずかな分別しか持たない人々をも説き伏せられると思います。実際、これらの言葉は、わたしが組み立てたものでも、人間の技巧で飾り立てたものでもありません。そうではなく、ダビデが歌い、イザヤが福音として告げ、ゼカリヤが宣べ伝え、モーセが書き記した言葉です。トリュフォンよ、あなたはこれらの言葉に見覚えがありますか。これらは、あなたがたの書物に収められています。いや、むしろ、あなたがたのではなく、わたしたちの書物にです。実際、わたしたちはこれらの言葉に従っていますが、あなたがたは読んでいながら、その中の意味を理解していません」 29:3 「ですから、腹を立てないでください。神ご自身が形造られた、わたしたちのからだの包皮を、非難しないでください。また、わたしたちが安息日に温かいものを飲むことを、ひどいことだと考えないでくださ

い。神も、ほかのすべての日と同じように、この日にも、世界を同じように治めておられるからです。大祭司たちも、ほかの日と同じように、この日にも、供え物をささげるよう命じられていたからです。あれほど多くの義人も、これらの律法の定めを何ひとつ行わずに、神ご自身から証しを受けているからです」

30:1「そうではなく、あなたがた自身の悪をこそ責めてください。分別のない者たちは、神をさえ中傷することができます。神が、同じ正しい定めをいつもすべての人に教えられたのではないかのようにです。それは、あなたがたの悪のためです。実際、多くの人には、このような教えは、理に合わず、神にふさわしくないものと思われました。その人々は、次のことを知る恵みを受けなかったのです。神は、悪を行い、魂の病にかかっていたあなたがたの民を、霊の立ち帰りと悔い改めへと招かれました。そして、モーセの死の後に出た預言は、永遠のものなのです」30:2「皆さん、このことは、その詩を通して言われています[1]。また、それらによって賢くされたわたしたちは、それらを蜜よりも、蜂の巣よりも甘いと言い表しています。そのことは、わたしたちが死に至るまで主の名を否まない者となることから明らかです。また、主を信じるわたしたちは、よそ者たち、すなわち悪い、惑わす霊たちから守ってくださるよう、主に願っています。預言の言葉は、主を信じる者のひとりになりかわって、そう語っています。このことは、すべての人に明らかです」30:3「実際、わたしたちは、悪霊たちから守られるよう、イエス・キリストを通して、いつも神に願い求めています。わたしたちが、キリストを通して神に立ち帰った後に、傷のない者であるためです。悪霊たちは、神を敬うことにとってよそ者であり、わたしたちは、かつてそれらを拝んでいたのです。実際、わたしたちは、そのかたを助け手、あがない主と呼んでいます。悪霊たちでさえ、そのかたの名の力に震えおののきます。今日も、悪霊たちは、イエス・キリストの名によって命じられると、服従するのです。ユダヤの総督であったポンテオ・ピラトのもとで、十字架につけられたかたの名です。こうして、このことからも、すべての人に明らかになります。そのかたの父は、そのかたに大きな力を与えられました。悪霊たちでさえ、そのかたの名と、そのかたが受けられた苦しみの計らいとに服従するほどの力です」

訳注

1 ここで詩篇一九篇が引かれ、写本で脱け落ちたとみる説がある。

31〜32章　人の子の来臨を告げるダニエルの幻と、主の右に座すかた

31:1「キリストの受けられた苦しみの計らいには、これほどの力が伴いましたし、今も伴っています。そのことが示されるのなら、栄光のうちに起こるキリストの来臨には、どれほどの力が伴うでしょうか。実際、ダニエルが示したとおり、キリストは人の子のように雲の上に来られ、御使いたちも、ともにやって来ます」31:2「その言葉は次のとおりです。『わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられ、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎のようであり、その車輪は燃える火であった。彼の前から、火の川が出て流れていた。彼に仕える者は千々、彼のかたわらに立つ者は万々であった。かずかずの書き物が開かれ、審判を行う者がその席に着いた」31:3「そのとき、わたしは、その角の語る大いなる言葉の声に目を留めていた。すると、獣は打ち殺され、そのからだは滅び、焼かれるために火に渡された。その他の獣はその主権を奪われ、獣たちには、時と時期に至るまで、命を保つ時期が与えられた。わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲とともに来る。彼は日の老いたる者のところまで来て、その前に立った。そして、そばに立つ者たちが、彼を近くに導いた」31:4「彼に権威と王の誉れとが与えられ、地のすべての国民が種族ごとに、またすべての栄光が、彼に仕える。その権威は永遠の権威であって、取り去られることがなく、その国は滅びることがない。わたしの霊は、わたしの身のうちでおののき、わたしの頭の幻は、わたしを悩ました。わたしは、そこに立っている者のひとりに近寄って、このすべての事の真意を尋ねた。するとその者は答えてわたしに語り、言葉の解き明かしを告げ知らせた。「この大きな獣は四つの国である。それらは地から滅び、とこしえに、世々限りなく、国を受けることはない」」31:5「そこでわたしは、第四の獣について確かに知ろうとした。その獣は、すべてを滅ぼし、はなはだ恐ろしかった。その歯は鉄、そのつめは青銅であって、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。また、その頭にある十の角と、そこに生え出た一つの角についても知ろうとした。この角のために、先の角のうち三つが抜け落ちた。その角には目があり、また大きな事を語る口があって、その姿はほかの角にまさっていた。わたしが見つめていると、その角は聖徒たちに戦いをいどみ、彼らを打ち負かした。ついに日の老いたる者が来られ、いと高き者の聖徒たちに審判をゆだねられた。そして時が来て、いと高き者の聖徒たちが国を手にした」31:6「また、第四の獣について、わたしにこう告げられた。「第四の国が地上に起こる。これは、これらすべての国と異なって、全地を食い尽くし、これを荒らし、かつ打ち砕く。十の角は、十人の王が起こることである。その後に、もうひとりが起こる。彼は悪において先の者たちにまさり、三人の王を低くする。彼は、いと高き者に向かって言葉を語り、いと高き者の別の聖徒たちを滅ぼし、時と時期とを変えようと望む。そして、時と、時々と、半時の間、彼の手に渡される」」31:7「「そして、審判が座に着き、その主権は移され、消し去られ、終わりまで滅ぼされる。国と権威と、天の下にある国々の場所の威光とは、いと高き者の聖なる民に与えられ、永遠の国を治めさせる。すべての権威は彼に服し、彼に従う」。ここで言葉は終わった。わたしダニエルは、ひどく驚きにとらわれ、身の様子が変わった。そして、この言葉を心に留めた』（ダニエル七・九〜二八）」

32:1わたしが話し終えると、トリュフォンは言った。「人よ、これらの聖書の言葉や、このような言葉は、わたしたちに、栄光ある偉大なかたを待つよう強いています。人の子のように、日の老いたる者から永遠の国を受けるかたです。ところが、あなたがたのいわゆるキリストは、卑しく、栄光もない者となり、神の律法にある最も重いのろいにさえ陥りました。実際、十字架につけられたのです」32:2わたしは彼に向かって言った。「皆さん、わたしが先に詳しく述べた聖書から、次のことが言われていなかったとします。キリストの姿には栄光がなく、その生まれは語り尽くせない。キリストの死の代わりに、富む者たちが殺される。

『その打たれた傷によって、われわれはいやされた』。キリストは羊のように引かれて行かれる。また、わたしが、キリストの来臨は二度あると解き明かさなかったとします。一度目は、あなたがたがキリストを刺し通したときです。二度目は、あなたがたが、自分たちの刺し通したかたを、それと知るときです。そのとき、あなたがたの部族は部族ごとに嘆き、女たちは女たちで、男たちは男たちで、別れて嘆きます。そうであったなら、わたしは、あいまいで解きがたいことを言っていると思われたでしょう。しかし今、わたしは、どの言葉においても、あなたがたのもとにある聖なる預言の書から、すべての論証をしています。あなたがたのうちのだれかが、残された者の中に見いだされうることを望んでいるからです。万軍の主からの恵みによって、永遠の救いへと残された者です」 32:3 「ですから、いま問われていることが、あなたがたにいっそう明らかになるようにしましょう。そのために、祝福されたダビデを通して語られた、ほかの言葉もお話しします。それらの言葉から、あなたがたは理解するでしょう。キリストが、聖なる預言の霊によって主と呼ばれていることです。また、万物の主である父が、キリストを地から導き上げ、ご自分の右に座らせておられることです。その敵をその足台とされるまでです。このことは、わたしたちの主イエス・キリストが、死人の中からよみがえられた後、天に上げられたときから起こっています。時は満ちようとしており、いと高き者に向かって冒瀆的で大胆なことを語ろうとしている者は、もう戸口に来ています。ダニエルは、その者が時と時々と半時の間支配すると示しています」 32:4 「ところが、あなたがたは、その者がどれほどの期間支配することになるのかを知らないので、別の考えを抱いています。実際、あなたがたは、『時』は百年を言うのだと解き明かしています。もしそうなら、不法の者は、少なくとも三百五十年、王として治めなければなりません。聖なるダニエルの言った『時々』を、ただ二つの時と数えるとしても、そうなります」 32:5 「わたしが話のわき道で語ってきたこれらのことも、すべて、あなたがたに向けて言っているのです。神は、あなたがたに対して、こう言われました。『あなたがたは悟りのない子らだ』（エレミヤ四・二二参照）。また、『それゆえ、見よ、わたしはこの民を移すことを重ね、彼らを移す。わたしは賢い者たちの知恵を取り去り、彼らのうちの聡明な者たちの悟りを隠す』（イザヤ二九・一四）。あなたがたが今こそ、これらの言葉に納得して、自分自身と、あなたがたの言うことを聞く人々とを惑わすのをやめるためです。そして、キリストの恵みによって賢くされたわたしたちから学ぶためです」 32:6 「では、ダビデを通して語られた言葉も、次のとおりです。『主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。主は力あるつえを、シオンからあなたに遣わされる。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。あなたの力の日に、主権はあなたとともにある。あなたの聖なる者たちの輝きのうちに、わたしは明けの明星の前に、胎からあなたを生んだ。主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」。主はあなたの右におられて、その怒りの日に王たちを打ち破られた。主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たされる。彼は道のほとりの谷川から飲む。それゆえ、そのこうべをあげる』（詩篇一一〇篇）」

33〜35章　とこしえの祭司と永遠の王、キリストの名をかたる者たち

33:1 わたしは言葉を継いだ。「あなたがたは、この詩はヒゼキヤ王について言われたものだと、あえて解き明かしています。わたしはそれを知らないわけではありません。しかし、あなたがたが迷っていることを、言葉そのものから、すぐに示しましょう。『主は誓いを立てて、み心を変えられることはない』と言われています。また、『あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である』と（詩篇一一〇・四）。その後に続く言葉も、その前にある言葉も、言われています。ヒゼキヤが祭司になったこともなく、神の永遠の祭司でもないことには、あなたがたでさえ、あえて反論しようとはしないでしょう。一方、これがわたしたちのイエスについて言われていることは、その言葉そのものが指し示しています。しかし、あなたがたの耳はふさがれ、心は鈍くされています」 33:2 「実際、『主は誓いを立てて、み心を変えられることはない。あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である』とあります。この言葉で、神は、あなたがたの不信仰のゆえに、誓いをもって明らかにされました。そのかたが、メルキゼデクの位にしたがう大祭司であられることをです。つまり、こうです。モーセの書き記したところでは、メルキゼデクはいと高き者の祭司となりました。この人は、包皮のある者たちの祭司でした。そして、割礼を受けていて、十分の一を自分にささげたアブラハムを、祝福しました。それと同じように、神は、ご自分の永遠の祭司が、包皮のある者たちの祭司となられることを、明らかにしておられたのです。聖霊によって主とも呼ばれるかたです。また、割礼のある者たちでも、そのかたのもとに来るなら、そのかたは受け入れ、祝福されます。そのかたのもとに来るとは、そのかたを信じ、そのかたから祝福を求めることです。また、そのかたが、まず低い人間となられ、その後に高く上げられることは、詩の終わりの言葉が明らかにしています。実際、『彼は道のほとりの谷川から飲む』とあり、それと合わせて『それゆえ、そのこうべをあげる』とあるのです（詩篇一一〇・七）」

34:1 「さらに、あなたがたが聖書を少しも悟っていないことを、納得していただきましょう。そのために、聖霊によってダビデに語られた、もう一つの詩を思い起こします。あなたがたは、この詩はソロモンについて言われたものだと言います。ソロモンもまた、あなたがたの王となった人です。しかし、この詩もまた、わたしたちのキリストについて言われたものなのです。ところが、あなたがたは、同じ名で別のものを指す語によって、自分を欺いています。実際、『主の律法は傷がない』と言われています（詩篇一九・七）。あなたがたは、これを、モーセを通して与えられた律法のことだと解き明かし、その後に来るはずの律法のこととはしていません。神が、新しい律法と新しい契約とをお立てになる、と叫んでおられるのにです」 34:2 「また、『神よ、あなたの公平を王に与えてください』と言われています。ソロモンが王となったので、あなたがたは、その詩は彼について言われたのだと言います。しかし、詩の言葉は、それが永遠の王、すなわちキリストについて言われたことを、はっきりと告げ知らせているのです。実際、キリストは、王、祭司、神、主、御使い、人、軍勢の長、石であられると告げ知らされています。また、お生まれになる幼子であられ、まず苦しみを受けるかたとなられると、告げ知らされています。その後、天に昇られ、再び栄光のうちに来られて、永遠の国を持たれるかたであられるとも、告げ知らされています。わたしが聖書のすべてから示していくとおりです」 34:3 「わたしの言ったことを理解していただくために、詩の言葉を述べます。それは次のとおりです。『神よ、あなたの公平を王に与え、あなたの義を王の子に与えてください。彼が義をもってあなたの民をさばき、公平をもってあなたの貧しい者をさばくためである。もろもろの山は民のために平和を受け、もろもろの丘は義を受けるように。彼は民の貧しい者をさばき、乏しい者の子らを救い、しえたげる者を低くする。彼は太陽とともにとどまり、月より前に、代々に至る。彼は、羊の毛の上に降る雨のように、地にしたたるしずくのように下る」 34:4 「彼の日々に義が起こ

り、平和の豊かさは、月が取り去られるまで続く。彼は海から海まで、川々から地のはてまで治める。エチオピヤ人は彼の前にひれ伏し、彼の敵はちりをなめる。タルシシと島々の王たちは贈り物を携えて来る。アラビヤ人とセバの王たちは贈り物を携えて来る。地のすべての王は彼を拝み、すべての国民は彼に仕える。彼は貧しい者を力ある者から救い出し、助け手のない乏しい者を救い出したからである」34:5「彼は貧しい者と乏しい者とをあわれみ、乏しい者たちのいのちを救う。彼は利息と不義とから、彼らのいのちをあがなう。彼の名は彼らの前で尊い。彼は生きながらえ、アラビヤの黄金が彼にささげられる。人々は絶えず彼のために祈り、ひねもす彼を祝福する。地には支えがあり、それは山々の頂の上に高く上がる。その実はレバノンにまさり、人々は地の草のように、町から咲き出る」34:6「彼の名は、とこしえに祝福される。彼の名は太陽より前からとどまる。地のすべての部族は彼によって祝福を受け、すべての国民は彼をさいわいなる者ととなえる。イスラエルの神、主はほむべきかな。ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。その栄光ある名は、とこしえに、世々限りなく祝福される。全地はその栄光に満たされる。そうなりますように、そうなりますように』（詩篇七二・一～一九）。わたしが挙げたこの詩の終わりには、『エッサイの子ダビデの賛歌は終わった』と書かれています（詩篇七二・二〇）」34:7「ソロモンが名高い偉大な王となったことは、わたしも知っています。エルサレムにあって神殿と呼ばれた家は、彼の代に建てられました。しかし、詩で言われたことが何ひとつ彼の身に起こらなかったことは、明らかです。実際、すべての王が彼を拝んだのでもなく、彼が地のはてまで王として治めたのでもありません。彼の敵が彼の前にひれ伏して、ちりをなめたのでもありません」34:8「それどころか、わたしはあえて、列王紀に書かれている彼の行いを言います。彼は一人の女のために、シドンで偶像を拝んでいたのです（列王紀上一一・一～八参照）。異邦人の中から、十字架につけられたイエスを通して、万物の造り主である神を知った者たちがいます。彼らは、そのようなことを、忍んでしようとはしません。そうではなく、偶像を拝まず、偶像に供えた肉を食べないためなら、あらゆる虐待と刑罰を、最後の死に至るまで忍ぶのです」

35:1 するとトリュフォンは言った。「ですが、イエスを告白すると言い、キリスト者と呼ばれている人々がいます。聞くところでは、その多くが、偶像に供えた肉を食べ、そのことで何の害も受けないと言っています」35:2 わたしは答えた。「そのような人々がいます。自分はキリスト者であると言い、十字架につけられたイエスを主とも、キリストとも告白すると言います。それでいて、そのかたの教えではなく、惑わす霊たちから出た教えを教えています。わたしたちは、イエス・キリストの真実で清い教えの弟子です。そのような人々がいることからも、わたしたちは、そのかたが告げられた望みに、いっそう信頼を置き、いっそう堅く立つのです。実際、そのかたは、ご自分の名において起こることを、前もって言われました。それが成し遂げられていくのを、わたしたちは、この目で、現実に見ているのです」35:3「実際、そのかたはこう言われました。『多くの者が、わたしの名を名のってやって来る。外側には羊の皮を着ているが、内側は強欲なおおかみである』（マタイ二四・五、七・一五）。また、『分争と分派が起こる』（第一コリント一一・一八～一九参照）。また、『にせ預言者たちを警戒せよ。彼らはあなたがたのところにやって来る。外側には羊の皮を着ているが、内側は強欲なおおかみである』（マタイ七・一五）。また、『多くのにせキリストやにせ使徒が起こって、信者たちの多くを惑わす』（マタイ二四・一一、二四、マルコ一三・二二）」35:4「すると、友人の皆さん、そういう者たちが、今も多くいますし、これまでも多くいました。イエスの名によってやって来て、無神論の考えや冒瀆を語り、また行うよう教えた者たちです。わたしたちは、彼らを、それぞれの教えと見解の始まりとなった人の呼び名で呼んでいます」35:5「実際、彼らは、それぞれ別のしかたで、冒瀆するよう教えています。万物の造り主と、その造り主が、来られると預言しておられたキリストと、アブラハム、イサク、ヤコブの神とをです。わたしたちは、そのだれとも交わりを持ちません。彼らが無神論者で、神を敬わず、不義で、不法な者であることを、知っているからです。イエスをあがめる代わりに、名だけで告白していることも、知っているからです」35:6「そして、彼らは自分たちをキリスト者と言っています。ちょうど、異邦人のあいだで、人々が手で造ったものに神の名を書き記すのと同じです。また彼らは、不法で無神論の秘儀に加わっています。彼らのうち、ある者たちはマルキア

ノイ[1]と呼ばれ、ある者たちはウァレンティノス派と呼ばれます。また、ある者たちはバシレイデス派、ある者たちはサトルニロス派と呼ばれます。ほかの者たちも、それぞれ別の名で呼ばれます。どの者も、その見解の創始者の名で呼ばれているのです。初めに言ったように、哲学をしていると思っている人々も同じです。それぞれ、自分の学ぶ哲学の名を、その言説の父から取って帯びていると考えています」35:7「そのため、先に言ったように、わたしたちは、このことからも知っています。イエスは、ご自分の後に起こることをも、前もって知っておられたかたです。そのかたは、ご自分を信じ、キリストと告白する者たちに起こるほかの多くのことも、前もって言われました。そこからも、わたしたちはそれを知っています。実際、わたしたちは、身内の者たちに殺されて苦しみを受けています。それはすべて、そうなるであろうと、そのかたがわたしたちに前もって言われたことです。こうして、そのかたの言葉や行いには、どのような点でも、非難すべきところが見られないのです」35:8「だからこそ、わたしたちは、あなたがたのためにも、わたしたちを敵とするほかのすべての人々のためにも、祈っています。あなたがたが、わたしたちとともに考えを改め、キリスト・イエスを冒瀆しないためです。そのかたは、すべての点で傷がなく、責められるところのないかたです。みわざによっても、そのかたの名によって今も起こる力あるわざによっても、そう示されています。教えの言葉によっても、そのかたについて告げられた預言によっても、そう示されているのです。そうではなく、あなたがたが、そのかたを信じて、再び起こる栄光ある来臨のときに救われるためです。そのかたから火の刑を言い渡されないためです」

訳注

1 マルキオンの派か、マルコスという人の派か、説が分かれる。

36〜38章　万軍の主、栄光の王

36:1 彼は答えた。「それも、あなたの言うとおりだとしましょう。キリストが苦しみを受けるかたとなることが預言されていたことも、石と呼ばれていることもです。また、最初の来臨では、苦しみを受けるかたとして現れると告げ知らされていました。その後、栄光あるかたとして来て、それからは万人の審判者となり、永遠の王、祭司ともなるということもです。しかし、この人こそ、これらのことが預言されていたその人であることを、示してください」 36:2 わたしは言った。「トリュフォンよ、お望みのとおりにしましょう。あなたの望むその論証には、ふさわしい箇所で取りかかります。しかし今は、まず、わたしの望む預言を挙げることを、許していただきたいのです。キリストが、聖霊によって、たとえのうちに、神とも、万軍の主とも、ヤコブとも呼ばれていることを示すためです。また、あなたがたのところの解き明かす者たちは、神が叫んでおられるとおり、愚かな者たちであることを示すためです。彼らは、その言葉がキリストについてではなく、ソロモンについて言われたのだと言います。ソロモンが、あかしの幕屋を、自分の建てた神殿に運び入れたときのことだ、というのです」 36:3 「それは、ダビデの次の詩です。『地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。主はその基を大海のうえにすえ、大川のうえに定められた。主の山に登るべき者はだれか。あるいは、その聖所に立つべき者はだれか。手が清く、心のいさぎよい者、その魂をむなしい事に向けず、隣人に偽って誓わなかった者である」 36:4 「このような人は主から祝福をうけ、その救の神からあわれみをうける。これこそ主を求める者のやから、ヤコブの神の、み顔を求める者のやからである。君たちよ、あなたがたの門をあげよ。とこしえの門よ、あがれ。栄光の王が入られる。この栄光の王とはだれか。強く、戦いに力ある主である。君たちよ、あなたがたの門をあげよ。とこしえの門よ、あがれ。栄光の王が入られる。この栄光の王とはだれか。万軍の主、これこそ栄光の王である』（詩篇二四・一〜一〇）」 36:5 「すると、ソロモンが万軍の主でないことは、示されました。そうではなく、わたしたちのキリストが、死人の中からよみがえり、天に昇って行かれたときのことです。神によって天に任じられた君たちが、天の門を開くよう命じられているのです。栄光の王であるこのかたが入られ、昇って、敵がそのかたの足台とされるまで、父の右に座しておられるためです。もう一つの詩によって明らかにされているとおりです（詩篇一一〇・一参照）」 36:6 「実際、天の君たちは、そのかたが、姿もなく、卑しく、栄光もない様子をしておられるのを見ました。そのかたを見分けられなかったので、彼らは『この栄光の王とはだれか』と尋ねたのです。すると聖霊が、父になりかわって、あるいは自身として、彼らに答えます。『万軍の主、このかたこそ栄光の王である』と（詩篇二四・一〇）。実際、だれであっても認めるでしょう。エルサレムの神殿の門に立つ者たちのだれも、ソロモンについて『この栄光の王とはだれか』とあえて言いはしなかったはずです。あれほど栄光ある王だったからです。あかしの幕屋についても、そう言いはしなかったはずです」

37:1 「また、第四十六篇の詩の、セラの後で、キリストについて、こう言われています」とわたしは言った。「『神は喜び叫ぶ声と共にのぼり、主はラッパの声と共にのぼられた。われらの神をほめうたえよ、ほめうたえよ、われらの王をほめうたえよ、ほめうたえよ。神は全地の王である。悟りをもってほめうたえよ。神はもろもろの国民を統べ治められた。神はその聖なるみくらに座せられる。もろもろの民の君たちは、アブラハムの神と共に集められた。地の強い者たちは神のものであり、大いに高められたからである』（詩篇四七・五〜九）」 37:2 「また、第九十八篇の詩で、聖霊はあなたがたを非難しています。あなたがたは、このかたが王であることを望みません。しかし聖霊は、このかたが王であり主であられることを、示しています。サムエルとアロンとモーセの、また分け隔てなく、ほかのすべての人々の王であり主であられるのです」 37:3 「その詩の言葉は次のとおりです。『主は王となられた。もろもろの民は怒れ。主はケルビムの上

に座せられる。地は震えよ。主はシオンにおられて大いなるかた、もろもろの民の上に高くいらせられる。彼らは、あなたの大いなるみ名をほめたたえよ。それは恐るべく、聖なるものだからである。王の誉れは公平を愛する。あなたは正しさを備え、ヤコブの中に公平と義とを行われた。われらの神、主をあがめ、その足台を拝みまつれ。主は聖でいらせられるからである」37:4「その祭司の中にモーセとアロンとがあった。そのみ名を呼ぶ者の中にサムエルもあった』。聖書は言います。『彼らが主に呼ばわると、主は彼らの願いを聞き入れられた。主は雲の柱のうちで彼らに語られた。彼らはそのあかしと、彼らに賜わった命令とを守った。われらの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。神よ、あなたは彼らに恵み深くあられ、彼らのすべてのしわざに報いられた。われらの神、主をあがめ、その聖なる山に向かって拝みまつれ。われらの神、主は聖でいらせられるからである』（詩篇九九・一～九）」

38:1 するとトリュフォンは言った。「人よ、わたしたちは、教師たちに従っていればよかったのです。彼らは、あなたがたのだれとも語り合ってはならないと定めました。わたしたちは、あなたとこのような議論を交わすべきでもなかったのです。実際、あなたは多くの冒瀆の言葉を語っています。あなたは、わたしたちを説き伏せようとしています。この十字架につけられた者が、モーセやアロンとともにいて、雲の柱のうちで彼らに語ったのだと。さらに、その者が人となって十字架につけられ、天に昇り、再び地に来て、拝まれるべき者であるのだと」

38:2 わたしは答えた。「わたしは知っています。神の言葉が告げたとおり、万物の造り主であり全能の神であるかたの、この大いなる知恵は、あなたがたから隠されているのです。だからこそ、わたしは、あなたがたをあわれに思い、あなたがたのために骨折ろうと努めているのです。あなたがたが、わたしたちのこの驚くべき言葉を理解するためです。そうでなければ、せめてわたし自身が、さばきの日に罪のない者であるためです。実際、あなたがたは、さらに驚くべきものと思える、ほかの言葉も聞くことになります。しかし、うろたえないでください。むしろ、いっそう熱心になって、聞き、調べる者であり続けてください。あなたがたの教師たちの言い伝えは、軽んじてください。彼らは、神から告げられたことを理解できず、むしろ、自分たちのことを教えようとしています。そのことが、預言の霊によって証明されているからです」38:3「では、第四十四篇の詩でも、同じように、キリストについて次のように言われています。『わたしの心はうるわしい言葉であふれる。わたしは自分のわざを王に語る。わたしの舌はすみやかに物書く人の筆のようだ。あなたは人の子らにまさって麗しく、恵みがそのくちびるに注がれている。このゆえに神はとこしえにあなたを祝福された。力ある者よ、つるぎを腰に帯びよ。あなたの麗しさと美しさとをもって、弓を張り、勝利を得て進み、王として治めよ。真理と柔和と義とのためである。あなたの右の手は、驚くべきしかたであなたを導くであろう。力ある者よ、あなたの矢は鋭い。もろもろの民はあなたのもとに倒れる。矢は王の敵の胸を刺す」38:4「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた。あなたの衣からは、没薬と香油と肉桂とがかおる。象牙の殿からもかおる。それによって、人々はあなたを喜ばせた。王たちの娘たちが、あなたの誉れのうちにいる。王妃は金を織り込んだ衣をまとい、色とりどりに着飾って、あなたの右に立った。娘よ、聞け、見よ、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。王はあなたのうるわしさを慕うであろう。彼はあなたの主だからである。人々は彼を伏しおがむであろう」38:5「ツロの娘も贈り物を携えて来る。民のうちの富める者は、あなたの顔を請い求める。王の娘の栄えは、すべて内にある。金の縁飾りのある衣をまとい、色とりどりに着飾っている。おとめらは、彼の後に従って王のもとに連れて行かれる。彼女の友であるおとめらが、あなたのもとに連れて行かれる。彼らは喜びと楽しみとをもって連れて行かれ、王の宮に導かれる。あなたの父祖に代わって、あなたの子らが生まれた。あなたは彼らを全地の君とする。わたしはあなたの名をよろず代に覚える。このゆえに、もろもろの民はとこしえに、世々限りなくあなたをほめたたえる』（詩篇四五・一～一七）」

39〜41章　高い所に上られたキリストの賜物、律法の型

39:1 わたしはさらに言った。「あなたがたが、わたしたちをも憎むとしても、少しも不思議ではありません。わたしたちは、これらのことを理解し、あなたがたの見解がいつもかたくなであることを、証明しているのですから。実際、エリヤも、あなたがたのことを神に訴えて、こう言っています。『主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこぼちました。わたしひとりが取り残されました。そして彼らは、わたしのいのちを求めています』。すると、彼にこういう答えがあります。『わたしには、バアルにひざをかがめなかった七千人の男が、まだいる』（列王紀上一九・一〇、一八、ローマ一一・三〜四）」 39:2「すると、あの七千人のために、そのとき神が怒りを下されなかったのと同じように、今も神は、まださばきを下しておられません。今下しておられるのでもありません。今なお日ごとに、ある人々が神のキリストの名によって弟子とされ、迷いの道を離れていることを、ご存じだからです。彼らは、それぞれふさわしさに応じて、賜物を受けています。このキリストの名によって照らされているのです。実際、ある人は悟りの霊を受け、ある人は思慮の霊を、ある人は力の霊を受けています。ある人はいやしの霊を、ある人は予知の霊を、ある人は教えの霊を、ある人は神を恐れる霊を受けています」 39:3これに対して、トリュフォンはわたしに言った。「そんなことを言うとは、あなたは正気を失っています。そのことを、あなたに知っておいてもらいたいのです」 39:4わたしは彼に向かって言った。「あなた、聞いてください。わたしは狂ってもいませんし、正気を失ってもいません。そうではなく、次のことが預言されていたのです。キリストは天に昇られた後、わたしたちを迷いからとりことして連れ出し、わたしたちに賜物を与えられるのです。その言葉は次のとおりです。『彼は高い所に上り、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を与えた』（詩篇六八・一八、エペソ四・八）」 39:5「すると、高い所に上られたキリストから賜物を受けたわたしたちは、預言の言葉によって、次のことを示します。あなたがたは、自分では賢く、自分の目には知識のある者です。しかし愚かであり、くちびるでだけ神と神のキリストを敬っているのです。一方、わたしたちは、真理のすべてによって弟子とされた者です。行いによっても、知識によっても、心によっても、死に至るまで敬っています」 39:6「一方、あなたがたは、おそらく次のためにも、この人こそキリストであると告白することを、ためらっているのでしょう。聖書も、そのかたの名において現れていることや起こっていることも、それを示しているのにです。あなたがたは、治める者たちに迫害されないために、ためらっているのです。治める者たちは、悪い、惑わす霊、つまり蛇の働きによって動かされています。キリストの名を告白する者たちを殺し、迫害することを、やめないでしょう。キリストが再び来られ、彼らをみな滅ぼし、それぞれにふさわしいものを分け与えられるときまでです」 39:7するとトリュフォンは言った。「ですから、もう、わたしたちに説明してください。あなたが、十字架につけられ、天に昇ったと言っているこの人が、神のキリストであることをです。実際、キリストが苦しみを受けるかたであることは、聖書を通して告げ知らされています。また、栄光のうちに再び来て、すべての国々の上に永遠の王国を受け、あらゆる王国がそのかたに従うことも、そうです。そのことは、あなたが先に詳しく述べた聖書によって、十分に示されました。しかし、この人こそそのかたであることを、わたしたちに示してください」 39:8わたしは言った。「皆さん、耳のある者には、すでに示されています。あなたがたが認めていることからも、示されています。しかし、約束したとおり、ふさわしい箇所で論証をします。わたしが当惑していて、あなたがたの求めることについても論証できないのだと、思われないためです。ただ、今は、わたしがしていた話の続きに戻ります」

40:1「では、神が過越としてほふるよう命じておられる羊の奥義は、キリストの型でした。キリストを信じる者たちは、キリストへの信仰に応じて、その血を自分たちの家に塗ります。つまり、自分自身に塗るのです。実際、神はアダムを

形造られました。その形造られたものが、神から吹き入れられた息の家となったことは、あなたがたもみな理解できます。また、この戒めも一時のものだったことを、次のように示します」40:2「神は、過越の羊を、ご自分の名が呼ばれている場所のほかでは、どこでもほふることを許しておられません。キリストが苦しみを受けられた後に、日が来ることを、ご存じだったからです。そのとき、エルサレムの地はあなたがたの敵に引き渡され、供え物はひとつ残らず、ささげられなくなるのです」40:3「また、まるごと焼くよう命じられたあの羊は、十字架の苦しみのしるしでした。キリストは、その十字架によって苦しみを受けられることになっていたのです。実際、焼かれる羊は、十字架の形と同じ形に整えられて焼かれます。実際、まっすぐな一本の串が、いちばん下の部分から頭まで突き通されます。また、もう一本が背の上のほうに通され、それに羊の前足もくくりつけられます」40:4「また、断食の日に、似た二頭の山羊を用意するよう命じられていました。その一頭は追い払われるものとなり、もう一頭は供え物となりました。この二頭の山羊は、キリストの二度の来臨を告げ知らせるものでした。一度目の来臨では、あなたがたの民の長老たちと祭司たちが、キリストに手を置いて殺しました。追い払われる山羊のように送り出したのです。二度目の来臨については、こうです。あなたがたは、エルサレムの同じ地で、あなたがたが辱めたそのかたを、それと知るでしょう。そのかたは、悔い改めようと望み、イザヤが述べているとおりの断食をする、すべての罪人のための供え物であられました。彼らは、無理な取り引きの結び目を断ち切り、そのほかにもイザヤが数え上げていることを、同じように守ります。それらのことは、わたし自身も詳しく述べました。イエスを信じる者たちは、それらのことを行っているのです」40:5「断食の日にささげるよう命じられていた二頭の山羊の供え物があります。それも同じように、エルサレムのほかでは、どこでもささげることが許されていません。そのことを、あなたがたは知っています」

41:1 わたしは言った。「皆さん、らい病から清められる者のために、小麦粉の供え物をささげるよう伝えられていました。この供え物もまた、聖餐のパンの型でした。わたしたちの主イエス・キリストは、このパンを作るようお伝えになりました。魂をあらゆる悪から清められる人々のために、そのかたが受けられた苦しみを記念するためです。それは、わたしたちが、次のことについて、あわせて神に感謝をささげるためです。神が、人のために、世界とその中のすべてのものとを造られたことです。また、わたしたちがその中にあった悪から、わたしたちを解放してくださったことです。もろもろの支配と権威とを完全に滅ぼされたことです。御旨に従って苦しみを受けるかたとなられた、そのかたによってです」41:2「ですから、そのころあなたがたがささげていたいけにえについては、先に述べたように、神がこう言われます。十二人のひとりマラキを通してです。『わたしはあなたがたを喜ばないと、主は言われる。わたしは、あなたがたの手から、あなたがたのいけにえを受けない。日の出る所から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられているからである。どこでもわが名のために、香と清いいけにえとがささげられているからである。わが名が国々のうちに大いなるものだからであると、主は言われる。ところが、あなたがたはそれを汚している』（マラキ一・一〇～一二）」41:3「一方、わたしたち異邦人は、どこででも神にいけにえをささげています。つまり聖餐のパンと、同じく聖餐の杯です。そのいけにえについては、そのとき前もって告げておられます。わたしたちが神の名をあがめ、あなたがたが汚していると言われたのです」41:4「また、割礼の戒めは、生まれた子に、八日目に必ず割礼を施すよう命じていますが、これはまことの割礼の型でした。わたしたちの主イエス・キリストは、週の初めの日に死人の中からよみがえられました。わたしたちは、そのかたによって、迷いと悪から割礼を受けたのです。実際、週の初めの日は、すべての日の初めの日でありながら、一巡りのすべての日をもう一度数えると、八日目と呼ばれます。そして、初めの日であり続けるのです」

42〜44章　十二使徒のしるし、おとめからの誕生、救いの道

42:1「さらに、大祭司の足までたれた衣に十二の鈴が結びつけられていたと伝えられていることも、十二使徒のしるしでした。使徒たちは、永遠の祭司キリストの力に結びつけられた者です。その使徒たちの声によって、全地は、神とそのキリストの栄光と恵みとに満たされたのです。だからこそ、ダビデは言っています。『その響きは全地に出て行き、その言葉は世界のはてにまで及んだ』（詩篇一九・四）」42:2「また、イザヤは、使徒たちになりかわって語ります。使徒たちはキリストに向かって言います。人々が信じるのは、自分たちの聞いたことではなく、自分たちを遣わされたかたご自身の力なのだ、と。それゆえ、イザヤはこう言います。『主よ、だれがわれわれの聞いたことを信じたか。主の腕は、だれにあらわれたか。われわれは、彼の前で、幼な子のように、かわいた土にある根のように告げた』（イザヤ五三・一〜二）。預言のそれに続く言葉は、先に挙げたとおりです」42:3「一方、この言葉は、多くの人になりかわって『われわれは、彼の前で告げた』と言います。そして、そのあとに『幼な子のように』と続けています。これは、次のことを明らかに示すものです。悪い者であった人々が、そのかたに従う者となって、その命令に仕え、すべての者が一人の幼な子のようになったのです。これは、体の場合にも見ることができます。肢体は数えれば多くありますが、それらはすべて合わせて一つと呼ばれ、また一つの体なのです。実際、民衆も民会も、数では多くの人々ですが、一つのものとして、一つの呼び名で呼ばれ、名指されます」42:4わたしは言った。「皆さん、モーセが定めたほかのことも、ひとつ残らず、数え上げて示すことができます。それらは、次のものの型であり、しるしであり、告げ知らせるものです。すなわち、キリストに起こることになっていた事柄と、キリストを信じると予知されていた人々です。そして、キリストご自身によって同じように行われることになっていた事柄です。しかし、今わたしが数え上げたことで十分だと思われますので、話の順序に従って、先へ進みます」

43:1「では、割礼はアブラハムから始まり、安息日といけにえと供え物と祭りはモーセから始まりました。そして、これらのことが、あなたがたの民の心のかたくなさのために定められたことは、すでに示されました。それと同じように、これらは、父の御旨に従って、神の子キリストに至って終わらなければならなかったのです。キリストは、アブラハムの民族、ユダとダビデの部族から出たおとめによって、お生まれになりました。このかたは、全世界のための永遠の律法、また新しい契約として、来られると宣べ伝えられていました。先に挙げた預言が告げているとおりです」43:2「そして、このかたによって神のもとに来たわたしたちが受け入れたのは、この肉による割礼ではなく、霊の割礼です。エノクと、彼に似た人々が守った割礼です。わたしたちは、罪人となっていたので、神からのあわれみによって、洗い清めを通して、この割礼を受けました。そして、すべての人が、同じようにそれを受けることを許されています」43:3「さて、このかたの誕生の奥義について、もう語らなければならないときが迫っていますので、語ります。では、イザヤは、キリストご自身の生まれについて、それが人には語り尽くせないものであることを、こう言いました。先にも書いたとおりです。『だれがその生まれを語ることができようか。その命が地から取り去られるからである。わたしの民の不法によって、彼は死に引かれた』（イザヤ五三・八）。すると、預言の霊がこれらのことを語ったのは、このかたの生まれが語り尽くせないものだからです。このかたは、罪人であるわたしたち人間がその打たれた傷によっていやされるために、死なれることになっていたのです（イザヤ五三・五参照）」43:4「さらに、預言の霊は、同じイザヤを通して、それがどのように起こるかを前もって預言しました。このかたを信じる人々が、このかたがどのようにして世にお生まれになったかを、深く知ることができるためです。その預言は、こうです」43:5「『主は再びアハズに告げて言われた。「あなたの神、主に、深い所に、あるいは高い所に、あなたのために一つのしるしを求めよ」。ア

ハズは言った。「わたしは求めません。主を試みることもいたしません」。イザヤは言った。「ダビデの家よ、聞け。あなたがたは、人を煩わすことを小さい事とするのか。どうして主を煩わすのか。それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる。彼は凝乳と蜂蜜とを食べる」」 43:6「「彼は、悪を知るか、選び取るかする前に、善を選ぶ。その子は、善も悪も知る前に、悪に従わずに、善を選ぶからである。その子は、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを、アッスリヤの王の前で取るからである。そして、あなたがふたりの王のゆえに苦しんで耐えるその地は、奪われる。しかし神は、あなたと、あなたの民と、あなたの父の家とに、日々を臨ませられる。それは、エフライムがユダから離れ去った日このかた、まだあなたに臨んだことのない日々である。アッスリヤの王を臨ませられるのである」』（イザヤ七・一〇～一六、八・四、七・一六～一七）」 43:7「さて、肉によるアブラハムの民族の中で、おとめから生まれた者も、生まれたと言われた者も、かつてだれもいません。ただ、このわたしたちのキリストだけは別です。それは、すべての人に明らかです」 43:8「ところが、あなたがたとあなたがたの教師たちは、あえて言っています。イザヤの預言では、『見よ、おとめがみごもる』とは言われていない。そうではなく、『見よ、若い女がみごもって男の子を産む』と言われているのだ、と。そして、あなたがたは、その預言を、あなたがたの王となったヒゼキヤについてのものとして解き明かしています。そこで、わたしはこの点でも、あなたがたに反論して、手短に解き明かしてみましょう。そして、この預言が、わたしたちが告白しているこのキリストについて言われたことを、示してみましょう」

44:1「実際、わたしは、論証をしながら、あなたがたが納得するよう努めています。そうするなら、わたしは、あなたがたのことで、あらゆる点で責任のない者と認められるでしょう。キリスト者には死が定められています。しかし、あなたがたが心のかたくななままでいたり、その死のゆえに心が弱かったりして、真理に同意しようとしないとします。そのとき、責めは自分自身にあることが明らかになるでしょう。また、あなたがたは自分を欺いています。肉によるアブラハムの子孫だから、良いものを必ず受け継ぐと思い込んでいるのです。それは、神がキリストを通して与えると告げ知らせておられた良いものです」 44:2「実際、それらのうちのどれ一つも、だれも、どこからも受けることはできません。ただ、思いにおいてアブラハムの信仰に似た者となり、すべての奥義を深く知った人々は別です。わたしが言うのは、次のことです。ある戒めは、神を敬うことと正しい行いのために定められていました。一方、ある戒めや行いは、同じように言われていました。それは、あるいはキリストの奥義のため、あるいはあなたがたの民の心のかたくなさのためでした。そして、そのとおりであることについて、神はエゼキエル書で明言して、こう言われました。『たとい、ノアとヤコブ[1]とダニエルが、むすこか娘かを求めても、彼らには決して与えられない』（エゼキエル一四・二〇）」 44:3「また、イザヤ書でも、まさにこのことについて、こう言われました。『主なる神は言われた。「彼らは出て、そむいた人々のしかばねを見る。彼らのうじは死なず、彼らの火は消えないからである。彼らはすべての肉なる者の見るものとなる」』（イザヤ六六・二四）」 44:4「そのため、あなたがたは、この望みを自分の魂から断ち切らなければなりません。そして、どの道によるのかを、熱心に深く知らなければなりません。あなたがたに罪のゆるしが与えられ、告げ知らされた良いものを受け継ぐ望みが与えられる道です。その道は、ほかでもなく、これです。あなたがたがこのキリストを深く知り、洗いで身を洗って、これからは罪を犯さずに生きることです。その洗いは、罪のゆるしのために、イザヤを通して宣べ伝えられたものです」

訳注

1 エゼキエル書ではヨブ。古い刊本にはヨブに改めたものもある。

45〜47章　律法に従って生きた人々の救い、律法を守るキリスト者

45:1 するとトリュフォンは言った。「あなたの話しているこれらの言葉は、吟味されなければならないものです。その言葉の腰を折るように思われるかもしれません。それでも、わたしの吟味したい問いが差し迫っていますので、まず、わたしの問いに付き合ってください」わたしは言った。「何でも、思いつくままに尋ねてください。実際、わたしは、問いと答えのあとでも、話を取り上げ直して、終わりまで語るよう努めます」 45:2 彼は言った。「ですから、わたしに言ってください。モーセを通して定められた律法に従って生きた人々がいます。その人々は、死者の復活のときに、ヤコブやエノクやノアと同じように生きるのでしょうか。それとも、生きないのでしょうか」 45:3 わたしは彼に言った。「人よ、わたしは、エゼキエルの言った言葉を挙げました。『たとい、ノアとダニエルとヤコブが、むすこや娘を求めても、彼らには与えられない』。そうではなく、明らかに、おのおのが自分の義によって救われる、ということです（エゼキエル一四・二〇、一四）。そう挙げたとき、わたしは、モーセの律法に従って生活した人々も、同じように救われる、と言ったのです。実際、モーセの律法には、本性によって良いこと、敬虔なこと、正しいことがあります。その定めに従う者たちがそれを行うよう、法として定められているのです。また、民の心のかたくなさのために定められたことも、行われるよう、同じように書き記されています。律法のもとにいた人々は、それらも行っていたのです」 45:4 「というのは、普遍的で、本性による、永遠の良いことを行っていた人々は、神に喜ばれる者だからです。そして、彼らは、このキリストを通して、復活のときに救われます。彼らより前に生まれた義人たち、ノア、エノク、ヤコブ、またほかにいたかもしれない義人たちと同じように救われるのです。それも、このキリストを神の子と深く知った人々とともに救われるのです。このかたは、明けの明星と月より前におられました。そして、肉体をとって、ダビデの家系から出たこのおとめによってお生まれになることを、忍ばれました。それは、このはからいによって、初めに悪を行った蛇と、蛇に似た者となった御使いたちとが滅ぼされるためです。また、死が軽んじられるためです。そして、キリストご自身の二度目の来臨のときに、そのかたを信じて神に喜ばれるように生きる人々から、まったく去るためです。そのあと、死はもはやありません。そのとき、ある者たちは、さばきと火の刑罰に送られ、絶えず罰を受けます。一方、ある者たちは、苦しみも、朽ちることも、悲しみも、死もない中で、ともに生きるのです」

46:1 彼はわたしに尋ねた。「ところで、ある人々が、今も、モーセを通して定められたことを守りながら生きたいと望むとします。そして、この十字架につけられたイエスを信じるとします。この人こそ神のキリストであると、深く知ったうえでです。分け隔てなくすべての人をさばくことがこの人に与えられていて、永遠の国はこの人のものであると、深く知ったうえでです。その人々も救われることができるのでしょうか」 46:2 わたしはまた言った。「そのことも、いっしょに考えてみましょう。モーセを通して定められたことを、今すべて守ることができるかどうかです」彼は答えた。「できません。実際、わたしたちは知っています。あなたが言ったとおり、過越の羊をほかの所でほふることはできません。断食の日にささげるよう命じられた山羊も、ほかの供え物も、ひとつ残らず、ささげることはできません」わたしは言った。「では、守ることのできるのは何ですか。お願いですから、あなた自身が言ってください。実際、あなたは納得することになるでしょう。人は、永遠の正しい定めを守らなくても、あるいは行わなくても、必ず救われることができる、と」彼は言った。「わたしが言うのは、安息日を守ること、割礼を受けること、新月を守ることです。そして、モーセが禁じたものに何か触れたとき、あるいは交わりをしたときに、身を洗い清めることです」 46:3 わたしは言った。「アブラハム、イサク、ヤコブ、ノア、ヨブ、またこの人たちの前や後に、同じように正しい人がほかにいたなら、その人々もです。それに、わたしが言うのは、アブラハムの妻サラ、イサクの妻リベカ、ヤコブの

妻ラケルとレアのこともです。そして、忠実なしもべモーセの母に至るまでの、ほかのそのような女たちもです。この人たちは、これらのことを何一つ守りませんでした。あなたがたには、彼らが救われると思えますか」するとトリュフォンは答えた。「アブラハムも、その後の人々も、割礼を受けていたのではありませんか」46:4わたしは言った。「アブラハムとその後の人々が割礼を受けていたことは、知っています。しかし、なぜ彼らに割礼が与えられたのかは、先に述べた多くのことの中で話しました。そして、話したことにあなたがたが恥じ入らないなら、もう一度、この議論を吟味しましょう。一方、モーセに至るまで、正しい人はだれ一人として、わたしたちが問題にしていることを何一つ守りませんでした。守るよう戒めを受けもしませんでした。ただ、アブラハムから始まった割礼は別です。そのことは、あなたがたも知っています」彼は言った。「知っています。そして、彼らが救われることも認めます」46:5わたしはまた言った。「神はモーセを通して、そのようなおきてをすべてあなたがたに命じられました。あなたがたの民の心のかたくなさのためです。そう理解してください。それは、それらの多くのことによって、あなたがたが、あらゆる行いの中で、いつも神を目の前に置くためです。そして、不義を行うことも、神を敬わないことも始めないためです。実際、モーセは、緋色の糸を身につけるよう、あなたがたに命じました。それによって、あなたがたが神を忘れないためです。また、ごく薄い皮に、ある文字を書いた経札を身に着けるよう、あなたがたに命じました。その文字を、わたしたちは、まったく聖なるものと理解しています。そして、モーセは、これらのものによって、あなたがたに強く促して、いつも神を覚えているようにさせたのです。同時に、あなたがたの心の中に、罪の証拠を持たせたのです」46:6「あなたがたは、神を敬うことを思い起こす手だてを、少なからず持っています。それでも、偶像を拝まないよう説き伏せられませんでした。それどころか、エリヤの時代には、バアルにひざをかがめなかった者たちの数が挙げられ、その数は七千人であると言われています。また、イザヤ書では、あなたがたが自分の子供たちまで偶像へのいけにえにしたことが、証明されています」46:7「一方、わたしたちは、かつていけにえをささげていたものに、もういけにえをささげません。そのために、極みの罰を耐え忍び、殺されても喜んでいます。神がキリストを通してわたしたちをよみがえらせてくださると信じているからです。そして、朽ちない者、苦しみを受けない者、死なない者にしてくださると信じているのです。また、わたしたちは知っています。あなたがたの民の心のかたくなさのために定められたことは、正しい行いにも敬虔にも、何の役にも立たないのです」

47:1するとトリュフォンはまた尋ねた。「ところで、ある人が、これらのことがそのとおりであると知っているとします。そのうえ、この人がキリストであることを明らかに知り、信じ、この人に従っているとします。そして、これらのことも守りたいと望むとします。その人は救われるのでしょうか」わたしは言った。「トリュフォンよ、わたしの思うところでは、そのような人は救われる、と言います。ただし、ほかの人々に、自分と同じことを守るよう、なんとしても説き伏せようと努めないならばです。ほかの人々とは、異邦人の中から、キリストを通して迷いから割礼を受けた人々のことです。これらのことを守らなければ救われない、と彼らに言うことによってです。この話の初めに、あなたもそうしていました。わたしがこれらのことを守らなければ救われない、と明言していたのです」47:2彼は言った。「では、なぜ、あなたは『わたしの思うところでは、そのような人は救われる』と言ったのですか。そのような人々は救われない、と言う人々でもいるのですか」わたしは答えた。「トリュフォンよ、います。彼らは、そのような人々と、語り合うことも、食卓をともにすることも、あえてしません。わたしは、その人々に賛成しません。しかし、そのような人々自身が、思いの弱さのために、モーセの定めのうち、今できることを守りたいと望むとします。それは、民の心のかたくなさのために定められたと、わたしたちが理解しているものです。彼らは、このキリストに望みを置き、永遠の、本性による正しい行いと敬虔とを守りながら、それも守りたいと望むのです。そして、キリスト者である信者たちとともに生きることを選ぶとします。ただし、先に言ったとおり、その人々を説き伏せようとしないならばです。自分たちと同じように割礼を受けることも、安息日を守ることも、ほかのそのようなことを守ることもです。それなら、わたしは、彼らを受け入れ、すべてのことで交わるべきだと明言します。同胞として、兄弟としてです」47:3わたしは言った。「一方、トリュフォン

よ、あなたがたの民族から出て、このキリストを信じると言う人々がいるとします。彼らが、異邦人の中からこのキリストを信じる人々に、なんとしても強いるとします。モーセを通して定められた律法に従って生きるようにです。あるいは、そのような共同の生活で彼らと交わらないことを選ぶとします。そのときは、わたしは、同じように、この人々も受け入れません」47:4「しかし、彼らに説き伏せられて、律法に従う生活をしている人々もいます。その人々も、神のキリストへの告白を守っているなら、おそらく救われるだろう、とわたしは考えます。一方、このかたこそキリストであると告白し、深く知った人々がいます。その人々が、どんな理由からであれ律法に従う生活に移り、このかたがキリストであることを否んだとします。そして、死ぬ前に考えを改めなかったとします。その人々は決して救われない、とわたしは明言します。また、アブラハムの子孫から出て、律法に従って生きる人々がいます。生涯の終わる前にこのキリストを信じないなら、その人々も同じように救われない、と明言します。とりわけ、会堂で、まさにこのキリストを信じる者たちを呪ってきた者たち、今も呪っている者たちはそうです。その信じる者たちは、救いを得て、火の罰から解き放たれるために信じているのです」47:5「実際、神の慈悲と博愛と、その富のはかり知れなさとは、罪から悔い改める人を、罪のない正しい者として扱います。エゼキエルを通して示されているとおりです。一方、敬虔や正しい行いから不義と無神論へと移る人を、罪人、不義な者、神を敬わない者と認めます。だからこそ、わたしたちの主イエス・キリストは言われました。『わたしは、あなたがたを見いだしたときのありさまのままで、あなたがたをさばく』」

48〜50章　キリストの先在、エリヤとヨハネ、ヨハネの先駆けの預言

48:1 するとトリュフォンは言った。「これらのことについても、あなたの考えていることを、わたしたちは聞きました。ですから、話を取り上げ直して、あなたがやめたところから、終わりまで進めてください。実際、その話は、何か思いがけないもので、まったく示すことのできないもののように、わたしには思えます。実際、あなたは言っています。このキリストは、神であって、世々の前から先にいた。そのうえ、人間となって、生まれることを忍んだ。そして、人間から生まれた人間ではない、と。これは、思いがけないことであるばかりでなく、愚かなことでもあるように、わたしには思えます」 48:2 わたしはこれに答えて言った。「この話が思いがけないものに思えることは、知っています。とりわけ、あなたがたの民族の人々にはそうでしょう。あなたがたは、神のことを理解しようとも、行おうとも、一度も望んだことがありません。そうではなく、あなたがたの教師たちのことを望んできたのです。神ご自身が叫んでおられるとおりです。とはいえ、トリュフォンよ、このかたが神のキリストであることは、今となっては失われはしません。たとえ、わたしが次のことを示すことができないとしてもです。このかたが、万物の造り主の子として、神であられ、先におられたこと。そして、おとめによって人間としてお生まれになったことです」 48:3 「しかし、このかたが神のキリストであることは、どこから見ても示されています。このかたがどのような者であるにせよ、そうなのです。そこで、もしわたしが、次のことを示さないとします。このかたが先におられたこと。そして、父の御旨に従って、肉体を持ち、わたしたちと同じような人間として、生まれることを忍ばれたことです。そのときは、この点でだけ、わたしが思い違いをしていた、と言うのが正しいのです。このかたがキリストであることを否むのは、正しくありません。たとえ、このかたが人間から生まれた人間としてお生まれになったと見えるとしてもです。そして、キリストであるために選ばれた者となられた、と示されるとしてもです」 48:4 「実際、友人たちよ、あなたがたの民族から[1]出た人々の中に、このかたがキリストであることを認める人々がいます。ただし、彼らは、このかたが人間から生まれた人間であると明言しています。わたしは、その人々に同意しません。わたしと同じ考えを持つ人々の大多数も、そうは言わないでしょう。キリストご自身が、わたしたちに命じておられるからです。人間の教えに従うのではなく、祝福された預言者たちを通して宣べ伝えられ、キリストを通して教えられたことに従うように、と」

49:1 するとトリュフォンは言った。「この人は人間として生まれ、選びによって油を注がれ、キリストとなった、と言う人々がいます。わたしには、その人々のほうが、あなたの言うようなことを言うあなたがたよりも、もっともなことを言っていると思えます。実際、わたしたちはみな、キリストが人間から生まれた人間として生まれると、待ち望んでいます。そして、エリヤが来てキリストに油を注ぐと、待ち望んでいるのです。もしこの人がキリストであると見えるなら、人間から生まれた人間として生まれたと、どうしても知っておかなければなりません。しかし、エリヤさえまだ来ていないことから、わたしは、この人もキリストではないと明言します」 49:2 わたしはまた彼に尋ねた。「言葉は、ゼカリヤを通して、エリヤが主のこの大いなる恐るべき日の前に来る、と言っているではありませんか（マラキ四・五）」彼は答えた。「そのとおりです」わたしは言った。「では、もし言葉によって、次のことを認めざるをえないとします。キリストの来臨は二度起こると預言されていました。一度目は、キリストが苦しみを受け、卑しく、姿もなく現れられる来臨です。二度目は、栄光のうちに、万人の審判者として来られる来臨です。先に述べた多くのことの中でも、そう示されています。そうであれば、恐るべき大いなる日、すなわちキリストの二度目の来臨の先駆けとして、エリヤが来る。神の言葉はそう宣べ伝えていると、わたしたちは理解するのではありませんか」彼は答えた。「そのとおりです」 49:3 わたしは言った。「すると、わたしたちの主も、まさにこのことが起こると、ご自分の教えの

中でお伝えになりました。エリヤも来る、と言われたのです。そして、わたしたちも、このことが起こると知っています。わたしたちの主イエス・キリストが、栄光のうちに天から来られようとするときにです。このかたの最初の現れのときにも、エリヤのうちにあった神の霊が、告げ知らせる者として先に来ました（ルカ一・一七参照）。あなたがたの民族の中に生まれた預言者、ヨハネのうちにです。そのあと、あなたがたのもとには、ほかにどの預言者も現れていません。このヨハネは、ヨルダン川のほとりに座って叫びました。『わたしは悔い改めのために、水でおまえたちを洗い清めている。しかし、わたしよりも力のあるかたが来られる。わたしは、そのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによって、おまえたちを洗い清められる。また、その手には箕があり、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からを消えない火で焼き捨てられる』（マタイ三・一一～一二、ルカ三・一六～一七）」 49:4「この預言者を、あなたがたの王ヘロデは獄に閉じ込めていました。そして、誕生日の祝いが行われていたとき、ヘロデのめいが踊って、ヘロデを喜ばせました。そこでヘロデは、何でも望むものを願うようにと、彼女に言いました。すると、その少女の母は、獄にいるヨハネの首を願うよう、彼女をそそのかしました。彼女が願うと、ヘロデは人を遣わし、ヨハネの首を盆に載せて持って来るよう命じました（マタイ一四・三～一一、マルコ六・一七～二八、ルカ三・二〇参照）」 49:5「だからこそ、わたしたちのキリストは、そのとき地上におられて、こう言われたのです。キリストの前にエリヤが来なければならない、と言う人々に向かってです。『確かに、エリヤが来て、万事を元どおりに改める。しかし、あなたがたに言っておく。エリヤはすでに来たのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼をあしらった』。そして、こう書かれています。『そのとき、弟子たちは、イエスが洗い清める者ヨハネのことを言われたのだと悟った』（マタイ一七・一一～一三）」 49:6 するとトリュフォンは言った。「あなたの言うこのことも、思いがけないことのように、わたしには思えます。エリヤのうちにあった神の預言の霊が、ヨハネのうちにもあった、ということです」わたしはこれに答えて言った。「ヌンの子ヨシュアの上にも同じことが起こったと、あなたには思えませんか。モーセのあとを継いで、民を導く務めを受けたヨシュアです。それは、モーセが、ヨシュアの上に手を置くよう告げられたときのことです。そのとき、神ご自身がこう言われました。『わたしも、あなたのうちにある霊から取って、彼の上に移す』（民数記一一・一七、二七・一八、申命記三四・九参照）」 49:7 彼は言った。「そうです」わたしは言った。「すると、モーセがまだ人々の中にいたときに、神はモーセのうちにある霊から取って、ヨシュアの上に移されました。それと同じように、神は、霊がエリヤからヨハネの上に来るようにすることも、おできになったのです。それは、エリヤのうちにあった霊の最初の来臨も、栄光のないものと理解されるためです。キリストが、最初の来臨のときに、栄光のない姿で現れられたのと同じようにです。その霊は、キリストのように、いつも清いままなのです」 49:8「実際、主は隠れた手でアマレクと戦われる、と語られています（出エジプト一七・一六）。そして、アマレクが倒れたことを、あなたがたは否まないでしょう。しかし、アマレクとの戦いが行われるのは、キリストの栄光の来臨のときだけだと言われているとします。そうであれば、『神は隠れた手でアマレクと戦われる』と言う言葉は、どんな実を結ぶのでしょうか。あなたがたは理解することができます。十字架につけられたキリストには、神の隠れた力があったのです。悪霊たちも、地上の支配と権威もひとつ残らず、このかたを恐れおののいています」

50:1 するとトリュフォンは言った。「あなたは、問題になるすべてのことについて、多くの人々と何度もやりとりをしてきたように見えます。それゆえ、尋ねられることには何にでも、すぐに答えられるのでしょう。ですから、まずわたしに答えてください。万物の造り主のほかにも別の神がいることを、どのように示すことができるのですか。そのあとで、その神がおとめによって生まれることを忍んだことを、示してください」 50:2 わたしは言った。「その前に、イザヤの預言から、いくつかの言葉を挙げさせてください。このわたしたちの主イエス・キリストご自身に先立って、ヨハネが先駆けとして来ました。洗い清める者であり、預言者となった人です。その先駆けについて語られた言葉です」彼は言った。「どうぞ」 50:3 わたしは言った。「では、イザヤは、ヨハネの先駆けについて、こう預言しました。『そこで、ヒゼキヤはイザヤに言った。「主の語られた言葉は良い。わたしの時代に、平和と義があるように」。また、民を慰めよ。祭司たち

よ、エルサレムの心に語り、これを慰めよ。その卑しめが満ちたからである。その罪は解かれた。主の手から、その罪の二倍を受けたからである。荒野で呼ばわる者の声がする。主の道々を備え、われわれの神の小道をまっすぐにせよ。すべての谷は満たされ、すべての山と丘とは低くされる。曲がったところはすべてまっすぐになり、険しい所は平らな道となる。こうして主の栄光が現れ、すべての肉なる者は神の救いを見る。主が語られたからである」 50:4 「「呼ばわれ」と言う者の声がする。わたしは言った。「何と呼ばわりましょうか」。「すべての肉なる者は草であり、人の栄えはみな草の花のようである。草は枯れ、その花は散る。しかし、主の言葉はとこしえに残る」。よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ。声をあげよ、恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ、あなたがたの神を。主は、見よ、力をもって来られ、腕は支配をもって来る。見よ、報いは主とともにあり、わざは主の前にある。主は牧者のようにその群れを養い、腕で小羊を集め、身ごもっている女を慰められる」」 50:5 「だれが、手で水をはかり、指を伸ばして天をはかり、ひと握りで全地をはかったか。だれが、山々をはかりにかけ、谷々を天びんにかけたか。だれが、主の思いを知ったか。だれが主の相談役となって、主を教えるのか。あるいは、主はだれと相談し、だれが主を教えたか。あるいは、だれが主に公義を示したか。あるいは、だれが主に悟りの道を知らせたか。すべての国々は、おけの一しずくのように、はかりの傾きのようにみなされた。また、つばのようにみなされる。レバノンは焼くのに足りず、四つ足の獣は燔祭に足りない。すべての国々は無に等しく、無とみなされた』（イザヤ三九・八、四〇・一～一七）」

訳注

1 多くの古い刊本は『わたしたちの民族から』と読む。

51〜55章　途絶えた預言者、ユダへの祝福、ろばの子とぶどうの血

51:1 わたしが話し終えると、トリュフォンは言った。「人よ、あなたの挙げる預言の言葉は、どれもあいまいです。それらの言葉は、あなたが示そうとしていることを論証するのに、決め手となるものを何も持っていません」わたしは答えた。「トリュフォンよ、もし預言者たちが絶えず、このヨハネの後にも、あなたがたの民族の中になお現れていたとします。そうであれば、あなたがたは、言われていることをあいまいだと思ったかもしれません」51:2「しかし、ヨハネが先に来て、悔い改めるよう人々に叫んだとします（マタイ三・二参照）。そして、ヨハネがまだヨルダン川のほとりに座っていたとき、キリストが来られたとします。そして、ヨハネに預言することと洗い清めることを、やめさせなさったとします。また、キリストは福音を宣べ伝えられ、ご自身でもこう言われました。天国は近づいた（マタイ四・一七参照）。そして、ご自分は律法学者とパリサイ人から多くの苦しみを受け（マタイ一六・二一参照）、十字架につけられ、三日目によみがえられなければならない。また、再びエルサレムに来られ、そのときに弟子たちと再びともに飲み、ともに食事をされる（マタイ二六・二九参照）、と。さらに、ご自分の来臨までのあいだの時に、ご自分の名を名のって分派とにせ預言者が起こると、前もって示されました（マタイ二四・五、一一参照）。先に述べたとおりです。そして、それがそのとおりになっているのが見えます。そうであれば、あなたがたは事実によって確信することができるのに、どうしてなお疑うことができるでしょうか」51:3「また、キリストは、あなたがたの民族の中にもはや預言者が現れないことについて、こう語っておられました。そして、次のことを深く知ることについてもです。神が昔から、立てられると宣べ伝えてこられた新しい契約が、そのときすでに来ていた。すなわち、キリストご自身がそれであられた、ということです。『律法と預言者とは、洗い清める者ヨハネの時までのものである。それ以来、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている。そして、もしあなたがたが受けいれることを望めば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである。聞く耳のある者は聞くがよい』（ルカ一六・一六、マタイ一一・一二〜一五）」

52:1 わたしは付け加えた。「また、族長ヤコブを通しても、次のことが預言されていました。キリストの来臨は二度あること。最初の来臨のときには、キリストは苦しみを受けられること。キリストが来られた後には、あなたがたの民族の中に、預言者も王もいなくなること。そして、異邦人が、苦しみを受けられたキリストを信じて、このかたが再び来られるのを待ち望むようになることです。聖霊は、それゆえ、これらのことをたとえのうちに、覆い隠して語っていたのです」52:2 わたしは、聖霊がこう語っていたことも付け加えた。「『ユダよ、兄弟たちはあなたをほめた。あなたの手は敵の背の上にある。父の子らはあなたを伏し拝むであろう。ユダは獅子の子。わが子よ、あなたは若枝から上って来た。彼は身を伏せて、獅子のように、獅子の子のように眠った。だれが彼を起こすのか。ユダから治める者は絶えず、その腿から君も絶えない。彼のために備えられているものが来るまで。彼はもろもろの民の待ち望む者となる。彼はそのろばの子をぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子をぶどうのつるにつなぐ。彼はその衣をぶどう酒で洗い、その着物をぶどうの血で洗う。その目はぶどう酒によって輝き、その歯は乳のように白い』（創世記四九・八〜一二）」52:3「では、あなたがたの民族の中では、預言者も治める者も、一度も絶えたことがありません。民族が始まったときから、このイエス・キリストがお生まれになり、苦しみをお受けになるまでです。あなたがたは、そうでないとは、恥知らずにもあえて言わないでしょうし、示すこともできません。実際、あなたがたは、キリストがその者から苦しみを受けられたヘロデ[1]はアスカロン人であったと言います。それでも、あなたがたの民族の中には大祭司がいたと言っています。そのときにも、あなたがたには、モーセの律法に従う大祭司がいて、供え物をささげ、ほかの定めを守っていました。また、預言者たちが、ヨハネまで代々続いて現れていました。そのた

め、あなたがたの中から、預言者が絶えることはありませんでした。その預言者は、あなたがたの民の主であり、君であり、治める者でした。あなたがたの民がバビロンに連れ去られたときも、同じでした。その地が攻められ、聖なる器が奪い去られたときです。実際、預言者たちのうちにあった霊が、あなたがたのために、王たちにも油を注ぎ、王に立てていたのです」52:4「しかし、わたしたちのキリストであるイエスが、あなたがたの民族の中に現れられ、死なれました。その後には、どこにも預言者は現れていませんし、今もいません。それどころか、あなたがたが自分たちの王のもとにあることもやみました。さらに、あなたがたの地は荒らされ、番小屋のように取り残されています（イザヤ一・七～八参照）。また、言葉はヤコブを通して『彼はもろもろの民の待ち望む者となる』と言いました。これは、しるしによって、このかたの二度の来臨を示していました。そして、異邦人がこのかたを信じるようになることもです。そのことを、あなたがたは、今ようやく見ることができます。実際、わたしたちは、あらゆる異邦人の中から出て、キリストへの信仰によって、神を敬う者、正しい者となりました。そして、このかたが再び来られるのを待ち望んでいるのです」

53:1「また、『そのろばの子をぶどうの木につなぎ、雌ろばの子をぶどうのつるにつなぐ』とは、前もって明らかにするものでした。最初の来臨のときにこのかたがなさったわざと、同じように、このかたを信じるようになる異邦人とをです。実際、この人々は、荷を負わされたことがなく、自分の首にくびきを負ったこともない子ろばのようでした。それは、このキリストが来られて、弟子たちを遣わし、弟子たちを通して彼らを弟子とされるまでのことです。そして、彼らは、このかたの言葉のくびきを負い、背中を差し出して、すべてを耐え忍ぶようになりました。彼らが待ち望む良いもの、このかたによって告げ知らされた良いもののためです」53:2「また、わたしたちの主イエス・キリストは、エルサレムに入ろうとされました。そのとき、本当に、一頭の雌ろばを、その子ろばとともにご自分のところに引いて来るよう、弟子たちに命じられました。それは、ベテパゲと呼ばれる村の入り口に、つながれていたものです。そして、主はそれに乗って、エルサレムに入られました（マタイ二一・一～七参照）。このことは、キリストによってなされるとはっきり預言されていたとおりに、このかたによってなされ、知られました。そして、このかたがキリストであられることを明らかにしたのです。そして、これらのことがすべて起こり、聖書から示されているのに、あなたがたはなお心がかたくななのです」53:3「このことが起ころうとしていることは、十二人のひとりであるゼカリヤによって、こう預言されていました。『シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ、叫べ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって救いを与え、柔和で貧しく、荷を負う獣と、ろばの子とに乗る』（ゼカリヤ九・九）」53:4「また、預言の霊は、族長ヤコブとともに、荷を負う獣の雌ろばを、すでに連れている子ろばといっしょに名指ししました。そして、このかたがそれを持ち物としておられると言いました。そればかりか、先に述べたように、このかたご自身が、その両方の動物を引いて来るよう、弟子たちに命じられました。これらのことは、前もって告げるものでした。あなたがたの会堂から出る人々も、異邦人から出る人々とともに、このかたを信じるようになる、ということです。実際、荷を負わされたことのない子ろばは、異邦人から出る人々のしるしでした。それと同じように、荷を負った雌ろばは、あなたがたの民から出る人々のしるしでした。実際、あなたがたは、預言者たちを通して与えられた律法を、荷として負わされているのです」53:5「それだけでなく、預言者ゼカリヤを通しても、預言されていました。このキリストご自身が撃たれ、その弟子たちが散らされることです。そして、そのとおりになりました。実際、このかたが十字架につけられた後、ともにいた弟子たちは散り散りになりました。それは、このかたが死人の中からよみがえられ、弟子たちに得心させてくださるまでのことです。このかたがこのように苦しみを受けられることが、このかたについて前もって預言されていた、と。そして、弟子たちは、こうして得心し、全世界に出て行って、これらのことを教えたのです（ルカ二四・二五～二六、四四～四六参照）」53:6「ですから、わたしたちも、このかたへの信仰と、このかたの弟子であることとに、堅く立っています。わたしたちは、預言者たちから確信を得ているからです。また、世界中で、あの十字架につけられたかたの名によって神を敬う者となった人々が見られることからもです。ゼカリヤによって言われた言葉は、次のとおりです。『つるぎ

よ、立ち上がって、わが牧者を攻めよ。わたしの民の男を攻めよ、と万軍の主は言われる。牧者を撃て、その羊は散らされる』（ゼカリヤ一三・七）」

54:1「また、モーセによって書き記され、族長ヤコブによって預言された言葉があります。『彼はその衣をぶどう酒で洗い、その着物をぶどうの血で洗う』。この言葉は、次のことを明らかにしていました。このかたが、ご自分を信じる人々を、ご自分の血で洗おうとしておられる、ということです。実際、聖霊がこのかたの『衣』と呼んだのは、このかたを通して罪のゆるしを受けた人々のことです。その人々のうちに、このかたは、いつも力によってともにおられます。そして、二度目の来臨のときには、目に見える形でともにおられるでしょう」 54:2「また、言葉が『ぶどうの血』と言ったことは、巧みな言い方で、次のことを明らかにしています。キリストは血を持っておられる。しかし、それは人間の種からではなく、神の力からである、ということです。実際、ぶどうの木の血は、人間が生み出したのではなく、神が生み出されました。それと同じように、キリストの血も、人間の種族からではなく、神の力から生じることを、言葉は前もって示したのです。皆さん、わたしが語ってきたこの預言は、次のことを示しています。キリストは、人間から生まれた人間ではない。人間の通常のしかたに従ってお生まれになったのではない、ということです」

55:1 するとトリュフォンは答えた。「あなたのこの解き明かしも、覚えておきましょう。この難問も、ほかの箇所によって裏づけてくださるなら、ですが。しかし今は、話を取り上げ直して、わたしたちに示してください。万物の造り主のほかに別の神がいると、預言の霊によって認められていることをです。ただし、太陽と月のことを言うのは控えてください。神は、それらを神々として拝むことを、異邦人に許されたと書かれています（申命記四・一九参照）。そして、預言者たちは、この言い方をいわば借りて使い、しばしばこう言います。『あなたの神は、神々の神、主たちの主である』。そして、しばしば『大いにして力ある恐るべき』と付け加えるのです（申命記一〇・一七）」 55:2「実際、これは、神々が存在するものとして言われているのではありません。そうではなく、言葉がわたしたちに教えているのです。神々、主たちとみなされているものの中で、まことの神、万物を造られたかたが、ただひとりの主である、と。実際、聖霊は、このことも証明するために、聖なるダビデを通して言いました。『もろもろの民の神々は、神々とみなされているが、悪霊の偶像であって、神々ではない』（詩篇九六・五、歴代志上一六・二六参照）。そして、それを造り、拝む者たちに、のろいを下しています（詩篇一一五・八参照）」 55:3 わたしは言った。「トリュフォンよ、わたしが挙げようとしていたのは、そのような論証ではありません。それによって、これらのものや、それに類するものを拝む者たちが罪に定められると、わたしが知っている論証です。そうではなく、だれも反論することのできない論証です。しかし、それらは、あなたがたが毎日読んでいるものであるのに、あなたには耳慣れないものに思えるでしょう。それで、あなたがたは、このことからも悟るはずです。あなたがたの悪のために、神は、ご自分の言葉にある知恵を理解する力を、あなたがたから隠された、ということです（第二コリント三・一四参照）。ただし、ある人々は別です。イザヤが言ったように、神は、豊かなあわれみの恵みによって、その人々に、救いのための種を残されました。それは、あなたがたの民族も、ソドムの人々やゴモラの人々のように、すっかり滅びてしまわないためです（イザヤ一・九参照）。ですから、わたしが聖なる書から思い起こさせようとしていることを、よく聞いてください。それは、解き明かされる必要もなく、ただ聞かれさえすればよいものです」

訳注

1 アスカロン人とされたのは別のヘロデ。この句を後の書き込みとみる説がある。

56章（1〜13節） マムレでアブラハムに現れた神

56:1 「では、神の幸いな、忠実なしもべであるモーセは、次のことを示しています。マムレの樫の木のそばで、神がアブラハムに現れられた。その神を、別のかたが、ソドムの裁きのために、二人のみ使いとともに遣わされた、ということです。その別のかたは、天の上の所にいつもとどまっておられます。そして、いまだかつて、だれにも現れられたことがなく、ご自身でだれかと語られたこともありません。わたしたちは、このかたを万物の造り主、また父と理解していますす」 56:2 「実際、モーセはこう言っています。『神は、マムレの樫の木のそばで彼に現れられた。それは真昼で、彼は天幕の入口にすわっていた。彼が目を上げて見ると、見よ、三人の人が彼に向かって立っていた。彼はこれを見て、天幕の入口から走って行って彼らを迎え、地に身をかがめて言った』。以下、次の言葉まで続きます[1]。『アブラハムは朝早く起き、主の前に立っていた所に行った。そして、ソドムとゴモラの方、また周りの地の全面をながめた。すると、見よ、炎が地から、かまどの煙のように立ちのぼっていた』（創世記一八・一〜三、一九・二七〜二八）」わたしは、ようやく話すのをやめた。そして、言われたことを理解したかと彼らに尋ねた。 56:3 彼らは、理解はしたと言った。しかし、語られた言葉は、論証となるものを何も持っていないと言った。万物の造り主のほかに、だれか別の神か主がいる、あるいは聖霊によってそう言われている、ということの論証である。 56:4 わたしはまた言った。「わたしは、あなたがたが聖書を理解したうえで、わたしの言うことに納得してもらえるよう努めます。それは、万物の造り主の下に、別の神、また主がおられ、そう言われている、ということです。このかたは、み使いとも呼ばれます。万物の造り主が人々に告げ知らせたいと望まれることを、すべて人々に告げ知らせなさるからです。万物の造り主の上には、ほかに神はいません」そして、先に挙げた言葉をもう一度たどり直して、わたしはトリュフォンに尋ねた。「言葉が言うとおり、神はマムレの樫の木の下でアブラハムに現れられたと、あなたは思いますか」すると彼は言った。

「そのとおりです」 56:5 「それで、その神は、あの三人のうちのひとりだったのですか。聖なる預言の霊が、人々としてアブラハムに見えたと言っている、あの三人です」とわたしは言った。すると彼は答えた。「いいえ。そうではなく、神は、三人が現れる前に、アブラハムに現れておられたのです。それから、言葉が人々と呼んでいるあの三人は、み使いでした。そのうちの二人は、ソドムを滅ぼすために遣わされた者たちでした。ひとりは、サラに、子を授かるという良い知らせを告げる者でした。そのために遣わされていたのです。そして、その務めを成し遂げて去りました」 56:6 わたしは言った。「では、天幕の中にいた三人のうちのひとりは、『時が来れば、わたしはあなたのところに引き返して来る。そして、サラに男の子が生まれる』と言われました（創世記一八・一〇、一四参照）。どうして、そのかたが、サラに男の子が生まれた後に、戻って来られたことが明らかなのでしょうか。また、どうして、預言の言葉は、そこでも、このかたが神であられることを示しているのでしょうか。わたしの言うことがあなたがたに明らかになるように、モーセによってはっきりと語られた言葉を聞いてください」 56:7 「それは次のとおりです。『サラは、エジプトのはしためハガルがアブラハムに産んだ子が、自分の子イサクと遊ぶのを見て、アブラハムに言った。「このはしためとその子を追い出してください。このはしための子は、わたしの子イサクとともに、世継ぎとなることはないからです」。この言葉は、その子のことで、アブラハムにはたいへんつらいものに思えた。しかし、神はアブラハムに言われた。「あの子のことでも、はしためのことでも、つらく思ってはならない。サラがあなたに言うことは、すべて聞きいれなさい。イサクに生まれる者が、あなたの子孫と唱えられるからです」』（創世記二一・九〜一二）」 56:8 「では、あなたがたは次のことを理解しましたか。あのとき樫の木の下で、戻って来ると言われたかたは、書かれているとおり、戻って来られました。サラがアブラハムにさせたいと望んだことを、アブラハムに勧める必要があると、前もってご

存じだったからです。そして、このかたは神であられます。次のように語られた言葉が、それを示しているとおりです。『神はアブラハムに言われた。「あの子のことでも、はしためのことでも、つらく思ってはならない」』（創世記二一・一二）」とわたしは尋ねた。56:9 トリュフォンは言った。「そのとおりです。しかし、あなたはこのことから、次のことを示したのではありません。アブラハムに現れられ、ほかの族長たちや預言者たちにも現れておられたこのかたのほかに、別のかたが神である、ということです。そうではなく、あなたが示したのは、わたしたちの理解が正しくなかった、ということです。天幕の中でアブラハムのもとにいた三人は、みな、み使いだった、という理解です」56:10 わたしはまた言った。「では、もしわたしが、聖書からも次のことを示せなかったとします。あの三人のうちのひとりは神であられ、またみ使いとも呼ばれる、ということです。先に述べたように、このかたは、万物の造り主である神が望まれる人々に、その神からのことを告げ知らせなさるからです。そうであれば、あなたがたが、次のように理解するのは理にかなっていたでしょう。あのかたは、ともに来た二人のみ使いと同じく、地上で人の姿をとってアブラハムに現れられた。そのかたは、アブラハムの神であり、世界が造られる前からおられた神である、と。あなたがたの民族全体も、そう理解しています」すると彼は言った。「まったくそのとおりです。実際、わたしたちは、今までそう考えてきました」56:11 わたしはまた言った。「聖書に立ち返って、あなたがたに納得してもらえるよう努めます。アブラハムにも、ヤコブにも、モーセにも現れられたと言われ、また書かれている神がおられます。この神は、万物を造られた神とは別のかたである、ということです。わたしが言うのは、数においてであり、意志においてではありません。実際、わたしは言います。この神がかつてなさったことも、語られたことも、すべて、世界を造られたかたが、なし、語るようにと望まれたことだけです（ヨハネ一二・四九参照）。世界を造られたかたの上には、ほかに神はいません」56:12 トリュフォンは言った。「では、そういう者が本当にいることを、もう示してください。わたしたちがこのことにも同意するためです。実際、わたしたちは、あなたが次のように言っているとは受け取っていません。その者が、万物の造り主の意志に反して、何かを言ったとか、行ったとか、語ったとか、ということです」わたしは言った。「では、わたしが先に挙げた聖書の言葉が、このことをあなたがたに明らかにするでしょう。それは次のとおりです。『日が地の上にのぼり、ロトはゾアルに入った。そして、主は硫黄と火とを、主の所から、天からソドムの上に降らせ、これらの町と、周りの地のすべてを滅ぼされた』（創世記一九・二三～二五）」56:13 トリュフォンとともに残っていた者たちのうちの四人目が言った。「すると、二人のみ使いがソドムに下ったとき、言葉がモーセを通して、そのひとりを主とも名づけたわけだ。その者のほかに、アブラハムに現れられた神ご自身もいる、と言わなければならないな」

訳注

1 本来は全文が引かれ、写本で略されたとみられる。

56章（14〜23節） ソドムに火を降らせた主

56:14 わたしは言った。「そのことは、確かにそのとおりでした。しかし、ただそのためだけに、次のことをどうしても認めなければならなかったのではありません。万物の造り主と理解されているかたのほかに、別のだれかが、聖霊によって主と呼ばれている、ということです。しかも、モーセを通してだけでなく、ダビデを通してもです。実際、ダビデを通しても、こう言われています。『主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と』（詩篇一一〇・一）。先に述べたとおりです。また、ほかの言葉では、こうです。『神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた』（詩篇四五・六〜七）」 56:15 「では、もしあなたがたが、次のように言うとします。聖霊は、万物の父とそのキリストのほかに、だれか別の者をも神と呼び、主と呼んでいる、と。そうであれば、わたしに答えてください。わたしは、聖書そのものから、次のことをあなたがたに示すと約束しますから。聖書が主と言ったのは、ソドムに下った二人のみ使いのうちのひとりではありません。そうではなく、二人とともにおられ、神とも言われ、アブラハムに現れられた、あのかたです」 56:16 トリュフォンは言った。「示してください。実際、ご覧のとおり、日も進んでいますし、わたしたちも、これほど危うい答えをする用意ができていません。だれかがこのようなことを調べたり、問い求めたり、示したりするのを、いまだかつて聞いたことがないからです。また、もしあなたがすべてを聖書に引き戻していなかったら、わたしたちは、あなたの話を我慢して聞いてはいなかったでしょう。実際、あなたは聖書から論証をしようと努めています。そして、万物の造り主の上には、どんな神もいないと明言しています」 56:17 わたしは言った。「では、ご承知のとおり、聖書はこう言っています。『主はアブラハムに言われた。「なぜサラは、『わたしは本当に子を産むのだろうか。わたしはもう年をとっているのに』と言って笑ったのか。神にとって、不可能なことがあるだろうか。この時期に、時が来れば、わたしはあなたのところに帰って来る。そして、サラに男の子が生まれる」』（創世記一八・一三〜一四）。また、少し後では、こうです。『その人々はそこから立ち上がって、ソドムとゴモラの方を見おろした。アブラハムは、彼らを見送りながら、ともに行った。主は言われた。「わたしは、自分のすることを、わたしのしもべアブラハムに決して隠さない」』（創世記一八・一六〜一七）」 56:18 「また、少し後で、聖書は再びこう言っています。『主は言われた。「ソドムとゴモラの叫びは増し加わり、その罪は非常に重い。それで、わたしは下って行って、わたしに届いた彼らの叫びのとおりに、彼らがことごとく行っているかどうかを見よう。そうでなければ、それを知ろう」。その人々は、そこから身を巡らしてソドムに行った。アブラハムは、主の前に立っていた。アブラハムは近寄って言った。「あなたは、正しい者を、悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」』（創世記一八・二〇〜二三）」以下、言葉が続く。実際、同じことをもう一度書くのは、よいとは思えない。すべて先に書いたからである。そうではなく、わたしがトリュフォンとその仲間たちに論証をしたとき、拠り所とした言葉を述べなければならない。 56:19 そこで、わたしはその続きの箇所に移った。そこには、こう言われている。『主はアブラハムに言い終えると、去って行かれた。そして、アブラハムは自分の所へ去って行った。二人のみ使いは、夕暮にソドムに着いた。ロトはソドムの門のそばにすわっていた』（創世記一八・三三、一九・一）。以下、同じように、次の言葉まで続く。『その人々は手を伸べてロトをつかみ、家の内の自分たちのもとに入れて、家の戸を閉じた』（創世記一九・一〇）。さらに、その後の言葉が、次の言葉まで続く。『そして、み使いたちは、彼の手と、その妻の手と、娘たちの手を取った。主が彼を惜しまれたからである』 56:20 『彼らを外に連れ出したとき、彼らは言った。「救いなさい。自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。周り

の地のどこにも立ち止まってはならない。山へ逃れて救われなさい。巻き添えにならないように」。ロトは彼らに言った。「主よ、お願いです。しもべは、あなたの前にあわれみを得、あなたは、ご自分の義を大いなるものとされたのですから。わたしの命を生かすために、わたしにそれを行っておられるのです。しかし、わたしは山へ逃れて救われることができません。災いが身に追い迫って、わたしは死ぬでしょう」』 56:21 『「ごらんください。この町は、そこへ逃げ込むのに近く、小さな町です。小さな町ですから、わたしはそこで救われ、わたしの命は生きるでしょう」。すると、彼に言われた。「見よ、わたしはこの言葉についても、あなたの願いを聞きいれた。あなたの言ったその町を滅ぼさないことにする。急いで、そこで救われなさい。あなたがそこに入るまでは、わたしは何事もすることができないからである」。それゆえ、その町の名はゾアルと呼ばれた。日が地の上にのぼり、ロトはゾアルに入った。そして、主は硫黄と火とを、主の所から、天からソドムとゴモラの上に降らせ、これらの町と、周りの地のすべてを滅ぼされた』（創世記一九・一六～二五）。 56:22 わたしはまた話をやめてから、言い添えた。「それで、友人たちよ、今は次のことを理解したのではありませんか。三人のうちのひとりは、神でも主でもあられ、天におられるかたに仕えておられます。このかたが、二人のみ使いの主であられるのです。実際、二人がソドムへ行ったとき、このかたはあとに残っておられました。そして、モーセによって書き記されたことを、アブラハムと語り合っておられました。そして、このかたも、語り合いの後に去って行かれると、アブラハムは自分の所へ帰りました」 56:23 「このかたが来られると、もう二人のみ使いがロトと語り合うのではありません。そうではなく、言葉が明らかにしているとおり、このかたご自身が語り合われるのです。このかたは主でもあられます。天におられる主、すなわち万物の造り主から、務めを受けられたのです。言葉が数え上げているこれらのことを、ソドムとゴモラに下す務めです。言葉はこう言っています。『主は硫黄と火とを、主の所から、天からソドムとゴモラの上に降らせなさった』（創世記一九・二四）」

57〜58章　ヤコブに現れた神

57:1 わたしが話をやめると、トリュフォンは言った。「聖書がわたしたちに、このことを認めるよう迫っているのは、明らかです。しかし、言われていることについて当惑するのももっともだ、ということは、あなたも認めるでしょう。その者が、アブラハムの用意して差し出したものを食べた、と言われていることです（創世記一八・六〜八参照）」 57:2 わたしは答えた。「彼らが食べたことは、書かれています。しかし、もし、食べたと言われているのが三人であって、二人だけではない、とわたしたちが聞き取るとします。その二人は、まことにみ使いでした。そして、天で養われていることは、わたしたちには明らかです。わたしたち人間が用いるのと同じような食物で養われるのではないにしてもです。実際、あなたがたの先祖が荒野で養われたマナという食物について、聖書はこう言っています。『彼らはみ使いのパンを食べた』（詩篇七八・二五）。そうであれば、わたしは言うでしょう。食べたと言っている言葉は、わたしたちも火について『すべてを食い尽くした』と言うように言っているのだ。しかし、歯とあごでかんで食べた、と必ずしも聞き取らなくてよい、と。そのため、比喩の言い方に少しでも通じていれば、ここでも、わたしたちは何ひとつ当惑しないでしょう」 57:3 トリュフォンは言った。「このことも、食べ方について、そのように説明をつけることができます。書かれているのは、その食べ方で、彼らがアブラハムの用意したものを使い尽くして食べた、ということです。そのため、さあ、もうわたしたちに説明してください。アブラハムに現れ、万物の造り主である神に仕える者でもあるというこの神が、どのようにして、おとめによって生まれたのか。そして、あなたが先に言ったように、すべての人と同じような人間となったのか、ということです」 57:4 わたしは言った。「トリュフォンよ、まず、この要点について、ほかにもいくつかの論証を、多くの箇所から集めさせてください。あなたがたが、この点についても納得するためです。そして、その後で、あなたが求めている説明をします」すると彼は言った。「あなたのよいと思うようにしてください。実際、わたしにとっても、あなたがしようとしていることは、とても望ましいことです」

58:1 わたしは言った。「わたしは、あなたがたに聖書を語り聞かせようとしています。ただ技巧だけで言葉を組み立てて見せようと、躍起になっているのではありません。実際、わたしには、そのような力はまったくありません。そうではなく、ただ神からの恵みだけが、神の聖書を悟るために、わたしに与えられたのです。わたしは、報いを求めず、惜しまずに、すべての人にも、この恵みを分かち合う者となるよう勧めています。わたしが、このことのゆえにも、裁きを受けることのないようにです。その裁きは、万物の造り主である神が、わたしの主イエス・キリストを通して行おうとしておられるものです」 58:2 トリュフォンは言った。「そうすることも、神を敬う心にふさわしいことです。しかし、あなたは、技巧のある言葉の力を持っていないと言って、とぼけているように思えます」わたしはまた答えた。「あなたにそう思えるのなら、そういうことにしておきましょう。わたしとしては、それが本当だと確信しています。しかし、それよりも、わたしがもう残りの論証をするために、心を向けてください」すると彼は言った。「話してください」 58:3 わたしは言った。「兄弟たちよ、モーセによって、また次のように書かれています。族長たちに現れられ、神と言われているこのかたは、み使いとも主とも言われている、ということです（創世記一八・一、三一・一〇〜一三参照）。それは、あなたがたが、このことからも、このかたが万物の父に仕えておられることを深く知るためです。あなたがたが、すでに同意したとおりです。そして、さらに多くのことによって納得して、揺るがずにとどまるためです」 58:4 「では、神の言葉は、モーセを通して、アブラハムの孫ヤコブのことを説き明かして、こう言っています。『群れが身ごもって発情したとき、わたしは夢の中で、それを目で見た。見よ、羊とやぎの上に乗っている雄やぎと雄羊は、しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりのものであった。神のみ使い

が夢の中でわたしに言われた。「ヤコブよ、ヤコブよ」」58:5「わたしは言った。「主よ、何でしょうか」。すると、言われた。「目を上げて見なさい。羊とやぎの上に乗っている雄やぎと雄羊は、しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりのものである。わたしは、ラバンがあなたにしていることを、みな見ているからである。わたしは、神の所であなたに現れた神である。あなたはそこで、わたしのために柱に油を注ぎ、そこで誓いを立てた。いま立って、この地を出なさい。そして、去って、あなたの生れた地へ行きなさい。わたしはあなたと共にいる』」（創世記三一・一〇～一三）」58:6「また、ほかの言葉の中で、同じヤコブについて語って、こう言っています。『彼はその夜起きて、ふたりの妻とふたりのはしためと十一人の子供とを連れて、ヤボクの渡しを渡った。そして、彼らを連れて川を渡り、自分の持ち物をみな渡らせた。ヤコブはひとりあとに残った。そして、ひとりの人が、朝まで彼と組み打ちをなさった。その人は、ヤコブに勝てないのをご覧になって、ヤコブのももものつがいに触れられた。すると、ヤコブがその人と組み打ちするあいだに、ヤコブのももものつがいがしびれた。そして、彼に言われた。「夜が明けるからわたしを去らせてください」」58:7「彼は言った。「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」。すると、彼に言われた。「あなたの名はなんと言いますか」。彼は言った。「ヤコブです」。すると、彼に言われた。「あなたの名は、ヤコブとは呼ばれません。イスラエルが、あなたの名となります。あなたは神と共に力を振るったので、人々と共にあっても力ある者となるからです」。ヤコブは尋ねて言った。「どうかわたしにあなたの名を知らせてください」。すると、言われた。「なぜ、このように、わたしの名をきくのですか」。そして、その所で彼を祝福された。ヤコブは、その所の名を「神の姿」と名づけた。「わたしは顔と顔をあわせて神を見たからである。そして、わたしの魂は喜んだ」』（創世記三二・二二～三〇）」58:8「また、ほかの箇所で、同じヤコブについて告げ知らせて、こう言っています。『ヤコブは、共にいたすべての人々と一緒に、カナンの地にあるルズ、すなわちベテルに来た。彼はそこに祭壇を築き、その所の名をベテルと名づけた。彼が兄エサウの顔を避けてのがれるとき、神がそこで彼に現れられたからである。リベカのうばデボラが死んで、ベテルのしもの、かしの木の下に葬られた。ヤコブは、その木の名を「嘆きのかしの木」と名づけた。神は、ヤコブがシリヤのメソポタミヤから来たとき、再びルズで彼に現れられ、彼を祝福された。神は彼に言われた。「あなたの名は、もはやヤコブとは呼ばれない。イスラエルが、あなたの名となる」』（創世記三五・六～一〇）」58:9「神と呼ばれ、神であられ、また、これからも神であられるのです」58:10 皆がうなずくと、わたしは言った。「また、次の言葉も、あなたがたに述べる必要があると考えて、述べます。兄エサウから逃れていたヤコブに、このかたがどのように現れられたかを告げる言葉です。このかたは、み使いでも、神でも、主でもあられます。このかたは、人の姿でアブラハムに現れられ、また、人の姿でヤコブ自身と組み打ちをなさったのです（創世記一八・二、三二・二四参照）」58:11「その言葉は、次のとおりです。『ヤコブは誓いの井戸を出て、ハランへ向かった。そして、一つの所に着いて、そこで一夜を過ごした。日が暮れたからである。そして、その所の石を取って、頭のところに置き、その所に伏して寝た。そして、夢をみた。見よ、一つのはしごが地にしっかりと立てられていて、その頂は天に達し、神のみ使いたちがそれを上り下りしていた。そして、主はその上にしっかりと立っておられた」58:12「そして、言われた。「わたしは主、あなたの父アブラハムの神、またイサクの神である。恐れるな。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。あなたの子孫は地の砂のようになり、海と南と北と東にひろがる。地の諸族はみな、あなたとあなたの子孫とによって祝福をうけるであろう。見よ、わたしはあなたと共にいて、あなたがどの道を行くにも、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに語ったことをすべて行うまで、決してあなたを捨てないからである」」58:13「ヤコブは眠りからさめて言った。「主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった」。そして、恐れて言った。「この所は、なんと恐るべき所だろう。これは神の家にほかならない。これは天の門だ」。ヤコブは朝起きて、そこで頭の下に置いた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いだ。そして、ヤコブはその所の名を「神の家」と名づけた。その町の名は、初めはウラムマウスといった』（創世記二八・一〇～一九）」

59〜61章　柴の中から語った神、生まれた力

59:1 こう言ってから、わたしは言った。「辛抱して聞いてください。出エジプト記という書からも、あなたがたに示します。同じこのかたは、み使いでも、神でも、主でも、男でも、人でもあられ、アブラハムとヤコブに現れられました。このかたは、炎の火の中に、柴の中から現れられ、モーセと語られました。そのありさまを示すのです（創世記一八・二、三二・二四、出エジプト三・二参照）」彼らが、喜んで、疲れも見せず、心から聞くと言うので、わたしは続けて言った。59:2「これは、『出エジプト記』と題された書にあります。『それから多くの日を経て、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは、その苦役のゆえにうめいた』（出エジプト二・二三）。以下、次の言葉まで続きます[1]。『行って、イスラエルの長老たちを集め、彼らに言いなさい。「あなたがたの先祖の神、主が、わたしに現れられました。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神です。そして、言われました。『わたしは、あなたがたと、あなたがたがエジプトで遭ったこととを、必ず顧みる』』」（出エジプト三・一六）」59:3 そして、これに続けて、わたしは言った。「皆さん、次のことを理解しましたか。モーセは、み使いが炎の火の中で自分に語られたと言います。そのみ使い自身が、神であられて、ご自分がアブラハムとイサクとヤコブの神であることを、モーセに示しておられるのです（出エジプト三・二、六参照）」

60:1 トリュフォンは言った。「先に挙げた言葉から、わたしたちはそのようには理解しません。そうではなく、火の炎の中に現れたのはみ使いであり、モーセと語られたのは神であった、と理解します。そのため、み使いと神の二者が共に、そのときの幻の中にいたのです（出エジプト三・二、使徒七・三〇参照）」60:2 わたしはまた答えた。「友人たちよ、たとえ、そのとき、モーセに起きた幻の中に、み使いと神が共にいた、ということが起きたとします。そうだとしても、ご自分がアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると、モーセに言われた神がいます。その神は、先に書いた言葉によって、あなたがたに示したとおり、万物の造り主ではないでしょう。そうではなく、アブラハムとヤコブに現れられたと、わたしがあなたがたに示したかたです。このかたは、万物の造り主の意志に仕えておられ、ソドムの裁きでも、同じようにその御旨に仕えられました。そのため、あなたがたの言うように、み使いと神の二者であったとします。そうだとしても、少しでも分別があれば、だれひとり、あえてこう言わないでしょう。万物の造り主であり父であるかたが、天の上にあるものをすべて後にして、地のわずかな一角に現れられた、と」60:3 トリュフォンは言った。「アブラハムに現れた者は、天におられる主によって、神とも主とも名づけられました。この者が、ソドムの地に下されたものを受けて、それを下したことは、すでに示されています。ですから、今も、たとえモーセに現れた神と共に、み使いがいたとします。そうだとしても、柴の中からモーセと語った神を、万物の造り主である神であったとは理解しないでしょう。そうではなく、アブラハムにもヤコブにも現れたと示された、あの者であったと理解するでしょう。この者は、万物の造り主である神のみ使いとも呼ばれ、またそうであると理解されています。万物の父であり造り主であるかたからのことを、人々に伝えるからです」60:4 わたしはまた言った。「しかし、トリュフォンよ、今こそ示しましょう。モーセの幻のときに、み使いと呼ばれ、神であられるこのかたが、ただひとりで現れられ、モーセと語られたことをです。実際、言葉はこう言っています。『主のみ使いが、炎の火の中に、柴の中から彼に現れられた。彼が見ると、柴は火に燃えているのに、その柴は燃え尽きなかった。モーセは言った。「行って、この大きな見ものを見よう。なぜ柴が燃え尽きないのか」。主は、彼が見に近づいて来るのをご覧になると、主が柴の中から彼を呼ばれた』（出エジプト三・二〜四）」60:5「では、言葉は、夢の中でヤコブに現れられたかたを、み使いと言っています。そして、言葉によれば、夢の中で現れられたそのみ使い自身が、彼にこう言われました。『わたしは、あなたが兄エサウの顔を避けてのがれていたとき、あなたに現れた神であ

る』（創世記三一・一三、三五・一参照）。また、アブラハムのときには、ソドムの裁きで、主が、天におられる主の所から裁きを下された、と言いました（創世記一九・二四参照）。それと同じように、ここでも、言葉は、主のみ使いがモーセに現れられたと言います。そして、その後で、そのかたが主であり神であられることを示します。こうして、同じかたのことを言っているのです。言葉は、これまでに述べた多くの箇所によっても、このかたを示しています。世界の上におられる神、その上にはほかのだれもいない神に、仕えておられるかたとしてです」

61:1 わたしは言った。「友人たちよ、聖書から、あなたがたにもう一つの証しを示しましょう。神は、すべての造られたものより前に、初めとして、ご自身から、ある理性ある力をお生みになりました。この力は、聖霊によって、主の栄光と呼ばれます（出エジプト一六・七参照）。また、ときには子（詩篇二・七参照）、ときには知恵（箴言八章参照）、ときにはみ使い、ときには神、ときには主またロゴスと呼ばれます（詩篇三三・六、一〇七・二〇参照）。また、ときには、人の姿でヌンの子ヨシュアに現れられて、ご自分を軍勢の将と言っておられます（ヨシュア五・一三〜一四参照）。実際、このかたは、これらすべての名で呼ばれることができます。父の御旨に仕えておられること、また、父から意志によってお生まれになったことによってです」61:2「しかし、これは、わたしたちにも起きるのを見るのと、同じようなことではないでしょうか[2]。実際、わたしたちは、ある言葉を発するとき、言葉を生みます。しかし、切り分けて発するのではないので、わたしたちのうちにある言葉が減ることはありません。また、火についても、ほかの火が生じるのを見るのと同じです。火をともしたもとの火は減らず、同じままです。そして、それからともされた火も、それ自体として存在するのが見え、ともしたもとの火を減らしはしません」61:3「知恵のロゴスが、わたしに証ししてくださるでしょう。このロゴスこそ、万物の父から生まれた神ご自身であり、お生みになったかたのロゴス、知恵、力、栄光であられます。このかたは、ソロモンを通して、こう言われました。『もしわたしが、日々起こることをあなたがたに告げるなら、永遠からのことを忘れずに数えよう。主は、その道の初めとして、そのわざのために、わたしを造られた。世の前に、初めに、わたしを据えられた。地を造る前、淵を造る前、水の泉が流れ出る前、山が定められる前、すべての丘より前に、わたしをお生みになる」61:4「神は、土地と、人の住まない所と、天の下の人の住む果てを造られた。彼が天を備えられたとき、わたしはそのかたわらにいた。彼は風の上にご自分の王座を定められ、上にある雲を強くされた。淵の泉を確かなものとされ、地の基を強くされた。そのとき、わたしは彼のかたわらにいて、調え合わせていた。わたしは、彼が喜ばれた者であった。わたしは日々、いつも彼の前で楽しんでいた。彼は世界を完成して楽しまれ、人の子らのうちで楽しまれたからである」61:5「それゆえ、子よ、今わたしに聞け。わたしに聞き従う人、わたしの道を守る人はさいわいである。その人は、日々わたしの門のかたわらで目をさまし、わたしの入口の柱を見守る。わたしの出口は、いのちの出口であり、主から恵みが備えられているからである。わたしに対して罪を犯す者は、自分の魂に対して不敬虔を行い、わたしを憎む者は死を愛する』（箴言八・二一〜三六）」

訳注

1 ここも本来は全文が引かれ、写本で略されたとみられる。

2 写本の区切りでは『わたしたちに起こるようなことではない』となる。

62〜63章 『造ろう』の語りかけの相手、人の胎から生まれる神

62:1 「友人たちよ、神の言葉は、モーセを通しても、まさにこのことを言いました。人を造るとき、神は、神の言葉が明らかにしたそのかたに、まさにこの意味で語られた。そのことを、わたしたちに示したのです。言葉は、こう言っています。『「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう。そして、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、全地と、地を這うすべての這うものとを治めさせよう」。神は人を造られた。神のかたちに彼を造られた。男と女とに彼らを造られた。神は彼らを祝福して言われた。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」』（創世記一・二六〜二八）」 62:2 「また、あなたがたは、先に挙げた言葉を変えて、あなたがたの教師たちの言うことを言うかもしれません。神はご自分に向かって『造ろう』と言われた。わたしたちも、何かをしようとするとき、よく自分に向かって『造ろう』と言うのと同じだ、と。あるいは、神は元素に向かって『造ろう』と言われた。つまり、地や、同じようにほかのものに向かってである。わたしたちは、人がそれらから生じたと理解している、と。そう言わせないために、モーセ自身の語った言葉を、さらに述べましょう。その言葉から、わたしたちは、神がだれかと語り合われたことを、疑いの余地なく深く知ることができます。そのだれかは、数において別であり、理性あるかたです」 62:3 「その言葉は、次のとおりです。『神は言われた。「見よ、アダムは、善と悪とを知る点で、われわれのひとりのようになった」』（創世記三・二二）。すると、神は『われわれのひとりのように』と言われました。それによって、互いに共にいる者たちの数を、しかも少なくとも二者であることを、示されたのです。実際、あなたがたのところで異端と呼ばれているものが教えていることを、わたしは真実だとは言わないでしょう。また、その異端の教師たちも、示すことはできません。神がみ使いたちに語られたとか、人の体はみ使いたちの造ったものであったとかいうことです」 62:4 「そうではなく、まことに父から発せられた、この生み出されたかたが、すべての造られたものより前に、父と共におられたのです。そして、父は、このかたに語りかけておられるのです。言葉がソロモンを通して明らかにしたとおりです。すなわち、神は、すべての造られたものより前に、まさにこのかたをお生みになっていました。初めとして、また生み出されたかたとしてです。このかたは、ソロモンを通して、知恵と呼ばれています。また、言葉は、ヌンの子ヨシュアに与えられた啓示を通しても、まさにこのことを言いました。わたしの言うことが、これらの言葉からも、あなたがたに明らかになるように、ヨシュアの書からの言葉も聞いてください」 62:5 「その言葉は、次のとおりです。『ヨシュアがエリコにいたとき、目を上げて見ると、ひとりの人が彼に向かって立っていた。ヨシュアは近寄って、彼に言った。「あなたはわれわれの味方ですか。それとも敵の味方ですか」。ヨシュアに言われた。「わたしは主の軍勢の将である。今来たのだ」。ヨシュアは地にひれ伏して、彼に言った。「主よ、あなたはこのしもべに何をお命じになりますか」。主の軍勢の将はヨシュアに言われた。「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたが立っている所は、聖なる地だからである」。エリコは閉ざされ、固められていて、そこから出て行く者はなかった。主はヨシュアに言われた。「見よ、わたしはエリコと、そこにいるその王とを、あなたの手に渡す。彼らは力の強い者たちである」』（ヨシュア五・一三〜六・二）」

63:1 トリュフォンは言った。「友よ、あなたは、このことを、力強く、多くの箇所によって示しました。では、あとは、この者が、その父の御旨に従って、おとめによって人として生まれることを忍んだと、示してください。十字架につけられ、死ぬことも忍んだと、示してください。また、その後、復活して天に昇ったことも、明らかにしてください」 63:2 わたしは答えた。「皆さん、このことも、わたしはすでに示しました。先に詳しく述べた預言の言葉のうちでです。あなたがたのために、その言葉をもう一度思い起こし、解き明かしましょう。そして、この点についても、あなたがたを同意へと導くよう努めます。たとえば、イザヤ

が言った言葉があります。『だれがその生まれを語ることができようか。その命が地から取り去られるからである』（イザヤ五三・八）。この言葉は、次のことを言っていると、あなたには思えませんか。民の不法のために死に渡されると神が言われたかたは、人間から生まれを得ておられない、ということです（イザヤ五三・五参照）。このかたについて、モーセも、先に言ったように、その血のことをたとえで語りました。このかたがぶどうの血でその衣を洗われる、と言ったのです（創世記四九・一一参照）。それは、このかたの血が、人間の種からではなく、神の意志から生まれたものであることを言うのです（ヨハネ一・一三参照）」63:3「また、ダビデの語った言葉もあります。『あなたの聖なる者たちの輝きのうちに、わたしは明けの明星の前に、胎からあなたを生んだ。主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」』（詩篇一一〇・三〜四）。これは、あなたがたに次のことを示しているのではありませんか。万物の神であり父であるかたが、昔から、また人の胎を通して、このかたを生もうとしておられた、ということです」63:4「また、神は、ほかの言葉でも言われました。これも先に挙げた言葉です。『神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた。あなたの衣からは、没薬と香油と肉桂とがかおる。象牙の殿からもかおる。それによって、人々はあなたを喜ばせた。王たちの娘たちが、あなたの誉れのうちにいる。王妃は金を織り込んだ衣をまとい、色とりどりに着飾って、あなたの右に立った。娘よ、聞け、見よ、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。王はあなたのうるわしさを慕うであろう。彼はあなたの主だからである。あなたは彼を伏しおがむであろう』（詩篇四五・六〜一一）」63:5「少なくとも、このかたが、これらのものを造られたかたから証しを受けて、拝まれるべきかた、神、キリストであられること。このことを、これらの言葉もはっきりと示しています。また、神の言葉は、このかたを信じる人々に、娘に語るように語っています。その人々は、一つの魂、一つの会衆、一つの教会だからです。その娘とは、このかたの名から生まれ、このかたの名にあずかった教会です。実際、わたしたちはみな、キリスト者と呼ばれています。神の言葉がこのように語っていることも、これらの言葉は同じようにはっきりと告げています。そして、わたしたちに、昔からの先祖の慣わしをも忘れるよう教えています。その言葉は、こうです。『娘よ、聞け、見よ、耳を傾けよ。あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。王はあなたのうるわしさを慕うであろう。彼はあなたの主だからである。あなたは彼を伏しおがむであろう』（詩篇四五・一〇〜一一）」

64〜65章　ユダヤ人のうちで救われる者、ほかの者に与えない栄光

64:1 トリュフォンは言った。「この者は、聖書の示すとおり、あなたがた異邦人にとっては、主とも、キリストとも、神とも認められる者だとしましょう。あなたがたは、みな、この者の名から、キリスト者と呼ばれるようにもなったのですから。しかし、わたしたちは、この者自身をも造られた神に仕える者です。ですから、この者を告白することも、拝むことも、必要としません」 64:2 わたしは、これに対して言った。「トリュフォンよ、もしわたしが、あなたがたと同じように争いを好む、むなしい者であったとします。そうであれば、もうこれ以上とどまって、あなたがたと言葉を交わしはしなかったでしょう。あなたがたは、言われたことを悟ろうと備えているのではなく、ただ何かを言おうとして、自分を研ぎすましているだけだからです。しかし今、わたしは神のさばきを恐れています。そのため、あなたがたの民族のだれについても、先走って明言することはしません。その人が、万軍の主からの恵みによって救われうる者たちのひとりであるかどうかについてです。それで、たといあなたがたが悪意をもってふるまうとしても、わたしはとどまります。そして、あなたがたが持ち出し、反論することの何にでも答えます。また、あらゆる民族の人々に対しても、分け隔てなく、同じようにしています。これらのことについて、わたしと論じ合おうと、あるいはわたしに尋ねようと望む人々です」 64:3 「では、あなたがたの民族のうちで救われる人々も、このかたによって救われ、このかたの受ける分のうちにいます。もしあなたがたが、わたしが聖書から先に挙げた言葉に心を留めていたなら、このことを、もう理解していたはずです。そして、明らかに、このことについてわたしに尋ねはしなかったでしょう。わたしは、ダビデから先に挙げた言葉を、もう一度述べます。そして、あなたがたにお願いします。悟るために心を奮い立たせてください。ただ悪意をもってふるまい、反論するためにではありません」 64:4 「では、ダビデの言う言葉は、次のとおりです。『主は王となられた。もろもろの民は怒れ。主はケルビムの上に座せられる。地は震えよ。主はシオンにおられて大いなるかた、もろもろの民の上に高くいらせられる。彼らは、あなたの大いなるみ名をほめたたえよ。それは恐るべく、聖なるものだからである。王の誉れは公平を愛する。あなたは正しさを備え、ヤコブの中に公平と義とを行われた。われらの神、主をあがめ、その足台を拝みまつれ。主は聖でいらせられるからである。その祭司の中にモーセとアロンとがあった。そのみ名を呼ぶ者の中にサムエルもあった。彼らが主に呼ばわると、主は彼らの願いを聞き入れられた。主は雲の柱のうちで彼らに語られた。彼らが、そのあかしと、彼らに賜わったそのもろもろの命令とを守ったからである』（詩篇九九・一〜七）」 64:5 「また、ダビデを通して語られた、ほかの言葉にもあります。これも、先に詳しく述べた言葉です。あなたがたは、愚かにも、この言葉はソロモンについて言われたと言い張ります。表題に『ソロモンのために』と記されているからです。しかし、この言葉からも、ソロモンについて言われたのではないことが示されます。また、このかたが太陽より前にもおられたことも示されます。そして、あなたがたの民のうちで救われる人々が、このかたによって救われることも示されます」 64:6 「その言葉は、次のとおりです。『神よ、あなたの公平を王に与え、あなたの義を王の子に与えてください。彼は義をもってあなたの民をさばき、公平をもってあなたの貧しい者をさばく。もろもろの山は民のために平和を受け、もろもろの丘は義を受けるように。彼は民の貧しい者をさばき、乏しい者の子らを救い、しえたげる者を低くする。彼は太陽とともにとどまり、月より前に、代々に至る』（詩篇七二・一〜五）。以下、次の言葉まで続きます[1]。『彼の名は太陽より前からとどまる。地のすべての部族は彼によって祝福を受け、すべての国民は彼をさいわいなる者ととなえる。イスラエルの神、主はほむべきかな。ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。その栄光ある名は、世々限りなくほむべきかな。全地はその栄光に満たされる。そうなりますように、そうなりますように』（詩篇七二・一七〜一九）」 64:7 「また、同じようにダビデを通して語られたと先に言った、ほ

かの言葉からも、思い起こしてください。このかたが天の果てから出て来られることになっており、再び同じ所へ昇って行かれることが、示されていたのです。それは、神として上から出て来られ、人々の中で人となられたかたを、あなたがたが知るためです。また、このかたが再び来られることをも知るためです。このかたを刺し通した者たちは、このかたを見て、嘆くことになっています（ゼカリヤ一二・一〇参照）」64:8「その言葉は、次のとおりです。『もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。日は日に言葉をあふれ出させ、夜は夜に知識を告げる。話す言葉も語る言葉も、その声の聞こえないものはない。その響きは全地に出て行き、その言葉は世界のはてにまで及んだ。彼は太陽のうちにその幕屋を置いた。彼は、花婿がその祝のへやから出てくるように、巨人のように強く、喜び勇んで道を走る。彼は天の果てから出て、天の果てまで行き着く。その熱から隠れられる者はない』（詩篇一九・一～六）」

65:1 トリュフォンは言った。「これほど多くの聖書の言葉に恥じ入らされて、わたしは、イザヤの言った聖句について、何と言えばよいのか分かりません。その聖句によれば、神は、ご自分の栄光をほかのだれにも与えないと言われます。神は、こう言われたのです。『わたしは主なる神、これがわたしの名である。わたしは、わが栄光をほかの者に与えない。わが誉れをも与えない』（イザヤ四二・八）」65:2 わたしは言った。「トリュフォンよ、あなたは、この言葉を言って、口をつぐみました。その前の言葉を先に言うことも、後に続く言葉をつなげることもしませんでした。もしそれが、悪意からではなく、他意なくしたことだとします。そうであれば、あなたは許されてよいのです。しかし、もしあなたが、議論を行き詰まりに追い込めると考えて、そうしたのなら、思い違いをしています。わたしに、聖書は互いに矛盾すると言わせるためだったのなら、です。実際、わたしは、そのようなことを考えることも言うことも、決してあえてしません。そうではなく、もし、そのように見える聖句が持ち出され、矛盾しているかのような口実を与えるとします。そのときも、わたしは、どの聖句もほかの聖句と矛盾しないと、かたく確信しています。それで、むしろ、言われたことを自分が理解していないのだと認めます。そして、聖書が矛盾すると思っている人々を、わたしと同じ考えを持つよう説き伏せることに、むしろ力を尽くします」65:3「あなたがどのようなつもりでこの問いを持ち出したのかは、神がご存じです。しかし、わたしは、その言葉がどのように言われているかを、あなたがたに思い起こさせましょう。それは、まさにこの言葉からも、神がご自分のキリストにだけ栄光を与えておられることを、あなたがたが知るためです。皆さん、わたしは、いくつかの短い言葉を取り上げます。トリュフォンが言った言葉とつながっている言葉と、同じように、そのあとに続いてつながっている言葉です。実際、わたしは、それらを別の箇所から述べるのではありません。そうではなく、つながっているとおりに、ひと続きに述べます。あなたがたも、わたしの言うことに心を向けてください」65:4「その言葉は、次のとおりです。『主なる神は、こう言われる。主は天を造って、これを堅く据えられた。地とその中にあるものとを固め、その上の民に息を与え、地を踏む者に霊を与えられる。わたしは主なる神、義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手を取り、あなたを強くする。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与えた。盲人の目を開き、足かせをはめられた者を縄目から導き出し、暗きに座する者を獄屋から導き出すためである」65:5「わたしは主なる神、これがわたしの名である。わたしは、わが栄光をほかの者に与えない。わが誉れを刻んだ像に与えない。見よ、初めからの事は来た。わたしの告げる新しい事は、告げる前から、あなたがたに明らかにされた。神に向かって新しい歌をうたえ。その初めは地の果てからである。海に下って航海する者たち、島々と、そこに住む者たちよ」65:6「荒野よ、喜べ。その村々も、囲い地も喜べ。ケダルに住む者たちは喜ぶ。岩に住む者たちは山々の頂から叫び、神に栄光を帰し、その誉れを島々で告げる。万軍の主なる神は出て行かれ、戦いを打ち砕き、熱心を奮い起こし、力をもって敵に向かって叫ばれる』（イザヤ四二・五～一三）」65:7 これを言ってから、わたしは彼らに言った。「友人たちよ、理解しましたか。神は、もろもろの国びとの光として立てられたこのかたに栄光を与え、ほかのだれにも与えないと言っておられるのです。トリュフォンが言ったように、神がご自分のために栄光を取っておかれるのではありません」。トリュフォンは答えた。「そのことも理解しました。ですから、話の残りも終わりまで続けてください」

訳注

1　ここも本来は全文が引かれ、写本で略されたとみられる。

66〜67章　おとめの子の預言、ペルセウスの神話、新しい契約

66:1 わたしは、また、初めに中断したところから話を取り上げ直した。キリストはおとめからお生まれになったかたであり、おとめによってお生まれになることが、イザヤを通して預言されていた。わたしは、そう示していたのである。そして、その預言そのものを、もう一度述べた。66:2 その預言は、次のとおりである。『主は再びアハズに告げて言われた。「あなたの神、主に、深い所に、あるいは高い所に、あなたのために一つのしるしを求めよ」。アハズは言った。「わたしは求めません。主を試みることもいたしません」。イザヤは言った。「ダビデの家よ、聞け。あなたがたは、人を煩わすことを小さい事とするのか。どうして主を煩わすのか。それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。人々はその名をインマヌエルととなえる。彼は凝乳と蜂蜜とを食べる」』 66:3 『「彼は、悪を知るか、選び取るかする前に、善を選ぶ。その子は、悪も善も知る前に、悪に従わずに、善を選ぶからである。その子は、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを、アッスリヤの王の前で取るからである。そして、あなたがふたりの王のゆえに苦しんで耐えるその地は、奪われる。しかし神は、あなたと、あなたの民と、あなたの父の家とに、日々を臨ませられる。それは、エフライムがユダから離れ去った日このかた、まだ臨んだことのない日々である。アッスリヤの王を臨ませられるのである」』（イザヤ七・一〇〜一六、八・四、七・一六〜一七） 66:4 そして、わたしは続けて言った。「さて、肉によるアブラハムの民族の中で、おとめから生まれた者も、生まれたと言われた者も、かつてだれもいません。ただ、このわたしたちのキリストだけは別です。それは、すべての人に明らかです」

67:1 トリュフォンは答えた。「聖書には、『見よ、おとめがみごもって男の子を産む』とはありません（イザヤ七・一四）。そうではなく、『見よ、若い女がみごもって男の子を産む』とあります。以下は、あなたが言ったとおりです。そして、この預言は、すべてヒゼキヤについて言われたものです。この預言のとおりのことが、ヒゼキヤに起こったと示されています」 67:2 「また、いわゆるギリシヤ人の神話では、ペルセウスは、おとめであったダナエから生まれたと言われています。彼らのところでゼウスと呼ばれている者が、金の姿となって彼女の上に流れ下ったのだ、と。あなたがたは、彼らと同じことを言っているのですから、恥じるべきです。むしろ、このイエスは、人間から生まれた人間であると言うべきです。そして、もしあなたがたが、この者がキリストであることを聖書から示すなら、こう言うべきです。この者は、律法に従って完全に生活したので、キリストとして選ばれるにふさわしいとされたのだ、と。しかし、奇怪な話を、あえて語ってはなりません。ギリシヤ人と同じように愚かであると、証明されないためです」 67:3 わたしは、これに対して言った。「トリュフォンよ、わたしは、あなたにも、分け隔てなくすべての人々にも、次のことを確信してもらいたいのです。たといあなたがたが、ふざけたり、あざけったりして、もっとひどいことを言うとします。そうだとしても、わたしを、いま論じていることから引き離すことにはなりません。そうではなく、あなたがたは、ある言葉や事柄を、反証として持ち出せると思っています。まさにそこから、わたしは、自分の言うことの論証を行います。いつも聖書の証しとともにです」 67:4 「しかし、あなたのしていることは、正しくもなく、真理を愛する者のすることでもありません。わたしたちのあいだで、いつも同意されてきたことまで、くつがえそうとしているからです。それは、あなたがたの民の心のかたくなさのために、モーセを通して、戒めのいくつかが定められた、ということです。実際、あなたは、このかたが律法に従って生活されたので、選びを受けてキリストとなられた、と言いました。もし、このかたがキリストであると示されるなら、ということですが」 67:5 トリュフォンは言った。「あなた自身が、わたしたちに認めたからです。この者は割礼を受け、モーセを通して命じられたほかの定めも守った、と」 67:6 わたしは答え

た。「認めましたし、今も認めます。しかし、このかたが、それらによって義とされるかのように、すべてを忍ばれた、と認めたのではありません。そうではなく、はからいを成し遂げようとして忍ばれた、と認めたのです。それは、このかたの父であり、万物の造り主であり、主であり、神であるかたが望まれたはからいです。実際、わたしは、このかたが十字架につけられて死なれることも、人となられることも、忍ばれたと認めます。また、あなたがたの民族の者たちがこのかたに加えたほど多くの苦しみを受けられることも、忍ばれたと認めます」 67:7 「トリュフォンよ、あなたは、すでに同意したことに、またしても同意しないのですから、わたしに答えてください。モーセより前に生まれた、義人である族長たちがいます。聖書の言葉は、いくつかの事柄がモーセを通して初めて定められたと示しています。その人々は、それらを何一つ守りませんでした。その人々は、祝福された人々の嗣業のうちで救われるのですか、それとも救われないのですか」 67:8 トリュフォンは言った。「聖書が、わたしに認めるよう迫っています」。わたしは言った。「同じように、もう一度あなたに問います。神が、あなたがたの先祖に、供え物といけにえとをささげるよう命じられたのは、必要とされたからですか。それとも、先祖たちの心のかたくなさと、偶像礼拝に傾きやすいことのためですか」。彼は言った。「このことも、同じように、聖書が、わたしたちに認めるよう迫っています」 67:9 わたしは言った。「また、神は、ホレブの山での契約とは別の、新しい契約を立てると約束しておられます。このことも、同じように、聖書は前もって言いましたか（エレミヤ三一・三一参照）」。彼は、このことも前もって言われていたと答えた。わたしはまた言った。「一方、古い契約は、恐れとおののきとのうちに、あなたがたの先祖に定められたのではありませんか。彼らが神の言われることを聞くことさえできなかったほどに（出エジプト一九・一六～一八、二〇・一八～一九、ヘブル一二・一八～一九参照）」。彼はそれを認めた。 67:10 わたしは言った。「では、どうでしょう。神は、別の契約があることになると約束されました。それは、あの契約が定められたようなものではありません。神は、それが恐れもおののきも稲妻もなしに、彼らに定められると言われました。また、その契約は次のことを示す、とも言われました。神が、どのおきてとどの行いを、永遠のもの、あらゆる民族にふさわしいものとしてご存じであるかです。また、どれを、あなたがたの民の心のかたくなさに合わせて命じておられたかです。神が預言者たちを通しても叫んでおられるとおりです」 67:11 彼は言った。「このことにも、争いを好む者ではなく、真理を愛する者なら、どうしても同意しなければなりません」。わたしは言った。「どうしてなのか分かりません。あなたは、ある人々を争いを好む者と呼びます。それなのに、あなた自身こそ、何度もまさに争いを好む者のふるまいをしていることが、明らかになりました。同意したことに、何度も反論したのです」

68〜69章　ダビデの家への預言、七十人訳、悪魔のまねごと

68:1 トリュフォンは言った。「実際、あなたは、信じがたく、ほとんど不可能なことを示そうとしています。神が、生まれることを忍んで、人となった、ということです」。わたしは言った。「もし、わたしがこのことを、人間の教えや論法によって示そうと企てたとします。それなら、あなたがたがわたしに耐える必要はなかったでしょう。しかし、このことについて語られた聖書の言葉は、これほど多くあります。わたしは、それを何度も述べて、あなたがたにそれを深く知ってほしいと求めているとします。そうであれば、あなたがたは、神の御思いと御心とを知ることについて、心がかたくなになっているのです。もし、あなたがたが、いつまでもそのようなままでいたいのなら、わたしのほうは、何の害も受けないでしょう。わたしは、あなたがたと出会う前に持っていたものと同じものを、いつも持ち続けたまま、あなたがたのもとを去ります」 68:2 トリュフォンは言った。「友よ、考えてもみてください。あなたがそれを手に入れたのは、多くの労苦と骨折りによってでした。ですから、わたしたちも、思い浮かぶことをすべて吟味してから、聖書がわたしたちに迫ることに同意しなければなりません」。わたしは、これに対して言った。「わたしが求めているのは、あなたがたが、あらゆる仕方で力を尽くして、問われていることを吟味しないことではありません。そうではなく、同意したと言ったことに、言うべきことが何もないのに、また反論しないことです」 68:3 トリュフォンは言った。「そうしてみましょう」。わたしはまた言った。「これまでに尋ねたことに加えて、今もまた、あなたがたに尋ねたいのです。実際、これらの問いによって、話を速やかに終わらせるよう力を尽くします」。トリュフォンは言った。「尋ねてください」。わたしは言った。「聖書の中で、拝まれるべきかた、主、神と呼ばれているかたが、まさか、ほかにだれかいると理解しているのでしょうか。この万物を造られたかたと、キリストとのほかにです。このキリストが人となられたことは、これほど多くの聖書の言葉によって、あなたがたに示されました」 68:4 トリュフォンは言った。「どうして、わたしたちがそうだと認めることができるでしょうか。ただ父のほかに、だれかほかにいるのかどうかについて、わたしたちはこれほど長く論じてきたのですから」。わたしはまた言った。「このことも、あなたがたに尋ねなければなりません。あなたがたが、これまで認めてきたこととは別のことを、まさか考えていないかを知るためです」。彼は言った。「いいえ、人よ」。わたしはまた言った。「では、あなたがたは、これらのことに本当に同意しています。そして、聖書の言葉は、『だれがその生まれを語ることができようか』（イザヤ五三・八）と言っています。そうであれば、このかたが人間の種族から出た子孫ではあられないことを、もう理解すべきではありませんか」 68:5 トリュフォンは言った。「では、どうして聖書の言葉は、ダビデにこう言うのですか。神は、ダビデの腰から、ご自分のために子を取り、彼のために王国を堅くし、彼をその栄光の王座に着かせられる、と（詩篇一三二・一一、サムエル記下七・一二〜一六、使徒二・三〇参照）」 68:6 わたしは言った。「トリュフォンよ、イザヤが語ったあの預言があります。その預言は『見よ、おとめがみごもる』（イザヤ七・一三〜一四）と言います。もし、それがダビデの家に向かってではなく、十二部族のほかの家に向かってであったとします。そうであれば、おそらく、この事には当惑するところがあったでしょう。しかし、まさにこの預言も、ダビデの家に向かって言われたのです。ですから、神がダビデに奥義のうちに言われたことは、どのように起ころうとしていたのか。それが、イザヤを通して解き明かされたのです。ただし、友人たちよ、あなたがたが、まさか次のことを知らないというのなら、話は別です。覆われた仕方で、たとえや奥義によって、あるいは行いによるしるしによって語られた多くの言葉があります。それを、語ったり行ったりしたあの人々の後に現れた預言者たちが、解き明かしたのです」 68:7 トリュフォンは言った。「そのとおりです」。わたしは言った。「では、イザヤのこの預言は、あなたがたが言うようにヒゼキヤについてではありません。このわたしたちのキ

リストについて言われたものです。もしわたしが、そう示すとします。そうすれば、この点でも、あなたがたの教師たちに従わないよう、あなたがたを強く促すことになるのではありませんか。その教師たちは、あえてこう言います。あなたがたの七十人の長老たちが、エジプト人の王プトレマイオスのもとで行った訳は、ある箇所では真実でない、と」68:8「実際、聖書の中で、彼らの愚かで自分本位な見解の誤りを、はっきりと証明していると見える箇所があります。それを、彼らは、そのようには書かれていないと、あえて言います。一方、人の行いに当てはまると彼らが思い、そこへ引き寄せることができると考える箇所もあります。それは、このわたしたちのイエス・キリストについてではない、と彼らは言います。そうではなく、自分たちが解き明かそうとする者について言われたものだ、と言うのです。いま話しているこの聖書の言葉も、そうです。彼らは、それがヒゼキヤについて言われたものだと、あなたがたに教えました。約束したように、わたしは、この点で彼らが偽っていると示します」68:9「また、わたしたちが彼らに挙げる聖書の言葉があります。それは、キリストが苦しみを受けるかたであり、拝まれるべきかたであり、神であられることを、はっきりと示すものです。わたしは、それをあなたがたにも先に詳しく述べました。彼らは、それがキリストについて言われたものであることには、やむなく同意します。しかし、このかたはキリストではないと、あえて言います。そして、キリストが来られ、苦しみを受けられ、王となられ、拝まれるべき神となられることは、認めます。これがばかげた、愚かなことであることも、同じように示しましょう。しかし、まず、あなたがふざけた仕方で言ったことに答えることが急がれますので、それに答えます。残りのことについては、後で論証をします」

69:1 わたしは、続けて言った。「では、トリュフォンよ、よく知っておいてください。悪魔と呼ばれる者が、まねて作り、ギリシヤ人のあいだで語られるようにしたことがあります。エジプトの魔術師たちを通して（出エジプト七・一一以下参照）、また、エリヤのときの偽預言者たちを通して（列王記上一八章参照）働いたのと同じようにです。そうしたことも、聖書についてのわたしの知識と信仰とを、確かなものにしたのです」69:2「実際、彼らは、ディオニュソスはゼウスの子であり、ゼウスがセメレと交わった、その交わりから生まれたと言います。また、このディオニュソスはぶどうの木を見いだした者となり、引き裂かれて死んだのち、よみがえり、天に昇ったと語ります。そして、その秘儀の中で、ろば[1]を持ち出します。そのとき、悪魔が族長ヤコブの預言をまねたのだと、わたしは理解せずにいられるでしょうか。モーセによって書き記された、先に挙げた預言です（創世記四九・一一～一二参照）」69:3「また、彼らは、ヘラクレスは強く、全地を巡り歩いたと言います。このヘラクレスもゼウスの子としてアルクメネから生まれ、死んで天に昇ったと言います。そのとき、わたしは次のことを理解せずにいられるでしょうか。悪魔は、キリストについて言われた聖書の言葉も、同じようにまねたのです。『巨人のように強く、その道を走る』（詩篇一九・五）という言葉です。また、悪魔は、アスクレピオスを持ち出して、死人をよみがえらせ、ほかの病をいやした者とします。そのとき、わたしは次のように言わずにいられるでしょうか。この点でも、悪魔は、キリストについての預言を同じようにまねたのです」69:4「ところで、キリストがこれらのことをなさると示す聖書の言葉を、わたしはまだあなたがたに詳しく述べていませんでした。ですから、どうしても、その一つに触れておきます。そこから、あなたがたも悟ることができます。神を知ることのない荒野のような人々、つまり異邦人に、言葉がどのように前もって告げていたかをです。彼らは、目があっても見ず、心があっても悟らず（詩篇一一五・五、イザヤ六・一〇参照）、物質から造られたものを拝んでいました。言葉は、彼らがそれを捨てて、このキリストに望みを置くと、前もって告げていたのです」69:5「それは、次のように言われています。『かわいた荒野よ、喜べ。荒野は楽しみ、ゆりのように花咲け。ヨルダンの荒れた所は花咲き、楽しむ。レバノンの栄えと、カルメルの誉れとが、それに与えられた。わたしの民は、主の高さと神の栄光とを見る。弱った手と、なえたひざよ、強くなれ。心の弱い者たちよ、慰めを受けよ。強くあれ、恐れるな。見よ、われわれの神は、裁きをもって報いておられ、また報いられる。神みずから来て、われわれを救われる。そのとき、盲人の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は聞こえる。そのとき、足なえはしかのように飛び走り、口の重い者の舌ははっきりする。荒野に水が、かわいた地に谷川が、わき出たからである。水のない地は池となり、かわいた地には水の泉ができる』（イザヤ三五・一～七）」69:6「このキリスト

は、神からの生ける水の泉として（ヨハネ四・一〇参照）、神を知ることのない荒野、つまり異邦人の地に、わき出られました。このかたは、あなたがたの民族の中にも現れられました。そして、生まれつき、肉において目の見えない者、耳の聞こえない者、足なえを、いやされました。ご自分の言葉によって、ある者を飛び走らせ、ある者を聞こえるようにし、ある者を見えるようにされました。また、死人をよみがえらせ、生きるようにされました。そして、そのわざによって、当時の人々に、ご自分を深く知るよう強く促されました」69:7「しかし、人々は、これらのことが起こるのを見ても、魔術による幻だと言いました。実際、あえてこのかたを魔術師と呼び（マタイ九・三四、一二・二四参照）、民を惑わす者と呼んだのです（ヨハネ七・一二、マタイ二七・六三参照）。しかし、このかたは、これらのことをなさることによって、ご自分を信じるようになる人々にも、確信させておられました。たとい、ある人が、体に何かの欠けがあるとします。そうだとしても、このかたがお伝えになった教えを守る者であるとします。それなら、このかたは、ご自分の二度目の来臨のときに、その人を完全な者としてよみがえらせてくださいます。そのうえ、不死で、朽ちず、悲しみのない者にしてくださいます。そのことを、確信させておられたのです」

訳注

1 写本の本文では『ろば』ではなく『ぶどう酒』とある。

70〜73章　ミトラスの秘儀、削られた聖句

70:1「また、ミトラスの秘儀を伝える者たちは、ミトラスが岩から生まれたと言います。そして、ミトラスに従う者たちを入信させると伝える場所を、洞穴と呼びます。そのとき、わたしは次のことを知らずにいられるでしょうか。彼らは、ダニエルによって言われた言葉をまねたのです。『一つの石が、人手によらずに、大きな山から切り出された』（ダニエル二・三四参照）という言葉です。また、イザヤの言葉も同じようにまねたのです（イザヤ三三・一六参照）。彼らは、そのイザヤの言葉を、すべてまねようと企てました。実際、彼らは、義を行うことについての言葉が、あの者たちのあいだでも語られるように仕組んだのです」70:2「いま触れたイザヤの言葉を、どうしても、あなたがたに詳しく述べておきます。そこから、これがそのとおりであることを、あなたがたが知るためです。その言葉は、次のとおりです。『遠くにいる者たちよ、わたしがおこなったことを聞け。近づく者たちは、わたしの力を知る。シオンにいる不法の者たちは離れ去った。おののきが、神を敬わない者たちを捕える。だれが、あなたがたに永遠の場所を告げるのか。義のうちに歩む者、まっすぐな道を語る者、不法と不義とを憎む者、贈り物から手を清く保つ者。耳をふさいで、血の不正な裁きを聞かない者、目を閉じて、不義を見ない者。その人は、堅い岩の高い洞穴に住む」70:3「パンは彼に与えられ、その水は確かである。あなたがたは、栄光のうちにある王を見る。あなたがたの目は、遠くから見る。あなたがたの魂は、主への恐れを思い巡らす。文字に通じた者はどこにいるのか。計りごとをする者たちはどこにいるのか。養われている者たち、小さい民と大きい民とを数える者はどこにいるのか。彼らは、その民と共に計らず、声の深みを知らなかった。そのため、聞くことがなかった。それはさげすまれた民で、聞く者には悟りがない』（イザヤ三三・一三〜一九）」70:4「では、この預言の中で、パンについても語っていることは、明らかです。わたしたちのキリストが、わたしたちに、行うようお伝えになったパンです。そのかたが、ご自分を信じる人々のために体をとられたことを、記念するためです。そのかたは、その人々のために、苦しみを受けるかたともなられました。また、杯についても語っています。そのかたが、ご自分の血を記念して、感謝をささげつつ行うようお伝えになった杯です（第一コリント一一・二四、ルカ二二・一九参照）。そして、まさにこのかたを、わたしたちが栄光のうちにある王として見ることも、この預言は明らかにしています」70:5「また、このかたを信じると前もって知られていた民が、主への恐れを思い巡らすことも、前もって知られていました。この預言の文言は、そのことを叫んでいます。また、聖書の文字に通じていると思っている者たちは、預言を聞いても悟りを持ちません。同じように、この聖書の言葉は、そのことも叫んでいます。また、トリュフォンよ、ペルセウスはおとめから生まれたと言われます。それを聞くとき、わたしは、惑わす蛇がこのこともまねたのだと悟ります」とわたしは言った。

71:1「しかし、わたしは、あなたがたの教師たちには従いません。その教師たちは、エジプト人の王プトレマイオスのもとにいた七十人の長老たちの訳したものを、正しく訳されていると認めません。そうではなく、自分たちで訳してみようとしています」71:2「また、彼らは、プトレマイオスのもとにいた長老たちの行った訳から、多くの聖句をすっかり取り除きました。そのことを、あなたがたに知ってほしいのです。それらの聖句は、十字架につけられたまさにこのかたについて、はっきりと示しています。このかたが、神であり人であり、十字架につけられ、死なれるかたであられると、告げ知らされていたことです。しかし、あなたがたの民族の者がみな、それらの聖句を否定することを、わたしは知っています。ですから、そのような問いには取りかかりません。そうではなく、あなたがたのもとで今も認められている聖句から問うことに進みます」71:3「実際、わたしがあなたがたに挙げた聖句は、どれも、あなたがたが認めているものです。ただし、『見よ、おとめがみごもる』という文言については、あなたがたは反論

しました。『見よ、若い女がみごもる』と言われているのだ、と言ったのです（イザヤ七・一四）。そこで、わたしは、論証をすると約束しました。その預言は、あなたがたが教えられたようにヒゼキヤについてではなく、このわたしのキリストについて言われたのだ、と。そして今、その論証をしましょう」 71:4 トリュフォンは言った。「まず、あなたが言う、すっかり削られたという聖句のうち、いくつかを、わたしたちに言ってほしいのです」

72:1 わたしは言った。「お望みのとおりにしましょう。では、エズラが過越についての律法について行った解き明かしがあります。彼らは、その中から、次の解き明かしを取り去りました[1]。『エズラは民に言った。「この過越は、われわれの救い主であり、われわれの逃れ場である。われわれは、このかたをしるしのうちに低くしようとしている。あなたがたがこのことを悟って心に思い、その後、われわれがこのかたに望みを置くなら、この所はいつまでも荒れ果てない。万軍の神は、そう言われる。しかし、あなたがたがこのかたを信じず、その宣べ伝えることに聞き従わないなら、異邦人の物笑いとなる」』」 72:2 「また、エレミヤを通して語られた言葉から、彼らは次の言葉を切り取りました。『わたしは、ほふられるために連れて行かれる、おとなしい小羊のようであった。彼らは、わたしに対して計りごとをめぐらして言った。「さあ、彼のパンに木を投げ入れよう。生ける者の地から彼を絶ち滅ぼそう。彼の名は、もはや思い出されることがない」』（エレミヤ一一・一九）」 72:3 「エレミヤの言葉から取ったこの一節は、ユダヤ人の会堂にある写本のいくつかには、今も書き記されています。実際、彼らがこれを切り取ったのは、少し前のことです。そして、この言葉からも、次のことが示されます。ユダヤ人が、まさにキリストについて計りごとをめぐらし、このかたを十字架につけて殺そうと決めたことです。そのたびに、このかたのことは、イザヤを通しても預言されたように、『ほふり場に引かれて行く羊のように』と示されます（イザヤ五三・七参照）。そして、ここでも『おとなしい小羊のように』と明らかにされるのです（エレミヤ一一・一九参照）。そのため、彼らは当惑して、冒瀆することに走るのです」 72:4 「また、同じエレミヤの言葉から、同じように次の言葉を切り取りました[2]。『主なる神、イスラエルの聖なるかたは、ご自分の死者たち、ちりの地に眠っている者たちを思い出された。そして、ご自分の救いを彼らに宣べ伝えるために、彼らのところに下られた』（第一ペテロ三・一九、四・六参照）」

73:1 「また、ダビデを通して語られた言葉のうち、第九十五篇の詩から、彼らは次の短い文言を取り去りました。『木から』[3]という文言です。実際、言葉は『もろもろの国民の中に言え、「主は木から王となられた」』と言っていました。ところが、彼らは『もろもろの国民の中に言え、「主は王となられた」』だけを残したのです（詩篇九六・一〇）」 73:2 「しかし、神であり主であるとして、もろもろの国民の中で王となったと言われた人は、これまで、あなたがたの民族にはいません。そうではなく、ただ、十字架につけられたこのかたについてだけ、そう言われたのです。聖霊は、同じ詩の中で、このかたがよみがえって救いを受けられたことも言っています。そして、このかたが、もろもろの国民の神々のようではあられないことを示しています。実際、それらは悪霊の偶像です（詩篇九六・五、歴代志上一六・二六参照）」 73:3 「しかし、言われていることを、あなたがたが理解するために、詩の全体を、あなたがたに告げましょう。それは次のとおりです。『新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、その御名をほめよ。日ごとに、その救いを宣べ伝えよ。もろもろの国民の中にその栄光を告げ知らせ、もろもろの民の中にそのくすしきみわざを告げ知らせよ。主は大いなるかたで、いとほめたたうべき者、すべての神々にまさって恐るべき者だからである。もろもろの国民の神々は、みな悪霊だからである。しかし、主はもろもろの天を造られた。ほめたたえとうるわしさとはその御前にあり、聖さと威厳とはその聖所にある。もろもろの国民のやからよ、主に帰せよ。栄光と誉れとを主に帰せよ。その御名において、栄光を主に帰せよ」 73:4 「いけにえを携えて、その大庭に入れ。その聖なる大庭で、主を拝め。全地は、その御前に揺り動かされよ。もろもろの国民の中に言え、「主は木から王となられた」。主は世界を堅く立てられたからである。世界は揺り動かされることがない。主は、公平をもってもろもろの民をさばかれる。天は喜び、地は楽しめ。海とその中に満ちるものとは揺り動かされる。野とその中のすべての物は喜び、林のすべての木は、主の御前で大いに喜ぶ。主が来られるからである。地をさばくために来られるからである。主は、義をもって世界をさばき、ご自分のまことを

もってもろもろの民をさばかれる』（詩篇九六篇）」73:5 トリュフォンは言った。「あなたが言ったように、民の治める者たちが聖書から何かを削ったのかどうか、それは神なら知ることがおできになります。しかし、そのようなことは、信じがたいことに思えます」73:6 わたしは言った。「そうです、信じがたいことに思えます。実際、それは、子牛を造ったことよりも恐ろしいことです。彼らは、地上でマナに満ち足りていながら、子牛を造りました（出エジプト三二章参照）。また、子供たちを悪霊にいけにえとしてささげたことや（詩篇一〇六・三七参照）、預言者たちそのものを殺したことよりも、恐ろしいことです。しかし、わたしが、彼らが切り取ったと言った聖句については、聞きもしなかったものと思ってください。実際、これまでに詳しく述べたこれほど多くの聖句で、問われたことを論証するには十分すぎるほどです。これから述べようとしている、あなたがたのもとに保たれている聖句も加わるのですから」

訳注

1 この言葉は、今の旧約のどの写本や古代訳にも見当たらない。
2 この言葉は、今のエレミヤ書には見当たらない。
3 『木から』の句は、詩篇のごく一部の古い写本にしかない。

74〜76章　詩篇九六篇、本文の欠落、イエスという名

74:1 トリュフォンは言った。「あなたがそれらの聖句を詳しく述べたのは、わたしたちが求めたからだということは、分かっています。しかし、あなたが最後にダビデの言葉から述べたこの詩があります。それは、ほかのだれかについてではなく、父について言われたものと、わたしには思えます。天と地とを造られたかたです。ところが、あなたは、この詩が、この苦しみを受ける者について言われたのだと言います。あなたは、この者がキリストであることも示そうと努めています」 74:2 わたしは答えた。「どうか、わたしが語るのに従って、聖霊がこの詩の中で声高く語った文言によって、理解してください。そうすれば、わたしの言うことが誤っておらず、あなたがたが本当にたぶらかされているのでもないと分かるでしょう。実際、そうすれば、あなたがたは、自分たちだけになったときに理解できるでしょう。聖霊によって語られたほかの多くの言葉もです。『新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、その御名をほめよ。日ごとに、その救いを宣べ伝えよ。もろもろの民の中に、そのくすしきみわざを宣べ伝えよ』（詩篇九六・一〜三）」 74:3 「つまり、全地から出た人々に、万物の神であり父であるかたに向かって歌い、ほめ歌いながら過ごすよう命じています。この人々は、この救いの奥義、すなわちキリストの苦しみを知った人々です。その苦しみによって、この人々は救われました。また、この人々は、次のことを深く知った人々です。この救いを人類のために行われたかたは、ほめたたうべき者、恐るべき者、天と地との造り主であられる、ということです。そして、十字架につけられた後に死なれ、全地を治めるにふさわしいと、そのかたに認められたかたのことも、深く知っています。それは、ちょうど[1]」 74:4 「『この民が入って行く、その地の[2]。彼らはわたしを捨て、わたしが彼らと結んだ契約を、その日に破るであろう。わたしは彼らを捨て、わたしの顔を彼らから背ける。彼は食い尽くされる者となり、多くの災と悩みが彼に臨むであろう。その日、彼は言うであろう、「わたしの神、主がわれわれのうちにおられないので、これらの災がわたしに臨んだ」。しかし、わたしは、彼らが行ったすべての悪のゆえに、その日、必ずわたしの顔を彼らから背けるであろう。彼らがほかの神々に帰したからである』（申命記三一・一六〜一八）」

75:1 「また、出エジプト記の中では、神ご自身の名がイエスでもあったことが告げ知らされました。モーセを通して、同じように奥義のうちにです。その名は、アブラハムにもヤコブにも示されなかったと言われています（出エジプト六・三参照）。そのことを、わたしたちも理解しています。それは、こう言われています。『主はモーセに言われた、「この民に言え。見よ、わたしはわたしの使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた地にあなたを導き入れさせる。彼に心を向け、彼に聞き従い、彼にそむいてはならない。彼は決してあなたに譲らないからである。わたしの名が彼の上にあるからである』（出エジプト二〇・二二、二三・二〇〜二一）」 75:2 「では、あなたがたの父祖をその地に導き入れたのは、だれでしょうか。今こそ理解してください。それは、この名で呼ばれるようになったイエス[3]、以前はアウセと呼ばれていた者です（民数記一三・一六参照）。実際、このことを理解するなら、次のことも深く知るでしょう。モーセに向かって『わたしの名が彼の上にあるからである』（出エジプト二三・二一）と言われたかたご自身の名も、イエスであったということです。実際、このかたは、イスラエルとも呼ばれておられました。そして、ヤコブの名をも、同じようにこの名に改めておられたのです（創世記三二・二八参照）」 75:3 「また、預言者たちは、神から出ることを告げるためにつかわされます。その預言者たちが、神の使とも、つかわされた者とも呼ばれることは、イザヤ書の中で明らかにされています。実際、イザヤはそこで、『わたしをおつかわしください』と言っています（イザヤ六・八）。また、イエスの名で呼ばれるようになった者が、強い、大いなる預言者となったことは、だれの目にも明らかです」 75:4 「では、もし、かの神がこれほど多くの姿で現れられたことを、わたしたちが知って

いるとします。アブラハムにも、ヤコブにも、モーセにもです。そうであれば、どうして、わたしたちは当惑し、信じないのでしょうか。このかたが、万物の父の御旨に従って、おとめによって人としてお生まれになることもおできになった、ということをです。しかも、わたしたちには、これほど多くの聖句があるのです。そこから、このことも父の御旨に従って起こったのだと、はっきりと読み取ることができます」

76:1 「実際、ダニエルは、永遠の国を受けるかたを『人の子のような者』と言います（ダニエル七・一三〜一四参照）。そのとき、ダニエルは、まさにこのことを、なぞのように語っているのではありませんか。実際、『人の子のような』と言うことは、このかたが人として現れられ、人となられたことを示しています。しかし、人間の種から出たかたではあられないことを、明らかにしているのです。また、この石を『人手によらずに切り出された』と言うこと（ダニエル二・三四参照）も、奥義のうちに、同じことを叫んでいます。実際、それが人手によらずに切り出されたと言うことは、明らかにしているのです。それが人間のわざではなく、これを発せられた、万物の父である神の御旨によるものだということです」 76:2 「また、イザヤは『だれがその生まれを語ることができようか』（イザヤ五三・八）と言いました。そのことは、このかたが語り尽くせない生まれを持っておられることを、明らかにしていました。実際、人間から出た人間であれば、だれも語り尽くせない生まれを持ってはいません。また、モーセは、このかたがぶどうの血でその衣を洗われると言いました（創世記四九・一一参照）。それは、わたしがすでに何度もあなたがたに言ってきたことではありませんか。モーセが覆われた仕方で前もって預言したと言ってきたのです。つまり、モーセは、このかたが血を持っておられること、しかし、その血は人間から出たものではないことを、前もって示しました。ちょうど、ぶどうの木の血は、人間が生み出したのではなく、神が生み出されたのと同じです」 76:3 「また、イザヤは、このかたを『大いなる計画の使』と言いました（イザヤ九・六）。そのとき、イザヤは、このかたが来られて教えられたことの教師となられることを、前もって宣べ伝えていたのではありませんか。実際、父は、大いなることを計画しておられました。ご自分に喜ばれる者となった人々と、これから喜ばれる者となる人々すべてについてです。また、同じように、ご自分の計画に背いた人々やみ使いたちについてもです。このかたただ一人が、それを覆いなしに教えられたのです。こう言われました」 76:4 「『東から西から来て、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく。しかし、この国の子らは外のやみに追い出される』（マタイ八・一一〜一二）」 76:5 「また、『その日には、多くの者が、わたしにむかって言うであろう。「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって食べ、飲み、預言し、悪霊を追い出したではありませんか」。そこで、わたしは彼らに「わたしから離れて行け」と言おう』（マタイ七・二二〜二三、ルカ一三・二六〜二七参照）。また、ほかの言葉で、このかたは、救われるにふさわしくない者たちを罪にお定めになります。その言葉の中で、こうお告げになると言われました。『外のやみに行ってしまえ。それは、父がサタンとその使たちとのために用意されたものである』（マタイ二五・四一参照）」 76:6 「また、さらにほかの言葉の中で、こう言われました。『わたしはあなたがたに、へびやさそりやむかでを踏みつけ、敵のあらゆる力をも踏みつける権威を授ける』（ルカ一〇・一九）。そして今、わたしたちは、ポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられた、わたしたちの主イエスを信じています。そのわたしたちは、すべての悪霊と悪い霊とに命じて、わたしたちに服従させています。実際、預言者たちを通して、覆われた仕方で宣べ伝えられていました。キリストが苦しみを受けるかたとなられ、その後、万物を支配されることです。しかし、それでも、だれもそれを理解することはできませんでした。それは、キリストご自身が使徒たちを説得なさるまでのことです。これらのことは聖書の中ではっきりと宣べ伝えられている、と説得なさったのです」 76:7 「実際、このかたは、十字架につけられる前に、こう叫ばれました。『人の子は必ず多くの苦しみを受け、律法学者とパリサイ人に捨てられ、十字架につけられ、そして三日目によみがえる』（マルコ八・三一、ルカ九・二二参照）。また、ダビデは、このかたが父の御旨に従って、太陽と月より前に、胎からお生まれになることを宣べ伝えました（詩篇一一〇・三、七二・五、一七参照）。そして、キリストであられるこのかたが、強く、拝まれるべき神であられることを、明らかにしました（詩篇一九・五、四五・一一、七二・一一参照）」

訳注

1　ここで本文の一部が失われている。

2　前の部分が失われたため、引用の途中から始まる。

3　ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。

77〜78章　ダマスコの力とサマリヤの分捕り物、博士たちとヘロデ

77:1 トリュフォンは言った。「確かに、これほどの、またこれほど多くの聖句が、人を恥じ入らせるのに十分であることは、あなたに同意します。しかし、あなたが何度も持ち出したあの言葉があります。それについて示すよう、わたしがあなたに求めていることを、あなたに知っておいてほしいのです。ですから、その言葉も、わたしたちのために最後まで論じ尽くしてください。あの言葉があなたがたのこのキリストについて言われたものだと、あなたがどのように示すのかを、わたしたちが見るためです。実際、わたしたちは、その言葉はヒゼキヤについて預言されたものだと言っています」77:2 わたしは言った。「あなたがたが望むとおり、そのこともいたしましょう。しかし、まず、あなたがたがわたしに示してください。それがヒゼキヤについて言われたということをです。すなわち、ヒゼキヤが、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを取ったということです。アッスリヤの王の前でです。実際、あなたがたが望むように解き明かすことは、あなたがたに許されないでしょう。ヒゼキヤが、アッスリヤの王の前で、ダマスコやサマリヤにいる者たちと戦った、というようにです。実際、預言の言葉はこう言いました。『その子は、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを、アッスリヤの王の前で取る』（イザヤ八・四）」77:3「実際、もし預言の霊が、この付け加えなしにこれらのことを言っていたとします。つまり、次のようには言わなかったとします。『その子は、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを取る』。そうではなく、ただ『そして、男の子を産む。その子は、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを取る』とだけ言っていたとします。そうであれば、あなたがたは、こう言うことができたでしょう。神は、その子がこれらのものを取ることになると前もって知っておられたので、前もって言われたのだ、と。しかし、実際には、預言は、この付け加えをもって言いました。『その子は、父や母を呼ぶことを知る前に、ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを取る』（イザヤ八・四）。そして、あなたがたは、ユダヤ人のうちのだれかに、かつてこのことが起こったと示すことはできません。しかし、わたしたちは、このことがわたしたちのキリストに起こったことを示すことができます」77:4「実際、このかたがお生まれになるとすぐに、アラビヤから博士たちが来て、このかたを拝みました。その前に、博士たちは、そのころあなたがたの地で王であったヘロデのもとへ行ったのです。言葉は、このヘロデをアッスリヤの王と呼んでいます。ヘロデの、無神論の、不法な心のゆえです。実際、あなたがたは知っています。聖霊が、しばしばこのようなことを、たとえや、なぞらえのうちに語ることをです。聖霊は、エルサレムにいる民全体に対しても、そのようにしました。しばしば彼らに、こう言ったのです。『あなたの父はアモリびと、あなたの母はヘテびとである』（エゼキエル一六・三）」とわたしは言った。

78:1「実際、このヘロデ王は、あなたがたの民の長老たちから聞き知っていました。そのとき、アラビヤから来た博士たちがヘロデのもとに来て、こう言いました。天に現れた星によって、あなたがたの国に王がお生まれになったことを知った、と。『そして、わたしたちはそのかたを拝みにきました』と言ったのです（マタイ二・二参照）。また、長老たちは、ベツレヘムで、と言い、預言者の書にこう書いてある、と言いました。『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民の牧者となるであろう』（ミカ五・二、マタイ二・六）」78:2「そこで、アラビヤから来た博士たちは、ベツレヘムに来て、幼な子を拝み、黄金と乳香と没薬との贈り物をささげました。その後、ベツレヘムで子を拝んだ後に、お告げによって、ヘロデのところへ戻らないよう命じられました（マタイ二・一一〜一二参照）」78:3「また、ヨセフは、マリヤと婚約していましたが、初めは、婚約者のマリヤを離縁しようと思いました。マリヤが男との交わりによって、つまり不品行によって身ごもったと思ったからです。しかし、ヨセフは、幻

によって、自分の妻を離縁しないよう命じられていました。現れたみ使いが、マリヤの胎にあるものは聖霊によるのだ、とヨセフに告げたのです」78:4「そこで、ヨセフは恐れて、マリヤを離縁しませんでした（マタイ一・一八〜二〇参照）。そうではなく、そのころ、ユダヤでクレニオのもとで最初の人口調査が行われました。そのため、ヨセフは、住んでいたナザレから、自分の出であるベツレヘムへ、登録をするために上って行っていました（ルカ二・一〜五参照）。実際、ヨセフの家系は、その地に住むユダの部族から出ていました。そして、ヨセフ自身も、マリヤと共にエジプトへ出て行き、幼な子と共にそこにいるよう命じられます。ユダヤへ戻るようにと、彼らに再びお告げがあるまでです（マタイ二・一三参照）」78:5「さて、幼な子は、そのころベツレヘムでお生まれになりました（マタイ二・一参照）。ヨセフは、その村には、どこにも宿る所がありませんでした。そのため、村の近くのある洞穴に宿りました。そして、そのとき、彼らがそこにいる間に、マリヤはキリストを産み、飼葉おけの中に寝かせていました（ルカ二・六〜七参照）。アラビヤから来た博士たちは、そこに来て、キリストを見いだしたのです（マタイ二・一一参照）」78:6「イザヤが、洞穴にまつわるしるしについても前もって宣べ伝えていたことは、すでにあなたがたに詳しく述べました。しかし、今日あなたがたと一緒に来た人々のために、もう一度その一節に触れましょう」とわたしは言った。そして、わたしが先に書いたイザヤの一節を、詳しく述べた（イザヤ三三・一六参照）。そして、こう言った。ミトラスの秘儀を伝える者たちは、あの言葉のゆえに、悪魔に動かされて、こう言うようになったのだ。自分たちのあいだで洞穴と呼ばれる場所で、自分たちが人々を入信させるのだ、と。78:7「そして、アラビヤから来た博士たちは、ヘロデが求めたとおりに、ヘロデのもとへ戻って来ることはしませんでした。そうではなく、命じられたとおり、別の道を通って自分たちの国へ去って行きました。また、ヨセフも、彼らにもお告げがあったとおり、マリヤと幼な子と共に、すでにエジプトへ出て行っていました。ヘロデは、博士たちが拝みに来た子がだれなのか知りませんでした。それで、ベツレヘムにいるすべての子供たちを、分け隔てなく殺すよう命じました（マタイ二・一六参照）」78:8「また、このことが起こることも、エレミヤを通して前もって預言されていました。聖霊が、エレミヤを通して、こう言ったのです。『叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった』（エレミヤ三一・一五、マタイ二・一八）。では、ラマから、つまりアラビヤから聞えることになっていた声があります。実際、今に至るまで、アラビヤにはラマと呼ばれる場所があります。その声のゆえに、ある場所を泣き叫びが襲うことになっていました。その場所とは、ラケルが葬られている所、つまりベツレヘムです。ラケルは、イスラエルとも呼ばれた聖なる族長ヤコブの妻です。そこでは、女たちが、殺された自分の子らのためになげき、身に起こったことに慰めを得られずにいました」78:9「実際、イザヤは『ダマスコの力とサマリヤの分捕り物とを取る』（イザヤ八・四）と言いました。そのことは、ダマスコに住む邪悪な悪霊の力が、キリストに打ち負かされることを示していました。キリストがお生まれになるとすぐにです。そして、それが起こったことは示されています。実際、博士たちは、あの悪霊によって行われるあらゆる悪い行いへと、分捕られていました。しかし、その博士たちは、来てキリストを拝んだことによって、自分たちを分捕っていたあの力から離れたことが明らかです。その力がダマスコに住むことを、言葉は奥義のうちに、わたしたちに示していたのです」78:10「また、あの力は罪深く、不義であるので、言葉は、たとえのうちに、それをサマリヤと呼んでいます。ふさわしい呼び方です。また、ダマスコが、アラビヤの地に属していたし、今も属していることは、あなたがたでさえ、だれも否定できません。今はスロ・フェニキヤと呼ばれる地方に組み入れられていますが、それでもです。そのため、皆さん、あなたがたが理解していないことは、神から恵みを受けたわたしたちキリスト者から学ぶのがよいでしょう。あらゆる点で自分たちの教えを固めようと力を尽くし、神のことを軽んじるのではなくです」78:11「だからこそ、この恵みは、わたしたちに移されたのです。イザヤがこう言っているとおりです。『この民はわたしに近づき、くちびるでわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れている。人のおきてと教えとを教えて、むなしくわたしを拝んでいる。それゆえ、見よ、わたしはこの民を移すことを重ね、彼らを移す。わたしは彼らのうちの賢い者たちの知恵を取り去り、聡明な者たちの悟りをむなしくする』（イザヤ二九・一三〜一四）」

79〜81章　悪いみ使い、千年のエルサレム

79:1 トリュフォンは、いくらか憤ってはいたが、聖書には敬意を払っていた。それは、彼の顔つきから見てとれた。彼はわたしに言った。「神のことは聖なるものです。しかし、あなたがたの解き明かしは、こしらえものです。あなたが解き明かしたことからも、それは明らかです。いや、それどころか、冒瀆でさえあります。実際、あなたは、み使いたちが悪を行い、神から離れたと言っています」 79:2 わたしは、彼がわたしの言うことを聞く心構えになるよう望んで、いっそう穏やかな声で答えた。「人よ、わたしは、あなたのこの慎み深さに感心します。そして、あなたが、み使いたちが仕えると書かれているかたについても、同じ心持ちを持つよう願います。ダニエルが言うとおりです。人の子のような者が、日の老いたる者のもとへ導かれて行く。そして、すべての国が、世々限りなく、そのかたに与えられる、と（ダニエル七・一三〜一四参照）。人よ、あなたに知ってほしいのです。わたしたちが、自分の大胆さに任せて、あなたの責めるこの解き明かしをしたのではないことをです。そのために、わたしは、イザヤその人から、あなたに証しを挙げましょう。イザヤは、悪いみ使いたちが、エジプトの地のゾアンにも住んでいたし、今も住んでいる、と言っています」とわたしは言った。 79:3 「その言葉は、次のとおりです。『そむける子らはわざわいだ。主はこう言われる。あなたがたは計りごとを行ったが、わたしによってではない。同盟を結んだが、わが霊によってではない。罪に罪を加えるためだ。彼らはエジプトへ下って行こうとするが、わたしに尋ねなかった。パロに助けられ、エジプトびとの陰に隠れるためである。パロの保護は、あなたがたの恥となり、エジプトびとにたよる者たちのはずかしめとなるからである。それは、ゾアンには、かしらである悪いみ使いたちがいるからである。彼らは、むなしく民のもとで骨折る。その民は彼らを益して助けとならず、かえって恥となり、はずかしめとなる』（イザヤ三〇・一〜五）」 79:4 「それだけでなく、ゼカリヤも、あなた自身が触れたように[1]、こう言っています。悪魔が祭司ヨシュアの右に立って、これに逆らい、主が『エルサレムを選んだ主が、あなたを責めるように』と言われた、と（ゼカリヤ三・一〜二）。さらに、ヨブ記にも、あなた自身が言ったように、こう書かれています。み使いたちが主の前に立とうとして来た。悪魔も、彼らと共に来ていた、と（ヨブ一・六、二・一参照）。また、わたしたちの手もとには、モーセが創世記の初めに書いたものがあります。エバを惑わし、のろわれた蛇のことです（創世記三・一〜六、一四参照）。また、エジプトで、魔術師たちが、神の力に肩を並べようとしたことを、わたしたちは知っています。神が、忠実なしもべモーセを通して働かせておられた力にです（民数記一二・七、出エジプト七〜八章参照）。また、ダビデが『もろもろの国民の神々は悪霊である』（詩篇九六・五）と言ったことを、あなたがたは知っています」

80:1 トリュフォンは、これに対して言った。「人よ、わたしはあなたに言いました。あなたは聖書にすがりついて、すべての点で確かであろうと努めている、と。ところで、わたしに言ってください。あなたがたは、このエルサレムという場所が再び建てられると、本当に告白するのですか。そして、あなたがたの民が集められ、キリストと共に喜ぶことを待ち望んでいるのですか。族長たちや預言者たち、わたしたちの民族の聖徒たちと一緒にです。あるいは、あなたがたのキリストが来る前に改宗者となった者たちのうちの聖徒たちとも一緒にです。それとも、議論でわたしたちに勝っていると思われたくて、このことを告白するに至ったのですか」 80:2 わたしは言った。「トリュフォンよ、わたしは、自分の考えと違うことを言うほど、みじめな者ではありません。そういうわけで、前にも、あなたに告白しました。わたしも、ほかの多くの者も、このように考えている、と。このことが起こると、確かに知っているほどです。一方、純粋で敬虔な見解をもつキリスト者のうちにも、このことを認めない者が多いことを、わたしはあなたに示しました」 80:3 「実際、キリスト者と呼ばれてはいても、実は無神論者で、神を敬わない異端の者たちがいます。彼らが、あらゆる点で、冒瀆的

で、無神論の、愚かなことを教えていることは、あなたに明らかにしました。また、わたしがこのことを、あなたがたの前でだけ言うのではないことを、あなたがたに知ってもらいたいのです。そのために、わたしは、力の及ぶかぎり、わたしたちのあいだで交わされたすべての言葉の記録を作ります。その中に、わたしがあなたがたに告白しているこのことも、わたしが告白していると書き込みます。実際、わたしは、人間や人間の教えに従うことを選ぶのではありません。そうではなく、神と、神から出た教えに従うことを選ぶのです（使徒五・二九参照）」 80:4 「実際、たとい、あなたがたが、キリスト者と呼ばれるある人々に出会ったとします。彼らは、このことを告白しないばかりか、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神を、あえて冒瀆さえします。そして、死人の復活はなく、死ぬとすぐに、自分たちの魂は天に引き上げられる、と言います。そうだとしても、彼らをキリスト者だと思わないでください。それは、正しく調べるなら、サドカイ人や、それに似た分派を、だれもユダヤ人とは認めないのと同じです。その分派とは、ゲニスタイ派、メリスタイ派、ガリラヤ派、ヘレニアノイ派、パリサイ派、バプティスタイ派です。そうではなく、彼らは、ユダヤ人とか、アブラハムの子とか呼ばれているにすぎません。くちびるでは神を告白しながら、神ご自身が叫ばれたとおり、心は神から遠く離れているのです（イザヤ二九・一三参照）。わたしが考えていることをすべて言いますが、不快に思わずに聞いてください」 80:5 「しかし、すべての点で正しい見解をもつキリスト者がいるなら、わたしはその人々と共に、肉の復活が起こることを知っています。また、建てられ、飾られ、広げられたエルサレムで、千年があることも知っています。預言者のエゼキエルやイザヤ、またほかの預言者たちが言い表しているとおりです（エゼキエル三七・一二〜一四参照）」

81:1 「実際、イザヤは、この千年の期間について、こう言いました。『新しい天と新しい地とがあるようになるからである。さきの事は思い出されることなく、彼らの心に浮かぶこともない。かえって、彼らは、わたしの創造するすべてのものによって、その中に楽しみと喜びとを見いだす。見よ、わたしはエルサレムを喜びとし、わが民を楽しみとするからである。わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声も叫ぶ声も、再びその中に聞えることはない。日数の満たないうちに死ぬ者も、自分の時を満たさない老人も、もはやそこにはいない。若い者は百歳となり、死ぬ罪びとは百歳であって、のろわれた者となるからである」 81:2 「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てて、ほかの人が住むことはなく、彼らが植えて、ほかの人が食べることはない。わが民の日は、いのちの木の日のようになるからである。彼らは自分の労苦のわざを使い古す。わが選んだ者は、むだに労することなく、のろいのために子を産むこともない。彼らは、主に祝福された正しいすえとなり、その子らも彼らと共にいるからである。そして、彼らが呼ばないさきに、わたしは聞き入れ、彼らがなお語っているときに、わたしは「どうしたのか」と言う。そのとき、おおかみと小羊とは共に草をはみ、獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は土をパンのように食べる。彼らは聖なる山で、害することなく、そこなうこともない、と主は言われる』（イザヤ六五・一七〜二五）」 81:3 「では、この言葉の中で、『わが民の日は、木の日のようになるからである。彼らは自分の労苦のわざを使い古す』（イザヤ六五・二二）と言われていることがあります。それが奥義のうちに千年を示していると、わたしたちは理解しました。実際、アダムには、木から食べる日に、その日に死ぬ、と言われていました（創世記二・一七参照）。そのとおりに、アダムが千年を満たさなかったことを、わたしたちは知っています。また、『主の日は千年のようである』と言われていることも、このことに行き着くと、わたしたちは悟りました（詩篇九〇・四、第二ペテロ三・八参照）」とわたしは言った。 81:4 「それから、わたしたちのあいだにも、ヨハネという名の人がいました。キリストの使徒のひとりです。その人は、自分に与えられた黙示のうちに預言しました。わたしたちのキリストを信じた者たちは、エルサレムで千年を過ごす、と（黙示録二〇・四〜六参照）。そして、その後に、すべての人の、全体にわたる、ひと言で言えば永遠の復活と裁きとが、一斉に、同時に起こる、と（ヘブル六・二参照）。このことは、わたしたちの主も言われました。『彼らはめとったり、とついだりすることはない。そうではなく、み使いに等しい者となる。神の、復活の子供たちだからである』（ルカ二〇・三五〜三六参照）」

訳注

1 トリュフォンのこの発言も、次のヨブ記の発言も、今の本文には残っていない。

82〜84章　にせ教師、ヒゼキヤと詩篇一一〇篇、おとめのしるし

82:1 「実際、わたしたちのもとには、今に至るまで、預言の賜物があります。そこから、あなたがた自身も悟るべきです。昔あなたがたの民族のうちにあったものが、わたしたちに移されたことをです。また、あなたがたのところに聖なる預言者たちがいた時代にも、にせ預言者たちがいました。それと同じように、わたしたちのもとにも、今、多くのにせ教師がいます。わたしたちの主は、彼らを警戒するよう、わたしたちに前もって告げておられました。そのため、わたしたちは、何ひとつ欠けることがありません。次のことを知っているからです。主は、わたしたちに起ころうとしていることを、前もって知っておられたのです。ご自分が死人の中から復活され、天に昇られた後のことをです」 82:2 「実際、主はこう言われました。わたしたちは、主の御名のゆえに殺され、憎まれることになる、と。また、多くのにせ預言者やにせキリストが、主の御名を名のって現れ、多くの人を惑わす、と（マタイ二四・五、九、一一、二四、一〇・二一〜二二参照）。そして、そのとおりのことが、今起こっています」 82:3 「実際、多くの者が、無神論の、冒瀆的な、不義のことを、主の御名によるものと偽って教えてきました。また、汚れた霊である悪魔によって自分たちの思いに投げ込まれたことを教えてきましたし、今に至るまで教えています。わたしたちは、あなたがたと同じように彼らにも、惑わされないよう思い直させようと、力を尽くしています。わたしたちは知っているからです。真実を語ることができるのに語らない者はみな、神に裁かれる、と。神がエゼキエルを通して、はっきりと証しされたとおりです。神はこう言われました。『わたしはあなたを、ユダの家の見守る者として立てた。罪びとが罪を犯し、あなたが彼を戒めないなら、彼は自分の罪のために滅びる。しかし、その血を、わたしはあなたから求める。しかし、もしあなたが彼を戒めるなら、あなたは責任がない』（エゼキエル三・一七〜一九、三三・七〜九参照）」 82:4 「そういうわけで、わたしたちも、恐れのゆえに、聖書に従って語るよう努めています。金銭を愛するためでも、名誉を愛するためでも、快楽を愛するためでもありません。実際、これらのどれについても、わたしたちがそうであると証明できる者はいません。実際、わたしたちは、あなたがたの民の治める者たちのように生きることも望みません。神は、彼らを非難して、こう言われます。『あなたがたの治める者たちは盗びとの仲間であり、贈り物を好み、報いを追い求める』（イザヤ一・二三）。わたしたちのうちにも、そのような者たちがいると、あなたがたが認めるとします。そうだとしても、少なくとも、その者たちのために、聖書とキリストを冒瀆しないでください。曲げて解き明かそうと努めることもしないでください」

83:1 「実際、あなたがたの教師たちは、次の言葉も、ヒゼキヤについて言われたのだと、あえて解き明かしました。『主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と』（詩篇一一〇・一）。まるで、ヒゼキヤが神殿の右に座るよう命じられたかのように言うのです。それは、アッスリヤの王が彼に人を送って脅したときのことでした。そのとき、ヒゼキヤには、イザヤを通して、王を恐れないよう示されました。イザヤが言ったことは、そのとおりに起こりました。ヒゼキヤの時代に、アッスリヤの王は引き返して、エルサレムを攻めませんでした。また、主のみ使いが、アッスリヤびとの陣営から十八万五千人をも殺しました。わたしたちは、これらのことを知っており、認めてもいます（イザヤ三七・三三〜三八、列王記下一九・三二〜三七参照）」 83:2 「しかし、この詩がヒゼキヤについて言われたのでないことは、明らかです。実際、詩はこうです。『主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。力あるつえを、エルサレムに[1]遣わされ、あなたのもろもろの敵のなかでお治めになる。聖なる者たちの輝きのうちに、わたしは明けの明星の前にあなたを生んだ。主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」』（詩篇一一〇・一〜四） 83:3 「では、ヒ

ゼキヤがメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司でないことを、だれが認めないでしょうか。また、ヒゼキヤがエルサレムをあがなう者でないことを、だれが知らないでしょうか。また、だれが知らないでしょうか。ヒゼキヤ自身は、力あるつえをエルサレムに遣わさず、自分の敵のなかで治めもしなかったことをです。そうではなく、泣き悲しむヒゼキヤから敵を退けられたのは、神でした」83:4「一方、わたしたちのイエスは、まだ栄光のうちに来られる前に、力あるつえをエルサレムに遣わされました。それは、すべての国々に向けた、招きと悔い改めの言葉です。その国々を、悪霊たちが支配していました。ダビデが『もろもろの国民の神々は悪霊である』（詩篇九六・五）と言っているとおりです。そして、このかたの言葉は力強く、多くの者を説き伏せました。彼らは、仕えていた悪霊を捨て、このかたを通して全能の神を信じるようになりました。もろもろの国民の神々は悪霊だからです。また、先に述べたように、次の言葉は、キリストに向かって言われたものです。『聖なる者たちの輝きのうちに、わたしは明けの明星の前に、胎からあなたを生んだ』（詩篇一一〇・三）」

84:1「また、『見よ、おとめがみごもって男の子を産む』（イザヤ七・一四）という言葉も、このかたについて前もって言われていました。実際、イザヤが語っていたこのかたが、おとめからお生まれになるはずでなかったなら、聖霊はだれについて叫んだのでしょうか。『見よ、主はみずから一つのしるしをわたしたちに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む』（イザヤ七・一四）と。実際、もし、このかたも、ほかのすべての長子と同じように、交わりによってお生まれになるはずだったとします。そうであれば、神は、すべての長子に共通でない、どんなしるしを行うと言われたことになるのでしょうか」84:2「そうではなく、まことのしるしであり、人類にとって信じるに足るものとなるはずのことがありました。すなわち、すべての作られたものの長子が、おとめの胎を通して肉となられ、まことに幼な子となられることです（コロサイ一・一五参照）。神は、このことを預言の霊を通して先取りされました。そして、わたしがあなたがたに詳しく述べたように、さまざまな仕方で前もって宣べ伝えられました。それは、そのことが起こったとき、万物の造り主の力と御旨によって起こったのだと、知られるためです。エバが、アダムのひとつのあばら骨から生じたようにです。また、ほかのすべての生き物が、初めに神の言葉によって生まれたようにです」84:3「ところが、あなたがたは、この点でも、ある訳をあえて削っています。あなたがたの長老たちが、エジプト人の王であったプトレマイオスのもとで行った訳です。聖書には、あの長老たちが訳したようには書かれていない、と言うのです。そうではなく、『見よ、若い女がみごもる』とある、と言います。まるで、ひとりの女が交わりによって子を産むことになるのが、大きな出来事として示されているかのようにです。しかし、それは、不妊の女のほかは、すべての若い女がしていることです。神は、その不妊の女たちでさえ、望まれるなら、子を産ませることがおできになります」84:4「実際、サムエルの母は、子を産まない女でしたが、神の御旨によって子を産みました（サムエル上一・二〇参照）。聖なる族長アブラハムの妻も（創世記二一・二参照）、洗い清める者ヨハネを産んだエリサベツも（ルカ一・五七参照）、ほかの幾人かの女も、同じです。そのため、神が望まれることを何でもおできになるのを、あり得ないことと考えてはなりません。とくに、それが起こることが預言されていたのですから、預言を、あえて削ったり、曲げて解き明かしたりしないでください。あなたがたが害を加えるのは、自分自身に対してだけで、神をそこなうことはないからです」

訳注

1 七十人訳も口語訳も『シオンから』。続く論は『エルサレムに』の読みによる。

85〜86章　栄光の王と悪霊払い、いのちの木とつえの型

85:1 「実際、あなたがたのうちのある者たちは、次の預言も、同じようにヒゼキヤについて言われたのだと、あえて解き明かしています。ほかの者たちは、ソロモンについて言われたのだと言います。その預言は、こう言っています。『君たちよ、あなたがたの門をあげよ。とこしえの門よ、あがれ。栄光の王が入られるためである』（詩篇二四・七）。しかし、この預言が、ヒゼキヤについても、ソロモンについても、言われたと示すことはできません。要するに、あなたがたの王と呼ばれるほかのだれについても、できないのです。そうではなく、ただ、わたしたちのこのキリストについてだけ言われたのだと示せます。このかたは、姿もなく、卑しい様子で現れられました（イザヤ五三・二〜三参照）。イザヤも、ダビデも、すべての聖書も言ったとおりです。このかたは、ご自分に授けてくださった父の御旨によって、万軍の主であられます（詩篇二四・一〇参照）。また、このかたは、死人の中からよみがえられ、天に昇られました。あの詩も、ほかの聖書も、そのことを明らかにしていました。そして、このかたを万軍の主と告げ知らせていました。そのため、今も、目の前で起こっていることから、あなたがたは、望むなら、よりたやすく説き伏せられるはずです」 85:2 「実際、すべての悪霊は、まさにこのかたの名によって命じられると、打ち負かされ、服従します。神の子であり、すべての造られたものの長子であられるかたの名です（コロサイ一・一五参照）。このかたは、おとめによってお生まれになり、苦しみを受ける人となられました。また、ポンテオ・ピラトのもとで、あなたがたの民によって十字架につけられ、死なれました。そして、死人の中からよみがえられ、天に昇られました」 85:3 「一方、あなたがたのもとには、王や義人や預言者や族長が現れました。その人々の、どんな名によってあなたがたが命じても、悪霊はひとつも服従しないでしょう。ただ、もしかして、あなたがたのだれかが、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神によって命じるとします。そうすれば、おそらく服従するでしょう。しかし、あなたがたのうちの祈祷師たちは、すでに、異邦人と同じように術を使って命じています。また、香や呪いの結び目を使っています」とわたしは言った。 85:4 「また、み使いたちと、もろもろの力とがいます。ダビデを通して語られた預言の言葉は、彼らに向かって、門をあげるよう告げているのです。死人の中からよみがえられ、父の御旨に従って万軍の主であられるこのかた、イエス・キリストが入られるためです。このことも、ダビデの言葉が同じように示しました[1]。この言葉には、もう一度触れましょう。きのう、わたしたちと一緒にいなかった、この人々のためです。この人々のために、わたしは、きのう語ったことの多くを、要点だけ話しているのです」 85:5 「今も、わたしがあなたがたに向かってこのことを話すとします。たとい、何度も同じことを繰り返したとしても、それを言うのが不当でないことを、わたしは知っています。実際、わたしたちは、太陽や月やほかの星が、いつも同じ道を進み、季節の移り変わりをもたらすのを見ています。また、計算をする人が、二の二倍がいくつかと問われたとします。その人は、何度も四と言ったからといって、もう一度四と言うのをやめはしないでしょう。そのほかの、かたく認められていることも同じで、いつも同じように言われ、認められています。それなのに、預言の書から語る者が、聖書を手放し、いつも同じ聖書を語らないとします。そして、聖書よりもよい言葉を自分で生み出して語っていると考えるとします。それは、こっけいなことです」 85:6 「では、天にはみ使いたちも、もろもろの力もいることを、神が明らかにしておられると、わたしが述べた言葉は、次のとおりです。『もろもろの天から主をほめたたえよ。もろもろの高き所で主をほめたたえよ。そのみ使いたちよ、みな主をほめたたえよ。そのもろもろの力よ、みな主をほめたたえよ』（詩篇一四八・一〜二）」すると、ムナセアスという名の者が言った。二日目に彼らと一緒に来た人々のひとりである。「わたしたちもうれしいよ。あなたが、わたしたちのために、同じことをもう一度言ってみてくれるのだから」 85:7 わたしは言った。「友人たちよ、わたしがどの聖書の言葉に従って、こうして

いるのかを聞いてください。イエスは、敵をも愛するよう命じられました（マタイ五・四四、ルカ六・二七参照）。このことは、イザヤを通しても、多くの言葉で宣べ伝えられていました。その言葉の中には、わたしたちの新しい誕生の奥義でもあります。それは、分け隔てなく、すべての人の新しい誕生の奥義でもあります。その人々とは、キリストがエルサレムに現れられるのを待ち望み、行いによってこのかたに喜ばれようと努める者たちです」[85:8]「イザヤを通して語られた言葉は、次のとおりです。『その言葉におののく者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたを憎み、忌み嫌う者たちに、「われわれの兄弟たちよ」と言え。主の名があがめられるためである。それは彼らの喜びのうちに現れた。そして、彼らは恥を受ける。町からの叫びの声、民の声、高ぶる者たちに報いを返される主の声。産みの苦しみをする女が産む前に、その苦しみの痛みが来る前に、男子を産んだ」[85:9]「だれがこのような事を聞いたか、だれがこのように見たか。地が一日で産みの苦しみをし、一つの国民をひと時に産むことがあろうか。シオンは産みの苦しみをして、その子らを産んだのだ。しかし、わたしは、この望みを、産まない女にも与えた、と主は言われた。見よ、わたしは産む女も、不妊の女も造った、と主は言われる。エルサレムよ、喜べ。すべて彼女を愛する者よ、祭りを祝え。すべて彼女のために悲しむ者よ、喜び楽しめ。あなたがたが彼女の慰めの乳ぶさから乳を吸って、飽くためである。また、乳を吸い尽くして、彼の栄光が入って来ることによって楽しむためである』（イザヤ六六・五～一一）」

[86:1]これらのことを言ってから、わたしは付け加えた。「また、次のことを聞いてください。このかたは、十字架につけられた後、栄光のうちに再び来られると、聖書が示しているかたです（ダニエル七・一三～一四、詩篇二四・七参照）。このかたが、いのちの木をしるしとしてもっておられたことです（創世記二・九、箴言三・一八参照）。その木は、楽園に植えられたと言われていました。また、このかたは、すべての義人に起ころうとしていることも、しるしとしてもっておられました。モーセは、民のあがないのために、つえを持って遣わされました（出エジプト四・一七参照）。そして、そのつえを手に持ち、民の先頭に立って、海を分けました（出エジプト一四・一六参照）。このつえによって、岩から水がわき出るのを見ました（出エジプト一七・五～六、民数記二〇・八参照）。また、メラの水に木を投げ入れて、苦かったその水を甘くしました（出エジプト一五・二三～二五参照）」[86:2]「ヤコブは、水飲み場の水ぶねにつえを入れて、母の兄弟の羊をはらませることに成功しました。生まれる子を自分のものにするためでした（創世記三〇・三七～三八参照）。同じヤコブは、自分のつえを持って川を渡ったことを誇っています（創世記三二・一〇参照）。また、ヤコブは、はしごが自分に見えたと言いました。そして、神がその上にしっかりと立っておられたことを、聖書は明らかにしています（創世記二八・一二～一三参照）。その神が父ではなかったことを、わたしたちは聖書から示しました。また、ヤコブは、同じ所で石の上に油を注ぎました。ヤコブに現れられた神ご自身が、このことを証ししておられます。ヤコブが、自分に現れられた神のために、柱に油を塗った、と（創世記二八・一八、三一・一三参照）」[86:3]「また、聖書が、多くの箇所で、キリストを石として、しるしによって宣べ伝えていたことも、同じように示しました。また、油注ぎはすべて、このかたのものであったことも、同じように示しました。油であれ、香油であれ、調合した塗り油に使うほかの油であれ、そうです。言葉がこう言っているからです。『それゆえに、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた』（詩篇四五・七）。実際、すべての王も、油注がれた者たちも、このかたから、王とも、油注がれた者とも呼ばれることにあずかったのです。それは、このかたご自身が、父から、王、キリスト、祭司、み使いと呼ばれることを受けられたのと同じです。そのほか、このかたがもっておられる、またもっておられた、同じような名もすべてそうです」[86:4]「アロンのつえは、芽を出して、アロンを大祭司として示しました（民数記一七・八参照）。イザヤは、キリストがエッサイの根から出るつえとなられると預言しました（イザヤ一一・一参照）。また、ダビデは、義人は水の流れのほとりに植えられた木のようであると言います。その木は、時が来ると実を結び、その葉もしぼまない、と（詩篇一・三参照）。また、義人はなつめやしのように栄える、と言われています（詩篇九二・一二参照）」[86:5]「神は、木からアブラハムに現れられました。『マムレの樫の木のそばで』と書かれているとおりです（創世記一八・一参照）。民は、ヨルダンを渡って、七十本の柳と十二の泉を見つけました（出エジプト一五・二七、民数記三

三・九参照）。ダビデは、つえと支えのつえとによって神に慰められた、と言います（詩篇二三・四参照）」[86:6]「エリシャは、ヨルダン川に木を投げ入れて、斧の鉄の頭を浮かび上がらせました。預言者のともがらは、その斧を持って、木を切りに行っていたのです。家を建てるためでした。その家で、彼らは、神の律法と命令を語り、学ぼうとしていました（列王記下六・一～七参照）。同じように、わたしたちも、自分の犯したきわめて重い罪に沈められていました。そのわたしたちを、わたしたちのキリストは、あがない出してくださいました。木の上で十字架につけられ、水によって清めてくださることによってです。そして、祈りと礼拝の家としてくださいました。また、ユダが、大いなる奥義のゆえにタマルから生まれた子らの父であることを示したのも、つえでした（創世記三八・二五～二六参照）」

訳注

1 このあと引く詩篇の言葉は、今の本文ではこれより前に引かれていない。

87〜88章　霊の力がキリストの上にとどまったこと、ヨルダン川での洗い清め

87:1 わたしがこれらのことを言うと、トリュフォンは言った。「これからは、わたしが何を尋ねても、あなたの言うことを覆してみようとして尋ねているのだと、思わないでください。そうではなく、わたしが問う、まさにそのことについて、学びたいと思っているのです」 87:2 「では、教えてください。言葉は、イザヤを通して、こう言いました。『エッサイの根から一つのつえが出、エッサイの根から花が上る。その上に神の霊がとどまる。知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、知識と敬虔の霊である。そして、神を恐れる霊が彼を満たす』（イザヤ一一・一〜三）。また、あなたは、その者が神として先にいたと言います。そして、その者が、神の御旨に従って肉となり、おとめによって人間として生まれたと言います。そうであれば、どうして、その者が先にいたと示すことができるのでしょうか。その者は、イザヤを通して言葉が数え上げる聖霊の力によって、満たされるのです。それらの力に欠けている者のようにです」トリュフォンは、そう言った。これらの言葉がキリストについて言われたことは、わたしに認めたうえでのことである。 87:3 わたしは答えた。「あなたは、たいへん分別深く、聡明に尋ねました。実際、本当に難問だと思えます。しかし、この点についての説明も、あなたに分かるように、わたしの言うことを聞いてください。言葉は、数え上げられたこれらの霊の力が、このかたの上に臨んだと言っています。しかし、それは、このかたがそれらに欠けておられたからではありません。そうではなく、それらの力が、このかたの上でとどまろうとしていたからです。すなわち、このかたの上で終わりを迎えようとしていたからです。それは、あなたがたの民族の中に、昔からの習わしのように預言者が現れることが、もはやないためでした。このことは、あなたがたも自分の目で見ることができます。実際、このかたの後には、あなたがたのもとに、預言者はまったくひとりも現れていません」 87:4 「また、次のことについても、わたしの言うことをよく考えてください。あなたがたのもとの預言者たちは、それぞれ、神から一つか二つの力を受けていました。そして、わたしたちも聖書から学んだことを、行い、語っていたのです。実際、ソロモンは知恵の霊をもっていました。一方、ダニエルは悟りと思慮の霊を、モーセは力と敬虔の霊を、エリヤは恐れの霊を、イザヤは知識の霊をもっていました。ほかの預言者たちもまた同じように、それぞれ一つの力を、あるいは、かわるがわる、ある力とともに別の力をもっていました。たとえば、エレミヤも、十二人も、ダビデも、要するに、あなたがたのもとに現れたほかの預言者たちもみな、そうです」 87:5 「すると、とどまったのです。すなわち、やんだのです。このかたが来られたときにです。人々のあいだで、このかたのこのはからいが、その時に成りました。その後は、それらの力はあなたがたからやまなければなりませんでした。そして、このかたのうちにとどまって、再び賜物となるはずでした。預言されていたとおりです。このかたは、あの霊の力の恵みから、その賜物を、ご自分を信じる人々に与えておられます。一人ひとりがふさわしいとご存じのとおりにです」 87:6 「また、このことは、このかたが天に昇られた後、このかたによって起こると預言されていました。そのことは、すでに述べましたが、もう一度述べます。では、こう言われていました。『彼は高い所に上り、とりこを捕えて引き行き、人の子らに賜物を与えた』（詩篇六八・一八、エペソ四・八参照）。さらに、別の預言では、こう言われています。『その後、わたしはわが霊を、すべての肉なる者に、また、わたしのしもべたちと、わたしのはしためたちに注ぐ。そして、彼らは預言をする』（ヨエル二・二八〜二九）」

88:1 「また、わたしたちのもとでは、女も男も、神の霊からの賜物をもっているのを見ることができます。そのため、イザヤの数え上げた力がこのかたの上に来ると預言されていたのは、このかたが力に欠けておられたからではありません。そうではなく、それらの力が、このかたより後には、もはやなくなるはずだったからです。また、次のことも、あなたがたへの証としてください。アラビヤから来た博士たちによって起こったと、わたしがあなたがたに述べたことで

す。博士たちは、幼な子がお生まれになるとすぐにやって来て、その子を拝みました」88:2「実際、このかたは、お生まれになったときから、ご自分の力をもっておられました。そして、ほかのすべての人々と同じように成長されました。ふさわしいものを用いて、成長のそれぞれの段階に、その段階に合うものを割り当てられたのです（ルカ二・四〇、五二参照）。また、あらゆる食物で養われ、三十年か、それより多いか少ないかの年月を過ごされました。それは、ヨハネが、このかたの来臨を告げ知らせる者として先に来て、洗い清めの道を先立って進むまでのことでした（ルカ三・二三参照）。先に示したとおりです」88:3「そして、そのとき、イエスは、ヨハネが洗い清めていたヨルダン川に来られました。イエスが水に降りて行かれると、ヨルダン川に火が燃え上がりました[1]。そして、このかたが水から上がられると、聖霊が鳩のようにこのかたの上に飛んで来ました。このことは、まさにこのわたしたちのキリストの使徒たちが書いています（ルカ三・二一～二二、マタイ三・一三～一六参照）」88:4「また、わたしたちは知っています。このかたが川に来られたのは、洗い清めを受けることや、鳩の形で臨んだ霊に欠けたかたとしてではありません。このかたが、お生まれになることや十字架につけられることを忍ばれたのも、それらに欠けたかたとしてではありません。そうではなく、人類のためでした。人類は、アダム以来、死と、蛇の惑わしとのもとに陥っていました。一人ひとりが、自分の責めによって悪を行ったからです」88:5「実際、神は、み使いも人も、自由な選びのうちにあって、自分で選ぶ力をもつ者として造られました。そして、神が一人ひとりに、行うことができるよう力をお与えになったことを、彼らが行うよう望まれたのです。また、もし彼らが神に喜ばれることを選ぶなら、彼らを朽ちない者、罰を受けない者として守ることを望まれました。しかし、もし悪を行うなら、ご自分によいと思われるとおりに、一人ひとりを罰することを望まれたのです」88:6「実際、このかたは、ろばに乗ってエルサレムに入られました。そのことも、このかたに、キリストであられるための力を与えたのではありません。それが預言されていたことは、わたしたちが示しました。そうではなく、それは、このかたこそキリストであられることを、人々に知らせる目じるしとなったのです。それと同じように、ヨハネのときにも、人々への目じるしがなければなりませんでした。だれがキリストであるかを、人々が深く知るためです」88:7「実際、ヨハネはヨルダン川のほとりに座って、悔い改めの洗い清めを宣べ伝えていました。また、皮の帯と、らくだの毛ごろもだけを身に着け、いなごと野蜜のほかは何も食べていませんでした（マタイ三・一～四、マルコ一・四～六、ルカ三・三参照）。そのとき、人々は、彼がキリストだと思っていました（ルカ三・一五参照）。その人々に向かって、ヨハネ自身も叫びました。『わたしはキリストではなく、呼ばわる者の声である。わたしよりも力のあるかたが来られるからだ。わたしは、そのくつをぬがせてあげる値うちもない』（ヨハネ一・二〇～二三、マタイ三・一一、ルカ三・一六参照）」88:8「そして、イエスがヨルダン川に来られました。人々は、このかたを大工ヨセフの子だと思っていました（マタイ一三・五五、ルカ三・二三参照）。また、聖書が宣べ伝えていたとおり、このかたは姿もなく現れておられました（イザヤ五三・二～三参照）。そして、人々は、このかたを大工だと思っていました（マルコ六・三参照）。実際、このかたは、人々のあいだにおられたとき、こうした大工の仕事、すなわち鋤やくびきを作っておられました。それによって、義のしるしと、働く生き方とを教えておられたのです。そこで、聖霊は、人々のためにも、先に述べたように、鳩の形でこのかたの上に飛んで来ました。そして、同時に、天から声がありました。その声は、ダビデを通しても語られていました。ダビデは、このかたになりかわって、父からこのかたに言われようとしていたことを語ったのです。『おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ』（ルカ三・二二～二三、詩篇二・七参照）[2]。これは、人々がこのかたを知るようになる、その時から、このかたの誕生が人々にとって起こる、と言っているのです」

訳注

1 火のことは今の福音書の本文になく、古いラテン語訳の一部や外典に見える。
2 ルカ三・二二の天の声は、一部の古い写本でこの形になっている。

89〜92章　十字架ののろい、手を広げたモーセ、一角獣の角

89:1 するとトリュフォンは言った。「よく知っておいてください。わたしたちの民族全体が、キリストを待っています。また、あなたが挙げた聖書がみなキリストについて言われていることも、わたしたちは認めます。さらに、イエス[1]という名が、ヌンの子に付けられていたことから、わたしは、この点でも譲る気持ちになるよう強く促されました。このことも、わたしは言っておきます」89:2「しかし、キリストがこれほど不名誉なしかたで十字架につけられるということについては、わたしたちは当惑しています。実際、十字架につけられる者は、律法でのろわれた者と言われています（申命記二一・二三、ガラテヤ三・一三参照）。そのため、この点については、わたしはまだ納得しかねています。キリストが苦しみを受けるかたであることを聖書が宣べ伝えていることは、明らかです。しかし、それが律法でのろわれた苦しみによるのかどうかを、わたしたちは学びたいのです。この点についても、あなたが示すことができるのなら、ですが」89:3わたしは彼に言った。「もし、キリストが苦しみを受けることになっておられなかったとします。また、預言者たちも、次のことを預言していなかったとします。キリストは、民の不法によって死に引かれ、辱めを受け、むち打たれる。また、不法な者たちとともに数えられ、ほふり場に引かれて行く羊のように引かれて行かれる（イザヤ五三・八、三、一二、七参照）。預言者は、そのかたの生まれを語ることのできる者はだれもいない、と言う（イザヤ五三・八参照）。そうであったなら、いぶかるのも、もっともだったでしょう。しかし、もし、このことこそが、このかたの特徴を表し、このかたをすべての人に示すものであるとします。そうであれば、どうして、わたしたちも確信をもって、このかたを信じずにいられたでしょうか。また、預言者たちの言葉を理解した人々はみな、このかたが十字架につけられたと聞きさえすれば、言うでしょう。ほかのだれでもなく、このかたこそそうだ、と」

90:1 彼は言った。「では、わたしたちも、聖書から導いてください。わたしたちもあなたに納得するためです。実際、キリストが苦しみを受け、羊のように引かれて行くことは、わたしたちも知っています（イザヤ五三・七参照）。しかし、キリストが十字架につけられることについては、わたしたちに示してください。律法でのろわれた死によって、これほど恥ずべき、不名誉なしかたで死ぬことについてもです（申命記二一・二三、ガラテヤ三・一三参照）。実際、わたしたちは、そのようなことを思い浮かべることさえできないのです」90:2わたしは言った。「あなたも知っているとおり、預言者たちは、自分たちが言ったこと、行ったことをすべて、たとえと型によって明らかにしました。あなたがたも認めたとおりです。そのため、その大部分は、すべての人にたやすく理解されることがありませんでした。預言者たちは、その中にある真理を隠したのです。そのため、見いだし、学ぼうと探し求める人々も、労苦することになりました」すると、彼らは言った。「それは、たしかに認めたとも」90:3わたしは言った。「では、その次のことを聞いてください。実際、モーセが最初に、このかたの、のろいと思われているこのことを明らかにしました。自分の行ったしるしによってです」彼は言った。「それは、どんなしるしのことですか」90:4わたしは言った。「民がアマレクと戦い、イエスの名で呼ばれたヌンの子が、戦いを率いていたときのことです。モーセ自身は、両手を左右に広げて、神に祈っていました。そして、ホルとアロンが、一日中その手を支えていました。モーセが疲れて、その手が下がらないようにするためです。実際、モーセの書に書かれているとおり、十字架をかたどったこの姿勢を、モーセが少しでも緩めると、民は負けました。しかし、この形のままでいると、そのあいだは、アマレクが負けたのです。そして、勝ちを得たのも、十字架によって勝ちを得たのです（出エジプト一七・九〜一二参照）」90:5「実際、モーセがそのように祈ったから、民が優勢になったのではありません。そうではなく、イエスの名が戦いの先頭に立っているときに、モーセ自身が

十字架のしるしを作っていたからです。実際、あなたがたのうちのだれが、次のことを知らないでしょうか。とりわけ、嘆きと涙をもってする祈りが、神をなだめます。また、うつぶせに伏して、あるいはひざをかがめてする祈りもです。しかし、このような仕方で、石の上に座って祈ったことは、モーセ自身にもほかになく、後のほかのだれにもありません。そして、わたしが示したように、石もまた、キリストを指し示すしるしをもっています」

91:1 「実際、神は、別のことを通しても、十字架の奥義の力を示しておられます。神は、モーセを通して、ヨセフを祝福した祝福の中で、こう言われました。『彼の地は主の祝福による。天の季節と露から、下にある淵の泉から、太陽の運行による産物の季節に応じて、月の巡りからである。いにしえの山々の頂から、丘の頂から、絶えず流れる川から、地に満ちる実りからである。柴の中に現れられたかたに喜ばれるものが、ヨセフの頭と頂に臨むように。彼は兄弟たちの中で栄光を受けた長子、その美しさは雄牛のもの、その角は一角獣の角。これをもって、彼は国々を、地の果てからも、ことごとく角で突く』（申命記三三・一三〜一七）」 91:2 「実際、一角獣の角を、ほかのどんな物や形のものとしても、だれも言い表すことも、示すこともできないでしょう。十字架を示す型のほかにはです。実際、一本の木はまっすぐに立っています。もう一本の木が組み合わされると、立っている木の一番上の部分が、角のように高く突き出ます。そして、組み合わされた木の両端は、左右に見えます。一本の角に並んで添えられた角のようにです。また、中ほどに打ちつけられたものも、角のように突き出ています。十字架につけられる者は、その上にまたがります。それもまた、ほかの角と一緒に形づくられ、打ちつけられた角のように見えます」 91:3 「また、『これをもって、彼は国々を、地の果てからも、ことごとく角で突く』（申命記三三・一七）という言葉があります。それは、今すべての国々のあいだで起こった事を明らかにするものです。実際、すべての国々から出た人々は、角で突かれて、すなわち心を刺されて、この奥義によって向きを変えました。むなしい偶像や悪霊から、神を敬うことへとです。一方、信じない者たちには、同じ形が、滅びと罪の宣告をもたらすものとして示されます。それは、ちょうど、エジプトから出て来た民のうちで起こったことと同じです。そこでは、モーセが手を広げた型があり、ヌンの子にイエスという名が付けられていました。それによって、アマレクが負け、イスラエルが勝ったのです」 91:4 「また、イスラエルをかんだ蛇に対する型としるしがあります。それによっても、その型としるしが掲げられたのは、信じる人々の救いのためだったことが明らかです（民数記二一・六〜九、ヨハネ三・一五参照）。その人々は、次のことを信じるのです。十字架につけられることになっていたかたによって、蛇には死が来ることが、そのとき以来、前もって宣べ伝えられていた。また、救いが来ることも、宣べ伝えられていた。蛇にかまれて、十字架につけられたご自分の子を世に遣わされたかたのもとに逃れる人々である（ヨハネ三・一四〜一六参照）。実際、預言の霊は、モーセを通して、蛇を信じるようにと、わたしたちに教えていたのではありません。その霊は、蛇が初めに神にのろわれたことを明らかにしているからです（創世記三・一四参照）。また、イザヤの書では、蛇が敵として大きなつるぎで滅ぼされることを示しているからです（イザヤ二七・一参照）。そのつるぎとは、キリストです」

92:1 「すると、もし、だれかが、神からの大きな恵みによって、預言者たちが言ったことや行ったことを理解する力を受けないとします。そうであれば、その言葉や行われたことを語っているように見えても、何の益にもなりません。それらについて説明することができないならです。それどころか、それらを理解しない者たちが語るなら、多くの人々には、軽んじてよいものとさえ思われるのではないでしょうか」 92:2 「実際、もし、だれかが、あなたがたに次のように問いただそうとするとします。エノクとノアは、その子供たちとともに、割礼を受けず、安息日も守らずに、神に喜ばれた。ほかにもそのような人々がいたなら、その人々もそうである。それなのに、それほど多くの世代の後に、神は、別の指導者たちと律法の授与によって、人々が義とされることをよしとされた。それは、どんな理由によるのか。すなわち、アブラハムからモーセまでの人々は、割礼によって義とされた。モーセからの人々は、割礼とほかの戒め、すなわち安息日、いけにえ、灰、供え物によって義とされた。そのことの理由である、と。そのとき、あなたがたは、わたしが先に言ったように、次のことを示すほかに、どんな答えがあるでしょうか。神は、先を知るかたであられるので、次のことを知っておられた。あなたがたの民が、エルサレムから追い出され、だれもそこに入るこ

とを許されないのにふさわしい者となることである。そのためである、ということです」92:3「実際、先にわたしが言ったように、あなたがたは、肉の割礼によるほかには、どこからも見分けられることがありません。実際、アブラハムも、割礼のゆえに神から義人であると証しされたのではありません。そうではなく、信仰のゆえにです。実際、彼が割礼を受ける前に、彼について、こう言われています。『アブラハムは神を信じた。そして、それが彼の義と認められた』（創世記一五・六、ローマ四・一〇参照）」92:4「すると、わたしたちも、肉の包皮のあるまま、キリストを通して神を信じています。そして、それを持つわたしたちに益となる割礼、すなわち心の割礼を持っています。そして、神の前に義人として、また神に喜ばれる者として現れることを望んでいます。わたしたちは、すでに預言の言葉を通して、神から証しを受けているからです。一方、あなたがたは、安息日を守り、供え物をささげるよう命じられました。また、主は、神の名で呼ばれる場所があることを、忍ばれました。それは、先に言われたように、あなたがたが、偶像を拝み、神を忘れて、神を敬わない者、無神論者とならないためでした。あなたがたが、いつもそのような者となってきたことは、明らかです」92:5「そして、神がこれらの理由で、安息日と供え物についての戒めをお命じになったことは、わたしがすでに示しました。先に述べたことによってです。しかし、今日来た人々のために、同じことを、ほとんどすべて、もう一度取り上げたいと思います。というのも、もしそうでないとします。そうであれば、神はそしられることになるからです。先を知ることもなく、同じ正しいことを知り、行うよう、すべての人に教えることもしないかのようにです（実際、モーセより前にも、人間の多くの世代があったことは明らかです）。また、神は真実で義なるかたであり、その道はみな公正で、神には不義がない、と言う言葉も、成り立たなくなります（申命記三二・四、詩篇九二・一五参照）」92:6「しかし、その言葉は真実です。そうであれば、神は、あなたがたが、いつまでもこのように悟りがなく、自分を愛する者であることを望まれません。あなたがたが、キリストとともに救われることを望んでおられるのです。キリストは、神に喜ばれ、証しを受けておられるかたです。先に言ったように、わたしは、聖なる預言の言葉によって、その論証をしました」

訳注

1 ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。

93〜95章　二つの戒め、青銅の蛇、律法ののろい

93:1「実際、いつでも、どこまでも正しいことと、あらゆる義とは、人間のどの民族にも与えられています。そして、どの民族も、姦淫が悪であることを認めています。不品行も、人殺しも、そのほかこのようなことはみな同じです。たとえ、すべての人がそれを行うとします。そうだとしても、それを行うとき、自分が不義を行っていると知ることからは、免れていません。ただし、汚れた霊に満たされた人々は別です。育ちと、悪い習わしと、邪悪な法律とによって損なわれて、本性に備わった思いを失った人々です。いや、むしろ、その思いを消してしまったか、抑えつけたままにしているのです」93:2「実際、そのような人々でさえ、自分が他人にしているのと同じことを、自分は受けたくないと思っているのを見ることができます。また、敵意を抱いた良心で、自分たちが行っているまさにそのことを、互いに責め合っているのも見ることができます。ですから、わたしには、次のように思われます。わたしたちの主であり救い主であるイエス・キリストは、よく言われた。あらゆる義と敬虔は、二つの戒めで満たされる、と（マタイ二二・四〇参照）。その戒めは、次のとおりです。『心をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。また、自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』（ルカ一〇・二七、マルコ一二・三〇〜三一参照）。実際、心をつくし、力をつくして神を愛する人は、神を敬う思いに満ちていて、ほかのどんな神も敬いません。そして、神がお望みになるとおりに、主であり神であるかたご自身が愛しておられる、あのみ使いを敬うでしょう。また、自分を愛するように隣り人を愛する人は、自分に望む良いことを、その人にも望むでしょう。そして、だれも、自分に悪いことを望みはしません」93:3「すると、隣り人を愛する人は、自分に望むのと同じことが隣り人にも起こるように祈り、また、そうなるように働くでしょう。そして、人間にとっての隣り人とは、ほかでもなく、同じように感じる、理性ある生き物、すなわち人間です。すると、すべての義は、神に対するものと、人々に対するものとの、二つに分かれています。そうである以上、言葉が言うとおり、心をつくし、力をつくして、主なる神を愛する人がいるとします。その人が、また、自分を愛するように隣り人を愛するなら（ルカ一〇・二七参照）、まことに義人でしょう」93:4「しかし、あなたがたは、一度も示されたことがありません。神に対しても、預言者たちに対しても、自分たち自身に対しても、友情や愛を持つ者としてです。そうではなく、示されているとおり、あなたがたは、いつでも偶像を拝む者であり、正しい人々を殺す者であると分かります。そのため、あなたがたは、キリストご自身にまで手をかけ、今に至るまで、自分たちの悪にとどまっています。あなたがたが十字架につけたこのかたこそキリストであられると示す人々をさえ、のろっているのです。そのうえ、あなたがたは、このかたが神の敵として、のろわれた者として十字架につけられた、と示せると考えています。それは、あなたがたの理に合わない見解のしわざです」93:5「実際、あなたがたは、モーセを通して起こったしるしから、悟るきっかけを持っています。このかたこそそれであると悟るきっかけです。それなのに、悟ろうとしません。それだけでなく、わたしたちが答えに窮することもありうると考えて、思いつくままのことを持ち出して論じます。そして、しっかりしたキリスト者に出会うと、あなたがた自身が言葉に窮するのです」

94:1「実際、わたしに言ってください。神は、モーセを通して命じられたのではなかったでしょうか。上の天にあるものであれ、地にあるものであれ、像も、似姿も、まったく造ってはならない、と（出エジプト二〇・四参照）。そして、その神ご自身が、荒野で、モーセを通して、青銅の蛇を造らせなさり、しるしの上に立てられたのではありませんか。そのしるしによって、蛇にかまれた者たちは救われたのです（民数記二一・八〜九参照）。それでも、神は、不義の責めを負っておられないのではありませんか」94:2「実際、先に言ったように、神は、これによって奥義を宣べ伝えておられました。その奥義によって宣べ伝えておられたのは、一方では、蛇の力を打ち砕くことです。この蛇は、アダムによる背き

を引き起こしたものです。他方では、蛇のかみ傷からの救いです。それは、このしるし、すなわち十字架によって死を受けることになっておられたかたを信じる人々への救いです（ヨハネ三・一五参照）。そのかみ傷とは、悪い行い、偶像礼拝、そのほかの不義のことです」94:3「もし、このことがそのように理解されないなら、わたしに説明してください。どんな理由で、モーセは青銅の蛇をしるしの上に立てたのか。また、かまれた者たちに、それを仰ぎ見るよう命じたのか。そして、かまれた者たちは、いやされたのです。しかも、モーセ自身は、どんなものの似姿もまったく造ってはならない、と命じていたのにです」94:4すると、二日目に来た人々のうちの、もう一人が言った。「本当にそのとおりだ。わたしたちには説明できない。実際、わたしも、このことについて何度も教師たちに尋ねたが、だれもわたしに説明してくれなかった。そのため、あなたが言っていることを、続けて話してくれ。実際、わたしたちは、あなたが奥義を明らかにするのに、耳を傾けているのだ。こうしたことのために、預言者たちの教えまでもが、そしりを受けているのだ」94:5わたしは言った。「では、神は、青銅の蛇によってしるしを作るよう命じられました。それでも、責めを負っておられません。それと同じように、律法には、十字架につけられる人々に対するのろいが置かれています。しかし、その先、神のキリストにまで、のろいが置かれているのではありません。神は、このキリストによって、のろいに値することを行ったすべての人を救われるのです」

95:1「実際、人間のどの民族も、モーセの律法によれば、のろいの下にあることが分かるでしょう。実際、こう言われています。『律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず、これを行わない者は、皆のろわれる』（申命記二七・二六、ガラテヤ三・一〇参照）。そして、すべてを厳密に行った者は、だれもいません。あなたがたも、あえて言い返しはしないでしょう。そうではなく、命じられたことを、ほかの人より多く守った人もいれば、少なく守った人もいる、というだけです。しかし、もし、この律法の下にある人々が、すべてを守らなかったために、のろいの下にあることが明らかだとします。そうであれば、すべての異邦人は、なおさら、のろいの下にあることが明らかになるのではないでしょうか。偶像を拝み、少年を汚し、そのほかの悪を行っているのですから」95:2「では、もし、万物の父が望まれたとします。ご自分のキリストが、あらゆる民族の人々のために、すべての人ののろいをお引き受けになることをです。十字架につけられ、死なれたそのかたを、よみがえらせなさることを知っておられたうえです。そのかたは、父の御旨に従って、これらの苦しみをお受けになることを忍ばれました。そうであれば、なぜ、あなたがたは、そのかたについて、のろわれた者についてのように論じるのですか。なぜ、むしろ自分たちのことを嘆かないのですか。実際、たとえ、そのかたの父も、そのかたご自身も、そうされたとします。人類のために、そのかたがこれらの苦しみをお受けになるようにです。そうだとしても、あなたがたは、神の意志に仕える者として、このことを行ったのではありません。実際、預言者たちを殺したときも、あなたがたは敬虔を行ったのではありませんでした（マタイ二三・三一、ルカ一一・四七参照）」95:3「また、あなたがたのうちのだれも、こう言ってはなりません。『もし父が、その者がこれらの苦しみを受けることを望まれたのなら、わたしたちは何も不義を行っていない。その者の打たれた傷によって、人類にいやしがあるためだったのだから（イザヤ五三・五参照）』。では、もし、あなたがたが、犯した罪を悔い改めて、このことを言うとします。このかたこそキリストであられると深く知り、その戒めを守りながらです。そうであれば、あなたがたに罪のゆるしがあることは、わたしが先に言ったとおりです」95:4「しかし、もし、あなたがたが、このかたご自身をも、このかたを信じる人々をものろっているとします。そして、権限を持つときにはいつでも、その人々を殺すとします。そうであれば、どうして、あなたがたがこのかたに手をかけたことも、責任を問われずにすむでしょうか。不義な者、罪人、どこまでも心がかたくなで悟りのない者たちとしてです」

96〜99章　のろいの予告、敵のための祈り、第二十一篇の詩

96:1 「実際、律法で言われている『木にかけられる者は、すべてのろわれる』という言葉も（申命記二一・二三。ガラテヤ三・一三参照）、わたしたちの希望を強めます。十字架につけられたキリストにかかっている希望です。ただし、神がこの十字架につけられたかたをのろっておられる、という意味で強めるのではありません。そうではなく、神が前もって告げておられた、という意味でです。あなたがたすべてと、あなたがたに似た人々によって行われることになっていたことをです。あなたがたも、その人々も、このかたが万物より前におられるかたであることを知りません。神の永遠の祭司であり、王であり、キリストであられることを知らないのです（詩篇一一〇・四参照）」 96:2 「このことが起こっているのを、あなたがたは目で見ることもできます。実際、あなたがたは、自分たちの会堂で、このかたから出たキリスト者をみな、のろっています。また、ほかの国々の人々は、そののろいを実際に行い、自分はキリスト者だと告白するだけの人々を殺しています。わたしたちは、そのすべての人に言います。『あなたがたは、わたしたちの兄弟です（イザヤ六六・五参照）。むしろ、神の真理を深く知ってください』。しかし、あの人々も、あなたがたも、わたしたちの言うことに従いません。そうではなく、わたしたちにキリストの名を否ませようと、力を尽くしています。そのときに、わたしたちは、むしろ死に渡されることを選び、それを忍んでいます。神がキリストを通して約束されたすべての良いものを、神はわたしたちに報いてくださると、確信しているからです」 96:3 「そして、これらすべてに加えて、わたしたちは、あなたがたのために祈っています。あなたがたがキリストにあわれみを受けるためです。実際、このかたは、敵のためにも祈るよう、わたしたちに教えられました。こう言われたのです。『あなたがたの天の父のように、なさけ深く、慈悲深い者となれ』（ルカ六・三五〜三六参照）。実際、わたしたちは、全能の神が、なさけ深く、慈悲深いかたであられるのを見ています。神は、恩を知らない者の上にも、正しい者の上にも、ご自分の太陽をのぼらせておられます。また、聖なる者の上にも、悪い者の上にも、雨を降らせておられるのです（ルカ六・三五、マタイ五・四五参照）。そして、その人々がみな、さばかれることになることも、このかたは教えられました」

97:1 「実際、預言者モーセは、ホルとアロンにその手を支えられながら、この姿勢のままで夕方までとどまりました（出エジプト一七・一二参照）。そのことも、いたずらに起こったのではありません。実際、主も、ほとんど夕方まで木の上にとどまられ、夕方近くに、人々はこのかたを葬りました（マタイ二七・五七、マルコ一五・四二参照）。それから、このかたは三日目によみがえられました。このことは、ダビデを通して、こう声高く告げられていました。『わたしは声をあげて主に呼ばわった。主はその聖なる山からわたしに答えられた。わたしはふして眠り、目をさました。主がわたしをささえられたからである』（詩篇三・四〜五）」 97:2 「また、イザヤを通しても、同じように言われていました。このかたがどのような仕方で死なれることになっていたかについて、こうです。『わたしは、従わず、言い逆らう民に、よからぬ道に歩む者たちに、手を伸べた』（イザヤ六五・二）。また、このかたがよみがえられることになっていたことについて、イザヤ自身が、こう言いました。『その墓は、ただ中から取り去られた』（イザヤ五七・二）。また、『わたしは、富める者を、彼の死の代わりに与える』（イザヤ五三・九）」 97:3 「さらに、ダビデは、また別の言葉で、受難と十字架について、奥義に満ちたたとえで、第二十一篇の詩の中で、こう言いました。『彼らはわたしの手と足を刺し貫いた。わたしの骨をことごとく数えた。そして、彼らは目をとめて、わたしを見た。彼らは互いにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きにした』（詩篇二二・一六〜一八）。実際、人々がこのかたを十字架につけたとき、釘を打ち込んで、その手と足を刺し貫きました。そして、このかたを十字架につけた者たちは、その衣服を自分たちのあいだで分けました。それぞれが、自分の選びたいと思ったものを得ようとして、くじを投げ、く

じの当たりに従って分けたのです（マタイ二七・三五、ヨハネ二〇・二五参照）」 97:4 「それなのに、あなたがたは、まさにこの詩はキリストについて言われたのではない、と言っています。何事においても目が見えなくなっているのです。そして、次のことを悟っていません。あなたがたの民族の中で、かつて王と呼ばれた者のうち、生きながら足と手を刺し貫かれた者はいません。そして、この奥義によって、すなわち十字架につけられることによって死んだ者もいません。このイエスおひとりのほかには、だれもいないのです」

98:1 「そして、詩の全体を言いましょう。このかたの、父に対する敬虔を、あなたがたが聞くためです。また、このかたが、すべてを父に帰しておられることを聞くためです。このかたは、父によってこの死から救われることさえ、願っておられるのです。同時に、このかたは、この詩の中で明らかにしておられます。ご自分に逆らって共に立ち上がった者たちが、どのような者であったかをです。そして、ご自分がまことに、苦しみを感じ取る人となられたことを示しておられるのです」 98:2 「その詩は、次のとおりです。『神よ、わが神よ、わたしに心を向けてください。なにゆえわたしを捨てられたのですか。わたしの罪過の言葉は、わたしの救いから遠いのです。わが神よ、わたしが昼あなたに呼ばわっても、あなたは聞かれません。夜も呼ばわります。それは、わたしの無知のためではありません。しかし、あなたは聖所に住んでおられます。賛美であるかた、イスラエルよ。われらの先祖たちは、あなたに望みを置きました。彼らが望みを置いたので、あなたは彼らを助けられました。彼らはあなたに呼ばわって救われ、あなたに望みを置いて恥を受けなかったのです」 98:3 「しかし、わたしは虫であって、人ではない。人々にそしられ、民に侮られる。すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、くちびるで語り、かしらを振り動かした。「彼は主に望みを置いた。主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」。あなたこそ、わたしを胎から引き出されたかた、わたしが母の乳房にいたときからの、わたしの望みだからです。わたしは胎から出て、あなたの上に投げ出されました。母の胎を出てからこのかた、あなたはわたしの神です。わたしから離れないでください。悩みが近く、わたしを助ける者がないからです」 98:4 「多くの子牛がわたしを取り巻き、肥えた雄牛がわたしを囲んだ。かき裂き、ほえたける獅子のように、わたしに向かって口を開いた。わたしの骨はことごとく、水のように注ぎ出され、散らされた。わたしの心臓は、わたしの腹のただ中で、溶けるろうのようになった。わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はのどについた。あなたはわたしを死のちりに下された。まことに、多くの犬がわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んだ。彼らはわたしの手と足を刺し貫いた。わたしの骨をことごとく数えた。そして、彼らは目をとめて、わたしを見た」 98:5 「彼らは互いにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きにした。しかし主よ、あなたの助けをわたしから遠ざけないでください。わたしを支えることに心を向けてください。わたしの魂をつるぎから、わたしのひとり子を犬の手から助け出してください。わたしを獅子の口から、低くされたわたしを一角獣の角から救い出してください。わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、会衆の中であなたをほめたたえるでしょう。主を恐れる者よ、主をほめたたえよ。ヤコブのもろもろのすえよ、主をあがめよ。イスラエルのもろもろのすえは、主をおじおそれよ』（詩篇二二・一～二三）」

99:1 こう言い終えると、わたしは続けて言った。「では、この詩の全体がキリストについて言われていることを、次のように、あなたがたに示しましょう。もう一度、この詩を解き明かすことによってです。では、詩はすぐ初めに『神よ、わが神よ、わたしに心を向けてください。なにゆえわたしを捨てられたのですか』と言っています（詩篇二二・一）。これは、キリストによって言われることになっていたことを、昔から前もって告げていたのです。実際、このかたは、十字架につけられたとき、『神よ、神よ、なにゆえわたしを捨てられたのですか』と言われました（マタイ二七・四六、マルコ一五・三四） 99:2 「また、その続きはこうです。『わたしの罪過の言葉は、わたしの救いから遠いのです。わが神よ、わたしが昼あなたに呼ばわっても、あなたは聞かれません。夜も呼ばわります。それは、わたしの無知のためではありません』（詩篇二二・一～二）。これも、このかたがなさることになっていたことそのものを言うように、言われていました。実際、このかたは、十字架につけられることになっていたその日に、弟子たちのうちの三人をお連れになりました。オリブと呼ばれる山へです。その山は、エルサレムの神殿のすぐ隣にあります。そして、こう言って祈られました。

『父よ、できることでしたら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』（マタイ二六・三九）。また、その後、お祈りになって、こう言われました。『わたしの望むようにではなく、あなたのお望みのように』（マタイ二六・三九）。このかたは、これらのことによって、ご自分がまことに苦しみを受ける人となられたことを、明らかにしておられたのです」99:3「しかし、だれかが『すると、その者は、自分が苦しみを受けることになるのを知らなかったのだ』と言うかもしれません。そう言わないように、詩の中には、すぐに『それは、わたしの無知のためではありません』という言葉が続いています（詩篇二二・二）。神がアダムにどこにいるのかと尋ねられたのは、神にとって、無知のためではありませんでした。カインに、アベルはどこにいるのかと尋ねられたのも、同じです（創世記三・九、四・九参照）。そうではなく、それぞれがどのような者であるかを証明するためでした。また、書き記されることによって、すべてのことの知識がわたしたちに届くためでした。それと同じように、このかたも、ご自分の無知ではなく、人々の無知を示しておられたのです。その人々は、このかたがキリストであられるとは思っていませんでした。そうではなく、自分たちがこのかたを殺すだろう、と考えていました。そして、このかたはふつうの人と同じように、よみにとどまられるだろう、と考えていたのです」

100〜102章　イスラエルと呼ばれるかた、エバとマリヤ、詩の解き明かし

100:1「また、その次の言葉は、『しかし、あなたは聖所に住んでおられます。賛美であるかた、イスラエルよ』です（詩篇二二・三）。この言葉は、このかたが、賛美と驚嘆に値することを行われることになっていたことを示していました。このかたは、十字架につけられた後、三日目に死人の中からよみがえられることになっていたのです。このかたは、そのことを父から受けて、持っておられます（ヨハネ一〇・一八参照）。実際、キリストがヤコブともイスラエルとも呼ばれておられることは、すでに示しました。また、ヨセフとユダの祝福の中で、このかたについてのことが奥義のうちに宣べ伝えられていたことを示しただけではありません。福音書にも、このかたがこう言われたと書かれています。『すべての事は父からわたしに任せられています。そして、父を知る者は子のほかにはなく、子を知る者は、父と、子があらわす者とのほかに、だれもありません』（マタイ一一・二七）」100:2「そういうわけで、このかたは、すべてのことをわたしたちにあらわしてくださいました。わたしたちが、このかたの恵みによって、聖書からも理解したことのすべてです。わたしたちは、このかたが神の長子であられ、すべての造られたものより前におられることを知りました（コロサイ一・一五〜一七参照）。また、族長たちの子であられることも知りました。このかたが族長たちの子であられるのは、その人々の家系から出たおとめによって、肉となられたからです。そして、姿もなく、卑しく、苦しみを受ける人となることを忍ばれたからです（イザヤ五三・二〜三参照）」100:3「ですから、このかたは、ご自分の言葉の中でも、こう言われました。これから苦しみをお受けになることについて、語られたときです。『人の子は必ず多くの苦しみを受け、パリサイ人と律法学者に捨てられ、十字架につけられ、そして三日目によみがえる』（マルコ八・三一、ルカ九・二二参照）。では、このかたがご自分を人の子と言われたのは、次のどちらかのためです。一つは、おとめによる誕生のためです。そのおとめは、先に言ったように、ダビデ、ヤコブ、イサク、アブラハムの家系から出ていました。もう一つは、アダムが、ここに数え上げた人々の父でもあるためです（ルカ三・三八参照）。マリヤは、その人々から家系を引いています。実際、娘たちの親は、その娘たちから生まれる子供たちの父でもあると、わたしたちは知っています」100:4「実際、このかたは、弟子たちのひとりで、以前はシモンと呼ばれていた者に、ペテロという名をおつけになりました。その弟子が、このかたの父があらわしてくださったとおりに、このかたを神の子キリストであられると深く知ったからです（マタイ一六・一五〜一八参照）。そして、わたしたちが持っている、その使徒たちの回想録には、このかたが神の子であられると書かれています。また、わたしたちは、このかたを子と呼んでいます。そして、次のことを理解しました。このかたは子であられ、すべての作られたものより前に、父から、その力と御旨とによって出られたかたであられます。預言者たちの言葉の中では、このかたは、さまざまな仕方で呼ばれておられます。知恵、日、東、つるぎ、石、つえ、ヤコブ、イスラエルと呼ばれておられるのです（箴言八・一以下、詩篇一一八・二四、ゼカリヤ六・一二、イザヤ二七・一、ダニエル二・三四、イザヤ一一・一、詩篇二四・六、七二・一八参照）。そして、このかたは、おとめによって人となられました。蛇から出た不従順は、ある道によって始まりました。その同じ道によって、不従順が滅びにも至るためです」100:5「実際、エバは、おとめで、清い者であったときに、蛇から出た言葉をみごもり、不従順と死を産みました（ヤコブ一・一五参照）。しかし、おとめマリヤは、信仰と喜びを受けました。み使いガブリエルが、彼女に良い知らせを告げたときです。その知らせは、主の霊が彼女に臨み、いと高き者の力が彼女をおおう、というものでした。それゆえ、彼女から生まれるものは聖なるものであり、神の子である、というのです（ルカ一・二六、三五参照）。そのとき、マリヤは、こう答えました。『お言葉どおりこの身に成りますように』（ルカ一・三八）」100:6「そして、このおとめによって、このかたはお生まれになりました。わたしたちは、

これほど多くの聖書の言葉が、このかたについて言われていることを示してきました。このかたによって、神は、蛇と、蛇に似た者となったみ使いたちと人々とを滅ぼされます。一方、悪い行いを悔いて、このかたを信じる人々には、死からの解放をもたらされるのです」

101:1「また、その詩の続きは、次の言葉です。『われらの先祖たちは、あなたに望みを置きました。彼らが望みを置いたので、あなたは彼らを助けられました。彼らはあなたに呼ばわって救われ、あなたに望みを置いて恥を受けなかったのです。しかし、わたしは虫であって、人ではない。人々にそしられ、民に侮られる』（詩篇二二・四～八）。この言葉は、次のことを明らかにしています。このかたは、神に望みを置き、神に救われた人々を、ご自分の先祖であると告白しておられます。その人々は、おとめの先祖でもありました。このかたは、そのおとめによって、人となってお生まれになったのです。また、このかたは、ご自分も同じ神によって救われることを示しておられます。ご自分の御旨や力によって何かをなさると、誇っておられるのではありません」101:2「実際、このかたは、地上でも同じことをなさいました。ある人がこのかたに『よき師よ』と言ったとき、このかたは、こうお答えになりました。『なぜわたしをよき者と言うのか。よいかたはただひとり、天にいますわたしの父だけである』（マタイ一九・一六～一七、マルコ一〇・一七～一八、ルカ一八・一八～一九参照）。また、『わたしは虫であって、人ではない。人々にそしられ、民に侮られる』という言葉は（詩篇二二・六）、前もって告げていたのです。このかたに現にあり、また起こっていることが明らかな事柄をです。実際、そしりは、どこにおいても、このかたを信じる人間であるわたしたちに向けられています。また、『民に侮られる』と言うのは、あなたがたの民が、このかたを侮り、辱めたからです。そして、このかたが、あなたがたの加えたこれらの苦しみを受けられたからです」101:3「また、その続きは、『すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、くちびるで語り、かしらを振り動かした。「彼は主に望みを置いた。主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」』です（詩篇二二・七～八）。この言葉も、同じように、このかたの身に同じ事柄が起こることを、前もって告げていました。実際、十字架につけられたこのかたを見ていた者たちは、それぞれかしらを振り動かし、くちびるをゆがめました（マタイ二七・三九、マルコ一五・二九参照）。そして、互いに鼻であしらいながら（ルカ二三・三五参照）、あざけって、次の言葉を言いました。その言葉は、このかたの使徒たちの回想録にも書かれています。『彼は自分を神の子だと言っていた。降りて来て、歩いてみるがよい。神に彼を救わせよ』（マタイ二七・四〇～四三、マルコ一五・二九～三〇、ルカ二三・三五参照）」

102:1「また、その続きは、『わたしが母の乳房にいたときからの、わたしの望み。わたしは胎から出て、あなたの上に投げ出されました。母の胎を出てからこのかた、あなたはわたしの神です。わたしを助ける者がないからです。多くの子牛がわたしを取り巻き、肥えた雄牛がわたしを囲んだ。かき裂き、ほえたける獅子のように、わたしに向かって口を開いた。わたしの骨はことごとく、水のように注ぎ出され、散らされた。わたしの心臓は、わたしの腹のただ中で、溶けるろうのようになった。わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はのどについた』です（詩篇二二・九～一五）。この言葉によって、起こった事柄が前もって告げられていたのです」102:2「実際、『わたしが母の乳房にいたときからの、わたしの望み』という言葉について言えば（詩篇二二・九）、こうです。実際、このかたは、先に言ったように、ベツレヘムでお生まれになりました。するとすぐに、ヘロデ王は、アラビヤから来た博士たちから、このかたのことを聞き知りました。そして、このかたを殺そうとたくらんだのです。そして、神の命令に従って、ヨセフは、このかたをマリヤと共に連れて、エジプトに去りました（マタイ二・一～一四参照）。実際、父は、ご自分がお生みになったこのかたについて、定めておられたのです。このかたが成人されて、父から出た言葉を宣べ伝えられた後に、死をお受けになることをです」102:3「もし、だれかがわたしたちに、こう言うとします。『まさか、神は、むしろヘロデを殺すことが、おできにならなかったのか』。そうであれば、わたしは先回りして言います。『まさか、神は、初めに蛇を取り除いて、存在しないようにすることが、おできにならなかったのでしょうか。そして、こう言われないことが、おできにならなかったのでしょうか。「わたしは恨みをおく、彼と女とのあいだに、彼のすえと女のすえとの間に」（創世記三・一五）。また、まさか、すぐに多くの人間を造ることが、

おできにならなかったのでしょうか』」 102:4「しかし、神は、み使いたちをも人々をも、義を行うことについて、自分で選ぶ力をもつ者として造られました。そうなることが良いと、知っておられたとおりにです。また、時を定められました。彼らが自分で選ぶ力をもつことが良いと知っておられた、その時までです。そして、同じように良いと認めておられたので、全体に及ぶさばきも、一部に及ぶさばきも行われました。ただし、自分で選ぶ力は守られていたのです。ですから、言葉は、塔が築かれたときと、言語が多くの声に分かれて変わったときについても、こう言っています。『主は言われた、「見よ、民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはこの事をしはじめた。今、彼らがしようとする事は、何一つ彼らから欠けることはないであろう」』（創世記一一・六） 102:5「また、『わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はのどについた』という言葉もあります（詩篇二二・一五）。これも、同じように、父の御心に従って、このかたがなさることになっていた事柄を、前もって告げるものでした。実際、このかたは、ご自分の力ある言葉の力によって、いつも、ご自分と論じ合う者たちの誤りを証明しておられました。パリサイ人と律法学者、要するに、あなたがたの民族の中の教師たちです。その力が、水の豊かな力強い泉の水がせき止められたように、止まったのです。このかたが沈黙され、ピラトの前では、もはやだれにも何もお答えになろうとされなかったときです。このかたの使徒たちの回想録に明らかにされているとおりです（マタイ二七・一三～一四、マルコ一五・四～五、ルカ二三・九参照）。それは、イザヤを通して言われた言葉も、実を結んで働くためでした。そこでは、こう言われています。『主は、わたしが言葉を語るべきときを知るための舌を、わたしに与えられる』（イザヤ五〇・四） 102:6「また、このかたが『あなたはわたしの神です。わたしから離れないでください』と言われたことは（詩篇二二・一〇～一一）、同時に、このかたが次のことを教えておられることでもあります。すべての人は、万物を造られた神に望みを置き、そのかたからだけ、救いと助けを求めなければならない。ほかの人々のように、民族や富や力や知恵によって救われることができると考えてはならない。あなたがたも、いつもそのようにふるまってきました。あるときは子牛を造り（出エジプト三二・四参照）、いつも恩を知らず、義人たちを殺し、自分の民族のゆえに思い上がる者として現れてきたのです」 102:7「実際、神の子でさえ、こう言っておられないことは明らかです。子であるから、力があるから、知恵があるから、救われることができる、とは言っておられないのです。そうではなく、罪のないかたであられても、神なしには救われることができない、と言っておられるのです。イザヤが言うように、このかたは、言葉においてさえ罪を犯されませんでした。実際、『彼は不法を行わず、口で欺きも行わなかった』のです（イザヤ五三・九）。そうであれば、あなたがたは、どうして、自分自身を欺いていると考えないのでしょうか。この希望なしに救われることを待ち望んでいるほかの人々も、同じです」

103〜105章　子牛と雄牛、獅子とサタン、罪に定めた群れ、魂の行く末

103:1 「また、詩の中で続いて言われている言葉は、『悩みが近く、わたしを助ける者がないからです。多くの子牛がわたしを取り巻き、肥えた雄牛がわたしを囲んだ。かき裂き、ほえたける獅子のように、わたしに向かって口を開いた。わたしの骨はことごとく、水のように注ぎ出され、散らされた』です（詩篇二二・一一〜一四）。これは、同じように、このかたの身に起こった事柄を、前もって告げるものでした。実際、あの夜、パリサイ人と律法学者と教師たちは、あなたがたの民の中から人々を遣わしました。その者たちが、オリブ山へ、このかたを襲いに来たのです（マタイ二六・三〇、四七、マルコ一四・四三参照）。そのとき、このかたを取り巻いたのは、言葉が、突く癖のある、早く滅びる子牛と呼んでいた者たちでした（出エジプト二一・二九参照）」 103:2 「また、『肥えた雄牛がわたしを囲んだ』という言葉は（詩篇二二・一二）、ある者たちのことを前もって告げていました。その者たちも、子牛と同じようなことをしたのです。人々がこのかたを、あなたがたの教師たちのもとへ連れて行ったときのことです。言葉がその者たちを雄牛と言ったのは、雄牛が子牛の生まれる原因であることを、わたしたちが知っているからです。そういうわけで、雄牛が子牛の父であるように、あなたがたの教師たちは、自分の子供たちにとって原因となったのです。子供たちが、オリブ山へ出て行って、このかたを捕らえ、教師たちのもとへ連れて来ることの原因です（マタイ二六・三、四七参照）。また、『助ける者がないからです』と言うことも（詩篇二二・一一）、起こったことを明らかにするものです。実際、罪のないかたとして、このかたを助ける者は、ただのひとりもいませんでした（マタイ二六・五六、マルコ一四・五〇、五二参照）」 103:3 「また、『ほえたける獅子のように、わたしに向かって口を開いた』とあります（詩篇二二・一三）。この言葉は、そのころユダヤ人の王であった者を指しています。その者もヘロデと呼ばれ、あのヘロデの後継者となっていました。あのヘロデは、このかたがお生まれになったとき、そのころベツレヘムで生まれた子供たちを、すべて殺しました。アラビヤから来た博士たちが彼に語っていた子が、必ずその子供たちの中にいると疑ったからです。しかし、ヘロデは、万物にまさって力あるかたの御旨を知りませんでした。そのかたは、ヨセフとマリヤに命じておられたのです。幼な子を連れてエジプトへ去り、自分たちの国へ戻って来るようにと再びお告げがあるまで、そこにいるようにと。そして、彼らは、そこへ去って、そこにいました。ベツレヘムの幼な子たちを殺したヘロデが死に、アケラオがその後を継ぐまでです（マタイ二・一〜二三参照）。そして、このアケラオも、キリストが十字架につけられるために来られる前に、死にました。十字架につけられるために来られたことは、父の御旨に従ってキリストが成し遂げられた、はからいでした」 103:4 「一方、アケラオの後を継いだヘロデは、自分に割り当てられた権力を受けました。ピラトは、このヘロデに好意を示そうとして、イエスを縛ったまま送りました（ルカ二三・七〜八参照）。神は、このことも起こるのを前もって知っておられて、次のように言っておられました。『そして、彼を縛って、アッスリヤ人のもとへ運び、王への礼物とした』（ホセア一〇・六）」 103:5 「あるいは、このかたに向かってほえたける獅子とは、悪魔のことを言っていました。モーセは、悪魔を蛇と呼んでいます（創世記三・一以下）。また、ヨブ記とゼカリヤ書では、悪魔と呼ばれています（ヨブ一・六以下、ゼカリヤ三・一〜二）。そして、イエスによって、サタンと呼ばれています（マタイ四・一〇ほか）。イエスは、そうお呼びになることで、悪魔が、自分の行った行いから、組み合わせた名を得たことを示しておられるのです。実際、『サタ』は、ユダヤ人とシリヤ人の言葉で、背教者のことです。また、『ナス』は、訳すと蛇と呼ばれる名です。言われたこの二つから、サタナスという一つの名ができるのです」 103:6 「実際、使徒たちの回想録には、この悪魔のことが書かれています。このかたがヨルダン川から上がられるとすぐに、悪魔は、このかたに近づいて来て、試みました。それは、声がこのかたに『おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえ

を生んだ』と言ったときでした（ルカ三・二二、詩篇二・七参照）[1]。そして、悪魔は、ついには、このかたに『わたしを拝め』と言うまでに至りました。そして、キリストは、悪魔にこうお答えになりました。『わたしのうしろに退け、サタンよ。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」』（マタイ四・九〜一〇、ルカ四・七〜八参照）。実際、悪魔は、アダムを惑わしたように、このかたにも何かをすることができる、と言っていたのです」[103:7]「また、『わたしの骨はことごとく、水のように注ぎ出され、散らされた。わたしの心臓は、わたしの腹のただ中で、溶けるろうのようになった』とあります（詩篇二二・一四）。この言葉は、このかたに起こったことを、前もって告げるものでした。あの夜、人々が、このかたを捕らえようとして、オリブ山へ、このかたに向かって出て行ったときのことです」[103:8]「実際、回想録には、汗がしたたりのように流れ落ちた、と書かれています（ルカ二二・四四参照）。このかたが、お祈りになり、『できることでしたら、この杯を過ぎ去らせてください』と言っておられたときです（マタイ二六・三九、ルカ二二・四二参照）。その回想録は、このかたの使徒たちと、その使徒たちに従った人々とがまとめたものだと、わたしは言います。明らかに、心臓は震えており、骨も同じように震えていました。そして、心臓は、腹の中で溶けるろうのようになっていました。それは、わたしたちが次のことを知るためです。父は、ご自分の子が、わたしたちのために、このような苦しみのうちにも、まことにおられることを望まれたのです。また、わたしたちが、こう言わないためです。このかたは神の子であられたので、ご自分の身に起こり、降りかかったことを感じ取ってはおられなかった、と」[103:9]「また、『わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はのどについた』とあります（詩篇二二・一五）。この言葉は、先に言ったように、沈黙を前もって告げるものでした。このかたは、あなたがたのもとの教師たちが、みな知恵のない者であることを証明しておられました。それなのに、このかたは、何についても、何もお答えにならなかったのです」

[104:1]「また、『あなたはわたしを死のちりに下された。まことに、多くの犬がわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んだ。彼らはわたしの手と足を刺し貫いた。わたしの骨をことごとく数えた。そして、彼らは目をとめて、わたしを見た。彼らは互いにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きにした』という言葉は（詩篇二二・一五〜一八）、先に言ったように、前もって告げるものでした。悪を行う者の群れが、どのような死によって、このかたを罪に定めることになっていたかをです。言葉は、その者たちを犬とも呼び、また狩人であることも示しています。このかたを狩り立てた者たちそのものが、このかたを罪に定めようと力を尽くす者として、集まったからです。このことも、起こったこととして、このかたの使徒たちの回想録に書かれています（マタイ二六・五七、マルコ一四・五三参照）」[104:2]「また、このかたが十字架につけられた後のことも、すでに明らかにしました。このかたを十字架につけた者たちが、このかたの衣服を自分たちのあいだで分けたことです」

[105:1]「また、その詩の続きは、『しかし主よ、あなたの助けをわたしから遠ざけないでください。わたしを支えることに心を向けてください。わたしの魂をつるぎから、わたしのひとり子を犬の手から助け出してください。わたしを獅子の口から、低くされたわたしを一角獣の角から救い出してください』です（詩篇二二・一九〜二一）。これも、同じように、またしても、教えであり、前もって告げるものです。このかたに現にあった事柄と、これから起こることになっていた事柄についてです。実際、このかたが万物の父のひとり子であられたことは、先に明らかにしました。このかたは、父から特別な仕方で、ロゴスとして、また力としてお生まれになり（ヨハネ一・一八参照）、後に、おとめによって人となられたのです。わたしたちが回想録から学んだとおりです」[105:2]「また、このかたが十字架につけられて死なれることも、同じように前もって告げられていました。実際、『わたしの魂をつるぎから、わたしのひとり子を犬の手から助け出してください。わたしを獅子の口から、低くされたわたしを一角獣の角から救い出してください』という言葉も（詩篇二二・二〇〜二一）、同じように示していました。このかたが、どのような苦しみによって死なれることになっていたか、すなわち十字架につけられることをです。実際、『一角獣の角』という言葉が（詩篇二二・二一）、十字架の形にしか当てはまらないことは、先にあなたがたに解き明かしました」[105:3]「また、このかたは、つるぎと獅子の口と犬の手から、ご自分の魂が救われるよう求められました。それは、だれもこのかたの魂を支配し

ないようにとの願いでした。そう願われたのは、わたしたちも、この世の生涯を去るときに、同じことを神に求めるためです。神は、すべての恥知らずな悪いみ使いを退けて、わたしたちの魂を捕らえさせないことがおできになるかたです」105:4「また、魂が残り続けることは、あなたがたに示しました[2]。サウルが求めたとおりに、サムエルの魂さえも、口寄せの女によって呼び起こされたことによってです（サムエル上二八・七以下参照）。また、このように義人である預言者たちの魂もすべて、そのような力の権威のもとに落ちていたことも明らかです。そのような力が、あの口寄せの女のうちにもあったことは、事実そのものから認められています」105:5「ですから、神は、ご自分の子を通しても、わたしたちに教えておられます。何としても義人となるよう力を尽くすことをです。また、この世を去るときに、わたしたちの魂がそのような力のもとに落ちないよう求めることをです。実際、このかたは、十字架の上で霊をお返しになるとき、こう言われました。『父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます』（ルカ二三・四六）。このことも、わたしは回想録から学びました」105:6「実際、このかたは、弟子たちに、パリサイ人の生活にまさるよう強くお勧めになりました。そうでなければ、救われないと知るように、と。そうお勧めになって、次の言葉を言われたと、回想録に書かれています。『あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない』（マタイ五・二〇）」

訳注

1 ルカ三・二二の天の声は、一部の古い写本でこの形になっている。
2 この論証は今の本文になく、失われた部分にあったとみられる。

106〜109章　詩の終わり、ヨナのしるし、ミカの預言

106:1 「また、詩の残りの部分は、次のことを明らかにしていました。このかたは、願われるとおりに父がすべてを与えてくださることを、知っておられました。また、父が死者のうちからよみがえらせてくださることも、知っておられました（ヨハネ一三・三、マタイ一一・二六〜二七、一六・二一参照）。また、このかたは、神を恐れるすべての者に、神をほめたたえるよう勧められました。神が、この十字架につけられたかたの奥義を通しても、信じる人々のあらゆる民族をあわれんでくださったからです。また、このかたは、このかたの兄弟たちである使徒たちの中に立たれました（ルカ二四・三六、ヨハネ二〇・一七参照）。使徒たちは、このかたが死者のうちからよみがえられた後、このかたによって納得させられました。このかたが、苦しみをお受けになる前にも、これらの苦しみをお受けにならなければならないと、彼らに言っておられたことをです。また、これらのことが、預言者たちによって前もって宣べ伝えられていたことをです。そして、使徒たちは、このかたが十字架につけられたとき、このかたから離れ去ったことを悔い改めました（ルカ二四・二五〜二六、四四〜四六、五〇参照）。そして、このかたは、使徒たちとともに過ごされながら、神をほめたたえられました（マタイ二六・三〇、マルコ一四・二六参照）。このことが起こったことは、使徒たちの回想録にも明らかにされています」 106:2 「その言葉は、次のとおりです。『わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、会衆の中であなたをほめたたえるでしょう。主を恐れる者よ、主をほめたたえよ。ヤコブのもろもろのすえよ、主をあがめよ。イスラエルのもろもろのすえは、主をおじおそれよ』（詩篇二二・二二〜二三）」 106:3 「また、このかたは、使徒のひとりの名をペテロと改められた、と言われています。そして、このことも起こったと、彼の回想録[1]に書かれています。さらに、このかたは、ほかのふたりの兄弟、ゼベダイの子たちの名を、ボアネルゲ、すなわち雷の子という名に改められました（マルコ三・一六〜一七参照）。これらのことは、次のことを示すものでした。このかたこそ、まさにあのかたであられるということです。そのかたによって、ヤコブにイスラエルという呼び名が与えられました。また、アウセに、イエス[2]という名がつけられました。そして、その名によって、エジプトから出て来た者たちのうち残された民が、族長たちに約束された地に導き入れられたのです」 106:4 「また、このかたが、星のように、アブラハムの民族を通して出られることになっていたことは、モーセがほのめかしていました。モーセは、こう言ったのです。『ヤコブから一つの星が出、イスラエルから指導者が出る』（民数記二四・一七参照）。また、別の聖句も、こう言っています。『見よ、その名を東という人がある』（ゼカリヤ六・一二）。そういうわけで、このかたがお生まれになるのと同時に、天にも星が出ました。このかたの使徒たちの回想録に書かれているとおりです。アラビヤから来た博士たちは、そのことから深く知って、やって来て、このかたを拝みました（マタイ二・二、九〜一〇参照）」

107:1 「また、このかたは、十字架につけられた後、三日目によみがえられることになっていました。そのことについて、回想録に次のように書かれています。あなたがたの民族の人々が、このかたと論じ合って、『しるしを見せてください』と言いました。すると、このかたは、彼らにお答えになりました。『邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも彼らには与えられないであろう』（マタイ一二・三九、一六・一、四参照）。このかたがこう言われたとき、それは、聞いている人々には、覆われた仕方で理解されるものでした。このかたが十字架につけられた後、三日目によみがえられる、ということです」 107:2 「また、このかたは、あなたがたの時代が、ニネベの人々の町よりも邪悪で、いっそう不義であることを、明らかにされました。ヨナは、三日目に大いなる魚の腹から吐き出された後、ニネベの人々に、三日たてば[3]彼らがひとり残らず滅びる、と宣べ伝えました。そのとき、ニネベの人々は、人も理性のない動物も、すべての生き物が、分け隔てなく断食することをふれ出しま

した。荒布をまとい、ひたすら泣き叫び、心からまことに悔い改め、不義を捨てることをともなう断食です。彼らは、神が、悪から離れるすべての者に対して、あわれみ深く、人を愛するかたであると、信じたのです。そのため、その町の王自身も、大臣たちも、同じように荒布をまとって、断食と嘆願を続けました。そして、自分たちの町が滅ぼされずにすんだのです（ヨナ三・四〜九参照）」107:3

「それだけでなく、ヨナは、自分が宣べ伝えたとおりの三日目に、町が滅ぼされなかったことに、心を痛めました。そのとき、一つのはからいによって、地からヨナのためにとうごまが生え出ました。ヨナは、その下に座って、暑さから陰に守られていました（このとうごまは、にわかに生えたものでした。ヨナが植えたのでも、水を注いだのでもなく、ヨナに陰を与えるために、突然生え出たのです）。そして、もう一つのはからいによって、とうごまは枯らされました。ヨナは、そのことを悲しみました。ヨナは、ニネベの人々の町が滅ぼされなかったことで、正しい理由もなく気を落としていました。こうして、これらのはからいによって、そのことを証明して、こう言われました（ヨナ四・六〜九参照）」107:4

「『あなたは、労せず、育てもしなかったとうごまを惜しんだ。それは、その夜のうちに来て、その夜のうちに滅びた。それなのに、わたしは、大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、自分の右と左のあいだをわきまえない十二万あまりの人々と、あまたの家畜とが住んでいるのに』（ヨナ四・一〇〜一一）」

108:1「また、あなたがたの民族の人々はみな、ヨナによってこれらのことが起こったことを知っていました。そして、キリストは、あなたがたのもとで、ヨナのしるしをあなたがたにお与えになると叫ばれました。このかたは、勧められたのです。せめて、このかたが死者のうちからよみがえられた後にでも、あなたがたが自分の行った悪を悔い改めるように、と。また、ニネベの人々のように、神の前で泣き求めるように、と。それは、あなたがたの国民も町も、今そうなったように、攻め取られて滅ぼされることのないためでした」108:2「それなのに、あなたがたは、このかたが死者のうちからよみがえられたことを知っても、悔い改めなかっただけではありません。先に言ったように、選り抜きの人々を任命して、全世界に送り出しました（マタイ二八・一五参照）。その人々は、こう宣べ伝えました。『ガリラヤ人イエスという惑わす者から、無神論の、不法な異端が起こった。われわれはその者を十字架につけたが、その弟子たちが、夜のうちに墓から彼を盗み出した。彼は、十字架から釘を抜かれて、その墓に置かれていたのである。そして、弟子たちは、彼が死者のうちからよみがえり、天に昇ったと言って、人々を惑わしている』（マタイ二七・六三〜六四、二八・一三、マルコ一六・一九、使徒一・一〇〜一一参照）。また、あなたがたは、このかたが、あの事柄もお教えになったと非難しました。それは、あなたがたが、あらゆる民族の人々に向かって言い立てる、無神論の、不法な、汚れた事柄です。このかたを、キリストであり、教師であり、神の子であられると告白する者たちに対して、言い立てているのです」108:3「そのうえ、あなたがたの町が攻め取られ、地が荒らされても、あなたがたは悔い改めません。そうではなく、このかたと、このかたを信じるすべての人々とを、あえて呪うことさえしています。そして、わたしたちは、あなたがたも、あなたがたのせいでわたしたちについてこのような思い込みを抱いた人々も、憎みません。そうではなく、祈っています。せめて今からでも、みなが悔い改めて、あわれみを受けるように、と。慈しみ深く、あわれみに富む、万物の父である神からです」

109:1「しかし、異邦人は、迷いのうちに暮らしていた悪から悔い改めることになっていました。このかたの使徒たちによってエルサレムから宣べ伝えられた言葉を聞き、その使徒たちを通して学ぶことによってです。そのことについて、わたしが、十二人のひとりであるミカの預言から短い言葉を述べるあいだ、我慢して聞いてください」109:2「その言葉は、次のとおりです。『そして、末の日に、主の山は現れ、もろもろの山の頂に備えられ、もろもろの丘よりも高くあげられる。もろもろの民は、そこに川をなし、多くの国民は来て言う、「さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。われわれにはその道が照らし示され、われわれはその道に歩もう」と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。彼は多くの民の間をさばき、遠い所まで強い国々を戒められる。そして、彼らはつるぎを打ちかえて、すきとし、そのやりを打ちかえて、かまとする。国は国にむかってつるぎをあげず、再び戦いのことを学ばない」109:3「人は自分のぶどうの木の下、自分のいちじくの木の下に座し、恐れさ

せる者はない。万軍の主がその口で語られたからである。すべての民は、その神々の名によって歩むが、われわれは、われわれの神、主の名によって、とこしえに歩むからである。その日には、わたしは苦しめられた者を集め、追いやられた者と、わたしが痛めた者とを寄せ集める。そして、苦しめられた者を残れる民とし、しいたげられた者を強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえに、彼らを治められる』（ミカ四・一～七）」

訳注

1 この『彼』はペテロとみられる。『使徒たちの』の誤りとみる説もある。
2 ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。
3 ギリシア語訳の読み。ヘブル語本文は『四十日』で、写本にもその書き込みがある。

110〜112章　ミカの預言の解き明かし、十字架と過越の血の型

110:1 これを言い終えて、わたしは言い足した。「皆さん、あなたがたの教師たちは、この一節の言葉がすべてキリストについて言われたものだと認めています。そのことを、わたしは知っています。また、彼らが、キリストはまだ来ておられないと言っていることも、知っています。また、たとえ来ておられると言うとしても、そのかたがだれであるかは知られていない、と彼らは言います。そうではなく、そのかたがはっきりと現れ、栄光あるかたとなられるとき、だれであるかが知られるのだ、と言うのです（ヨハネ七・二七参照）」 110:2「そして、この一節で言われていることは、そのときに起こるのだ、と彼らは言います。預言の言葉から、まだ何の実も生じていないかのように言うのです。彼らは、考えの浅い人々です。すべての言葉を通して示されてきたことを、悟っていないのです。それは、このかたの来臨が二度あると、告げ知らされているということです。一度目の来臨では、このかたは、苦しみを受け、栄光もなく、卑しく、十字架につけられるかたとして、宣べ伝えられています（イザヤ五三・二〜三、八、一二参照）。二度目の来臨では、このかたは、栄光のうちに天から来られます（ダニエル七・一三〜一四、イザヤ三三・一七参照）。そのときには、背教の人も、地上で、わたしたちキリスト者に対して、あえて不法を行います（第二テサロニケ二・三〜四参照）。この者は、いと高き者に向かって法外なことを語る者です（ダニエル一一・三六、七・二五参照）。わたしたちは、律法と、エルサレムから出た言葉によって、イエスの使徒たちを通して、神を敬うことを深く知りました。そして、ヤコブの神、イスラエルの神のもとに逃れて来たのです」 110:3「また、わたしたちは、かつては戦いと、殺し合いと、あらゆる悪とに満ちていました。しかし、地の至るところで、おのおの戦いの道具を変えました。つるぎをすきに、やりを農具に変えたのです（ミカ四・三参照）。そして、わたしたちは、敬虔、義、人を愛すること、信仰、希望を耕しています。その希望は、十字架につけられたかたを通して、父ご自身から来るものです。わたしたちは、おのおの自分のぶどうの木の下に座しています（ミカ四・四参照）。すなわち、おのおの自分の妻とだけ交わっているのです。実際、預言の言葉が『彼の妻は、実り豊かなぶどうの木のようである』と言っていることを、あなたがたは知っています（詩篇一二八・三）」 110:4「また、地の至るところでイエスを信じているわたしたちを、恐れさせ、奴隷にする者がいないことは、明らかです（ミカ四・四参照）。実際、次のことは明らかです。わたしたちは、首をはねられ、十字架につけられ、獣に投げ与えられています。鎖や火や、ほかのあらゆる責め苦にもあっています。それでも、信仰の告白から離れません。そうではなく、このようなことが起これば起こるほど、ますます多くのほかの人々が、次々に信者となり、神を敬う者となります。イエスの名によってです。だれかがぶどうの木の、実を結んだ部分を切り取ると、ぶどうの木は、ほかの枝を生え出させます。よく茂り、実を結ぶ枝です。それと同じことが、わたしたちにも起こっています。実際、神と救い主キリストによって植えられたぶどうの木とは、このかたの民なのです（ヨハネ一五・一〜二参照）」 110:5「一方、預言の残りの部分は、このかたの二度目の来臨のときに起こります。実際、『苦しめられた者と、追いやられた者』（ミカ四・六）とは、世界から追いやられた者のことです。あなたがたと、ほかのすべての人々の力の及ぶかぎり、そうされているのです。キリスト者はおのおの、自分の財産から追い出されているだけでなく、全世界からも追い出されているのです。あなたがたも、ほかの人々も、どのキリスト者にも、生きることを許さないのです」 110:6「ところが、あなたがたは、このことは自分たちの民に起こったのだ、と言います。しかし、もしあなたがたが、戦いに敗れて追い出されたのなら、あなたがたがこのような目にあったのは、正当なことです。すべての聖書が証ししているとおりです。一方、わたしたちは、神の真理を深く知ってからは、そのようなことを何一つ行っていません。それなのに、わたしたちは地から取り去られます。最も正しく、ただひとり汚れも罪もないキリストとともにで

す。そのことを、神は証ししておられます。実際、イザヤは叫んでいます。『見よ、正しい者が滅びたのに、心にとめる人はない。正しい人々が取り去られても、悟る者はない』（イザヤ五七・一）」

111:1 「また、このキリストの来臨が二度起こることは、モーセによっても、しるしによって前もって告げられていました。そのことは、断食の日にささげられる山羊のしるしによって、先に述べました（レビ一六章参照）。さらに、モーセとイエス[1]が行ったことのうちにも、同じことが、しるしによって前もって宣べ伝えられ、語られていました。実際、ふたりのうちの一方は、丘の上で手を伸べて、夕方までとどまっていました。その手は下から支えられていました。このことは、ほかの何でもなく、十字架の型を示しています。もう一方の、イエスの名で呼ばれるようになった者は、戦いを率い、イスラエルは勝ちました（出エジプト一七・九～一二参照）」 111:2 「また、あの聖なる人たちであり、神の預言者であったふたりについて、次のことが起こったことも、理解することができました。それは、ふたりのうちのひとりでは、二つの奥義を両方とも担うことができなかった、ということです。二つの奥義とは、十字架の型と、その名を名づけられることの型のことです。実際、この力は、ただひとりのかただけのものであり、これまでもそうであり、これからもそうなのです。そのかたの名をさえ、あらゆる支配は恐れています。そのかたによって自分たちが滅ぼされることになっていると、苦しみもだえているのです。すると、苦しみを受け、十字架につけられた、わたしたちのキリストは、律法によってのろわれたのではありません。そうではなく、このかただけが、このかたへの信仰から離れない者たちをお救いになることを、明らかにしておられたのです」 111:3 「また、エジプトの人々の長子が滅ぼされたとき、エジプトで救われた者たちを助け出したのは、過越の血でした。入口の二つの柱と、かもいに塗られた血です（出エジプト一二・七、二二～二三参照）。実際、過越とはキリストのことでした。後にほふられたかたです（第一コリント五・七参照）。イザヤも言ったとおりです。『彼は、羊のように、ほふり場に引かれて行った』（イザヤ五三・七）。また、あなたがたが過越の日にこのかたを捕らえ、同じように過越のときに十字架につけたことも、書かれています（マタイ二六・二、ヨハネ一九・一四参照）。そして、過越の血がエジプトにいた者たちを救ったように、キリストの血も、信じた者たちを死から助け出すのです」 111:4 「では、もしこのしるしが戸口になかったなら、神は思い違いをされることになっていたのでしょうか（出エジプト一二・一三参照）。わたしはそうは言いません。そうではなく、救いが前もって宣べ伝えられていた、と言うのです。キリストの血によって人類にもたらされることになっていた救いです。実際、赤い糸のひものしるしも、そうでした。ヌンの子ヨシュアから遣わされた斥候たちは、エリコで、それを遊女ラハブに与えました。そして、ラハブが彼らを敵に気づかれないようにつりおろした窓に、それを結びつけるよう言いました（ヨシュア二・一、一五、一八参照）。このひものしるしも、同じように、キリストの血のしるしを明らかにしていました。その血によって、あらゆる国々の、かつて不品行であり、不義であった者たちが、救われています。罪のゆるしを受け、もはや罪を犯さなくなったのです」

112:1 「一方、あなたがたは、これらのことを卑俗に解き明かして、神に大きな弱さがあると決めつけています。もしあなたがたが、これらのことを、ただ字句のとおりに聞き、言われたことの力を調べないなら、そうなるのです。そうであれば、モーセも、律法を破る者と判断されることになるでしょう。実際、モーセ自身が命じました。天にあるものも、地や海にあるものも、どんなものの似姿も造ってはならない、と（出エジプト二〇・四参照）。それなのに、その後、自分で青銅の蛇を造りました。そして、それを、あるしるしの上に立てて、かまれた者たちに、それを見るよう命じました。すると、かまれた者たちは、それを仰ぎ見て、救われたのです（民数記二一・八～九参照）」 112:2 「それなら、そのとき蛇が民を救った、と理解されることになるのでしょうか。先に言ったように、神が初めにのろわれ（創世記三・一四参照）、イザヤが叫んでいるとおり、大きなつるぎで滅ぼそうとしておられる蛇がです（イザヤ二七・一参照）。そして、わたしたちは、このようなことを、しるしとしてではなく、愚かにもそのまま受け入れるのでしょうか。あなたがたの教師たちが言うようにです。そうではなく、わたしたちは、そのしるしを、十字架につけられたイエスの像に当てはめるのではありませんか。モーセも、手を伸べることによって、イエスと名づけられた者とともに、あなたがたの民を勝たせたのですから」 112:3 「実際、そうすれば、わ

たしたちは、律法を与えた者が行ったことについて、当惑することもなくなるでしょう。実際、彼は、神を捨てたうえで、獣に望みを置くよう民を説き伏せたのではありません。その獣によって、背きと不従順が始まったのです。そして、これらのことは、祝福された預言者を通して、深い意味と奥義をもって行われ、語られました。そして、分け隔てなくすべての預言者たちが語ったことにも、行ったことにも、正当に責められるものは何一つありません。もしあなたがたが、その中にある知識を持っているならです」112:4「しかし、あなたがたの教師たちがみな、次のようなことだけを、あなたがたに解き明かすとします。なぜこの箇所では雌のらくだのことが言われていないのか（創世記三二・一五参照）。雌のらくだと言われているのは何なのか。なぜ供え物に、小麦粉がこれこれの量、油がこれこれの量なのか。しかも、それを卑俗に、地をはうように解き明かすとします。そして、大事なこと、探究に値することは、決してあえて語ろうとも、解き明かそうともしないとします。あるいは、わたしたちが解き明かすときにも、まったく耳を貸さず、話し合うことさえしないよう、あなたがたに命じるとします。そうであれば、彼らは、わたしたちの主イエス・キリストが彼らに言われた言葉を、聞いて当然ではないでしょうか。『白く塗った墓。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨でいっぱいである。はっかの十分の一を納めておりながら、らくだはのみこんでいる。盲目な案内者たちよ』（マタイ二三・二七、二三〜二四参照）」112:5「ですから、もしあなたがたが、自分を高くし、『先生、先生』と呼ばれたがる者たちの教えを、軽んじないとします（マタイ二三・六〜七参照）。あるいは、預言の言葉に、次のような覚悟と分別をもって近づかないとします。預言者たち自身が受けたのと同じ苦しみを、あなたがたの同胞から受けることになるほどの覚悟と分別です。そうであれば、あなたがたは、預言の言葉から、益になるものを何一つ受けることは、まったくできません」

訳注

1 ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。

113〜115章　ヨシュアの名と第二の割礼、大祭司ヨシュアの幻

113:1「わたしの言うことは、こういうことです。わたしがたびたび述べたように、イエス[1]は、以前はアウセと呼ばれていました。カレブとともに、斥候としてカナンの地に遣わされた、あの人です。その人を、モーセはイエスと呼びました（民数記一三・一六参照）。あなたは、モーセがどんな理由でそうしたのかを探りません。当惑もせず、詳しく尋ねようともしません。ですから、キリストはあなたに知られずにおられるのです。あなたは、読んでいながら悟りません。今も、イエスがわたしたちのキリストであると聞いていながら、推し量ろうとしません。あの人にその名がつけられたのは、無駄なことでも、たまたまでもなかった、ということをです」113:2「しかし、なぜアブラハムの最初の名に、アルファ一字が加えられたのかについては、あなたは神学を論じます。また、なぜサラの名にロー一字が加えられたのかについても、同じように大げさに論じます（創世記一七・五、一五参照）。それなのに、ヌンの子アウセの、父から受けた名は、まるごとイエスという名に改められました。その理由は、同じように探ろうとしないのです」113:3「また、この人は、名を改められただけでなく、モーセの後継者ともなったのですから。しかも、エジプトから出て来た、その年ごろの者たちのうちで、ただひとり、残された民を聖なる地に導き入れたのですから（ヨシュア五・六参照）。そして、モーセではなく、この人が民を聖なる地に導き入れました。また、この人は、くじによってその地を、ともに入った者たちに分け与えました。それと同じように、イエス・キリストも、散らされた民を連れ戻し、良い地をおのおのに分け与えられます。しかし、もはや同じ仕方ではありません」113:4「実際、あの人が彼らに与えた嗣業は、一時のものでした。あの人は、キリスト、すなわちあの神ではなく、神の子でもなかったからです。一方、このかたは、聖なる復活の後に、わたしたちに永遠の所有をお与えになります。あの人は、先に名をイエスと改められ、このかたの霊から力を受けて、太陽を止めました（ヨシュア一〇・一二〜一三参照）。実際、モーセにも、アブラハムにも、要するにほかの族長たちにも現れられて、語られたかたがいます。そのかたがイエスであられたことを、わたしは示しました。このかたは、父の御心に仕えておられたのです。このかたは、おとめマリアによって人としてお生まれになるために来られました。そして、いつもおられるのです」113:5「実際、このかたこそ、父がこのかたから、またこのかたを通して、天と地を新しくしようとしておられる、そのかたです。このかたこそ、エルサレムで永遠の光として輝こうとしておられるかたです（イザヤ六〇・一、一九〜二〇参照）。このかたこそ、メルキゼデクの位にしたがって、サレムの王であり、いと高き者の永遠の祭司であられるかたです（創世記一四・一八、詩篇一一〇・四参照）」113:6「あの人は、石の小刀で、民に第二の割礼を施したと言われています（ヨシュア五・二〜三参照）。それは、この割礼を前もって告げるものでした。イエス・キリストご自身が、石や、そのほかの偶像から、わたしたちを切り離して施された割礼です。また、このかたは、至るところで包皮から割礼を受けた者たちを、束を積むように集められました。包皮とは、世の迷いのことです。この者たちは、石の小刀、すなわち、わたしたちの主イエスの言葉によって、割礼を受けたのです。実際、預言者たちが、たとえのうちに、キリストを石とも岩とも宣べ伝えていたことは、わたしが示してきました」113:7「すると、石の小刀も、このかたの言葉のことと受け取ります。その言葉によって、迷っていた、これほど多くの者たちが、包皮から心の割礼を受けたのです。神は、アブラハムから始まった割礼を持つ者たちにも、この割礼を受けるよう、そのときから、イエスを通して勧めておられました。イエスが、あの聖なる地に入った者たちに、石の小刀で第二の割礼を施した、と言われることによってです」

114:1「実際、聖霊は、あるときは、来たるべきことの型となる何かを、はっきりと行わせました。また、あるときは、起ころうとしていることについて言葉を発しました。しかも、それを、そのとき起こっていることのように、あるいはす

でに起こったことのようにさえ語りました。読む者がこの技を知らなければ、預言者たちの言葉に、しかるべく従っていくこともできないでしょう。例として、いくつかの預言の言葉を挙げましょう。あなたがたが、わたしの言うことに従っていけるためです」[114:2]「聖霊がイザヤを通して、『彼は、羊のように、ほふり場に引かれて行った。また、毛を刈った者の前の小羊のように』（イザヤ五三・七）と言うとき、すでに受難が起こったかのように語っています。また、さらに次のように言うときも、そうです。『わたしは、従わず、言い逆らう民に、手を伸べた』（イザヤ六五・二）。また、『主よ、だれがわれわれの聞いたことを信じたか』（イザヤ五三・一）と言うときもです。これらの言葉は、すでに起こった出来事を告げ知らせるものとして語られています。実際、聖霊が、たとえのうちに、多くの箇所でキリストを石と呼んでいることを、わたしは示しました。また、比喩のうちに、ヤコブ、イスラエルと呼んでいることも示しました」[114:3]「さらに、聖霊は『わたしは、あなたの指のわざなる天を見る』（詩篇八・三）と言います。そのときにも、わたしがそれを神のロゴスの働きと受け取らなければ、悟りのない受け取り方をすることになります。あなたがたの教師たちが考えるようにです。彼らは、万物の父であり、生まれることのない神について、こう思っています。組み立てられた生き物のように、手と足と指と魂を持っておられる、と。そして、それゆえに、父ご自身がアブラハムとヤコブに現れられたのだと教えています」[114:4]「すると、石の小刀で第二の割礼を受けたわたしたちは、幸いです。実際、あなたがたの第一の割礼は、鉄によってなされ、今もなされています。実際、あなたがたは、心がかたくなままなのです。一方、わたしたちの割礼は、数において第二のもので、あなたがたの割礼の後に現れました。それは、切り立った石によって、わたしたちに割礼を施します。切り立った石とは、使徒たちを通して語られた言葉のことです。隅のかしら石であられ（イザヤ二八・一六、エペソ二・二〇、第一ペテロ二・六参照）、手によらずに切り出された石であられるかたの言葉です（ダニエル二・三四参照）。この割礼は、偶像礼拝からも、あらゆる悪からも、ひとつ残らず、わたしたちを切り離します。わたしたちの心は、悪から、このように割礼を受けています。そのため、良い岩の名のために死ぬことさえ喜ぶのです。この岩は、このかたを通して万物の父を愛した者たちの心に、生ける水をあふれさせてくださいます。そして、いのちの水を飲みたいと望む者たちに、飲ませてくださるのです（ヨハネ四・一四参照）」[114:5]「しかし、わたしがこのことを語っても、あなたがたは理解しません。実際、キリストがなさると預言されていることを、あなたがたは理解していません。また、書かれていることへとあなたがたを導くわたしたちを、信じてもいません。実際、エレミヤは、こう叫んでいます。『あなたがたはわざわいである。生ける泉を捨てて、自分のために、こわれた水ためを掘ったからである。それは水を入れておくことができない』（エレミヤ二・一三参照）。『まさか、シオンの山のある所が、荒れ果てるのだろうか』（イザヤ一六・一参照）。『わたしは、あなたがたの前で、エルサレムに離縁状を与えたからである』（エレミヤ三・八参照）」

[115:1]「しかし、あなたがたはゼカリヤを信じるべきです。ゼカリヤは、たとえのうちにキリストの奥義を示し、隠された仕方で宣べ伝えています。その言葉は、次のとおりです。『シオンの娘よ、喜び楽しめ。見よ、わたしが来て、あなたの中に住むからである、と主は言われる。その日には、多くの国民が主に加えられて、わたしの民となる。わたしはあなたの中に住む。そして彼らは、万軍の主が、わたしをあなたにつかわされたことを知る」[115:2]「主は聖なる地で、ユダとその分とを受け継ぎ、なおもエルサレムを選ばれる。すべて肉なる者よ、主の前に慎め。主はその聖なる雲から立ちあがられたからである。そして、大祭司イエス[2]が、主のみ使いの前に立っているのを、わたしに示された。悪魔がその右に立って、これに逆らっていた。主は悪魔に言われた、「エルサレムを選んだ主が、あなたを責めるように。見よ、これは火の中から取り出した燃えさしではないか」』（ゼカリヤ二・一〇～三・二）」[115:3]トリュフォンが答えて、わたしに反論しようとしたときに、わたしは言った。「まず待って、わたしの言うことを聞いてください。実際、わたしは、あなたの思っているような解き明かしをしようとしているのではありません。あなたがたの民が捕らわれていたバビロンの地に、イエスという名の祭司はいなかった、というような解き明かしではありません。たとえわたしがそうしていたとしても、次のことを示したでしょう。イエスという祭司は、たしかにあなたがたの民族の中にいました。しかし、預言者は、

自分の啓示の中で、その人自身を見たのではありませんでした。同じように、預言者は、悪魔も主のみ使いも、平常の状態で自分の目で見たのではありません。そうではなく、啓示が与えられたときに、忘我のうちに見たのです」115:4「しかし今、わたしは次のことを言います。ヌンの子によって、イエスという名を通して、力ある業と、いくつかの行いがなされた、と言われました。それは、わたしたちの主によって起こることになっていたことを、前もって告げる行いでした。それと同じように、あなたがたの民の中にいた、バビロンの祭司イエスについての啓示も、前もって告げるものなのです。わたしたちの祭司であり、神であり、キリストであられる、万物の父の子によって、起こることになっていたことをです。そのことを、わたしは今から示そうとしています」115:5「とはいえ、わたしはもう、いぶかっていたのです。なぜ、少し前にも、わたしが話しているのに、あなたがたは黙っていたのでしょうか。また、どうして、わたしの言葉尻をとらえなかったのでしょうか。わたしは、ヌンの子が、エジプトから出て来た同年代の者たちのうちで、ただひとり聖なる地に入った、と言いました。その世代の、年の満たない者として書かれている者たちとともにです。実際、あなたがたは、はえが傷に群がるように、駆け寄って飛びつくのです」とわたしは言った。115:6「実際、だれかが、一万のことを立派に語ったとします。そうだとしても、ほんの小さな一つのことが、あなたがたの気に入らないとします。あるいは、理解されないか、厳密でないとします。すると、あなたがたは、多くの立派なことには心を留めません。そして、その小さな言葉尻をとらえ、それを不敬虔なこと、不義なことに仕立て上げようと努めます。それで、あなたがたは、それとまったく同じ裁きで、神に裁かれることになります。そして、大それたことについて、はるかに重く申し開きをすることになるのです。悪い行いであれ、あなたがたが曲げて行う、つまらない解き明かしであれ、そうです。実際、あなたがたが裁くその裁きで、あなたがた自身も裁かれるのが、正しいことです（マタイ七・二参照）」

訳注

1 ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。
2 大祭司ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。

116〜118章　汚れた衣を脱いだ大祭司の種族、マラキのいけにえ

116:1「しかし、聖なるイエス・キリストの啓示についての説明を、あなたがたに果たすために、わたしは話を元に戻して、こう言います。あの啓示もまた、大祭司であられる、この十字架につけられたキリストを信じるわたしたちについて、与えられたのです。わたしたちは、不品行のうちに、またひとつ残らず、あらゆる汚れた行いのうちにいた者です。わたしたちのイエスは、このかたの父の御心に従って、恵みを与えてくださいます。その恵みによって、わたしたちは、身にまとっていた汚れた悪を、すべて脱ぎ捨てたのです（ゼカリヤ三・三〜四参照）。そのわたしたちのそばに、悪魔はいつも立って、逆らっています（第二テサロニケ二・三〜四参照）。そして、すべての者を自分のほうへ引き寄せようとしています。しかし、神のみ使い、すなわち、イエス・キリストを通してわたしたちに遣わされた神の力が、悪魔を責めます。そして、悪魔はわたしたちから離れ去るのです」116:2「また、わたしたちは、火の中から取り出されたもののようです（ゼカリヤ三・二参照）。以前の罪からは清められています。また、患難と火の試練からも、取り出されています。悪魔とその手下たちはみな、その火でわたしたちを焼いて試みます。神の子イエスは、それらからも、繰り返し、わたしたちを引き出してくださいます。このかたは、わたしたちがその戒めを行うなら、備えられた衣をわたしたちに着せてくださると、約束されました。また、永遠の国を用意してくださると、約束しておられます（ゼカリヤ三・四〜七参照）」116:3「実際、預言者に祭司と言われているあのイエスは、汚れた衣を着て現れました（ゼカリヤ三・三参照）。遊女を妻にめとったと言われていたからです（エズラ一〇・一八参照）。また、火の中から取り出した燃えさしと呼ばれました。罪のゆるしを受けたからです（ゼカリヤ三・四参照）。そのとき、これに逆らっていた悪魔も、責められました。それと同じように、わたしたちは、イエスの名を通して、ひとりの人のように、万物の造り主である神を信じました（ガラテヤ三・二八参照）。そして、神の長子であられる御子の名を通して、汚れた衣、すなわち罪を脱がされました。また、その召しの言葉によって、火で練り清められました。そのわたしたちこそ、神の真の大祭司の種族なのです。神ご自身も、そう証ししておられます。国々のうちで、どこでも、神に喜ばれる清いいけにえをささげる者たち、と言われることによってです（マラキ一・一一参照）。そして、神は、ご自分の祭司たちを通してでなければ、だれからも、いけにえをお受けになりません」

117:1「すると、この名を通してささげられるいけにえを、神は、すべて、ご自分に喜ばれるものであると、前もって証ししておられます。イエス・キリストが、行うようにとお伝えになったいけにえです。すなわち、パンと杯の聖餐においてささげるいけにえで、地のどこででも、キリスト者たちによってささげられています。一方、あなたがたにより、また、あなたがたのあの祭司たちを通してささげられるいけにえは、退けておられます。こう言われるのです。『わたしは、あなたがたの手から、あなたがたのいけにえを受けない。日の出る所から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられているからであると言われる。ところが、あなたがたはそれを汚している』（マラキ一・一〇〜一二）」117:2「それなのに、あなたがたは今に至るまで、言い争って、次のように言います。神は、エルサレムで、そのころそこに住んでいた、イスラエル人と呼ばれる者たちのもとでのいけにえは、お受けにならない。一方、そのころ離散の地にいた、あの民族の人々による祈りは、お受け入れになると言われた。そして、その人々の祈りを、いけにえと呼んでおられる、と。たしかに、祈りと感謝は、ふさわしい者たちによってささげられるとき、それだけが、神に喜ばれる完全ないけにえです。このことは、わたし自身も言います」117:3「実際、キリスト者たちも、これだけを行うようにと受け継いだのです。そして、乾いたものと湿ったものからなる、自分たちの食物の記念のときにも、これを行います。その記念において、神の子が自分たちのためにお受けになった苦しみも、思い起こしているのです。あなた

がたの民の大祭司たちと教師たちは、このかたの名が、全地で汚され、冒瀆されるようにしむけました。これらもまた、汚れた衣です（ゼカリヤ三・三参照）。あなたがたは、それを、イエスの名によってキリスト者となったすべての者に着せたのです。神は、その衣がわたしたちから取り去られるのを、お示しになります。それは、神がすべての者をよみがえらせなさるときです。また、ある者たちを、朽ちず、死なず、悲しみのない者として、永遠の、終わることのない国に置かれるときです。また、ほかの者たちを、火による永遠の罰にお送りになるときです」117:4「しかし、あなたがたも、あなたがたの教師たちも、自分を惑わしています。言葉は、離散の地にいる、あなたがたの民族の者たちについて語っていたと、解き明かすからです。その人々の祈りといけにえが、どこででも清く、神に喜ばれるものとしてささげられていたと言っていたのだ、とするのです。あなたがたが偽りを言い、何ごとにつけても自分を欺いてみようとしていることを、深く知りなさい。まず、今でさえ、あなたがたの民族は、日の出る所から没する所までいるわけではないからです。そうではなく、あなたがたの民族のだれひとり、まだ住んだことのない国々があるのです（マラキ一・一一参照）」117:5「実際、人間の民族のうちで、次のようなものは、まったく、ただの一つもありません。未開の人々であれ、ギリシヤ人であれ、要するに、どんな名で呼ばれる者たちであれ、そうです。また、車で暮らす者、家のない者と呼ばれる者たちであれ、天幕に住んで家畜を飼う者たちであれ、そうです。その中で、十字架につけられたイエスの名を通して、祈りと感謝がささげられていない民族です。万物の父であり造り主であるかたへの祈りと感謝です。次に、預言者マラキがこれを語っていたあのころには、あなたがたの離散は、まだ全地には及んでいなかったからです。今あなたがたが広がっているほどの全地にはです。そのことは、聖書からも示されます」

118:1「そのため、むしろ争いを好むのをやめて、悔い改めなさい。大いなる裁きの日が来る前にです（マラキ四・五参照）。その日には、あなたがたの部族から出て、このキリストを刺し通した者たちが、みな嘆くことになります（ゼカリヤ一二・一〇～一二、ヨハネ一九・三七、黙示録一・七参照）。そう前もって言われていたことを、わたしは聖書から示しました。また、主がメルキゼデクの位にしたがって誓われたことを、わたしは解き明かしました（詩篇一一〇・四参照）。その前もって言われた言葉が何を意味するかもです。また、わたしは先に述べました。イザヤの預言は、葬りを受け、よみがえられることになっていたキリストについてのものでした。イザヤは『その墓は、ただ中から取り去られた』（イザヤ五七・二）と言ったのです。また、このキリストご自身が、生きている者と死んだ者すべての審判者であられることを、わたしは多くの箇所で言いました（使徒一〇・四二、第二テモテ四・一、第一ペテロ四・五参照）」118:2「また、ナタンも、同じようにこのかたについてダビデに語り、こう言い添えました。『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。わたしは、わたしのあわれみを、彼のさきにあった者たちから取り去ったように、彼からは取り去らない。わたしは彼を、わたしの家に、また彼の王国に、とこしえに立てる』（歴代志上一七・一三～一四、サムエル記下七・一四～一六参照）。また、エゼキエルが言う家の中の君も、ほかならぬこのかたご自身です（エゼキエル四四・三参照）。実際、このかたこそ、選び抜かれた祭司であり、永遠の王であられる、キリストです。神の子であられるからです。このかたが再び来られるときに、血や注ぎの供え物によるいけにえが祭壇にささげられる。イザヤやほかの預言者たちがそう言っている、と思ってはなりません。そうではなく、まことの、霊的な賛美と感謝がささげられる、と言っているのです」118:3「また、わたしたちがこのかたを信じたのは、むなしいことではありません。このように教えた人々に惑わされたのでもありません。そうではなく、これは、神の驚くべき摂理によって起こったのです。それは、わたしたちが、あなたがたよりも聡明で、神を敬う者と認められるためです。新しい永遠の契約の召しによってです（エレミヤ三一・三一、イザヤ五五・三、ヘブル一三・二〇参照）。その契約とは、キリストのことです。あなたがたは、神を愛し、聡明であると思われていますが、実際にはそうではないのです」118:4「このことに驚いて、イザヤは言いました。『そして王たちは口をつむぐ。彼について告げ知らされなかった者たちが見、聞かなかった者たちが悟るからである。主よ、だれがわれわれの聞いたことを信じたか。主の腕は、だれにあらわれたか』（イザヤ五二・一五～五三・一）。トリュフォンよ、こう語りながら、わたしは、できるかぎり同じことを言ってみているのです。今日

あなたといっしょに来た人々のためです。ただし、短く、切り詰めてです」とわたしは言った。118:5 すると彼は言った。「それは結構なことです。もっと多くの言葉で、同じことを繰り返して言うとします。そうだとしても、わたしも、いっしょにいる者たちも、喜んで聞いていると知ってください」

119〜120章　アブラハムに約束された国民、ユダの祝福

119:1 わたしはまた言った。「皆さん、あなたがたは、わたしたちが聖書の中のこれらのことを、いつか理解できただろうと思いますか。それを望まれたかたの御心によって、理解する恵みを受けたのでなければです。それは、モーセによって言われた次のことも、起こるためでした」 119:2 「『彼らは、ほかの神々によってわたしを怒らせ、その忌むべきものによってわたしを激しく怒らせた。彼らは、自分の知らない悪霊にいけにえをささげた。それは新しく、近ごろ来た者たちで、彼らの先祖の知らなかった者たちである。あなたは、あなたを生んだ神を捨て、あなたを養う神を忘れた。主は見て、ねたみ、そのむすこ、娘たちの怒りのために、激しく怒られた。そして言われた、「わたしは彼らから顔をそむけ、終りに彼らに何が起こるかを示そう。彼らはねじけた世代、彼らのうちに信仰のない子らだからである。彼らは、神でないものによってわたしにねたみを起させ、その偶像によってわたしを怒らせた。わたしも、民でないものによって彼らにねたみを起させ、悟りのない民によって彼らを怒らせる。わたしの怒りから火が燃えさかり、陰府まで燃えるからである。それは地とその産物とを食い尽くし、山々の基を焼く。わたしは彼らの上に災を集める」』（申命記三二・一六〜二三）」 119:3 「そして、あなたがたがあの義人を殺した後に（イザヤ三・一〇、五七・一参照）、わたしたちは、別の民として新たに芽生えました。新しい、よく育つ穂として、芽を出したのです。預言者たちが言ったとおりです。『その日には、多くの国民が主のもとに逃れて来て、民となり、全地の真ん中に住む』（ゼカリヤ二・一一）。また、わたしたちは、ただ民であるだけでなく、聖なる民でもあります。すでに示したとおりです。『人々はこれを、聖なる民、主にあがなわれた者と呼ぶ』（イザヤ六二・一二）」 119:4 「すると、わたしたちは、侮られてよい民衆でも、未開の種族でもありません。カリア人やフルギヤ人のような国民でもありません。そうではなく、神は、わたしたちをも選ばれました（申命記一四・二参照）。そして、ご自分を尋ねない者たちに、現れてくださいました（イザヤ六五・一参照）。『見よ、わたしは、わたしの名を呼ばなかった国民の神である』と言われるのです（イザヤ六五・一）。実際、これこそ、神が昔アブラハムに約束された、あの国民です。また、神は、アブラハムを多くの国民の父とすると、約束されました（創世記一二・二、一七・五参照）。アラビヤ人のことでも、エジプト人のことでも、エドム人のことでもなく、そう言われたのです。イシマエルも、大いなる国民の父となり、エサウもそうなったからです。また、アンモン人も、今、大勢いるからです。また、ノアは、アブラハム自身にとっても父であり、分け隔てなく、人間のすべての民族の父でした。そして、ほかの者たちが、ほかの者たちの先祖となったのです」 119:5 「では、キリストは、ここでアブラハムに、何をそれ以上お与えになるのでしょうか。それは、同じような召しによって、声をもって、アブラハムを呼ばれたことです。住んでいた地から出て行くように、と言われたのです（創世記一二・一参照）。そして、わたしたちすべてをも、あの声によって呼ばれました。そして、わたしたちは、すでに以前の生活から出て来ました。その生活の中で、わたしたちは、地に住むほかの人々と同じように、悪い生き方をしていたのです。そして、わたしたちは、アブラハムとともに、聖なる地を受け継ぎます。果てしない世々にわたって、その嗣業を受けるのです。同じような信仰のゆえに、アブラハムの子であるからです（ガラテヤ三・七参照）」 119:6 「実際、アブラハムは、神の声を信じました。そして、それが彼の義と認められました（創世記一五・六参照）。それと同じように、わたしたちも、神の声を信じて、世にあるすべてのものに、死に至るまで別れを告げたのです。その声は、キリストの使徒たちを通して再び語られ、また預言者たちを通して、わたしたちに宣べ伝えられたものです。すると、同じような信仰をもち、神を敬う、正しい国民を、アブラハムに約束しておられるのです。父を喜ばせる国民です（箴言一〇・一参照）。あなたがたではありません。あなたがたは、うちに信仰のない者たちです（申命記三二・二〇参照）」

120:1「しかも、見てください。イサクにも、ヤコブにも、同じことを約束しておられます。実際、イサクには、こう言われます。『そして地のすべての国民は、あなたの子孫によって祝福をえるであろう』（創世記二六・四）。また、ヤコブには、こう言われます。『地の諸族は、あなたと、あなたの子孫とによって祝福をうけるであろう』（創世記二八・一四）。このことを、エサウにも、ルベンにも、ほかのだれにも、もう言われません。そうではなく、キリストがその人々から出られることになっていた、あの人々にだけ言われるのです。おとめマリヤによるはからいに従ってです」120:2「また、もし、あなたがユダの祝福もよく調べるなら、わたしの言うことが分かるでしょう（創世記四九・一〇参照）。実際、子孫はヤコブから分かれて、ユダ、ペレヅ、エッサイ、ダビデを通って下って来ます。そして、これらは、次のことのしるしでした。あなたがたの民族のうち、ある者たちは、アブラハムの子と認められます。そして、キリストの分のうちに見いだされます。一方、ほかの者たちは、アブラハムの子ではあっても、海辺の砂のようです（創世記二二・一七参照）。その砂は、何も生まず、実を結びません。多くて数えきれませんが、まったく何の実も結ばず、ただ海の水を飲むだけです。あなたがたの民族の中の大勢の者たちも、まさにそのようであると証明されています。苦さと無神論の教えをいっしょに飲み込み、神の言葉を吐き出しているからです」120:3「たとえば、ユダについての箇所でも、こうあります。『ユダから治める者は絶えず、その腿から君も絶えない。それが備えられているかたが来るまで[1]。彼はもろもろの民の待ち望む者となる』（創世記四九・一〇）。そして、この言葉が、ユダについてではなく、キリストについて言われたことは、明らかです。実際、あらゆる国から出たわたしたちはみな、ユダを待ち望んでいるのではありません。そうではなく、イエスを待ち望んでいるのです。あなたがたの先祖をエジプトから導き出されたかたでもあります。実際、預言は、キリストの来臨までのことを、前もって宣べ伝えていました。『それが備えられているかたが来るまで。彼はもろもろの民の待ち望む者となる』（創世記四九・一〇）と言っているのです」120:4「ですから、多くの箇所で示したとおり、イエスはすでに来られました。そして、わたしたちは、このかたが再び雲の上に来られるのを待ち望んでいます（ダニエル七・一三参照）。あなたがたは、このかたの名を汚し（マラキ一・一二参照）、全地で汚されるようにしむけています。皆さん、わたしは、その言葉について、あなたがたと争うこともできました。あなたがたは、そこで『彼のために備えられているものが来るまで』と言われている、と解き明かします。しかし、七十人は、そのようには訳さず、『それが備えられているかたが来るまで』（創世記四九・一〇）と訳したからです」とわたしは言った。120:5「しかし、わたしは、その一語について、あなたがたと論じ合うつもりはありません。続く言葉が、これはキリストについて言われたのだと示しているからです。実際、続く言葉は、『彼はもろもろの民の待ち望む者となる』（創世記四九・一〇）となっています。それは、わたしが、あなたがたの認めていない聖句から、キリストについての論証をしようと努めなかったのと同じです。その聖句とは、預言者エレミヤ、エズラ、ダビデの言葉で、わたしが詳しく述べたものです。そうではなく、わたしは、今に至るまであなたがたの認めている聖句から、論証しようと努めました。よく知っておいてください。もし、あなたがたの教師たちが、それらの聖句を理解していたなら、それらを消してしまっていたでしょう。イザヤの死についての記事を消したようにです。あなたがたは、イザヤを木ののこぎりで切ったのです。これもまた、キリストの奥義でした。キリストは、あなたがたの民族を二つに切り分けることになっておられます。そして、ふさわしい者たちを、聖なる族長たちや預言者たちとともに、永遠の国にふさわしい者とされることになっておられます。また、ほかの者たちを、消えない火の裁きにお送りになると、すでにお告げになりました。すべての国から出た、従わず、悔い改めない、同じような者たちとともにです」120:6「実際、キリストは言われました。『人々が西から東からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく。しかし、この国の子らは外のやみに追い出される』（マタイ八・一一～一二）。わたしは、これらのことを語るでしょう。真実を語ること以外には、何ひとつ気にかけないからです。今すぐ、あなたがたに八つ裂きにされなければならないとします。そうだとしても、わたしは、だれをもはばかるつもりはありません。実際、わたしは、自分の民族、つまりサマリヤ人のだれのことも気にかけずに、カイザルに書面で語りかけて、こう言いました。彼らは、自分たちの民族の中の魔術師シモンに従って、惑わされている、と。彼らは、シ

モンを、すべての支配、権威、権力の上にいる神だと言っているのです（エペソ一・二一参照）」とわたしは言った。

訳注

1 写本は52章と同じく『彼のために備えられているもの』と読む。

121〜123章　太陽にまさる名、改宗者と異邦人、まことのイスラエル

121:1 彼らが黙っていると、わたしは続けて言った。「友人たちよ、このキリストについては、ダビデを通して、もはや、その子孫によって国民が祝福されるとは言われませんでした。そうではなく、このかたによって祝福されると言われたのです。そこには、こうあります。『その名はとこしえに、太陽にまさって昇る。すべての国民は彼によって祝福を受ける』（詩篇七二・一七）。そして、もし、キリストによってすべての国民が祝福されるとします。また、わたしたちが、すべての国民の中から、このかたを信じているとします。そうであれば、このかたこそキリストであられ、わたしたちこそ、このかたによって祝福された者です」 121:2「神は、以前には、太陽を、拝むものとして与えておられました。書かれているとおりです（申命記四・一九参照）。しかし、太陽への信仰のゆえに死を忍んだ者は、いつの時にも、ひとりも見ることができません。一方、イエスの名のゆえには、そうした者たちを見ることができます。人間のあらゆる民族の中から、このかたを否まないために、どんなことでも苦しむのを忍んだ者も、今も忍んでいる者もいるのです。実際、このかたの真理と知恵の言葉は、太陽の力よりも燃えさかり、はるかに明るいのです。そして、心と思いの深みにまで入り込みます。ですから、言葉も、こう言いました。『太陽にまさって、その名は昇る』（詩篇七二・一七）。さらに、ゼカリヤは、『その名は東』と言っています（ゼカリヤ六・一二）。また、同じかたについて語って、『彼らは部族ごとに嘆く』と言いました（ゼカリヤ一二・一二参照）」 121:3「また、もし、このかたが、卑しく、姿もなく、さげすまれた最初の来臨のときに、それほどまでに輝かれ、力をふるわれたとします。そのため、このかたを知らない民族はないとします。また、あらゆる民族から、それぞれの民族の古い悪い生き方を悔い改める者が出たとします。そのため、悪霊たちさえ、このかたの名に従っているとします。また、あらゆる支配と王国も、このかたの名を、死んだすべての者にもまして恐れているとします。そうであれば、このかたは、栄光ある来臨のときには、必ず、このかたを憎んだすべての者を滅ぼされるのではないでしょうか。不義にもこのかたから離れ去った者たちもです。そして、ご自分の者たちを休ませなさり、彼らが待ち望んでいるものをすべて、お与えになるのではないでしょうか」 121:4「すると、わたしたちには、このキリストを通して、聞くことも、悟ることも、救われることも与えられました。また、父のことをすべて深く知ることも与えられたのです（ヨハネ一四・七参照）。それゆえ、このかたに向かって、こう言われていました。『あなたがわたしのしもべと呼ばれ、ヤコブの部族を立て、イスラエルの散らされた者たちを帰らせることは、あなたにとって大きなことである。わたしは、あなたを立てて、もろもろの国びとの光とした。あなたが地の果てまでも、彼らの救いとなるためである』（イザヤ四九・六）」

122:1「あなたがたは、これらの言葉が、寄留者と改宗者たちについて言われたと考えています。しかし、実は、イエスを通して照らされたわたしたちについて言われたのです。実際、そうであれば、キリストは、きっとあの人々にも証しをしておられるはずです。しかし、今は、キリストご自身が言われたとおり、あなたがたは、二倍もひどい地獄の子となっています（マタイ二三・一五参照）。すると、預言者たちを通して言われたことも、あの人々に向けて語られたのではありません。そうではなく、わたしたちに向けて語られたのです。言葉は、わたしたちについて、こう言っています。『わたしは盲人を、彼らの知らなかった道に導く。彼らは、知らなかった小道を歩む。わたしも、わたしが選んだわたしのしもべも、証人である、と主なる神は言われる』（イザヤ四二・一六、四三・一〇）」 122:2「では、キリストは、だれに証しをされるのでしょうか。明らかに、信じた者たちにです。一方、改宗者たちは、信じないばかりか、あなたがたの二倍も、このかたの名を冒瀆しています。そして、このかたを信じるわたしたちを、殺し、苦しめようと望んでいます。実際、彼らは、あらゆる点で、あなたがたに似ようと躍起になっているのです」 122:3「さらに、別の箇所で、こう叫ばれ

ています。『わたしは主、義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手を取り、あなたを強くする。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光とする。盲人の目を開き、足かせをはめられた者を縄目から導き出すためである』（イザヤ四二・六～七）。皆さん、これらの言葉もまた、キリストに向けて、照らされた異邦人について言われたのですから。それとも、あなたがたは、また『律法と改宗者たちに向けて、これらのことを言っている』と言うのでしょうか」122:4 すると、二日目に来た人々のうちの何人かが、芝居小屋でのように叫んだ。「何だって。律法と、律法によって照らされる者たちに向けて言っているんじゃないのか。それが改宗者たちなんだ」122:5 わたしはトリュフォンのほうを見て言った。「いいえ。というのも、もし律法に、異邦人と、律法を持つ者たちとを照らす力があったのなら、新しい契約に何の必要があるでしょうか。しかし、神は、新しい契約と、永遠の律法と命令とを送ると、前もって宣べ伝えておられました。そうである以上、わたしたちは、この言葉を、古い律法とその改宗者たちのことと受け取るのではありません。そうではなく、キリストとその改宗者たちのことと受け取るのです。それは、このかたが照らしてくださった、異邦人であるわたしたちです。どこかで、こう言われているとおりです。『主はこう言われる、「わたしは恵みの時に、あなたに答え、救いの日にあなたを助けた。わたしはあなたを与えて国々の契約とし、地を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる」』（イザヤ四九・八）」122:6 「では、キリストの嗣業とは何でしょうか。国々ではありませんか。神の契約とは何でしょうか。キリストではありませんか。別の箇所でも、こう言われているとおりです。『おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ。わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える』（詩篇二・七～八）」

123:1 「ですから、これらの言葉はすべて、キリストと異邦人に向けて言われています。それと同じように、あの言葉も、そのように言われていると考えてください。実際、改宗者たちは、契約を何も必要としません。もし、割礼を受けるすべての者に、一つの同じ律法が定められていて、聖書が改宗者たちについて、こう言っているのならです。『寄留者もまた彼らに加えられ、ヤコブの家に加えられる』（イザヤ一四・一）。また、民に加わるために割礼を受ける改宗者は、土地に生まれた者のようになります。一方、わたしたちは、民と呼ばれるにふさわしいとされながら、割礼を受けていないので、それでも異邦人です」123:2 「そのうえ、あなたがたが次のように考えるのは、こっけいです。改宗者たち自身の目は開かれているのに、あなたがたの目は開かれていない。そして、あなたがたは盲人、耳しいと呼ばれ、彼らは照らされた者と呼ばれる、と。また、もし、あなたがたが、律法は異邦人に与えられたと言うとします。しかも、あなたがた自身はその律法を知らなかったとします。そうであれば、あなたがたにとって、事はいっそうこっけいなものになるでしょう」123:3 「実際、あなたがたは、神の怒りを恐れていたはずです。そして、不法な、さまよう子らではなかったはずです。神が、そのたびごとに、こう言われるのを聞くことを、恥じたでしょうから。『彼らのうちに信仰のない子ら』（申命記三二・二〇）。また、『わたしのしもべたちのほかに、だれが盲人か。彼らを治める者たちのほかに、だれが耳しいか。神のしもべたちは盲目にされた。あなたがたは、たびたび見たが、心に留めなかった。あなたがたの耳は開かれていたが、聞かなかったではないか』（イザヤ四二・一九～二〇）」123:4 「いったい、神があなたがたをほめるこの言葉は、りっぱなものでしょうか。しもべたちにふさわしい、神の証しでしょうか。あなたがたは、同じことをたびたび聞いても恥じず、神が脅しておられても震えません。そうではなく、まことに、愚かで、かたくなな民です。『それゆえ、見よ、わたしはこの民を移すことを重ねる、と主は言われる。わたしは彼らを移す。わたしは賢い者たちの知恵を滅ぼし、聡明な者たちの悟りを隠す』（イザヤ二九・一四）。もっともなことです。実際、あなたがたは、賢くも聡明でもありません。そうではなく、抜け目がなく、悪賢いのです。ただ悪を行うことにだけ賢いのです（エレミヤ四・二二参照）。神の隠された御旨も、主の確かな契約も知ることができず、とこしえの小道を見いだすこともできません（エレミヤ六・一六参照）」123:5 「ですから、『わたしは、イスラエルとユダのために、人の種と獣の種とを起こす』と言われます（エレミヤ三一・二七参照）。また、イザヤを通して、別のイスラエルについて、こう言われます。『その日には、アッスリヤ人とエジプト人のうちに、第三のイスラエルがいる。それは、地において祝福された

ものである。その地は、万軍の主が祝福して、こう言われた地である。「エジプトにいるわたしの民と、アッスリヤ人のうちにいるわたしの民と、わたしの嗣業イスラエルとは、祝福される」』（イザヤ一九・二四～二五）」 123:6 「すると、神は、この民を祝福なさり、イスラエルとお呼びになり、ご自分の嗣業であると叫んでおられます。それなのに、どうしてあなたがたは悔い改めないのでしょうか。自分たちだけがイスラエルであるかのように自分自身を欺いていることと、神に祝福された民をのろっていることをです。実際、神は、エルサレムとその周りの地方に向かって語られたときにも、また、こう言い添えられました。『わたしは、あなたがたの上に人々を、わたしの民イスラエルを生まれさせる。彼らはあなたがたを受け継ぎ、あなたがたは彼らの所有となる。あなたがたは、もはや重ねて、彼らを失って子のない者となることはない』（エゼキエル三六・一二）」 123:7 トリュフォンは言った。「では、どうなのですか。あなたがたがイスラエルであり、これらのことは、あなたがたについて言われているのですか」。わたしは彼に言った。「もし、わたしたちが、このことについて、多くの言葉を費やしてこなかったとします。そうであれば、あなたが何か悟らずにこれを尋ねているのではないかと、わたしは疑ったことでしょう。しかし、わたしたちは、この問いについても、論証と同意とをもって結論を出しました。そうである以上、先に述べたことをあなたが知らないとも、また、争いを好んでいるとも、わたしは思いません。そうではなく、この人たちのためにも、同じ論証をするよう、わたしに求めているのだと思います」 123:8 彼が目でうなずいて同意すると、わたしは言った。「さらに、イザヤの書で、神は、キリストについて語っておられます。そして、たとえのうちに、このかたをヤコブとも、イスラエルとも呼んでおられます。あなたがたが、耳で聞いて、本当に聞き取るのであれば、ですが。神は、こう言われます。『わたしのしもべヤコブ、わたしは彼を支える。わたしの選び人イスラエル、わたしはわたしの霊を彼の上に置く。彼は国々に裁きをもたらす。彼は争わず、叫ばず、またその声を大路で聞く者はない。彼はいためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともない。そうではなく、真実へともたらす。彼は裁きを取り上げ、地に裁きを置くまで、くじかれることはない。そして、国々は彼の名に望みを置く』（イザヤ四二・一～四、マタイ一二・一八～二一参照）」 123:9 「すると、あのひとりのヤコブは、イスラエルとも呼ばれました。そして、あなたがたの民族全体が、このヤコブにちなんで、ヤコブ、イスラエルと呼ばれてきました。それと同じように、キリストの戒めを守るわたしたちも、わたしたちを神へと生んでくださったキリストにちなんで呼ばれています。ヤコブ、イスラエル、ユダ、ヨセフ、ダビデとも、神のまことの子らとも呼ばれ、また、まことにそうなのです（ヨハネ一・一二、第一ヨハネ三・一～三参照）」

124〜126章　神々の会議、イスラエルの名、キリストの呼び名

124:1 わたしたちは神の子らでもある、とわたしが言ったことに、彼らがうろたえたのを見ると、わたしは、問われるより先に言った。「皆さん、聞いてください。聖霊は、この民について、こう言っています。彼らはみな、いと高き者の子らである。そして、彼らの会議の中に、このキリストご自身が臨まれ、人間のあらゆる民族から出た者たちの裁きを行われる、と」124:2「この言葉は、ダビデを通して、あなたがたの訳では、こう言われています。『神は神々の会議の中に立たれ、そのただ中で、神々をさばかれる。いつまで、あなたがたは不義をさばき、罪人たちを、かたよって見るのか。みなしごと貧しい者のために、さばきをせよ。低い者と乏しい者を義とせよ。乏しい者を救い出し、貧しい者を罪人の手から助け出せ。彼らは知ることなく、悟ることもなくて、暗き中をさまよう。地のもろもろの基は、みなゆり動かされる。わたしは言った、「あなたがたは神々だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ。しかし、あなたがたは人のように死に[1]、君たちのひとりのように倒れる」。神よ、起きて、地をさばいてください。あなたは、すべての国々のうちに嗣業を受けられるからです』（詩篇八二篇）」124:3「一方、七十人の訳では、こう言われています。『見よ、まことに、あなたがたは人々のように死に、君たちのひとりのように倒れる』（詩篇八二・七）。それは、人々の不従順を示すためです。アダムとエバの不従順のことを、わたしは言っているのです。また、君たちのひとり、すなわち、あの蛇と呼ばれた者の堕落を示すためです。この者は、エバを惑わしたために、大いなる堕落をもって堕ちたのです」124:4「しかし、わたしが今この話をしたのは、そのことのためではありません。そうではなく、聖霊が人々を非難していることを、あなたがたに示すためです。その人々は、神の命令を守るなら、神と同じように、苦しみを受けず、死なない者とされていました。また、神によって、その子らと呼ばれるにふさわしいとされていました。それなのに、この人々も、アダムとエバと同じように、彼らに似た者となって、自分に死を招いているのです。そうである以上、詩の訳も、あなたがたの望むとおりのものでかまいません。それでも、次のことは示されています。彼らは神々となるにふさわしいとされ、みな、いと高き者の子となることができるにふさわしいとされました。そして、アダムとエバと同じように、自分自身のせいで、裁かれ、罪に定められようとしているのです。また、キリストを神とも呼んでいることは、多くの箇所で示されています」

125:1 わたしは言った。「皆さん、わたしは、イスラエルという名の意味が何であるかを、あなたがたから学びたいと思います」。彼らが黙っていると、わたしは続けて言った。「わたしが知っていることを言いましょう。実際、知っていながら言わないのは、正しいことだとは思いません。また、次のように疑って、いつも気をもむのも、正しいとは思いません。あなたがたは知っているのに、ねたみのためか、自分自身を欺こうとする経験のなさのために、黙っているのだ、と。そうではなく、すべてを、他意なく、偽りなく言うのが正しいと思います。わたしの主が言われたとおりです。『種まきが種をまきに出て行った。ある種は道に落ち、ある種はいばらの中に、ある種は石地に、ある種は良い地に落ちた』（マタイ一三・三〜八、ルカ八・五〜八参照）」125:2「ですから、どこかに良い地があるという望みをもって、語らなければなりません。あのわたしの主は、強く力あるかたとして（詩篇二四・八参照）、来られて、すべての者からご自分のものを取り立てられるからです。そして、ご自分の管理人を、罪に定められないからです。ただし、主人が、その管理人を、どの両替台にも預け、どんな理由があっても地に埋めなかった者とお認めになるならです（ルカ一九・一二〜二三、マタイ二五・一四〜三〇参照）。管理人は、自分の主人が力あるかたであり、来られてご自分のものを取り立てられることを知っているので、そうするのです」125:3「では、イスラエルという名は、次のことを意味します。すなわち、力に勝つ人です。実際、『イスラ』は勝つ人、『エル』は力です。このことは、ヤコブが組み打ちをした、その組み打ちの奥義によっても、預言されていました。ヤコブ

は、あのかたと組み打ちをしたのです。そのかたは、父の御旨に仕えておられることによって、現れたかたであられます。一方、すべての造られたものの長子であられることによって、神であられます（コロサイ一・一五参照）。すなわち、キリストが人となられて、このように苦しまれることが、預言されていたのです」125:4「実際、先に述べたように、このかたが人となられたとき、悪魔が、このかたに近づいて来ました。すなわち、蛇ともサタンとも呼ばれた、あの力です。悪魔は、このかたを試み、自分を拝むよう求めることによって、打ち倒そうと力を尽くしました。しかし、このかたは、悪魔を打ち滅ぼされ、打ち倒されました。悪魔が悪い者であることを、証明されたのです。悪魔は、聖書に反して、神のように拝まれることを求め、神の意志に背く者となっていたからです。実際、このかたは、悪魔にこうお答えになりました。『「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある』（マタイ四・一〇、申命記六・一三）。そして、悪魔は、打ち負かされ、悪い者と証明されて、そのとき退いたのです（マタイ四・一一参照）」125:5「しかし、わたしたちのキリストは、しびれることにもなっておられました。すなわち、十字架につけられようとしておられたときの、苦しみのうちに、また受難を身に感じることのうちにです。そうである以上、このかたは、このことの予告もなさいました。ヤコブのももに触れられ、しびれさせなさったことによってです（創世記三二・二五参照）。また、イスラエルは、もとから、このかたの名でした。このかたは、幸いなヤコブを祝福なさって、ご自分の名で、その名をおつけになったのです。そして、このことによっても、宣べ伝えておられたのです。このかたを通して父のもとに逃れて来る者はみな、祝福されたイスラエルである、と（イザヤ一九・二四～二五参照）。ところが、あなたがたは、これらのことを何も理解しておらず、理解しようと備えてもいません。そして、ヤコブの肉の子孫による子らであるので、必ず救われると待ち望んでいます。しかし、これらのことでも、あなたがたが自分自身を惑わしていることは、わたしが多くの箇所で示してきました」

126:1 わたしは言った。「このかたは、あるときは大いなる計画の使と呼ばれておられます。また、エゼキエルを通しては人と、ダニエルを通しては人の子のようなかたと、イザヤを通しては幼な子と呼ばれておられます。ダビデを通してはキリスト、拝まれるべき神と、多くの者を通してはキリスト、石と呼ばれておられます。ソロモンを通しては知恵と、モーセを通してはヨセフ、ユダ、星と、ゼカリヤを通しては東と呼ばれておられます。再びイザヤを通しては、苦しみを受けるかた、ヤコブ、イスラエルと呼ばれておられます。また、つえ、花、隅のかしら石、神の子とも呼ばれておられます。トリュフォンよ、このかたがだれであるかを、もし、あなたがたが知っていたなら、このかたを冒瀆してはいないはずです。このかたは、すでに来られ、お生まれになり、苦しみを受けられ、天に昇られました。そして、再び来られます。そのとき、あなたがたの十二の部族は嘆くのです（ゼカリヤ一二・一二参照）」126:2「というのも、もし、あなたがたが、預言者たちによって言われたことを理解していたとします。そうであれば、このかたが神であられることを、否んではいないはずです。このかたは、ただひとりの、生まれることのない、言い表せない神の子であられるのです。実際、モーセを通しても、出エジプト記のどこかで、こう言われています。『主はモーセに語られ、彼に言われた、「わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに、彼らの神として現れた。わたしの名は、彼らに知らせなかった。わたしは、彼らと契約を立てた」』（出エジプト六・二～四）」126:3「また、さらに、こう言っています。『ひとりの人が、ヤコブと組み打ちをなさった』（創世記三二・二四参照）。そして、その人が神であると言っています。ヤコブがこう言ったと言っているのです。『わたしは顔と顔をあわせて神を見たからである。そして、わたしの魂は救われた』（創世記三二・三〇）。また、ヤコブが、その所を『神の姿』と呼んだことも、書き記しています。そのかたが、ヤコブと組み打ちをなさり、ヤコブに現れられ、ヤコブを祝福なさった所です」126:4「また、モーセが言うように、アブラハムにも同じように、神は、マムレの樫の木のそばで現れられました。アブラハムが、真昼に天幕の入口にすわっていたときです（創世記一八・一）。それから、モーセは、こう述べたあとで、続けて言います。『彼が目を上げて見ると、見よ、三人の人が彼に向かって立っていた。彼はこれを見て、走って行って彼らを迎えた』（創世記一八・二）。少しあとで、そのうちのひとりが、アブラハムに男の子を約束なさいます。『なぜサラは、「わたしは子を産むのだろうか。わたしはもう年をとっているのに」と言って笑ったの

か。神にとって、不可能なことがあるだろうか。この時期に、時が来れば、わたしは帰る。そして、サラに男の子が生まれる』（創世記一八・一三〜一四）。そして、彼らはアブラハムのもとを去ります」126:5「また、彼らについて、さらに、こう言います。『その人々はそこから立ち上がって、ソドムの方を見おろした』（創世記一八・一六）。それから、さらに、かつておられ、今もおられるかたが、アブラハムに向かって、こう言われます。『わたしは、自分のしようとすることを、わたしのしもべアブラハムに決して隠さない』（創世記一八・一七）」。そして、わたしは、それに続く言葉、すなわち、モーセの書から記し、わたしが解き明かしたことを、再び語った。そして、言った。「それによって、次のことが示されています。このかたは、アブラハムにも、イサクにも、ヤコブにも、ほかの族長たちにも現れられ、神と書き記されています。このかたは、父であり主であられるかたに従い、その御旨に仕えておられるのです」126:6わたしは、先には言わなかったけれども、さらに続けて言った。「同じように、民が肉を食べたいと望んだとき、モーセは、そこでもみ使いと言われているかたを信じませんでした。そのかたは、神が彼らに飽きるほど与えてくださると約束しておられたのです。そのときも、このかたご自身が、これらのことを言われ、また行われたことが示されています。このかたは、神であり、父から遣わされたみ使いでもあられます。実際、聖書は、続けてこう言っています。『主はモーセに言われた、「主の手は足りないであろうか。あなたは、いま、わたしの言葉があなたに追いつくかどうかを知るであろう」』（民数記一一・二三）。また、さらに、ほかの言葉の中で、こう言っています。『主はわたしに言われた、「おまえはこのヨルダンを渡ることはできない」。あなたの神、主、あなたの前に先立って行かれるかたが、みずから国々を滅ぼし去られる』（申命記三一・二〜三）」

訳注

1 写本はここも『人々のように』と複数で読む。

127〜129章　場所に収まらない父、父から生まれた力

127:1 「律法を与えた者と預言者たちが言ったほかのことも、このようなものです。そして、次のことは、もう十分に述べたと思います。わたしの神は『神はアブラハムを離れてのぼられた』と言われます（創世記一七・二二）。また『主はモーセに語られた』（出エジプト六・二九）、『主は、人の子たちの建てた塔を見るために下られた』（創世記一一・五）と言われます。また『神はノアの箱舟を外から閉ざされた』と言われます（創世記七・一六）。そのようなときに、生まれることのない神ご自身が、どこかから下られたとか、のぼられたとか考えてはならない、ということです」 127:2 「実際、言い表せない父、万物の主は、どこかへ来られることもなく、歩き回られることもありません。眠られることも、起き上がられることもありません。そうではなく、どこであれ、ご自分の場所にとどまっておられます。鋭く見、鋭く聞いておられますが、目や耳によってではなく、語ることのできない力によってです。そして、すべてを見渡し、すべてを知っておられます。わたしたちのだれひとり、このかたに隠れてはいません。このかたは、動かれることもありません。場所にも、世界全体にも収まらないかたであり、世界が生じる前からおられたかたなのです」 127:3 「では、どうして、このかたが、だれかに語られたり、だれかに姿を見せられたりするでしょうか。地のわずかな一角に現れられたりするでしょうか。民は、このかたから遣わされたかたの栄光さえ、シナイで見ることができなかったからです（出エジプト一九・二一参照）。また、モーセ自身も、自分の造った幕屋が神からの栄光に満たされたときには、その幕屋に入ることができなかったからです（出エジプト四〇・三五参照）。また、祭司も、神殿の前に立っていることに耐えられなかったからです（歴代下五・一四参照）。それは、ソロモンが、エルサレムの宮に箱を運び入れたときのことでした。その宮は、ソロモン自身が建てたものです」 127:4 「すると、アブラハムも、イサクも、ヤコブも、ほかのどの人も、父を見たことはありません（ヨハネ一・一八参照）。ひとつ残らずすべてのものの主であり、キリストご自身の主でもある、言い表せないかたを、見たことはないのです。そうではなく、あのかたを見たのです。このかたは、父の御旨に従って神でもあられ、父の子であられます。また、父の意志に仕えておられることによって、み使いでもあられます。父は、このかたが、おとめによって人としてお生まれになることも、お望みになりました。このかたは、かつて、柴の中からモーセと語られたときに、火ともなられたのです（出エジプト三・二以下参照）」 127:5 「というのも、もし聖書をこのように理解しないなら、次のことになってしまうからです。モーセを通して、こう言われました。『主は火と硫黄とを、主の所から、天からソドムの上に降らせなさった』（創世記一九・二四）。そのとき、父であり万物の主であるかたは、天におられなかったことになります。また、さらに、ダビデを通して、こう言われたときも、そうです。『君たちよ、あなたがたの門をあげよ。とこしえの門よ、あがれ。栄光の王が入られる』（詩篇二四・七）。また、さらに、こう言うときも、そうです。『主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と』（詩篇一一〇・一）」

128:1 「また、キリストは主であられ、神の子として神であられます。そして、以前には力によって、人として、またみ使いとして、また柴の中でのように火の栄光のうちに現れておられました。そのキリストが、ソドムに下された裁きのときにも現れられたことは、これまで述べた多くのことの中で示されています」。そして、わたしは、出エジプト記から先に書いたことを、すべて、もう一度語った。柴の上の幻のことも、イエスという名で呼ばれたことも語った。そして、言い添えた。 128:2 「皆さん、わたしが、むだに言葉を重ねて、これらのことを何度も言っているとは思わないでください。そうではなく、ある人々が、これらのことについて、先回りして言おうとしているのを知っているからです。その人々は、こう言います。万物の父からの力が、モーセやアブラハムやヤコブに現れ

た。この力は、人々のもとへ出て行くときには、み使いと呼ばれる。この力を通して、父からのことが人々に伝えられるからである。また、栄光とも呼ばれる。ときに、何ものにも収まらない幻のうちに現れるからである。また、ときには男とも人とも呼ばれる。父が望まれるような姿をとって現れるからである。そして、彼らは、この力をロゴスとも呼んでいます。父からの語りかけをも、人々に運ぶからだ、というのです」128:3「また、彼らは、この力が父から切り分けられず、離れることもない、と言います。それは、太陽の光が、地上にあっても、天にある太陽から切り分けられず、離れないのと同じである、と言うのです。そして、太陽が沈むと、光もいっしょに運び去られる。それと同じように、父は、望まれるときに、ご自分の力を飛び出させなさる、と彼らは言います。そして、望まれるときに、再びご自分のもとへお引き戻しになる、と言うのです。また、同じ仕方で、父がみ使いたちをも造られる、と教えています」128:4「しかし、み使いたちは存在します。そして、いつもとどまっていて、自分が生じたもとのものに解き戻されることはありません。このことは、すでに示されました。また、預言の言葉は、この力を神とも呼び、み使いとも呼びます。このことは、多くの箇所で同じように示されたとおりです。このかたは、太陽の光のように名においてだけ数えられるのではなく、数においても別のかたであられます。このことも、わたしは、先に述べたことの中で、手短に論じました。そのとき、わたしは言いました。この力は、父から、その力と御旨とによってお生まれになったのであって、切り分けられてではない。父の実体が分けられるかのようにではない。ほかのものはみな、分けられ、切られると、切られる前と同じものではなくなる。そのようにではない、と。また、たとえとして、次のことを挙げていました。わたしたちは、火からともされた火を、別のものとして見ます。多くの火をともすことのできるもとの火は、少しも減らず、同じままです」

129:1「そして今も、このことの論証のために、先に述べた言葉を、なお述べましょう。『主は火を、主の所から、天から降らせなさった』（創世記一九・二四）と言うとき、預言の言葉は、数において二者であることを示しています。一者は地上におられるかたで、ソドムの叫びを見るために下られた、と言っておられます（創世記一八・二一参照）。もう一者は天におられるかたで、地上の主の主でもあられます。父として、また神としてです。そして、地上のかたが、力あるかた、主、神であられることの原因でもあられます」129:2「また、さらに、神は初めにこう言われた、と言葉は言います。『見よ、アダムは、われわれのひとりのようになった』（創世記三・二二）。このときの『われわれのひとりのように』という句も、数を示すものです。この言葉は、比喩を受け入れはしません。ソフィストたちは比喩として解き明かそうと試みますが、彼らは、真理を語ることも、理解することもできないのです」129:3「また、『知恵』の書には、こう言われています。『もしわたしが、日々起こることをあなたがたに告げるなら、永遠からのことを忘れずに数えよう。主は、その道の初めとして、そのわざのために、わたしを造られた。世の前に、初めに、わたしを据えられた。地を造る前、淵を造る前、水の泉が流れ出る前、山が定められる前、すべての丘より前に、わたしをお生みになる』（箴言八・二一～二五）」129:4こう言ってから、わたしは続けて言った。「聞いている皆さん、次のことを理解してください。もし、本当に心を向けているならです。この生み出されたかたが、父によってお生まれになったことを、言葉は明らかにしていました。ひとつ残らずすべての造られたものより前にです。また、生まれる者は、生む者とは数において別のものです。このことは、だれであれ認めるでしょう」

130〜132章　国々の喜び、荒野の民への恵み、アウセの畑

130:1 皆が同意すると、わたしは言った。「また、以前には挙げなかった言葉も、いま述べましょう。それは、忠実なしもべモーセによって（民数記一二・七参照）、覆われた仕方で語られた言葉です。こう言われています。『天よ、彼とともに喜べ。神のみ使いたちはみな彼を拝せよ』（申命記三二・四三）」。そして、わたしは、その言葉の続きとして、次のことを挙げた。「『国々よ、その民とともに喜べ。神のみ使いたちはみな彼に力を与えよ。その子らの血の報復がなされ、彼は報復をなさるからである。また、敵に罰を報いられ、彼を憎む者に報いられ、主はその民の地を清められるからである』（申命記三二・四三）」 130:2 「このように言われることによって、わたしたち国々の者が、その民とともに喜ぶ、と言っておられるのです。その民とは、アブラハム、イサク、ヤコブ、預言者たちのことです。そして、あの民の中から神に喜ばれた人々すべてを、分け隔てなく言うのです。これは、わたしたちが先に同意したとおりです。しかし、わたしたちは、あなたがたの民族の者すべてを、その民と解するのではありません。イザヤを通しても、次のことを知っているからです。そむいた人々のしかばねは、死なずにいて、うじと消えない火に食い尽くされることになる。そのため、すべての肉なる者の見るものともなる、ということです（イザヤ六六・二四参照）」 130:3 「皆さん、これに加えて、モーセの言葉そのものから、ほかの言葉も、あなたがたに挙げたいのです」とわたしは言った。「その言葉から、あなたがたは、次のことも理解できます。神は、初めに、すべての人を、民族ごとにも言葉ごとにも散らされました（創世記一一・六〜九、申命記三二・八参照）。一方で、すべての民族の中から、ご自分のために、あなたがたの民族を取られました。役に立たない、不従順な、信仰のない民族です（ホセア八・八、イザヤ三〇・九、六五・二、申命記三二・二〇参照）。そして、あらゆる民族の中から選ばれる人々が、キリストを通して、その御旨に聞き従ったことを示されました。このキリストを、ヤコブともお呼びになり、イスラエルとも名づけておられます。先に多くのところで述べたように、この人々もヤコブであり、イスラエルでなければならないのです」 130:4 「実際、『国々よ、その民とともに喜べ』（申命記三二・四三）と言われることによって、一方では、この人々に同じような嗣業を分け与えておられます。そして、同じような名を与えておられます。しかし、他方では、この人々を、その民とともに喜ぶ『国々』と言われます。そのことによって、あなたがたの民族をはずかしめておられるのです。実際、あなたがたは偶像を拝んで神を怒らせました。それと同じように、神は、この人々をも、偶像を拝む者であったのに、ふさわしい者とされたのです。ご自分の御旨を知り、ご自分のもとにある嗣業を受け継ぐにふさわしい者とです」

131:1 「また、神がすべての国々を分けられたことを明らかにする言葉も述べましょう。その言葉は、次のとおりです。『あなたの父に問え、彼はあなたに告げるであろう。あなたの長老たちに問え、彼らはあなたに語るであろう。いと高き者が国々を分け、アダムの子らを散らされたとき、イスラエルの子らの数々に従って、国々の境を定められた。そして、主の分はその民ヤコブとなり、その嗣業の割り当てはイスラエルとなった』（申命記三二・七〜九）」。こう言ってから、わたしは言い添えた。「七十人は『神のみ使いたちの数に従って、国々の境を定められた』と訳しました（申命記三二・八）。しかし、このことによっても、ここでもまた、わたしの論は少しも損なわれないので、あなたがたの訳を述べたのです」 131:2 「あなたがたも、真実を認める気があるならですが、わたしたちのほうが、神に対してより忠実なのです。わたしたちは、さげすまれ、そしりに満ちた十字架の奥義によって、神から召されました。そして、わたしたちが告白し、従い、神を敬うことのゆえに、死に至る罰が、悪霊たちと悪魔の軍勢によって科されています。あなたがたが彼らに仕えたことによってです。それでも、わたしたちは、言葉の上でさえキリストを否まないために、すべてを忍んでいます。このキリストを通して、わたしたちは、父によって前もって備えられた

救いへと召されたのです」131:3「あなたがたよりも、です。あなたがたは、高く上げた腕と、大いなる栄光の顧みとによって、エジプトからあがない出されました（申命記四・三四、出エジプト六・一以下、一三・二一、一六・一〇、使徒一三・一七参照）。海があなたがたのために分けられて、乾いた道となりました。あなたがたを追う者たちは、非常に大きな軍勢と輝かしい戦車とで追って来ました。あなたがたのために道となったその海を、彼らの上にあふれさせなさり、その道で、その者たちの命をお取りになりました（出エジプト一四・六参照）。また、あなたがたには、光の柱が輝いていました（出エジプト一三・二一ほか参照）。それは、世界のほかのどの民にもまさって、あなたがたが光を用いることができるためでした。自分たちだけの、欠けることのない、沈まない光です。また、あなたがたに、天のみ使いたちを通して、食物としてパン、すなわちマナを降らせなさいました（出エジプト一六・一四以下参照）。あなたがたが、パンを作る必要もなく、それを求めることもないようにするためでした。また、メラの水は甘くされました（出エジプト一五・二五参照）」131:4「また、十字架につけられることになっていたかたのしるしが、先に述べたように、あなたがたをかんだ蛇についても起こりました（民数記二一・六～九参照）。神は、すべての奥義を、それぞれのときより前に、先回りしてあなたがたに恵んでおられたのです。しかし、あなたがたは、その神に対して、いつも恩知らずであったことが証明されています。また、モーセと、イエス[1]の名で呼ばれるようになった者とが、アマレクと戦いました。そのとき、モーセが両手を広げた型によっても、しるしが起こりました（出エジプト一七・九～一三参照）。このことについて、神は、起こったことを書き記すように言われました。そして、イエスの名を、あなたがたの耳にも置くように、と言われました。この者こそ、天の下からアマレクの記憶を消し去る者である、と言われたのです（出エジプト一七・一四、申命記二五・一九参照）」131:5「また、アマレクの記憶が、ヌンの子の後にも残っていることは、明らかです。しかし、次のことが明らかにされています。十字架につけられたイエスによって、悪霊たちは滅ぼされ、このかたの名を恐れることになります。また、あらゆる支配と王国も同じように、このかたを恐れて警戒することになります。そして、人間のあらゆる民族の中の、このかたを信じる人々が、神を敬う者、平和を好む者と示されることになります。あの数々のしるしは、このかたについてのすべてのことを前もって告げ知らせるものでした。トリュフォンよ、わたしが先に語ったことも、このことを示しています」131:6「また、あなたがたが肉を食べたいと欲したときには、数えきれないと言えるほど多くのうずらが与えられました（出エジプト一六・一三参照）。また、あなたがたのために、岩から水がわき出ました（民数記二〇・一一参照）。そして、雲が、暑さを避ける陰として、また寒さを防ぐ守りとして、ついて来ました（詩篇七八・一四、一〇五・三九参照）。その雲は、別の新しい天のありさまを告げ、前もって知らせるものでした（イザヤ六五・一七、六六・二二、黙示録二一・一、第二ペテロ三・一三参照）。また、あなたがたの靴のひもは切れず、靴そのものも古びず、衣もすり切れませんでした。それどころか、若い者たちの衣は、その人たちとともに大きくなったのです（申命記八・四、二九・五、ネヘミヤ九・二一参照）」

132:1「さらに、これに加えて、あなたがたは子牛を造り（出エジプト三二章参照）、異国の娘たちと不品行を行うこと、偶像を拝むことに努めました（民数記二五・一～二参照）。そして、その後にも、再びそうしたのです。地が、それほど大きな力をもって、あなたがたに渡されたのにです。そのため、あなたがたは、太陽が天にとどまり、三十六時間まで沈まないのを見ました。イエスの名で呼ばれるようになったあの人の命令によってです（ヨシュア一〇・一二～一三参照）。また、時に応じてあなたがたのために起こった、ほかのすべての力あるわざも、あなたがたは見ました。その中から、もう一つを、いま数えるのがよいと、わたしには思われます。実際、そのわざは、あなたがたが、そこからもイエスを悟るための助けとなります。このイエスを、わたしたちも、神の子キリストであられると深く知りました。このかたは、十字架につけられ、よみがえられ、天に昇られ、再び来られるかたです。アダムその人に至るまで、分け隔てなく万人の審判者として、来られるのです」132:2わたしは言った。「では、あなたがたは知っています。あかしの幕屋が、アシドドびとをはじめとする敵に奪われ、彼らに恐ろしい、いやしがたい災いが起こったときのことです。彼らは、幕屋を車に載せることにしました。その車には、子を産んだばかりの雌牛をつなぎました。自分たちが、幕屋のゆえに神の力によって打たれたのかどうかを、知るため

に試したのです。また、幕屋がもとの所へ運び返されることを、神が望んでおられるのかどうかをです（サムエル上五～六章参照）」[132:3]「彼らがそうすると、雌牛は、だれにも導かれずに、幕屋が奪われたもとの所へは行きませんでした。そうではなく、アウセ[2]という名の、ある人の畑へ行ったのです。この人は、あの人と同じ名でした。あの人は、先に述べたように、イエスという名に改められた人です。また、民をその地に導き入れ、くじによってその地を彼らに分け与えた人です。雌牛は、その畑に来ると、そこにとどまりました。このことによっても、あなたがたには、次のことが示されています。雌牛は、力の名によって導かれたのです。ちょうど、以前に、エジプトから出て来た者たちのうち残された民が、その地に導かれたのと同じです。民は、イエスという名を受けた人、以前はアウセと呼ばれていた人によって導かれました」

訳注

1 ヌンの子ヨシュアのこと。ギリシア語訳ではイエスと同じ名で書かれる。

2 ヘブル語の聖書では、この人の名はヨシュア。

133〜135章　高く上げられた手、ヤコブの結婚、二つのヤコブの家

133:1「これらのことも、このような驚くべき不思議なことも、すべて、時に応じてあなたがたに起こり、目に見えていました。それなのに、預言者たちを通しても、次のことが証明されています。あなたがたが、自分の子供たちを悪霊たちにいけにえとしてささげるまでになったことです（詩篇一〇六・三七参照）。さらに、これらすべてに加えて、キリストに対して、あれほどのことをあえて行い、今もなおあえて行っていることもです。これらすべてにもかかわらず、あなたがたが、神とそのキリストからあわれみを受けて、救われますように」133:2「実際、神は、あなたがたがこのようなことを行うと、前もって知っておられました。そして、預言者イザヤを通して、こうのろわれました。『わざわいなるかな、彼らの魂は。彼らは自分たちに対して悪いはかりごとをめぐらし、「正しい者を縛ろう。彼はわれわれに不都合だから」と言った。それゆえ、彼らは自分の行いの実を食べる。わざわいなるかな、不法な者は。その手のわざに応じて、悪いことが彼に起こる。わが民よ、あなたがたの取り立て人たちは、あなたがたを刈り尽くし、返せと迫る者たちが、あなたがたを治めるであろう」133:3「わが民よ、あなたがたを幸いだと言う者たちは、あなたがたを迷わせ、あなたがたの道の小道を乱す。しかし今、その民を裁きに立たせなさる。そして、主ご自身が、民の長老たちと、その治める者たちとを相手に、裁きに来られる。あなたがたは、なぜわたしのぶどう畑に火を放ったのか。なぜ、貧しい者からかすめた物が、あなたがたの家にあるのか。あなたがたは、なぜわたしの民に不義を行い、へりくだった者の顔を辱めたのか』（イザヤ三・九〜一五）」133:4「また、さらに、同じ預言者は、ほかの言葉の中で、同じことについて、こう言いました。『わざわいなるかな、長い綱で引くように自分の罪を引き寄せ、雌牛のくびきの革ひもで引くように不法を引き寄せる者たちは。彼らは言う、「彼のすみやかさが近づくように。イスラエルの聖なるかたのはかりごとが来るように。われわれが知るためだ」と。わざわいなるかな、悪を善といい、善を悪という者たちは。光を暗しとし、暗きを光とし、苦きを甘しとし、甘きを苦しとする者たちは。わざわいなるかな、自分のうちで聡明であり、自分の目の前で知識のある者たちは」133:5「わざわいなるかな、あなたがたのうちの力ある者たち、ぶどう酒を飲む者たち、また権力ある者たち、濃い酒を混ぜる者たちは。まいないのために神を敬わない者を義とし、義人の義を取り去る者たちは。それゆえ、刈り株は火の炭で焼かれ、燃える炎で焼き尽くされる。それと同じように、根はちりのようになり、彼らの花はほこりのように舞い上がる。彼らは万軍の主の律法を望まず、かえって、イスラエルの聖なるかたである主の言葉を侮ったからである。そして、万軍の主は怒りに燃えられ、彼らに両手を下され、彼らを撃たれ、山々に向かって激しく憤られた。そして、彼らのしかばねは、ただ中で、道のあくたのようになった。これらすべてのことがあっても、彼らは立ち返らず、かえって、なお彼らの手は高く上げられている』（イザヤ五・一八〜二五）」133:6「実際、あなたがたの手は、まことに、今なお悪を行おうと高く上げられています。あなたがたは、キリストを殺しておきながら、それでもなお悔い改めないからです。それどころか、このかたを通して万物の神であり父であるかたを信じたわたしたちをも憎み、権限を得るたびに殺しているからです。そして、このかたご自身と、このかたから出た者たちとを、絶えずのろっているからです。わたしたちは皆、あなたがたのために、また、すべての人のために、分け隔てなく祈っているのにです。わたしたちのキリストであり主であられるかたから、そうするように教えられたとおりにです。このかたは、敵のためにも祈り、憎む者を愛し、のろう者を祝福するよう、わたしたちにお命じになりました（マタイ五・四四、ルカ六・二七〜二八参照）」

134:1「ですから、もし、預言者たちの教えも、このかたご自身の教えも、あなたがたをも恥じ入らせるなら、こうするほうがよいのです。悟りのない、目の見えないあなたがたの教師たちに従うより、神に従うことです。この教師たちは、

今に至るまで、あなたがたが、各自、四人でも五人でも妻をもつことを許しています。また、だれかが美しい女を見て欲しくなれば、その女をめとることも許しています。彼らは、ヤコブ、すなわちイスラエルや、ほかの族長たちの行いを語り聞かせます。そして、同じようなことを行う者たちは少しも不義を行っていない、と言うのです。この点でも、彼らはみじめで愚かな者たちです」134:2「実際、先に述べたように、そうした一つ一つの行いのうちに、大いなる奥義の、いくつかのはからいが成し遂げられていたのです。実際、ヤコブの結婚において、どのようなはからいと、前もって告げ知らせることとが成し遂げられていたかを、述べましょう。それは、このことにおいても、あなたがたが次のことを深く知るためです。あなたがたの教師たちは、それぞれの行いがなされた、より神にかかわる理由には、いつも少しも目を向けませんでした。そうではなく、むしろ、地に低い情欲と、堕落の情欲とに目を向けてきたのです。ですから、わたしの言うことに心を向けてください」134:3「ヤコブの結婚は、キリストがやがて成し遂げられる行いの型でした（創世記二九・一六以下参照）。実際、二人の姉妹を同時に妻にすることは、ヤコブには許されていませんでした。また、ヤコブは、娘たちのためにラバンに仕えました。そして、年下の娘のことで欺かれて、再び七年仕えました。しかし、レアは、あなたがたの民であり、会堂です。一方、ラケルは、わたしたちの教会です。そして、キリストは、今に至るまで、この二人のために、また、二人のうちにいる奴隷たちのためにも、仕えておられます」134:4「実際、ノアは、二人の息子に、三人目の息子の子孫を奴隷として与えました（創世記九・二五参照）。そうである以上、今度は、自由な子らの両方と、そのうちにいる奴隷たちとを、もとに戻すために、キリストが来られたのです。このかたは、ご自分の戒めを守る人すべてを、同じものにふさわしい者としてくださいます。それは、次のことと同じです。ヤコブに、自由な女たちから生まれた者も、奴隷の女たちから生まれた者も、みな子となり、同じ誉れを受けました。ただし、各自がどのような者になるかは、序列に従って、また予知に従って、前もって告げられています（創世記四九・一以下参照）」134:5「ヤコブは、まだらで、さまざまな姿の家畜のために、ラバンに仕えました（創世記三〇～三一章参照）。キリストも、あらゆる民族の中の、色とりどりで、さまざまな種類の人々のために、お仕えになりました。十字架に至るまで、奴隷の務めをもってお仕えになったのです（ピリピ二・七～八参照）。血と十字架の奥義とによって、その人々をご自分のものとされたのです。レアの目は弱かったのです（創世記二九・一七参照）。実際、あなたがたの魂の目も、ひどく弱いのです。ラケルは、ラバンの神々を盗み、今日まで隠しました（創世記三一・一九～三四参照）。わたしたちにとっても、父祖の、物質でできた神々は滅び去ったのです」134:6「ヤコブは、ずっと、兄に憎まれていました。そして今、あなたがたも、また分け隔てなくほかの人々も、わたしたちを、また、わたしたちの主ご自身をも憎んでいます。すべての人は、生まれつき兄弟であるのにです。ヤコブは、イスラエルと名づけられました。そして、キリストも、イスラエルであられると示されています。イエスであられ、イエスと呼ばれるかたです」

135:1「また、聖書は、こう言います。『わたしは主なる神、イスラエルの聖なる者、イスラエルを、あなたがたの王として示した者である』（イザヤ四三・一五）。このように言うとき、あなたがたは、それを、まことに、永遠の王であられるキリストのことと解するのではありませんか。実際、イサクの子ヤコブが一度も王にならなかったことを、あなたがたは知っています。そして、それゆえ、聖書は、ヤコブ、イスラエルと言う王がだれであるかを、再びわたしたちに解き明かして、こう言いました」135:2「『わたしのしもべヤコブ、わたしは彼を支える。わたしの選び人イスラエル、わたしの魂は彼を受け入れる。わたしはわたしの霊を彼の上に与えた。彼は国々に裁きをもたらす。彼は叫ばず、その声は外に聞こえない。彼はくじかれた葦を砕くことがなく、煙っている燈心を消すこともない。勝利をもたらすまでである。彼は裁きを取り上げ、地に裁きを置くまで、くじかれることはない。そして、国々は彼の名に望みを置く』（イザヤ四二・一～四）」135:3「では、まさか、国々から出た人々も、あなたがた自身も、キリストではなく、族長ヤコブに望みを置いているのでしょうか。すると、キリストをイスラエルともヤコブとも言います。それと同じように、キリストの胎から切り出されたわたしたちも、まことのイスラエルの民族なのです。しかし、むしろ、言葉そのものに心を向けましょう」135:4「また、こう言われます。『わたしは、ヤコブから、またユダから出た子孫を導き出す。その子孫は、わたしの聖な

る山を受け継ぐ。わたしの選んだ者たちと、わたしのしもべたちがそれを受け継ぎ、そこに住む。林には羊の群れの囲いができ、アコルの谷は牛の群れの休む所となって、わたしを尋ね求めた民のものとなる。しかし、わたしを捨て、わたしの聖なる山を忘れ、悪霊たちに食卓を備え、悪霊に混ぜた酒を満たすあなたがたよ。わたしは、あなたがたをつるぎに渡す。あなたがたはみな、ほふられて倒れる。わたしが呼んだのに、あなたがたは答えず、わたしが語ったのに、あなたがたは聞き流したからである。また、わたしの前で悪を行い、わたしの望まなかったことを選んだからである』（イザヤ六五・九〜一二）」135:5「聖書の言葉は、以上です。しかし、あなたがた自身も、次のことを考え合わせてください。ここで言われているヤコブから出た子孫は、何か別のものです。人が思うかもしれないように、民について言われているのではありません。実際、ヤコブから蒔かれた者たちが、ヤコブから生まれた者たちに、入り込む余地を残すことはありえません。また、民を嗣業にふさわしくないと非難なさりながら、受け入れるかのように、再び同じ者たちに約束なさることもありえません」135:6「そうではなく、預言者は、あそこで、こう言っています。『そして今、あなた、ヤコブの家よ、さあ、主の光に歩もう。主は、その民、ヤコブの家を捨てられたからである。彼らの地が、初めのように、占いとまじないで満ちたためである』（イザヤ二・五〜六）。それと同じように、ここでも、わたしたちは、ユダの二つの子孫と二つの民族があると理解しなければなりません。ヤコブの二つの家のようにです。一方の家は血と肉から、他方の家は信仰と霊から生まれたのです（ヨハネ一・一三参照）」

136〜139章　ヤコブから出た子孫、七十人の訳、ノアの洪水とノアの祝福

136:1 「実際、ご覧ください。今、民に向かって、どのように言われているかを。その前には、こう言われていました。『ぶどうの房の中にぶどうの粒が見いだされると、人々は「それを損なうな。その中に祝福があるから」と言う。そのように、わたしは、わたしに仕える者のために行う。その者のために、わたしは、すべての者を滅ぼすことはしない』（イザヤ六五・八）。そして、その後で、こう付け加えておられます。『わたしは、ヤコブから、またユダから出た子孫を導き出す』（イザヤ六五・九）。すると、次のことは明らかです。あの者たちに対してこれほどお怒りになり、ごくわずかの者しか残さないと脅しておられます。そうであれば、ご自分の山に住むことになる、ほかのある人々を導き出すと約束しておられるのです（イザヤ六五・九参照）」 136:2 「この人々こそ、お蒔きになり、生まれさせなさると言われた人々です（エレミヤ三一・二七、エゼキエル三六・一二参照）。実際、あなたがたは、呼んでおられるのに受け入れず、語っておられるのに聞きません。それだけでなく、主の前で悪を行いました（イザヤ六五・一二参照）。しかし、あなたがたの悪のきわみは、次のことです。あなたがたが殺した正しいかたを、さらに憎むことです。そして、このかたから受けて、今あるとおりの者、すなわち敬虔で、正しく、人を愛する者となった人々をも憎むことです。ですから、主は、こう言われます。『わざわいなるかな、彼らの魂は。自分たちに対して悪いはかりごとをめぐらしたからである。彼らは「正しい者を取り除こう。彼はわれわれに不都合だから」と言った』（イザヤ三・九〜一〇、知恵の書二・一二参照）」 136:3 「実際、あなたがたがわざわいなのは、次のことのためではありません。あなたがたも、あなたがたの先祖たちのように、バアルにいけにえをささげていたからではないのです。木陰の場所や高い場所で、天の軍勢に菓子を作っていたからでもありません（エレミヤ七・一八参照）。そうではなく、主のキリストを受け入れなかったからです。実際、このかたを知らない者は、神の御旨をも知りません。また、このかたを辱め、憎む者は、このかたを遣わされたかたをも、明らかに憎み、辱めています（ヨハネ五・二三参照）。そして、もし、だれかがこのかたを信じないなら、その人は、預言者たちの宣べ伝えた言葉を信じていないのです。その言葉は、このかたについて良い知らせを告げ、すべての人に宣べ伝えたものです（ヨハネ五・四六参照）」

137:1 「どうか、兄弟たちよ、あの十字架につけられたかたに、悪口を言わないでください。また、このかたの打たれた傷を、あざけらないでください。その傷によって、すべての人がいやされることができます。わたしたちも、そのようにいやされたのです（イザヤ五三・五参照）。実際、もし、あなたがたが、聖書の言葉に説き伏せられて、かたくなな心に割礼を受けるなら、それは良いことです。あなたがたは、肉の割礼を、自分たち自身から生じた見解として、もっているのではありません。割礼は、印として与えられたのであって、義を行うわざとして与えられたのではなかったからです。聖書の言葉が、そう考えるよう迫るとおりです」 137:2 「ですから、同意したうえで、神の子をののしらないでください。また、パリサイ人の教師たちに従って、イスラエルの王を、決して笑いものにしないでください。あなたがたの会堂司たちが、祈りの後に教えているようなことをです。実際、神に喜ばれない者たちに触れる者でさえ、神の瞳に触れる者のようです（ゼカリヤ二・八参照）。そうであれば、愛されたかたに手をかける者は、なおさらそうです（エペソ一・六参照）。そして、このかたこそ、その愛されたかたであられることは、すでに十分に示されています」 137:3 彼らが黙っていると、わたしは言った。「わたしは、友人たちよ、今、聖書を、七十人が訳したとおりにも引いています。実際、先には、あなたがたの持っているとおりに聖書を引いて、あなたがたの見解が今どうなっているかを、試していたのです。実際、わたしは、聖書の次の言葉を引きました。『わざわいなるかな、彼らは。自分たちに対して悪いはかりごとをめぐらし、こう言ったからである』。そのとき、七十人が訳したとおりに、『正しい者を取り除こう[1]。彼はわれわれに不都合

だから』と続けました（イザヤ三・九～一〇、知恵の書二・一二参照）。わたしは、話の初めには、あなたがたが聖書にこう言われているとしたい形でも引いていました。『正しい者を縛ろう。彼はわれわれに不都合だから』と言った、という形です（イザヤ三・一〇、知恵の書二・一二参照）」137:4「ところが、あなたがたはほかのことをしていて、わたしには、あなたがたが言葉を注意して聞いていたとは思えません。しかし、今はもう、日が終わろうとしています。実際、もう日が西に傾いています。そうである以上、これまで述べたことに、一つのことを付け加えて、終わりにします。そのこと自体は、わたしがこれまで述べたことの中でも、すでに語りました。しかし、もう一度それを詳しく論じるのが正しいと、わたしには思えます」

138:1 わたしは言った。「では、皆さん、知ってください。イザヤ書で、神がエルサレムに向かって、こう言われたことです。『ノアの洪水のときに、わたしはあなたを救った』（イザヤ五四・八～九参照）。神が言っておられたのは、次のことです。救われる人々の奥義が、洪水のときに起こったということです。実際、洪水のとき、義人ノアは、ほかの人々と一緒でした。すなわち、自分の妻と、三人の子と、息子たちの妻たちとです。この人々は、数において八人であり、八日目のしるしでした。その日に、わたしたちのキリストは、死人の中からよみがえられて、現れられました。その日は、数においては八日目ですが、力においては、常に初めの日です」138:2「実際、キリストは、すべての造られたものの長子であられ（コロサイ一・一五参照）、また、改めて、もう一つの種族の初めとなられました。その種族は、このかたによって、水と信仰と木とを通して、新たに生まれたものです。その木は、十字架の奥義をもつものです。ノアも、自分の家族とともに水の上に浮かび、木によって救われましたが、それと同じです。では、預言者は、先に述べたように、『ノアのときに、わたしはあなたを救った』と言います（イザヤ五四・八～九参照）。そのとき、預言者は、同じように神に対して忠実で、これらのしるしをもつ民に向かって言っているのです。実際、モーセも、つえを手に持って、あなたがたの民を、海の中を通って導きました（出エジプト一四・一六参照）」138:3「しかし、あなたがたは、あなたがたの民族だけに、あるいは地に向かって言われていたのだと思っています。実際、聖書が言うとおり、全地が洪水におおわれ、水がすべての山々の上に十五キュビト上がったのです（創世記七・一九～二〇参照）。そうである以上、神が地に向かって言われたのでないことは、明らかです。そうではなく、神に従う民に向かって言われたのです。神は、この民のために、エルサレムに安息をも前もって備えておられます。洪水のときのすべてのしるしによって、先に示されたとおりです。わたしが言ったのは、次のことです。前もって備え、自分の犯した罪を悔い改める人々がいます。その人々は、水と信仰と木とを通して、やがて来ようとしている神の裁きを逃れる、ということです」

139:1「実際、ノアのときに、もう一つの奥義も、成し遂げられるものとして預言されていました。あなたがたは、それを知りません。その奥義とは、次のことです。ノアは、二人の息子を祝福した祝福の言葉の中で、息子の子をのろってもいます。実際、ハムは、神によってほかの息子たちとともに祝福されていたので、預言の霊は、ハムをのろおうとはしませんでした（創世記九・一参照）。そうではなく、ノアの裸を笑ったハムの民族全体に、罪の罰が及ぶことになっていました。そうである以上、預言の霊は、その子カナンから、のろいを始めたのです（創世記九章参照）」139:2「また、語った言葉の中で、次のことを前もって告げていました。セムから出る者たちが、カナンの財産と住まいを占有することです。そして、今度は、ヤペテから出る者たちが、それを占有することです。セムから出た者たちがカナンの者たちから受け継いで占有していたものを、セムから出た者たちから奪って占有するのです。それは、カナンの子らがそれを奪われ、セムから出た者たちが占有したのと同じです」139:3「そのとおりになったことを、聞いてください。実際、セムから血筋を引くあなたがたは、神の御旨に従って、カナンの子らの地に攻め入り、それを占有しました。また、ヤペテの子らも、神の裁きに従ってあなたがたに攻め入り、あなたがたから地を奪って占有したことは、明らかです。このことは、次のように言われています。『ノアは酔いがさめて、末の子が自分にしたことを、ことごとく知った。そして言った、「しもべカナンはのろわれよ。彼はその兄弟たちの奴隷となる」。また言った、「セムの神、主はほむべきかな。カナンはそのしもべとなる。主がヤペテを大いならしめられるように。彼はセムの家々に住め。カナンはそのしもべとなれ」』（創世記

九・二四〜二七）」139:4「すると、セムから出た者たちとヤペテから出た者たちという、二つの民が祝福されました。セムから出た者たちが、先にカナンの家々を占有することが定められていました。そして今度は、ヤペテから出た者たちが、セムから出た者たちから同じ財産を受け継ぐことが、前もって告げられていました。また、カナンから出た一つの民が、二つの民に奴隷として渡されました。こうして、キリストは、全能の父がこのかたにお与えになった力に従って来られました。そして、友愛と祝福と悔い改めと、共に住むこととへ、お招きになりました（第一ペテロ三・九参照）。それは、すべての聖徒たちが、同じ地で共に住むようになることです。先に示されたように、このかたは、その地を占有することを約束しておられます」139:5「ですから、あらゆる所の人々のうち、キリストを信じる人々がいます。その人々は、このかたの言葉と、このかたの預言者たちの言葉にある真理を知っています。奴隷であれ自由人であれ、その人々は、このかたとともにその地にいるようになることを知っています。そして、永遠の、朽ちないものを受け継ぐことを知っています」

訳注

1 現存する七十人訳の写本は、どれも『縛ろう』と読む。

140〜142章　女奴隷の子らの型、悔い改めとゆるし、別れ

140:1 「ですから、先に述べたように、ヤコブ自身もキリストの型でした。ヤコブは、自分の二人の自由な妻の、二人の女奴隷をもめとり、彼女たちから息子たちをもうけました。それは、次のことが前もって示されるためでした。ヤペテの民族のうちにいて、カナンから出た者たちがいます。キリストは、その者たちをも、みな、自由人と同じようにお受け入れになります。そして、共に受け継ぐ子らとしてお持ちになる、ということです。わたしたちこそ、その子らなのですが、あなたがたは、それを悟ることができません。あなたがたは、神の生ける泉から飲むことができないからです。そうではなく、聖書が言うとおり、こわれた水ため、水を入れておくことのできない水ためから飲んでいるからです（エレミヤ二・一三参照）」 140:2 「こわれた、水を入れておくことのできない水ためとは、あなたがた自身の教師たちが、あなたがたのために掘ったものです。聖書もはっきり言うとおり、彼らは、人のおきてを教えとして教えています（イザヤ二九・一三、マタイ一五・九参照）。そのうえ、彼らは、自分たちをも、あなたがたをもたぶらかしています。アブラハムの肉による子孫である者には、永遠の国が必ず与えられる、と思っているのです。たとい、その者たちが罪人で、不信仰で、神に従わない者であってもです（マタイ三・九参照）。聖書は、それがそうではないことを示しました」 140:3 「実際、もしそうなら、まさにイザヤは、次のように言わなかったはずではありませんか。『もし万軍の主が、われわれに子孫を残されなかったなら、われわれはソドムとゴモラのようになったであろう』（イザヤ一・九）。また、エゼキエルも、こう言わなかったはずです。『たとい、ノアとヤコブ[1]とダニエルが、むすこか娘かを求めても、彼らには決して与えられない。むしろ、父が子のために滅びることも、子が父のために滅びることもない。かえって、おのおのは自分の罪によって滅び、おのおのは自分の正しい行いによって救われる』（エゼキエル一四・一四〜二〇、一八・四、二〇、申命記二四・一六参照）。また、さらに、イザヤも、こう言わなかったはずです。『彼らは、そむいた者たちのしかばねを見る。彼らのうじはやまず、彼らの火は消えない。彼らはすべての肉なる者の見るものとなる』（イザヤ六六・二四）」 140:4 「また、わたしたちの主も、このかたを遣わされた父、万物の支配者の御心に従って、こう言われなかったはずではありませんか。『人々が西から東からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につく。しかし、この国の子らは外のやみに追い出される』（マタイ八・一一〜一二）。それだけでなく、次のことは、先にも示しました。不義な者となることが前もって知られている者たちは、み使いであれ人であれ、悪い者となります。しかし、それは神の責めによるのではありません。そうではなく、各自が自分の責めによって、それぞれ現れることになるとおりの者となっているのです」

141:1 「しかし、わたしは、先に手短に、次のことを述べました。それは、あなたがたが、次のように言う口実をもたないためです。キリストは十字架につけられねばならなかった。あるいは、あなたがたの民族の中には、違反する者たちがいなければならなかった。ほかのようにはなりえなかった、と。わたしが述べたのは、こういうことです。神は、み使いたちと人々とを、義を行うことについて、自分で選ぶ力をもつ者として造ることを望まれました。彼らが神の御旨に従うことを望まれたからです。神は、理性とともに、そう造ることを望まれました。自分がだれによって生じたのか、また、以前にはなかったのに、だれのゆえに今あるのかを知る理性です。また、律法とともに、そう造ることを望まれました。正しい理性に反して行うなら、神によって裁かれるという律法です。そして、わたしたち、すなわち人もみ使いも、前もって心を改めないとします。そうであれば、悪を行った者であることが、自分自身のゆえに証明されることになります」 141:2 「しかし、もし神の言葉が、み使いであれ人であれ、ある者たちが必ず罰せられることになると、前もって示しているとします。そうであれば、言葉がそれを前もって告げたのは、彼らが変わることなく悪い者になることを、前

もって知っていたからです。神が彼らをそのような者に造られたからではありません。そのため、もし悔い改めるなら、望む者はみな、神からのあわれみを受けることができます。そして、言葉は、彼らを幸いな者と前もって告げて、こう言っています。『主に罪を認められない者は、さいわいである』（詩篇三二・二）。これは、罪を悔い改めて、神から罪のゆるしを受ける者のことです。あなたがたが自分を欺いて言うような意味ではありません。この点であなたがたと同じような、ほかのある人々が言うような意味でもありません。彼らは、たとい罪人であっても、神を知っているなら、主は彼らの罪をお認めにならない、と言うのです」141:3「このことの証しとして、わたしたちには、ダビデが自分の誇りのゆえに犯した、ただ一度の過ちがあります（詩篇二六・二以下参照）。その過ちは、書かれているとおり、ダビデがそのように泣き、嘆いたときに、ゆるされました（サムエル下一二・一三参照）。もし、このような人にさえ、悔い改める前には、ゆるしが与えられなかったとします。そうではなく、この偉大な王、油注がれた者、預言者である人が、そのように泣き、そのように行ったときに与えられたとします。そうであれば、汚れた、まったく分別を失った者たちが、嘆かず、胸を打たず、悔い改めないとします。その者たちが、どうして、主が自分たちの罪をお認めにならないという望みをもつことができるでしょうか」141:4わたしは言った。「皆さん、ウリヤの妻に対してダビデが過ちを犯した、このただ一つの行いも、次のことを示しています。族長たちが多くの妻をもったのは、不品行を行う者としてではありませんでした。そうではなく、彼らを通して、あるからいと、すべての奥義とが成し遂げられていたのです。あなたがたの民族の人々は、世界中で、滞在したり遣わされたりした先のどこででも、結婚の名のもとに女たちをめとっています。そのように、だれでも望む女を、望むように、望むだけ多く、妻としてめとることが許されていたとします。そうであれば、ダビデには、なおさら、そうすることが許されていたはずだからです」141:5親愛なるマルクス・ポンペイウスよ、わたしは、このように語って、話を終えた。

142:1トリュフォンは、しばらく黙っていたが、言った。「ご覧のとおり、わたしたちがこの事柄について話し合うことになったのは、前もって企てたからではありません。そして、わたしは、この語らいをことのほか喜んだことを、認めます。この人たちも、わたしと同じように感じていると思います。実際、わたしたちは、待ち望んでいた以上のもの、いや、およそ待ち望むことができた以上のものを見いだしました。もっとたびたびこうすることができたなら、聖書の言葉そのものを調べて、もっと益を受けたはずです。しかし、あなたは船出を間近にしていて、航海に出る日を日ごとに待ち望んでいます。そうである以上、ここを離れても、わたしたちを友として覚えることを、ためらわないでください」142:2わたしは言った。「わたしとしては、もしここにとどまるのなら、毎日でも同じことをしたいものです。しかし、神がお許しになり、助けてくださるなら、もう船出することになると待ち望んでいるので、あなたがたに勧めます。自分自身の救いのために、この最も大きな戦いに臨んでください。そして、あなたがたの教師たちよりも、全能の神のキリストを重んじるよう努めてください」142:3その後、彼らは、わたしのために、航海の無事と、あらゆる悪からの救いとを祈りながら、ついに去って行った。わたしも彼らのために祈って、言った。「皆さん、わたしがあなたがたのために祈ることのできるもので、これより大きなことは、ほかにありません。あなたがたも、この道によってすべての人に幸福になることが与えられると深く知って、必ずわたしたちと同じようにすることです。つまり、イエスが[2]神のキリストであられると認めることです」

訳注

1 エゼキエル書ではヨブ。古い刊本にはヨブに改めたものもある。

2 『イエスが』は刊本の推定で、写本は『わたしたちの』と読む。

トリフォンとの対話

2026年11月23日版
著者　ユスティノス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/dialogue-with-trypho/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/dialogue-with-trypho
全文を、ギリシア語原文（Προς Τρυφωνα Ἰουδαῖον διαλογος）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。